

I・S～DC～ インフィニット・ストラトス～ダサシンクリード～

凡人9号

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ある日突然赤ん坊に前世の知識が！

よくある転生物なら記憶が上書きされ前世の人間の人生が再スタートするはずがそんなに上手くいかずに赤ん坊+前世の知識な状態でスタート。

そしてその赤ん坊は思った。

「前世の俺が憧れたゲームの主人公のスキルを磨きたい」

その思いのまま彼は野山を駆け回る！現状森林フリーラン！目指すは街中フリーラン！

そして田舎者の彼が何故か突然大都会IS学園へ！果たして彼は適応出来るのか！

＼ダッサシッ／

目次

原作はまだまだ始まりませんよ	1
原作はまだ始まりませんよ	6
原作は始まりませんよ	12
原作が始まりそうですよ	20
原作が始まってるそうですよ	26
原作イベントに巻き込まれたようですよ	34
原作三人娘と知り合いましたよ	43
原作ヒロイン（その七）と知り合いましたよ	51
原作ヒロイン（その六）は敵のようですよ	59
原作ヒロイン（その一）は開発者の妹さんらしいですよ	66
原作主人公は弱体化してるらしいですよ	75
原作ではないようですよ	83
原作戦闘イベント（チュートリアル）ですよ	91
原作とは違う使命があったそうですよ	99
原作三話への繋ぎらしいですよ	107
原作ヒロイン（その三）来IS学園ですよ	115
原作的修羅場だそうですよ	123
原作的戦闘イベント発生のようですよ	132
原作とは違う戦闘ですよ	140
原作二巻への繋ぎですよ	148
原作転校生らしいですよ	157
原作的実習ですよ	166
原作的一触即発ですよ	174
原作突発戦闘イベントですよ	183

原作タッグトーナメントですよ	192
原作的暴走ですよ	201
原作三巻への繋ぎですよ	210
原作三巻スタートですよ	218
原作的登場ですよ	227
原作的海イベントですよ	235
原作宿夜イベントですよ	243
原作的戦闘イベントまでの繋ぎですよ	251
原作的撃墜イベントですよ	259
原作的第二次移行ですよ	267
原作的戦闘終了ですよ	275
原作的三巻終了ですよ	283
原作的じゃない夏休みですよ	291
原作的じゃないお話ですよ	299
原作的じゃない宇宙進出	307
原作的全校集会ですよ	315
原作的原作主人公が生徒会との接触ですよ	323
原作的特訓を静観ですよ	332
原作的文化祭導入ですよ	341
原作的主人公の友人ですよ	349
原作的灰かぶり姫ですよ	357
原作的公園での戦闘ですよ	365
原作的ではない捕虜ですよ	373
原作的誕生日会話ですよ	380
原作的デートらしいですよ	388

原作的機体相談ですよ	396
原作ではないキャノンボール・ファスト裏舞台ですよ	404
原作ではないキャノンボール・ファスト裏舞台2ですよ	412
原作的キャノンボール・ファスト終了ですよ	420
原作ではない何処かへ	428
原作ではない何処かへ2	437
原作ではない何処かへ3	445
原作ではない何処かへ4	454
原作ではない何処かへ5	462
原作ではない何処かへ6	470
原作ではない彼方へ	479
原作ではない其方へ	488

原作はまだまだ始まりませんよ

突然だが、俺には前世の記憶がある。

問題としては、『前世の記憶』があるだけで俗に言う『転生者』ではないという事だ。

神様に会った覚えも無ければ女の子を助けたわけでも、トラックに轢かれた訳でもない。

というか、その記憶自体も赤ん坊の時に急に智恵熱に襲われ三日三晩魘された後に得た記憶だ。

さて、そんな前世の記憶を手に入れた俺こと子供が憧れたものは一つ、

前世の俺が憧れたゲームの主人公のスキルを磨きたい。

北海道のド田舎に生まれ、祖父が山持ち土地持ち不動産。そんな境遇を生かした主人公・・・

「自然溢れる野山を自由に走り回る・・・ひとまず目指すはラドンハゲードンだな」

某アサシンゲームの三作品目兼五作品目の主人公なのにあまり人気の無い英雄ことコナーさんだ。

前主人公達が「テンプル騎士団」相手に無双したり、世界の秘密に近づいたりしたという功績と比べればポストン茶会事件とかを影で引き起こしたただだからだ。まあゲームシステム自体もなんか残念だと言う話もある。

これで「アメリカ独立を最初から最後まで支えていた」なら人気が出たのだろうか「故郷の土地守るには独立してくれた方がマシ」というスタンスだったから悪かったのだろうか。それとも独立した後はその「故郷の土地」も奪われたからだろうか。

まあこれは俺の考えであって全てではないのだが・・・一先ず置いておこう。

「今日も学校へ行くこう！」

小学二年生、距離で言えば十キロ程の道をランドセル担いで山道掛け分け進むわけですよ。いい修行になるよねホント。

「ああだからもう！木に登って移動するの止めなさい！」

カーちゃんなんが何か言ってるけど気にしない気にしない。こっ
ちのが早いしきつと将来的にもいい結果に転ぶはずさ！

「ふいいいいいいやっふうふうふうふうふうふう！」

ひよつとして毎回毎回奇声を上げながら走ってるからカーちゃん
も止めようとするんかね。だが私は謝らない！

「つてあ・・・イテエー！」

ちよつと考え事しすぎて着地ミスって地面に落ちちまった。枝か
ら枝にジャンプするときは変な事考えない方がいいな、いやマジで死
にかねない。

時は少しだけ過ぎ

通学往復二十キロダツシュ、帰ってからも野山を駆けずり回り時に
木刀振るい、麻縄回した木に拳を打ちつけたりそんな野生児な生活を
送っているとなにやら面白い事件が起こった。

ハッキングにより日本に向け発射された2341発のミサイルを、
たった一人の人物が操縦する『IS（インフィニット・ストラトス）』
と称される飛行パワードスーツで全てを無力化した事件。

通称『白騎士事件』が起こったのである。映像見たけど超カッコ良
かった。あの動きは熟練者だな、適当な人間が装備してもあんなにス
ムーズに動かせまい。

まあそんな評価は置いておいて・・・うむ、知らん。前世の記憶と、
現状の二重の意味で知らん。というか興味無い。

俺は今生身を鍛えてんだぞ！パワードスーツ？あれば将来祖父さ
んの介護の補佐くらいには役立つかもな！くらいなのが率直な感想
だ。

ただまあそんな野生児を置き去りにして世の中は変わりつつある。
なにやらISというのは女性にしか扱えない物であり、そのISを
使える女性は偉い。という『女尊男卑』なる風潮が世間に満ちた・・・
らしい。

らしいと言うのは俺の家も学校もド田舎でのんびりしているもの

だ。近所のおばちゃんも同級生も「そんな凄い技術が出来たんだ、生きてるうちに触れればいいね」程度だ。

男連中？「宇宙活動出来るんだろ？カッキー」ってな具合だ。田舎の男なんて総じて能天気のバカばかりである。「畑耕しやすくなるん？」他の意見はこれくらいだ。

学校に一台おいてあるパソコンや父親が仕事の関係上使用しているソレから『Oチャンネル(オーチャンネル)』という掲示板を覗けばごまんとある都会の男達が理不尽な女達に苦労させられている話を聞いて田舎者達は震え上がっている。

「都会コエエ」

「身に覚えの無い罪で捕まるとかなにそれこわい」

「物無理矢理買わされるし、それも自分の物じゃないとか働く気失せる」

「俺もう爺ちゃんと農作業して生きる」

「私達こんな大人にならないように気をつけなきゃねー」

「ねー」

数少ない学校の友達(生徒全員)でパソコンの前に集まって掲示板見ながらこんな話をしたのは記憶に新しい。

ソレから一年くらいし小学三年生の時。IS版オリンピックみたいなモンドグロツソとやらが開かれ日本人女性『織斑千冬』と言うキリツとした美少女が優勝した。映像見たが・・・どう見ても剣筋や体運びが白騎士のソレですありがとうございます。

そんな事があって以来地元にある剣道場の門下生の数が跳ね上がった。そして増えた分の三分の一が一月もしないうちに止めた。基本的には皆ミーハーである。何が驚きかというところ近所のおばちゃん達がしれつと混ざってちゃっかり続けているという事だ。

俺も俺で親に「彼女の様に芯のある人になりなさい」とか言われて通わされる事になり、入門して僅か二ヶ月で師範と師範代くらいしかまともに打ち合えない程になっている。あくまで『剣道』ではだ。

師範と師範代が振るう剣術は地元に伝わる伝承、アイヌ神話時代か

らマイナーチェンジしながら今へと伝わる由緒正しいらしい『ウエンペクル・エシクキク』という物で。日本語にすると「悪人を打ち倒す」という意味になるらしい。用は『実戦用剣術』『古流剣術』とか呼ばれるソレだそうだ。

ほぼ毎日打ち倒されている俺は悪人か何かかよ。しかもなんかソレを俺に教えるとか何とかいう話になったから逃げ出した。全力で逃げ出した。

しかし家に帰ったら何故か師範が居た。

「知らなかったのか？師匠からは逃げられない」とは彼の弁であるが、俺が何時弟子入りしたし。え？一度道場に入った時点で？スゲエな辞めたやつまで皆弟子かよ、懐広いなおい。

そんな嬉しくない弟子入りを果たしてから三年、俺もそろそろ中学生。なお、中学はこの辺りには一つしかなく、小学校よりももう少し離れ十五キロ先になる。

今日も今日とて師範に打ちのめされ倒れ疲労困憊でダウンしていると師範が見ていたテレビのニュースが耳に入ってきた。

なんでもモンドグロツソ第一回覇者こと織斑千冬氏が第二回モンドグロツソの決勝戦を棄権したらしい。原因は語られてはいないが師匠はポツリと「陰謀だな」とだけ呟いていた。

「世界最強でも陰謀には適わないか。そりゃそうだ、彼女だって人間だ・・・よし、続きだ」そう言って稽古の再開を宣言した師匠の顔も、その後の剣もどこか優れなかった。何か思うところがあつたのだろうか、少しだけ師範の過去が気になった一幕。

しかしなんだ、師範引き出し多すぎ。なんで剣戟の隙間を縫って壁駆け上って真上から竹刀振り下ろしたのに反撃してこれるんだよ、俺のこと見失つてた癖にくそう。

ソレからまた時間は飛び、中学三年だ。

この三年間、勉強に剣道こと「悪人ブッコロ剣」に興味の野山フリーラン、質実剛健を地で行く充実した三年だっただろう。主に師範のお

蔭ではあるが大幅なレベルアップをしただろう。実感は無いが、師範曰く「そろそろ俺も本気を出さなきゃ負ける」とか言ってくれ。毎度毎度冬になった時の雪がやばいけどいい鍛錬になるね！師範発町内雪かき大ボランティアとか超疲れるけど。

で、何が問題って？高校受験が終わって師範のところで稽古を受けて休憩中に見てたテレビで『織斑一夏』とか言う『男』が『IS』を動かしてくれやがったというニュースが流れた事が切欠だ。まあ苗字からしてかの世界最強剣士と呼ばれているらしい織斑千冬さんの弟なのだろうけれど。

『もしかしたら他にも動かせる男がいるんじゃないか？』とかお偉いさんの妄言によって全国で『男性IS機動テスト』なるモノが開催された。いや、名前は違ったかな、まあ関係ないからどうでもいいことだ。どうせ動かせたのも弟とかそんな理由なんだろう？

中学に上がって少し増えた男友達や少しだけ女尊男卑な世界に染まった女友達やらとワイワイやりながらそのテストとやら、ぶつちやけISに触るだけのモノだが・・・ワクワクでチャレンジした同級生達が凹みソレを見て女子が爆笑する中・・・

なんと機動出来ちゃいました。打鉄とか言う黒い機体。

マジで止めてくれよ。都会なんて行きたくねえよコエエよ畜生が。

原作はまだ始まりませんよ

唐突だが、皆さんは『重要人物保護プログラム』というのをご存知だろうか。

『国家にとつて重要な人物、およびその血縁者を保護するプログラム』の事である。

言い方を変えてしまえば『お前の身柄と家族守ってやる代わりに国のために働けや』と言った感じになる。

家に帰ったら美人な秘書さんと黒服黒グラサンのガタイの良いボーディーガード風の男三人を連れられたデブでスーツのオッサンが家に居て両親にドヤ顔でそんな感じの説明をしていたからだ。

話し聞いてて正直白目向きそうになった。そして軽く立ったまま気絶していた。なんとか白目は向いてなかったようだが死にそうな顔をしていたらしい。

そして俺が気絶しているその間になんと、なんと！

目の前の椅子に座って世界最強と名高い織斑千冬さんが母の出したお茶を飲んでいた。何でこんなド田舎の家に居るんすかこの人。

まあこの人が居るお蔭でデブのオッサンは滝の様な汗を流し、美人秘書さんは淡々と家族と保護プログラムについてだのなんだの会話をしている。

「IS学園から派遣されてきた織斑千冬だ。政府の人間が不平等な契約を結ばないかどうか見て来い、と言われてな」

「お、同じくIS学園教師の山田真耶です！」

IS学園って確か国から不干渉の独立国家的扱いなんだったっけ？ってか政府ってそんな仲介人が出てこなきや一方的な契約結ぶくらいヤバイの？

それにしても山田さん・・・童顔巨乳教師とかニツチすぎませんかね？

「どうも、鷲津翔です。なんか現状良く分かってないんですが、俺ってIS学園行かなきやいけないんですか？」

「そうだな。色々大変だろうがそうなるな」

「・・・マジですか。かーさん、高校入学金まだ払ってなかったよね！」
「政府から連絡が行ってお金返ってきたわよ」

「政府スゲー！なんでこんな仕事だけ早いんだよ！」

本気で仕事速すぎだろ！自分達の利益になることなら早いのか？

会話を戻そうとしたら織斑さんしか居なかった。山田さんを探せば家の家族サイドについて美人秘書さんの提案をあーだこーだ口出ししている。あの人良い人だ。

「なに、政府なんてこんなモノだ」

「なんか重みありますね織斑さん」

「実体験だ。今私の弟もお前と同じように大変だ」

「ああうん、一番目ってやつぱり織斑さんの弟さんだったんですか」

「うむ、まあIS学園で仲良くやつてくれると助かる」

「ええ・・・俺ら以外女子しかいないんでしょう？そりや仲良くはなりませんよね」

「まあ覚える事も多いぞ、一先ずこれだ」

そう言つて織斑さんが鞆から取り出したのは・・・

「なにこれ厚い、六法全書か広辞苑かな？」

「両方が混ざったようなモノだ。IS関連の用語から法律、取り扱の方等が書かれている参考書だ」

「ISヤベエ、一番初めは宇宙作業できるパワードスーツって話だったけど・・・俺には関係ないだろうとか笑つてた間にこんな事になってるなんて・・・」

前世の記憶的に宇宙キターとか、USGI simuraとか戦術機とかそういう話が出てくるとか思つてたけど・・・どう見ても兵器ですありがたいとございます。あ、最後のは兵器だったか。

「正直に言つて、普通に殴るだけでも人を殺せるような代物だからな。取り扱いは嚴重にしなければならぬのだ」

「これってIS学園受験する女の子達ってどうやって覚えるんですかね、参考書配られるわけじゃないんでしょう？」

「買うのだ。IS学園からな」

「教科書的な扱いなんすね・・・買って受からなかったら埃を被る運命

か」

「そういうのは不謹慎だから止めておけ」

「ラジャー・・・それにしても、後一月でコレ覚えるのか。つらいな」

「それにしても鷺津、貴様。何か武道をやっているか？」

「話変わりましたね。まあ剣道的なモノを少し。そう言えば織斑さんもでしたっけ？・剣道」

「うむ、分かるか」

「第一回と第二回の映像って結構出回りますからね。ネットで少し」

「そうか・・・ああ、ついでに言っておくが、IS学園で彼女を作ろうだとか考えるのはやめておいたほうが良いぞ」

「・・・ああ、ハニートラップでしたっけ。ぶっちゃけ祖父さんも父さんも動かせないってことは突然変異か何かでしょう？子供に遺伝しますかね？」

「さあな、現状理解できていないから各国が躍起になってお前と一夏の身柄を寄越せと言って来ているのだ」

「そ、そんな事になってるんですか・・・」

「教師が毎日対応しててな、それに含めて女性権利団体からも煩くてな」

「聞きたくないですねその辺の話」

頭が痛くなる。俺は前世含め脳筋だからこういう難しい話は苦手なんだよ。

「時に鷺津、お前の通っている道場に連絡は取れるか？」

「まあいつでも大丈夫ですけど、なんでです？」

「なに、すこし・・・な」

ああ、なんか嫌な予感がする笑みを浮かべてるよこの世界最強・・・マジ何が起こるんだよ。

そんな会話の裏で俺の家族の扱いは・・・ばれないようにボディーガードは付くけれど平常通り。ただし苗字と家は捨てる事になる。

祖父さんと祖母さんは変わらずド田舎だが両親は都会に行く事になるらしい。今日ほど兄弟が居なくて良かったと思う日は恐らくもう無いだろう。

祖父さんも祖母さんも両親も『事故みたいなもの』と割り切っているが、俺はまだ割り切れてないんだよなあ……まったく、俺はド田舎で平凡に過ごそうと思ってたの畜生が。

何が起るんです？

「入試試験だ！」

「いきなりなんだ驚津」

通いなれた師範の道場、その中心に俺と織斑さんは竹刀片手に胴着を着て向かい合っていた。

政府のデブオツサンとの話が終わり、山田さんの運転する車で織斑さんと一緒に後座席に座って揺られ……師範と織斑さんがなんか達人同士の会話をしている中俺と山田さんは置いてきぼりをくらい、師範の言う言葉に従い胴着に着替えて道場に入ったら

この現状である。

「まあ確かに今お前の言った通りではあるが、聞いたところお前のI S適正は高くないようだな」

「そうなんですか？」

「Dだ。これは下から数えたほうが早いランクでな、上からS A B C D Eの順だ」

「動かせるだけマシなレベル」

「だが所詮簡易適正試験で出た結果だ、それ以降の伸びは含まれてはいない」

「頑張ればランクアップできる様な物を目安にするなよ……」

「逆に言うなればソレくらいしか目安に出来ないのが現状だ」

「I Sエ……まあこれから発展していく技術に期待することにします」

「うむ、では始めよう」

「……え、マジでやるんすか？」

「これをやればI Sでの模擬戦闘試験をパスさせてやるぞ」

「そんなこと一存で決めちゃっていいんですか？」

「I Sのエネルギー保持量や武装、出力等は基本的には一律だが機動力に関しては乗り手次第で十人十色だ、高軌道でヒットアンドアウェイ

イする者も居れば武装を生かしたごり押し戦法まで居るぞ。それら皆が各々の分野で達人級の腕前だ。つまり、乗り主の腕がよければそれだけISも応えてくれるものだ」

「いやゴリ押しとか普通無理でしょう」

「ISの武装には盾があれば盾殺しと呼ばれる武装が存在しているだな・・・巨大な杭打ち機だ」

「なにそのロマン武器」

前世の知識の中にそんな武器を使って変態機動を描き敵を落とすゲーマーが居たような気がする。彼等とはきつと見えている世界が違うのだろうか？と前世の俺は諦めてたな。

「そんな話は一先ず置いておいてだな、やるぞ」

「うわーい、世界最強から稽古つけてもらえるぞーやったー」

数分後、そこにはボロボロ担った俺氏の姿が！

最後の『絶対殺す』と言わんばかりに喉に突き立てられた竹刀が効いた。だつて意識飛んでたもん。

何とか三太刀入れられたけど・・・二太刀入れたら発狂モードとか聞いてませんよ織斑さん。平常モードですらカツカツだったのに発狂してから良くあれだけ持ったよ俺。生存本能丸出しよ？そりやもう壁も蹴るわ天井も蹴るわ師範にもやった頭上から強襲含めて竹刀だけじゃなく拳も振るわ・・・そんな奮闘も竹刀一本で防がれたけどな！タツジン！

「どうです？うちのバカ弟子は、IS学園でやっていけそうですか？」
「十分なくらいですよ。生身の戦闘なら生徒の中でもトップでしょう、教師を含めてもトップ3に入るかと。ここまでよく鍛えられましたね、途中から剣道ではなかったですが」

「元々の素質が大きいでしょう、お母様の話によりますとなんでも物心付く前ほどから修行をしていたようです」

「・・・生まれた時代を間違えたようですね」

「でしょう？稽古を付けるたびに少しずつですけれども迫ってきているのが末恐ろしいです」

「織斑さん：…ついでに師範もですけどあなた達がいいいます、ソレ？」

「話せるまで回復したのか？大丈夫か？」

「喉突かれたらそりゃ死に掛けますよ、むしろなんで俺って死んでないんですかね。人間ですよ俺」

「失礼な、私も人間だ」

「僕ですよ」

お前等のような人間がいるか。

原作は始まりませんよ

どうも、鷺津翔です。俺は今……

「IS、正式名称『インフィニット・ストラトス』科学者『篠ノ之束』が独力で開発した宇宙空間での活動を想定して作られたマルチフォームスーツであるが、製作者の『宇宙進出』の思惑とは大きく外れ『兵器』として運用のみに開発が進められる事になった哀れな兵器よ」

「うん、哀れと思うなら『兵器』って呼ぶの止めろよ」

「だって関係ないじゃない」

「言い切ったよこの人、今俺に教えてるのに言い切ったよこの人」

学校の教室にて数少ない女友達、早坂さんにISについて教えてもらっている。三年生は卒業まで自由登校となっているが、皆遊びたい盛りだ、横でゲームしやがって畜生が。

織斑さん達？何故か家に一泊してから帰っていったよ、その間我が家には近所の人達が集まりに集まってちよつとした宴会騒ぎ。慌てる山田先生は可愛かった。添えるだけだったけど『第二IS男性操縦者』になった俺とのお別れ会の意味も含めていたっぽい。お前等飲みただけだろもう訳ワカンネ。

「だって私IS学園受験したのに落ちたんだもの！受験せずに通えるようになった人に八つ当たりするしかないじゃない！」

「うわヒデエー！」

「鷺津君には私が憧れた整備科に行ってもらうんだからね！」

「整備科って何ぞや」

「IS学園は二年生になったら整備科を選択できるんだ！正直整備科に入って技術的なこと学んでるとIS開発してる企業に入社しやすくなるんだよね！」

「将来安定だね！」

「ではそのために一問！アラスカ条約とはなんですか！」

「うわいきなり問題振ってきやがったよこの人！……アラスカ条約、確かIS強すぎるからISの情報公開して共有して争わないように

しようよ！IS強すぎるから兵器運用しない様にね！ISの研究は企業だけで国が開発用の機関を作るのは無しだよ！・・・とかじゃなかったっけ？」

「ついでに『IS』作ったのが日本だからって理由で日本にIS学園が建てられたのよ」

「なんかもう頭イテエ」

「次！」

「勘弁してくれよ！」

「ではISコアとはなんですか」

詰め込み教育駄目絶対！でも整備科か・・・武装とか作れたりするのかなあ。いや流石に無いか。

早坂さんとの勉強の後に待っているもの、それはただ一つ！

「さあ、卒業試験に向けての修行です」

「・・・卒業ってなんのですか？」

「我が道場の免許皆伝のです」

「着実に俺の都会進出計画が進んでいく・・・」

「嫌そうですね、何故です？都会はいいところですよ？」

「見ず知らずの女に無理矢理奢らされるような事案が結構な頻度で起こる都会なんて魔境と同じじゃないですかやだー！」

「お上りさんのフリしてれば引っかけりませんよ」

「フリじゃなくてそのものですよ俺は！いやだああああ都会なんて行きたかねえよおおおおお」

「動かしてしまったものは仕方ないじゃないですか、ほら。責任を取りに行ってきたさい、そして義務を果たしなさい」

「大人なんて嫌いだ・・・勝手に法律作って勝手に強要して勝手に逮捕して・・・」

「それが大人のエゴです。これから君は多くの大人達と関わる事になるでしょう、君はまだ中学三年生、様々な事を学び成長するのですよ」
「ソレっぽい事言っただや顔してるところ悪いんですが修行に入りません？」

「よろしい、ならば最後の追い込みだ。これからIS学園入学まで本気で行かせてもらおうよ」

あ、死んだなこれ。

学校に行つては勉強し、終わつては師範の道場で夜遅くまで最後の追い込み修行に入り一月が過ぎた。

黒服さんが運転する車で実家から最寄りの新幹線乗り場へと運ばれ、北海道土産を買い。そこから都会まで新幹線で一直線。何も喋らない黒服さん三人に囲まれむさ苦しい中で時折写真を取られたりし、新幹線降りたらまた車に乗せられ最後にモノレール。窓から見える近未来的な建物に内心仰天しつつも降ろされて三人に囲まれたまま再び歩き・・・

「これが・・・IS学園か！近未来的な外見に緑まで多い！流石独立国家的扱い素晴らしいな」

スゲエよこの学園。普通森作ろうなんて発想に到らないしそもそもそんな土地が無いだろう、遊歩道には結構な数の木が植えられている素晴らしい光景だ。その上なんか渦巻状の建造物まである、あれどうやって維持されてんの？

「鷺津か。時間通りだな」

「あ、織斑さん。どうもお久しぶりです。忙しい中どうもすみません」正直、IS学園に無理を言つて『IS学園入学一日前』に来ることに許可を貰ったのだ！何事も下見は大事だがこれから三年通うことになる学校だからな、初日が大事だろう。

「うむ、参考書は覚えてきたか」

「女友達に頼み込んで何とか」

「師範氏は」

「たつぷりフルボッコにされてきました。その分ランクアップはしたと言われましたが」

「ならば今から入試模擬試験だ」

「・・・え、試験あるんですか」

「当然だろう？と、言いたいところだが、入試と言っても筆記試験等で

はなくお前が一日早く来ると連絡を入れてから上から『やはりIS機動試験は必要だろう』等と言い出してな。まったく、私がアレだけ言ったにも関わらずに連中は……」

ああうん……なんか仕事増やして申し訳ございませんでした！

「ではこれより、模擬試験を始める！」

目の前には打鉄を装備したジャージ姿の織斑さん。そして俺もジャージで打鉄を装備しているわけなのだが……ジャージ？織斑さん、確かアイエスつて専用のスーツありましたよね？ソレ着なきやスベック落ちるんじゃないんですか？」

「そうだが、私とあれほど打ち合えるんだから別に要らんだろ。それに男用のISスーツはまだ開発中だ」

「打ち合っていない打ち合っていないですよ捏造しないで下さいよ……じゃあせめてハンデくれませんか？」

「私が専用機ではない。これがハンデだ」

「なんてこつたい……負け確じゃねえか」

「ソレに加えて私のエネルギーを五割削れたら終わりにしてやろう」

「五割でいいんですか？」

「よろしい、ならば七割だ」

「と言うか俺まだ動かし方すらまともに分からないんですけど！」

「安心しろ、実戦の中で教えてやる！」

「脳筋じゃないですかーやだー！」

世界最強 織斑千冬 が 現われた

「武器ってどうやって出すんですかー！」

「イメージしろ！」

「空ってどうやって飛ぶんですか！」

「イメージしろ！」

「こうですか分かりません！」

「良いイメージだ！だが無意味だ！」

「うおっ！ふざけやがってクソが！」

「良いガードだ、だが口が悪いな！」

「打鉄って他に武装無いんですか？」

「刀一振りだ！」

「兵器として欠陥品じゃないですかーやだー」

「ISなど全てが欠陥品だ！」

「それで現代兵器を凌駕するなんて・・・こんな欠陥品があるか！」

やっつてるときは必死だったが終わった後で審判をやって下さっていた山田先生に戦闘データをを見せてもらったならこんな会話をしていた。

「・・・俺ってこんな喋ってたんですか」

「うむ、必死だったぞ」

「でも凄かったですよ鷺津君！織斑先生の言った通りエネルギーを七割削れたじゃないですか！」

「相打ちでしたけどね・・・と言うか都会に来てまっさきにやったことが戦闘とか・・・やっぱ都会って怖い」

「私からしたらあそこまで雪が積もる事のほうが怖いのだが」

「ああそう言えば宴会の時に見せられましたね。家の一階くらいなら軽く埋まりますからね」

「あれは恐ろしい」

「ええ、あれはちよつと住みたくないですね」

「畜生都会人にバカにされた！俺だってIS動かさなきゃこんな魔境こねえよクソが！・・・このデータって俺貰ってもいいんですかね」

「他に出さなければな」

「冷静に見返して反復練習するだけですよ」

べつ別に『織斑さんの戦闘データなら金が取れるぜへっへっへ』とか考えてないんだからね！

「するなよ」

「しませんよ・・・ツ！」

「織斑先生はたまにこちらの考えを読んでくるのでそれだけは気をつけてくださいいね」

「先に言ってくれませんかね山田先生い！」

「ほう、山田君は私のことをそんな風に思っていたのか」

「ぴいっ！」

そして流れるような動きで山田先生の顔面をアイアンクローする織斑さん。あ、山田先生死んだなコレ。

ってかこの映像良く見たら俺の本能スゲエな。打ち合いじやまともにも勝てないって判断して織斑さんの剣を受けたと同時に攻撃を返してるよ、時々避けられるけど確実に当てられるようになっていく映像の中の俺・・・完全に相打ち覚悟だコレー。生身じゃ絶対こんな戦い方しないけどな！

しかし・・・実際に乗ってみた結果、ISなんてこんなものか。な感じだ。織斑さんが欠陥品って呼ぶのも納得だわな。

「ところで鷺津、お前は私を先生と呼ばないのだな」

「・・・千冬先生？」

「何故苗字ではなんだ？」

「織斑先生より言いやすいですし・・・三文字って素晴らしいですよね」

「そんな理由で山田君の事もか」

「真耶先生より山田先生の方が呼びやすいですし・・・やっぱ名前は駄目ですかね」

「許可しよう」

「わーい許された」

許された・・・あれ何故許されたし！

「ああそうだ、本来の目的をすっかり忘れていたが今からIS学園を一通り案内する」

「えっと、山田先生は大丈夫ですか？」

「大丈夫だ。これでも元日本代表候補だ、軟じゃない、いいな」

「アッハイ」

「では行くぞ」

「ここが職員室だ」

「ちよっとお邪魔してもいいですかね」

「何故だ？」

「いや、前に織斑さんが『男がIS乗れるようになったことで学園に連絡が大量に来てる』とか言ってたじゃないですか？その件でお詫びにと北海道土産を買ってきた次第でございませう．．．ちよつとした休憩の時にでも」

「そうか、いい心意気だな。だがそういうのは賄賂と思われろぞ」

「．．．．．じゃあ千冬先生、お手数ですが『北海道で買ってきた』とでも言つて」

「私が北海道に行ったのは一月も前だ、いまさら土産か」

「．．．．．どうしましょ」

「途中まではいい考えをしているんだが最後にトチるなお前は。私が何とかしておこう」

「やったー！千冬先生ステキー！」

「それほどでもない」

「ここが生徒会室だ、関わることはないだろう」

「じゃあなんで連れてきたんですか」

「ここが第一アリーナだ」

「広い」

「お前も来たことがあるだろう、私達が戦った場所に戻ってきたただけだ」

「ついさつきじゃないですか．．．って、え、説明それだけ？」

「そしてここが『第一アリーナ整備室だ』」

「わーい整備室だー」

「どうした？」

「いや、友人にね、IS学園に受験した奴がいるんすよ。まあソイツに勉強教わったつてのもあるんですけど．．．ソイツがですね、『整備科入れ、絶対』とか言つてたんでこつちもその気になつちやつたわけですよ」

「まあ整備室は他にもある、ここはISバトルを行う前にIS自体を搬入したり最終調整したりする場所だ」

「じゃあ普通に使う整備室はここではないと」

「その通りだ」

「そしてここがその整備室だ」

「わーい整備室だーやったー!」

「籠もるなら放課後にしておけよ」

「ラジャーです!」

「そしてここが最後・・・いや、食堂等はあるがまだ開いていないしな」

「食堂あるんですか・・・で、ここは?なんかホテルっぽいですけど」

「ここがIS学園の寮だ」

「そう言えば寮制でしたね」

「そしてこれが鍵だ。喜べ、男一人部屋だ」

「その言い方からすると男一人部屋じゃないところもあると」

「とある兎のおかげでな」

「なにその兎こわい」

「鍵も渡した、他の者達にも通達が行きわたっている・・・では明日まで自由時間だ」

「気がついたらもう日が暮れてるんですね」

「そうだな、思ったよりもお前がISで粘ったからな」

「まあ今日は寝ますよ、来る前にも師範にボコられてるんで正直疲れ

ました」

「うむ、では明日から勉学に励むように」

「お疲れ様でしたー」

「さて、部屋のナンバーは・・・1250号室。キリのいい番号だな。

気に入った、返すのは卒業してからにしてやる。

原作が始まりそうですよ

正直言って、俺はISを動かしたり前世の記憶的な何かがあるだけの凡人だと思っていた。いや戦闘能力は反復練習のおかげだから、これ生まれつきとかじゃないから。多分だけど千冬せんせいも同じだろう。素質と才能の差がこれだよ！あの人はきつとあれだ、剣オンのVRデスゲームに巻き込まれたら直ぐに二刀流を使えるようになるくらい反射神経高い。

なんでそんな事を突然言い出したのかというと、

「今このタイミングで鷹の目覚醒とかどういいうことなの」

俺の視界は今、夜空の様に黒く染まっている。

『鷹の目』特定のアサシンが所持する能力であり、コレさえあれば『一度視認した人物を見失う事はなくなる』そんな代物だ。

「ハッハッハ、まさか俺が使える日が来るとはなー」

父親も母親も祖父も祖母もアサシンだって話は聞いた事ないし彼等から教えを受けた覚えも無いし・・・なんでだろうねこれ。

さて、そんな俺が今どこにいるか分かる人ー？ヒントはIS学園で一番アサシンらしい場所。

答え？

渦巻状の塔の天辺。いやこれ本当に塔なのか？いや塔なんじゃないかなあ・・・塔でいいんだよねえ！誰か教えてよ!!

いやー、ついうっかりいつも通り規則正しく日の出と共に起きてちよっとランニングしたり竹刀振ったりしてたら不意に視界に入ったあの塔。ウズウズしてつい登っちゃいました。

登りきつてのんびり景色を見てたらある一回まばたきした直後、視界が殆ど真っ黒に染まって驚いて塔から落ちかけたのはついさっきの事だ。

少し意識をして目を瞑り、そして開く事で鷹の目のオンオフを切り替えるようになった。

「転生特典か何かかな？前世の記憶に無いだけで実は神様に会ってた

とか？」

考えうる可能性は大量にある。が、ソレはおいておいて今俺は無性にある行動への衝動に駆られている。

ああ、イーグルダイブしてえ・・・

幸いな事に鷹の目を使って地面を見れば塔の膝元辺りに白い塊が見えるわけだ。鷹の目を解除して見てみると木の葉が集められた山のようにも見える・・・遠いからで良く分からないが鷹の目を使えばよく分かる。

金色に光る人物が木の葉の山(仮定)の付近を行ったり来たりしているのだ。金色ってことは重要人物なんだろうが・・・そんな事知らん！

「今の俺なら行けるぜ！レッツイーグルダイブ！」

鷹の目を維持したまま少し膝を曲げ、木の葉の山(仮)の真上へジャンプ。

やっぱり地面見たままのは怖いから鷹の目をオフにしながら回転して空を見る。

ああ、だんだん離れていく空が青いなあ・・・これで死んだらダサイよなあ・・・俺の記憶も誰かにインストールされるのかなあ・・・
「へぶっ！」

体を優しく包むような感触と同時に背中に硬いものがぶつかる感触と、視界内で舞い上がる木の葉。

「え、ええっと・・・だ、大丈夫かい？」

「ええ、何故か無傷です・・・えっと、用務員さん、でいいんですか？」
俺の顔の上に突如現れた壮年なのだろうか皺の刻まれた柔和な笑顔を湛えた人物が現れた。特徴的な色のツナギから察して用務員さんなのだろう。

「ええ、どうも始めまして。IS学園の用務員、轡木十蔵です」
「どうも轡木さん、鷺津翔です。こんな形で初対面を迎えた事を謝ります」

「いえいえ、若い子供は元気が一番ですから」
「そう言って頂けると助かります。っと、散らかしちやった木の葉集

めるの手伝いますよ」

「……その木の葉の山の上で寝そべってる俺が言う台詞じゃねえなこれ。」

「いえいえ、見たところジャージですがそろそろ食堂に行つて食事を取つたほうが良いのでは？ 新入生は八時半に体育館の予定ですよ」

「……今、何時でしょうか」

「七時丁度ですね」

「やっべ後一時間半しかねえ！……いや十分じゃね？」

「鷺津君、少し汗臭いですよ？」

「マジすか、じゃあ早速戻つてシャワー浴びて食堂行く事にします！」

「道中、お気をつけて」

葉っぱの山から飛び跳ねてすぐさま真つ直ぐ寮へダツシユで向かう。

だけどなんだろうか、背中に突き刺さるような視線を感じるのほどうしてだろうか。轡木さん？……あー、なんかSMプレイで使いそうな器具の名前してるよね。

でも鷹の目で金色に光るって事は『重要人物』って事なんだよな、一介の用務員が重要ってどんなだ？ こんど千冬先生に聞く事にしよう。

それからと言えば……真つ直ぐ森の中を走りぬけ寮に到着したり、颯爽とシャワーを浴びて髪乾かしてなんかやけにフィットする制服着たり、食堂で働いているおばちゃん達をお姉さんと呼んだり、そのお姉さん方がサービスしてとんかつ定食を特盛りにしてくれたり、他の女子生徒達の波にこっそり馴染んでしれつと体育館に入り込み教師に見つかつて騒ぎになったり、

「全く、お前は何故あんな行動をした」

千冬センサーに正座させられています。

「いや、ノリで。正直男一人でどう行動すれば良いのか分からなかつたんです……不安だったんですよ！」

「だからといって女子の列に並ぶか普通」

「バーゲンの時とか」

「話を逸らすな！」

手に持ってた出席簿で叩かれたが・・・なんだろうか、手加減された？

「そしてお前の居るべき席はあそこだ」

出席簿で示された場所を見てみると・・・

一人目、織斑一夏。

うん、まあ当然だ。

二人目、金髪オツドアイ。

まって、修行でろくにテレビとか見てなかったから三人目が居るなんて知らなかった・・・ってか転生者だアレー！

待って！ねえ待って！転生者とか居るのこの世界！じゃあ何か？

この世界なんかの物語の世界なのか！

「ここが〇〇の世界か」とかいうライダー来ちゃうの？ライダー大戦始まつちやう感じですか！

「落ち着け！」

「たわばつ！」

うん、今度の出席簿はちゃんと痛い。表現するなら・・・ちゃんと腰が入ってるって言うの？

「落ち着いたか」

「あい、すみませんでした千冬センセー」

「よろしい、では空いてる席に座れ」

「ういッス、行つてきます」

「うむ、行け」

とりあえず衆目に晒されながらも歩いて織斑一夏君の隣に座る。

配置的には俺、織斑、てんせーしゃ。

どこからどう見ても髪の毛ボサボサの野生児、キリッとした爽やかなイケメン、クール系金髪オツドアイイケメン・・・なんだこの公開処刑。イケメンしかIS動かしちゃいけないの？やっぱ俺って突然変異かなんかで動かせたんじゃないかなあ・・・

隣を見たら織斑一夏君はなんか放心してるし、その向こうに見える転生者（仮）はこつちを射殺さんばかりに睨んで来てるし・・・助け

て千冬せんせー・・・あ、無視ですか。まあそうですよね。

入学式は入学式で変わらないようだ。

お偉いさんが長い話したり、生徒会長が話したり、新入生代表として転生者君がカッコイイ事言ったり、千冬さんが話したり・・・あれおかしくね？千冬先生って一教師じゃないの？非常時の指揮権一任するのかなにそれこわい。

そんな式の真つ最中、暇でもあったので鷹の目使ってみたらカオスカオス。

所々に居る青い人物。青いのは『此方に友好的な感情を持っている人物』である。

大量に要る白い輪郭の人物。これは『取るに足らない通行人とか』背景とかモブである。俺もそっちがいいなあ・・・

その次に多いのは赤い人物。赤いのは『此方に敵意を抱いている人物』である。敵多ッ！

青いのよりも多いのは金色の人物。要するに重要人物。恐らく『原作での重要人物』ってことなんだろうなあ・・・なんかテンション下がるわあ。

まあ置いておいて、金色なのは千冬さんに始まりその弟で隣に座っている織斑一夏君、生徒会長。大量の生徒の中に二人ほど。

意外なことに転生者君は青だった。じゃあなんで俺睨まれたん？

早速ですが、教室の空気が最悪です。

お前等せつかく山田先生が気を聞かせて『一年間よろしくお願いますね』って言ったんだから俺みたいに『よろしくおねがいしまーす』って能天気に戻せよ！みるよシヨンボリしてる山田先生を、かわいそうだろうが！いや実際は可愛いだけどね！

そんな訳で、俺は今年一組に居る。席順は苗字なので『わ』の俺は俗に言う主人公席な窓際最後尾。こんな良い席に座らされるなんて・・・俺に寝ろと？

「織斑くん、織斑一夏くんっ」

「は、はいっ?！」

あ、漸く反応した。これから一年間を共にする同級生の自己紹介を聞いていないとは全く太てえ野郎だな織斑ア!

急に声を上げた織村にビビった山田先生も可愛いなあ・・・ってあれ、俺ってこんなキヤラだったってけ・・・あ、ヤベエ。

化粧とか香水の匂いで気持ち悪くなってきた。

ちよ、意識しないようにしてたのに一度思っちゃったら止まらないじゃないか!何故か?それは元々の山育ちという事もあるが師範の修行で五感を鍛えさせられたのだ。なので俺の五感は強靱!無敵!最強・・・ではないが鋭いのだ。

やっべ、吐きそう。なんて思ってたらつい先ほど耳元で聞いた破裂音が響いた。

「げえっ、関羽!？」

「りよっ、呂布だー!！」

そんな事を叫んだ直後、先ず織斑が叩かれた。次に俺の方に出席簿が飛んできた。

「ワザマエー!！」

襲ってきた衝撃に耐えながら頭を抑えていると何処かからそんな声が聞こえてきたが・・・お前か転生者、なかなか話の分かる奴っぽいぞ?直後ソイツも千冬先生に叩かれた。席が織斑と近かったのが悪かったな。

「誰が三国志の美髯公で飛将で忍者か、馬鹿者共」

きやー千冬センサー!！」

でも現代の呂布クラスじゃね?ISの名前赤兎馬でいいんじゃないかな?

ってまた出席簿が飛んできた!ええいつIS学園教師の出席簿はブーメランか!

原作が始まってるそうですよ

さて、少し疑問に思ったのだがこの机は凄く未来的だ。そりやI Sなんて近未来を通り越した兵器について勉強する施設なんだ、そりや最先端な代物を使うのが相応しいという物だろう。

にもかかわらずだ！椅子は古今東西何も変わらずシンプルな椅子のままだ！

何故だ、椅子の下にでも推進エンジンでもつければ少しはバランスが取れるようになるのか？イーツモヒートリーデアールイーター

「諸君、私が織斑千冬だ。君たち新人を一年で使い物になる操縦者に育てるのが私の仕事だ。私の言う事を良く聴き、よく理解しろ。出来ない者は出来るまで指導してやる。私の仕事は弱冠十五才を十六才まで鍛え抜くことだ。逆らってもいいが、私の言うことは聞け。いいな」

千冬さんなんで仕事内容二回言ったんですかねえ・・・あれか？強調したいのかな？

なんてのんびり構えてたら突然響いた黄色い歓声に耳をやられることになる。

「きゃー！千冬様、本物の千冬様よ！」

「ずっとファンでした！」

「私、お姉様に憧れて北九州からこの学校に来たんです！」

「あの千冬様に指導していただけなんて嬉しいです！」

「私、お姉様のためなら死ねます！」

突っ込みどころ満載だが今耳が痛すぎてそれどころじゃないんですよ、だがこれからする行動は必然なのだ・・・

乗るかしかない、このビクウエーブにつ！

「キヤー千冬様素敵ー！抱いてー！」

「お前はさらりとそつちに混ざるなー！」

「ワザマエー！」

「お前もだー！」

乗った結果がこれだけだな！

「・・・毎年毎年よくもこれだけ馬鹿者が集まるのだ・・・二名ほど違うのもいるが、感心させられる・・・それとも何か？私のクラスにだけわざと馬鹿者を集めているのか？」

またまたご冗談を、じやなきや貴重な男性IS操縦者を三人も同じクラスにしませんってば。

にしても流石千冬さん、コレちよつとした国が作れるレベルの人気なんじゃないですかね、IS学園から独立しません？

「きやああああ！お姉様！もつと叱ってください！罵ってください！」

「でも時には優しくしてっ！」

「そしてつけあがらないように躰をしてください！」

「たまには下克上を果たしてみたり！ふべっ」

「そしてその反動でさらに躰けられたり！あべしっ」

下二人は言わなくても分かるだろう？千冬先生の出席簿を喰らった俺と転生者だ。

周りの女子からの目線がひどいが・・・お前等も大してかわらねえからな！むしろ本気で言ってるお前等の方がおかしいからな！レズが普通とか奇妙な思考回路してんじやねえぞオルア！

「で、挨拶もまともに出来んのか？お前は」

「いや、千冬ねえ！俺は——って！」

「織斑先生、と呼べ」

「・・・はい、織斑先生」

机に叩きつけられた一夏君見てうつとりするのは止めるんだ女子達！顔がだらしない事になってる子が二〜三人居るぞ！

「え・・・もしかして織斑くんって千冬様の弟・・・？」

「なん・・・だと・・・!?」

「それじゃあ彼がIS使えるのっていうもの関係してるのかしら？」

「だとしたら他の二人も・・・」

「ああっ、いいなあ・・・代わってもらえないかなあ」

やめろ、一斉にこつちとあつちをチラッと見るのは止めるんだ。

後、最後の一人はせめてこつちを見て言ってくれ、俺でも転生者でも一夏君でもなく千冬先生を見ながら言うな、どんな思考してるんだお前さんは。

さて、教室の雰囲気なんか残念な感じになったところで

「さあホームルームはこれで終わりだ。諸君等にはこれからISの基礎知識を半月で覚えてもらう。その後実習だが基本行動は半月で体に染み込ませろ。いいか、いいなら返事をしろ。よろしくなくても返事をしろ！私の言葉には返事をしろ！」

そして全員一斉に返事を・・・いや、センサー、一夏君が返事をしませんが。ただの屍です。

その後、姉弟で少し会話をしてから一夏君が席に座り姿勢を正して早速授業が始まった。

イヤ冷静に考えたら入学式の日には授業があるってどういうことなのっ！ってか自己紹介まだですよ俺！

一時間目のIS基礎知識の授業が終わったところで殆どのクラスメイトが席を立ちフラフラと団体を形成していく。そんな中俺と転生者は完全に動きがシンクロしていた。

教卓の真ん前の席で項垂れている一夏君へと真っ先に近づいていった。

「おっすおっす一番目と二番目、俺が三番目の金城栗栖だ。気軽にクリスって呼んでくれ！」

・・・なにこの転生者良い奴。

「お、俺は織斑一夏だ。俺の事も気軽に一夏って呼んでくれ」

うん、なかなか好青年だな一夏君。だがしかし顔色が優れないのはいけないことだな、どんなときも平常運行で生きなければいけないよ・・・ええそうですとも、地獄の修行の成果ですともチクシヨウ。

「初めまして一夏君とクリス。鷺津翔だ。まあ好きに呼んでくれ」

「じゃあ麻雀で負けた奴で」

「チツ、チゲーし、あつ相手が悪かっただけだし・・・ってか微妙に違うし、俺は『づ』あっちは『ず』」

「あの初登場時の時点で中学生には見えない主人公の漫画か、一瞬何事かと思っちまったぜ」

「ロマンだよなくギャンブル」

「勝てる気しねえけどな」

「だよな。麻雀のルールは覚えたけど難しすぎて出来る気がしないって」

そんな初対面でするような会話じゃない会話をしていると後ろから「ちよつといいか」とキツめの声が聞こえた。

振り返ってみればワガママボディーに黒髪ポニテの美少女が！ただまあ少し目つきは悪いがソレは愛嬌だろう。そしてこの子・・・かなり強いな、その筋では有名なのだろうか。

「鷺津、知り合い？」

「んいや、俺は知らん。そっちは？」

「・・・ほ、箒？」

「なんだ、一夏の知り合いだったか」

「なんだ、一夏君の知り合いか」

「少し借りてもいいか？」

「どうぞどうぞ」

「では、廊下でいいか？」

「あ、ああ。じゃあ悪いけど少し行っ来て来る」

「ごゆっくり」

そして教室から出て行った一夏君とポニテ少女・・・箒とか呼ばれてたから箒嬢でいいかな。二人を見送って・・・

「モーゼみたいな光景だなありや」

「すげえ、人ごみが避ける光景なんて初めて・・・でもないか」

体育館で千冬先生に説教される少し前に千冬先生相手にも道を開けてるのを見たな。

「で、時に鷺津君や？」

「いきなり何ぞやクリス氏？」

「IS学園って・・・女子のレベル高くね？」

「都会って感じがしますなあクリス氏！・・・うっぷ」

「え、どうしたん急に」

「化粧とか香水の匂いとか意識したら気持ち悪くなってきた、リバー
スしそうだからトイレ行って来る」

「お、おう・・・気つけてな鷺津」

よかった、俺の時もちゃんとモーゼごっこしてくれた。さて、男子
トイレは・・・遠いな。

タツプリ吐いて帰り道の途中にあった自販機で水を買って飲みな
がら女子生徒達とモーゼごっこをしつつ教室に戻ったらなんかクリ
スが女子三人組に囲まれていた。内一人はなんかダボダボな袖、通称
『萌え袖』をしているが・・・見ていて袖をまくってやりたくなる感情
に駆られる。

「ただいまクリス、モテモテだな」

「わ、鷺津！たすけ、助けてくれ！」

声をかけたらなんか知らんが急に抱きついて来てそのままの流れ
で俺を盾にしやがった・・・うわっ！クラスと廊下に居る女子の数人
の目が光った！

「とりあえず離れろ、話はソレからだ」

俺はホモオを見かけたら踏みつけることを信条にしているんだ、流
血沙汰になりたくなければ離れる事だな。

「すまん、だが・・・俺は実は女子は苦手なんだよお」

「男の方が好きとかそういうんじゃないよなテメエ！」

「それは違う！断じて違う！普通に女子は好きなんだが・・・」

「なにがあつたかは深くは聞かないがとりあえず落ち着け。クラスメ
イトも困ってる」

一部は涎垂らしてるけど・・・やめろ！鷺×金とか言うの止めろ！
逆も止めるんだ！ついでにと言わんばかりに一夏入れんな！駄目だ
腐ってやがる、遅すぎたんだ！

「あ、予鈴鳴っちゃった！」

「戻んなきゃ先生に怒られる！」

「でももう少し見ていたい！」

「先生に叱られるのと目の前の楽園・・・後者だな！」

後者だな（キリツ）じゃねえよ戻れよ！

その後は人ごみも去り、どこかに行っていたクラスメイトも戻って来たり、一夏君が千冬先生に叩かれたりあったが、授業中です。

「であるからしてISの基本運用は国家の認証が必要であり、枠内を逸脱した運用をした場合は刑法によって罰せられ——」

先生してる山田先生は可愛いが大人な感じが確りと伝わってくる。うん、説明も分かりやすいし良い教師だな本当。

ただ一夏、お前はなにをさつきから挙動不審なんだ。俺と目が合っ
て手元を確認してガツカリするのはやめるんだ。隣の女子を見るな
ビツクリしてるだろ、女子も女子でなんかまんざらでもなさそうな雰
囲気を出すのは勘弁してくれ、他の女子達が集中できないだろう。

それすなわち山田先生の授業の妨害以外何物でもない！

「織斑くん、何か分からないところがありますか？」

ほーら山田先生良い教師だから放っておけないんだよ、妨害か？妨害
なのかテメエ。

「あ、えっと」

「分からないところがあつたら何でも聞いてくださいね。なにせ私、
先生ですから！」

胸を張ってたわわに実つた二つの果実を振らすのは止めてください
い、一部の女子生徒達が自分の胸を触って落ち込んだり舌打ちしたり
怖いです。

だがクリス、テメーは駄目だ。ハアハアすんなムツツリかよテ
メエ。

「先生！」

「はいなんでしょうか織斑くん」

「殆ど全部分かりません！」

よろしい、ならば誅伐だ。誰か魔術が施された水銀持つてこーい！

「え・・・・・・殆どぜ、全部・・・ですか・・・」

山田先生が自信喪失しちゃったじゃないか！直訴だ直訴！

「え、ええと、織斑くんの他に今の段階で分からないって人はどれくらい居ますか？」

織村以外いかなあ……ってクリース！お、お前って奴は……そうか、一夏君に恥をかかせないためだな、俺は分かるぞ、お前は良い奴だ。

「……織斑、金城。入学前に渡した参考書は読んだか？」

「古い電話帳と間違えて捨てました」

「読み終わった漫画雑誌と一緒に捨てました」

「必読と書いてあっただろうが馬鹿者共」

当然の如く出席簿で叩かれた二人だが……クリス、お前、マジか。こいつ等二人残念なイケメンなんてレベルじゃないぞ。大丈夫かよこの先。

「……鷺津、お前は大丈夫と言っていたよな」

「サ、サーイエスマム！自分の事前勉強は万全であります！サーイエスマム！」

「よろしい。二人は後で再発行をしてやるから一週間以内に覚える。いいな」

「いや、あの厚さを一週間で覚えるのは……」

「俺アレちよつと読んだだけで頭痛くなっただんですが……」

「やれ、そう言っただろう」

「はい……やらせていただきます……」

「いいか、ISは機動性、攻撃力、制圧力と過去の兵器を暗香にしのご代物だ。そんな兵器を十全な知識無く扱えば必ずどこかで事故が起こる。将来諸君等がそういった事故を起こさないための基礎知識と訓練だ。理解できなくとも覚えろ、そして守れ。規則とはそう言ったモノだ」

なんか成敗されて印籠出されて説教受けてる悪役みたいになつて
るが……実際あれを一週間ではきつい。俺は早坂さんが居たから一
週間と半分ですんだが居なかったら一月は掛ってたんじゃないか
な……まあ時間が掛つたのが俺は脳筋だからってのもあるだろうけ
ど。

それにしてもつかれたなああの追い込みは、ISなんて生涯で接する予定も無かったはずなんだけどなあ・・・

「貴様等、『自分は望んでここに居るわけではない』と思っているな」
「そらそーですよ、当然じゃないですか。俺はただ森の中走って竹刀振って適当にサラリーマンになつて適当に生きようと思つてたんですから。」

「人は望む望まざるに関わらず集団の中で生きなければ鳴らない。それすら放棄するのなら先ず人を辞めることだな」

要略すれば『人間辞めたかつたら私を超えてみる』つて事ですよね
分かります無理です。石仮面でも使わない限り・・・使つても勝てるかどうか、つまり無理です。

「え、ええつと織斑くんと金城くん。分からないところは授業が終わつてから放課後に教えてあげますから頑張つてくださいね？ねっ？」

ああ胸の前で両手を握り締めちやつて山田先生可愛いなあ。

「あ、でも織斑くんは織斑先生の弟さん・・・という事は・・・」

「あーあーんんっ。山田先生授業を」

「ひゃっひゃいー！」

一夏め、さつそく山田先生フラグを建てやがったな・・・いやこれは千冬先生が建てたというべきか？だとしたらこの学校全体に千冬センサーフラグが乱立してるぞ。

あ、こけた山田先生も可愛い。

原作イベントに巻き込まれたようですよ

山田先生を内心ニヤニヤしながら見つっつノートを取るという充実した学生ライフを過ごしている俺です。やっぱり癒しは大事だね。都会の荒んだ生活には必要不可欠だよ。

「し、翔……勉強教えてくれよ」

「そーだそーだ！男三人の中で一人だけ勉強付いていけてる逆に置いてきぼりされてる感じしないのか！」

「ねーよ。勉強に関してはお前等の不注意だろうが、正直言って学校通いながらあの参考書を一週間で覚えるのは無理だと思うけどな」

「思うなら織斑先生にそう言ってくれよ！」

「言えると思うか？言ったとしてもお前等みたいに視線だけで叩き伏せられるだけだ」

目と目が合ったら死を覚悟するレベル。日本刀が命を刈取る形をしていると錯覚するレベル。

「世界最強つてすごい、改めてそう思った」

「自己紹介の時もネタに走ったけど同意見だ。宗教かな？」

「どーだ俺のねーちゃん凄いだろー」

「無理するな一夏」

「そんな泣きそうな顔で言われたらこっちまで泣きそうになるわ」

なんだろう、有名人の家族ってこんな感じなのか？

「ちよつとよろしくて？」

「へ？」

「は？」

「後ろから話しかけるなんて礼儀知らずは誰だ！」

振り返ると金髪ドリルが居た……。どっからどう見ても金髪ドリルだ、お嬢様キヤラだ。なんかどこも無くチョロそうな雰囲気がある。金髪ドリルなんてツンデレじゃん？この目つきとかどう見てもツンデレの目つきですわ。

「そちらの貴方達は聞いているのかしら？お返事は？」

「あ……ああ、聞いているが、どういう用件だ」

「スルーされてるwwwスルーされてるwwwねえ今どんな気持ち？」
「ええワツシー今どんな気持ちwww」

「すごく……どうでもいいです」

「どうでもいいって……ちよつとソレはどうかと思うぞ」

クリスとそんな会話をしているとこっちの事をガン無視して「まあなんですのそのお返事は！私に話しかけられているだけでも光栄なのでですからそれ相応の態度という物があるのではないかしら？」とか隣で喚いているが一夏君に投げっぱなしジャーマン！面倒な奴の相手はしないに限る！一人称『わたくし』とかどんなキャラ作りですか？

「これは駄目ですわ」

「どこが？これはこれでありだと思うが？」

「自分の常識を他人の常識とか考えてる時点で無理ですわ」

「そりゃ日本人じゃないから仕方ない。そもそもそういう相手と話す時はこっちが大人になってやろう」

「女子とまともに話せない奴がどの口で言うんだよ」

「はっ話せないわけじゃねーし！男より女子の方が人数多いと駄目なんだよー」

「お前のポリシー訳分からん」

「なあお前等」

「ん？いきなりどうした一夏」

「お前等教官倒した？」

「ハッハッハ！何を言ってるんだ一夏、当然じゃないか！」

「……じゃあ翔は？」

「お前モノ考えてから言ってる？」

「そりゃ俺だつて考えて発言してるぞ……ってかなんでそんなに怒ってるんだ？」

「お前の姉貴とか勝てるわけねーじゃん！勝ったクリスお前人間じゃねえだろ実はー」

「ハッ、ハア!?俺が戦ったの織斑先生じゃねーし！ってかなんでお前織斑先生と闘ってるの!?!」

「ち、千冬ねえと翔が・・・あ、IS使つてだよな？」

「当たり前前だろ！IS使わなかったら戦いにもなりやしねえわ！手加減されてハンデ貰った挙句相打ちだよ！」

「あ、相打ち！相打ちですって！あの織斑先生を相手に！それだけでも許せませんのにそっちの貴方達は勝ったというのですか！」

「圧勝」

「うんまあ、多分」

ピースするな煽るな馬鹿か。こういうのは放つとけばいいんだよ。構うな畜生。

「当然！たぶん！たぶんってどういう意味かしら！」

「えーと、落ち着けよ・・・ほら、な？」

「こっこれが落ち着いていられまっ——」

あ、チャイム鳴った。いいよー、いい仕事したよー。

「っ！・・・また後で来ますわ！逃げ出さないことね！よくって!？」

よくねーよ。

「それではこの時間は実践で使用する各種装備の特性について説明をする」

うわーい千冬先生の授業だーやったー・・・山田先生なら教室の端っこで立ってるよ。

「はずだったが！その前に再来週行われるクラス対抗戦に出る代表者を決めないといけないのだ」

代表者、所謂『生贄』ですねわかります。寝てたりすると勝手に決められるアレですよ、中学時代それで任命されて大変面倒でした。「クラス代表者はそのままの意味だ。対抗戦だけではなく生徒会の開く会議や委員会の出席・・・呼び名は違うがクラス長だな。ちなみにクラス対抗戦は入学時点での各クラスの実力推移を測るモノだ。今の時点では大した差は無いだろうが競争は向上心を生む。一度決まると一年間変更は無いからそのつもりで」

競争は向上心を生み、ソレと同時に嫉妬や妬みも生みます。ソースは早坂さん。女子はそう言った面で大変らしいね。『私の暗黒面が

育っていく』とかたまに呟いてて怖かったわ。

「はい！私は織斑君を推薦します！」

「私は金城君を！」

「ついでに鷺津君を！」

「ついで！俺……ついで！……ま、まあ俺つてイケメンじゃねーし、わ、分かりきってた事だし……悔しいです！」

「では候補者は男子三人でいいのか……他にはいないのか、自薦推薦は問わんぞ」

「えっお、俺っ!?!」

「いまさら気付いたのか一夏君が立ち上がるが、おそくね？彼つてもしかしなくても天然？」

「織斑、席につけ。さて、他にはいないのか？いないのなら一先ず三人で決定して次へ進むぞ」

「ちよ、ちよっと待った！俺はそんなのやらない！」

「自薦推薦問わずと言った。他薦された者に拒否権など無い。選ばれた以上は覚悟しろ、いいな」

「い、いやでも……」

正直言おう、横暴だ。千冬さん、いくら弟といえど彼は生徒で貴方は教師、そしてここは学校であり教室だ……この状況を生放送したらどれだけ反響が起こることか……

「待ってください！納得がいきませんわ！」

机を叩いたと同時に立ち上がったのは……金髪ドリル、名前は聞いてないし、俺に対して自己紹介もしてない。俺はな！俺に直接自己紹介した奴の事しか覚えねえことにしてるんだ！

「そのような選出は認められませんわ！大体、男がクラス代表だなんていい恥さらしですわ！私に！このセシリア・オルコットにそのような屈辱を一年間味わえとおっしゃるのですか!?!」

うん、そう思うなら自薦しようぜ？今のままじゃ『自分の意見言ってるだけの一生徒』だぜ？

「実力から行けば私がクラス代表になるのは必然。それを物珍しいからというだけの理由で極東の猿にされては困ります！私はこのよ

うな島国までIS技術の修練に来ているのであって、サーカスをする気なんて毛頭ございませんわ!」

クラスメイト殆どからの視線がパーフェクトフリーズになってることに気付かずに彼女・・・オルコットさん?は発言し続ける。

「いいですか!クラス代表は実力トップがなるべき、そしてそれは私ですわっ!」

ならクリスなんじゃなからうか、勝って当然とか言ってたし・・・アイツ誰と戦ったんだ?

「大体、文化としても後進的な国で暮らさなくてはいけないこと自体、私にとっては耐え難い苦痛で——」

「イギリスだつて大してお国自慢ないだろ。世界一まずい料理で何年覇者だよ」

「イギリスとかwww植民地もまともに支配できてない馬鹿ですしおすしwww」

うん、こいつ等なんなんだ。まあ煽られたから煽り返したくなるのは分からんでもないがクリス、『相手と話す時はこつちが大人になってやろう(キリッ)』とか言ってたお前はどこに行つた。・・・俺も乗るか?・・・いや、駄目だろ。よし、こうしよう。

「それは失礼だぞ一夏、クリス。イギリスにも良い物や良い事もあるさ、ロンドン塔だろ?ビックベンだろ?タワーブリッジだろ?・・・ピーターラビットの作者さんやシャーロックホームズの作者さんの出身国だ・・・たよな?」

「おまつ!これだけ言われてなんとも思わないのかよ!」

「そーだそーだ!それでも日本人か!」

「そんな反応してるからサルとか言われるんだよ。もう少し理性的に生きようぜ?実際ピーターラビット、面白いだろ?」

「ふ、ふふつ。あら、そちらのお猿さんはまだ話しが分かるようですね」

あ、千冬先生がニヤついている。きっと俺のやりたいことが伝わったんだろうなあ。他の女子の中にはニヤついているもの居るが、鷹の目で見たら赤で表示されたか。まあ多分『この男、女の意見に従うどこ

にでも居る弱い男だ』とか思ってるんだろ？残念俺は女尊男卑とは程遠い世界（田舎）で生きてきたんだ、そんなもん知らん。

「勿論ソレと同じように日本も良い国だ。何が良いつて四季がある、他の国には見られない風情のある光景だな。まあ今の日本で一番有名なものと言えばＩＳなんだがな。なんと言つても開発者が日本人だ、そしてそのＩＳを使った競技の初代優勝者も日本人、それも刀一振りですすよね千冬先生」

「うむ、一年ほど滞在したドイツも良い国だったぞ。何が良かったかと言えばビールが上手かったしＩＳの技術も良く進んでいた。生憎イギリスには訪れたことが無いから知識だけとなるがな」

「そんな事言つたらそもそも日本の事自体良く知りませんよー、生まれて今まで北海道で野生育ちですから」

「私だつて同じだ。生まれ育つた場所とドイツとＩＳ学園しか知らん、他の国にも行つた事はあるにはあるが批判できるほど長く居たわけではないからな」

俺の取つた行動、それは人生経験豊富で説得力のある人の発言によつて自分がどんな事を行いをしたのかを自覚させる事だ！

いくら『女尊男卑』だろうが『女性』である千冬先生の意見はろくに否定も出来ないだろう。それもただの女性ではない、『世界最強』だ。俺が女でも意見はしない、死にたくないからだ。

ま、日本人なら通じるとは思うけど生憎相手日本人じゃないしな。所詮田舎育ちの浅知恵よ。うちの田舎には良心持った人しか居ないからなあ。余所者？過疎ってるから大歓迎ですよ、俺はな！大人は知らん。

「うっううう。けつ、決闘ですわ！」

「・・・いいぜ、四の五の言うより分かりやすい」

「フルボッコにしてやんよｗｗｗ」

「クリス、その喋り方はウザイからやめろ」

「はい」

「一応言っておきますけれど、わざと負けたりしたら私の小間使い・・・いえ、奴隷にしますわよ！」

「侮るなよ、真剣勝負で手を抜くほど腐っちゃいない」

「手、抜かなきゃ瞬殺なんですけどね」

「そもそもISに慣れてないからな、真面目にやってもぶっっちゃけ勝てるかどうか」

「あら、そちらの方は自覚しているようで」

お前、俺がハンデ在りとはいえ千冬先生と相打ちになったこと忘れてね？ 呆れて物言えんわ。

「で、ハンデはどれくらいつける」

「あら、早速お願いですか？」

「いや、俺がどれだけハンデつけたらいいのかなーって」

一夏がそう言った直後、クラスのほぼ全体から爆笑が響いた。

「お、織斑くん、それ本気で言ってるの？」 本気なんじゃないかな？

「男が女より強かったのって大昔の話だよ？」 大昔って言っても十年前くらいだけだな。

「織斑くんや金城くん、鷺津くんは、それは確かにISを使えるかもしれないけど、それは言い過ぎよ」 所詮ISなんて、初心者俺がハンデ在りの千冬先生と相打ちになる程度の物だ。機体スペックや搭載兵器等の条件次第では弱者が強者を越える事も出来るって事知らないのか。

「男と女が戦争したら三日持たないって話だよ？」 さて、三日持たないのは男と女のどっちかな！

「じゃあ、ハンデはいい」

「ええそうでしょうそうですね。むしろ、私がハンデを付けなくていいのか迷うくらいですわ。ふっ男が女より強いだなんて、日本の男子はジョークセンスがあるのね」

「ねえ織斑くん。今からでも遅くないよ？ セシリアに言って、ハンデ付けて貰ったら？」

「男が一度言い出したことを覆せるか。ハンデは無くていい」

「え？ 一夏ハンデ付けねえの？ じゃあ俺付ける」

「あら、そちらはハンデが欲しいのですか？」

「だから、俺『が』ハンデをつけるんだよ」

「えー？ それは代表候補生を舐めすぎだよ二人とも。それとも、知らないの？ 鷺津君は知ってるみたいだから負けを認めてるんだし……」

「では金城のハンデは自分で考えろ」

「了解しました！」

「ここまででは良かったんだよ。ここまでは……」

「鷺津、お前もハンデをつけてやれ」

「あるえーこつちに飛び火してきたぞー」

「扱う機体はラファール・リヴァイヴ。使用武器は火器のみ、近接武器は禁止だ」

「……拳銃なんて撃つたこと無いんですけどどうすれば」

「なに、これから特訓すればいいだろう？ そのための場所はある」

「……慣れてない武器で強い奴が相手……負け確でね？」

「条件は私と戦った時と同じだ……時に鷺津、貴様一夏達には『私と相打ち』と言ったそうだな」

「いやー盛ったのバレちゃいました？ 正直アレって俺の負けですよね」

「いや、お前の勝ちだ。言っただろう、『五割まで』削れと」

「……その後修正しませんでしたっけ？」

「あれはリップサービスという奴だ。条件は厳しくしたほうが気合が入るだろう」

「疑問系ではないのはこれいかに」

「気をきかせたのかなんなのか知らないけど近づいてきて小声で話してたけど……一夏、何でお前は嫉妬したような目で俺を見てるんだ、他の女子達もその目は止める、代わって欲しいとか言うな死ぬぞ……主に千冬さんの覇気を間近で受けたお前がな！」

「さて、話は纏まったな。では勝負は一週間後の月曜。放課後、第三アリーナで行う。織斑とオルコット、鷺津はそれぞれ用意をしておくように。金城は自分で考えたハンデをまとめて提出するように……では、授業を始める」

「さーて、この重ツ苦しい雰囲気の中授業が始まりますよー。なんか

オルコット？はぶつくさ文句言ってるし、女子は半笑いだし・・・山田先生助けて下さい！

原作三人娘と知り合いましたよ

決闘することが決まった授業も終わり、のんびりと頭を抱えている一夏の元へと歩いていく。

「い、意味がまるでわからん。なんでこんなにややこしいんだ」

「同意見だぜ一夏、もう俺覚え切れねえ」

「千冬先生も言ってたけどISはあくまで『兵器』だからな、お前等だつてIS運用中に事故が起きて腕無くなつたりしたらイヤだろ？誰だつてイヤだ、俺だつてイヤだ、だから自分のために覚える。オーケー？」

「そうだな・・・指一本無くなるのもイヤだ」

「指無くなつたら義肢とかでも・・・」

「その義肢から上の部分が無くなるぞ？」

「・・・徐々に輪切りになっていくとかなにそれこわい」

「怖いっつーかグロッ！」

「そうなりたくないや覚えろ。どのみち覚えなきや千冬先生からの愛の鉄拳だ」

「俺の脳細胞がまた死滅する！」

「一夏・・・お前そんな事考えてたのか。ある意味スゲエな」

正直脳細胞云々言う前に頭蓋骨が陥没したり、血管が潰れたり。そっちの方が現実味あるな。

「つてか翔！お前千冬ねえのことなんて呼び方してるんだよ！」

「突然起き上がるな怖いぞ。それに、この呼び方自体千冬先生に許可された呼び方だ。文句があるなら千冬先生に言え」

「・・・無理」

あの反応（千冬さんからハンデ云々の時）この反応（今机から起き上がった事）・・・コイツ、さてはシス魂か！まあ確かに偉大な方ではあるが・・・うむ、無駄なシスコンっぶりだな。

さて、暇だ・・・暇なので少し教室を見渡せば居るわ居るわ、廊下にも教室にもこちらを見てヒソヒソ話している女子達。

そんな中、異色を放っているのは一時間目終了の休み時間でクリス

に話しかけていた女子三人組だ。というか一人だ。

萌え袖ガールは俺と目が合った事に気付いて此方にダボダボの袖を振り回して手を振っている・・・のか？

そんな彼女の方を両側から抑えている女子二人。短めの茶髪の子と長い黒髪の子だ。しかしまあなんだ・・・あの萌え袖っ娘は子供っぽくて可愛いが、他の二人も地味っぽい感じがしつかり可愛い。クリスの言うとおりIS学園は女子レベルが高いな・・・この画像を投稿したら『リア充爆発しろ』と叩かれる事請け合いだ。

そんな彼女らに向かって俺は『こつちおいで』の意味を含めた手招きをする。

地味可愛い子二人がポカンとしている間に萌え袖っ娘が拘束を抜けて此方へパタパタと駆け寄ってくる。

「えへへ〜ワシワシよんだ〜？」

「呼んだ呼んだ。早速だけど改めて自己紹介をしよう。鷺津翔です、一年間よろしくお願いします」

「おく私は布仏本音って言うんだ〜よろしくね〜ワシワシ〜」

「よろしくね、本音嬢。うん、良い友好関係は自己紹介からだ。というわけでお前等も、ほれ」

「あ、ああ・・・でもいきなり何でだ？」

「ういつ！お、俺もか！」

「お前等に一つ聞こう。彼女の名前、覚えてたか？」

俺の一言に男二人は視線を逸らす。安心しろ、俺も知らなかった。「というわけだ、そつちの二人もこつち来なよ。本音嬢の友人なんだろう？」

せめて・・・せめて！顔はイケメンじゃなくても雰囲気だけは！性格だけはイケメンで居たいじゃないか！爽やかな雰囲気出したいじゃないか！・・・うん、モツサリ男子の俺には無理だな。

だがしかし！その二人が恐る恐るこつちに来てくれたのが救いだ。いや、コレひよつとして俺脅しちやった？ビビらせちやった？・・・いやいや、今の時代都会では男より女の方が偉いんだろ、なら拒否してくれてもいいのよ？

「え、ええつと・・・どうしたのかな鷺津くん」

「いやなに、本音嬢とは友人になった訳だ。友人の友人と知り合いたいと思うのは当然じゃないか？」

「え、う、うん。まあ一理はあるよね」

「それにこっちに興味持ってたようだからね、俺だけじゃ華が無いだろうからイケメン二人をご案内しようと思ったわけだ。メインはあいつ等二人ね」

そう言ってから二人の方を見ると本音嬢と話している二人の姿が。クリスマスはどの段階で挙動不審になるのか少し疑問になってきた。

「じゃ、改めて。鷺津翔です。一先ず一年よろしくしてくれと助かる」

「た、谷本癒子です！」

「夜竹さゆかです。こちらこそよろしくお願いします」

「うん、谷本さんに夜竹さんね、覚えた。それと、一番初めの休み時間は悪かったな。クリスマスと何か話してたんだろ？」

「いやー本音が話しかけようとしたらビクビクしちやって」

「なんかトラウマあるらしくてさ、許してやってくれ」

「鷺津くんは金城くんとはお付き合いが長いんですか？」

「んいや、今日知り合った。男なんて能天気なもんでね、同じ境遇ってだけで親近感が湧いてくるんだよ・・・まあそれは置いといて、今はクリスマス普通に話せてるだろ？どっから挙動不審になるか・・・気にならないか？」

「なる！私達の時は三人だったからかな？」

「でも今は織斑くんも居るから変わってくるんじゃないの？」

「ソレを調べる。では先ずは谷本さん、行ってらっしゃい」

「うん、少し話してくるね」

・・・ノリが良い子で助かるわ。体育会系つつうの？今隣に居る文型っぽい女子はどうも苦手だ。

「鷺津くんは勉強は大丈夫なんだね」

「ん？おお、友人にタツプリ仕込まれてきたからなー・・・IS学園自体は受験したらしいんだけど落ちたらしくてね、すっごい凹んでた

よ」

「というのは早坂さん本人の弁。俺から見た彼女？俺に八つ当たりしてて楽しそうだった。」

「その友人さんのことは残念でしたね」

「いや・・・その死んでるみたいない方は止めてくれよ、彼女まだ生きてるからね？」

「あ、ごめんなさい。別にそんな意味では無いんですよ？」

「いや分かってるけどね。そういう夜竹は授業どう？」

「私や布仏さんはまだ付いていけてるけど、谷本さんは・・・少し苦勞しているっばいね」

「ま、偏差値的には他の学校よりも断然高いから入れただけで十分優秀なんだろうけど専門的な分野はそういうのとはまた違うからなあ」「その言い方だと、何か専門的なことを学ばれていたんですか？」

「発覚してからI.Sの整備とかをその友人にね。彼女自体バイク屋の娘だったしそういうのに興味があつたんだろうね。教わった代わりに『絶対整備科に入れ』って言われて送り出されたさ」

「そうなんだ、整備科って言えば布仏さんの友人がそつちを目指してるらしいよ」

「なんだ、やつぱり居るんだな。うん、少し心が軽くなったよ、ありがとう夜竹さん」

「さゆかつて呼んで。もう私達友人だし」

「じゃあさゆか嬢。そろそろ行ってみようか？」

「ええ、では行つてきます」

あ、さゆか嬢に挨拶されてキョドった・・・ああなるほど、人数の比率が男へ女になると駄目なのか。にしてはクラス代表を決めるときは饒舌だったな、俺一夏クリスの三人へほぼクラス女子全員だったろうに・・・まあそろそろかわいそうだから入ってやるか。

「さーて自己紹介も済んだし仲良くやれてるじゃないかクリス」

「仲良くやれてるじゃないか、クリス（キリツ）じゃねえよ！怖いだろ！こういうのもう止めろよな！」

谷本さんとさゆか嬢の間を強引に抜けて俺の胸倉を掴んで叫んで

いるクリスマスだが・・・

「悪かったな。もう狙ってはしない」

「ああ、織斑くん、金城くん。まだ教室にいたんですね・・・よかったです」

「狙って、はな」

なにやら一夏君とクリスマスを探している山田先生が合流。胸倉を掴んでいたクリスマスは流れるような動きで俺の真後ろに陣取った。

「え、ええ！なんですかその反応！先生傷つきますよ！」

「あ、あー、ああ、先生すみません・・・ま、まあちよ、ちよつとしたトラウマからです、すみません、すみません」

コイツホントになんなんだ・・・

「で、山田先生。何用ですか？」

「ああ！そうでした！お二人とも寮の部屋が決まりましたよ」

「俺の部屋まだ決まってないんじゃないんですか？前に聞いた話だと、一週間は自宅から通学してもらうって話でしたけど・・・」

「お、俺も俺も！なして！どして!?!」

「そうなんですけど・・・事情が事情なので一時的な処置として部屋割り無理矢理変更したらしいです。お二人共その辺りの事って何か政府から聞いてますか？」

そう山田先生が聞くと、男二人は顔を見合わせたついでにこつちを見てきた。

「山田先生、翔の部屋はどうなんですか？」

「そうですよ、なんでコイツだけ聞かれないんですか？」

「ええつと、それはですね——」

「俺は結構前から入学前日にIS学園入りって話になっててな、少し無理を言う形だったけど先生方が頑張ってくれたらしい」

「じゃあなんで俺達に連絡無かったんだ？」

「さあな、俺の事だけに集中しすぎた結果？・・・まあその辺はどっかに投げ捨ててひとまず先生の話を聞こうぜ？」

「ありがとう鷺津くん。そんな事と政府特命もあつて、とにかく寮に入れるのを最優先したことにより、部屋割りに関してお二人は別々の

部屋に入ることになりまして・・・」

一夏は少し不安そうな顔をしているが隣の奴の顔の方がヤバイ。顔面蒼白だ・・・お前二人つきりでも駄目なのかよ、さつきは織斑&お前||本音嬢&谷本さんでちゃんと会話できてただら。

「だつ大丈夫ですよ！一ヶ月もすればお二人の相部屋が用意できますから、それまで暫らく我慢してくださいっ！」

「あの・・・山田先生、さつきから耳に息がかかってくすぐったいんですけど」

それは一夏、お前だけだ。クリスは俺の真後ろにいるし、俺は関係ないし。

「あついやっ・・・これはそのつ別にわざととかではなくてですねっ！」
「分かってますよ。けど部屋は分かっても、荷物は今持ってないですし・・・」

「家族にも連絡入れなきゃいけないですし。今日は帰っていいですか？」

「あついえ、荷物や連絡なら——」

「私が手配をしておいてやった。ありがたく思え」

うん、どこからとも無く某竜で物語の三作品目なゲームのラスボス戦のBGMが聞こえる・・・俺、疲れてるのかな。

「ど、どうもありがとうございます・・・」

「まあ生活必需品だけだな。着替えと、携帯電話の充電器があればいいだろう」

それ、男の旅行荷物ですよ千冬先生。長期滞在は視野に入れてない男の道具一式です。

「金城の方はご家族方が用意してくださったぞ。感謝をするんだな」

「本当に、心のそこから・・・本当にツツ！」

千冬先生が引きずっているキャリーケースがソレか・・・天と地ほどの差だなこりゃ。

「じゃあ、時間を見て部屋に行ってくださいね。夕食は六時から七時、寮の一年生用食堂で取ってください。ちなみに各部屋にはシャワーがありますけど、大浴場もあります。学年ごとに使える時間が違いま

すけど・・・えっと、そのお・・・お二人は今のところ使えませんが、え、なんでですか？」

「混浴禁止！万歳！」

「お前は欲望に忠実だなクリスマス、お前見ると色々考えてる自分が馬鹿らしくなってるぜ」

「こっ！混浴っ！」

「きつ金城くんは織斑くんっ！女子と一緒に風呂に入りたいたいんですか!?だっ駄目ですよっ！」

「いついや！入りたくないです！」

「えっええっ！女の子に興味がないんですか!?そ・・・それはそれで問題のような・・・」

直後、教室が沸いた。いや、腐った。

「織斑くんって男にしか興味がないのかしら？」

「それはそれで・・・ありね！」

「まさか金城くんは驚津くんを狙っているのっ！」

「織斑くん・・・おそろしい子っ!!」

「それ以外にも中学時代の交友関係を洗って！すぐにね・・・明後日までは裏付けとって！」

女子達が歓喜の声を上げて行動する中、一夏が首をガタガタと動かしてこっちを見てくる。

「おい一夏、こっちみんな！」

「おいクリスマス、どの面下げてそんな台詞言ってるだテメエ吊るすぞ」

クリスマスの顔面に千冬先生を見て覚えたアイアンクロー！超！エキサイティンツ！・・・千冬先生は技マシンか何かか？

「や、やめっ！ヤメローシニタクナイ！シニタクナイツ！」

「え、ええっと、それじゃあ私達は会議があるので、これで。二人とも、ちゃんと寮に行くんですよ！道草くっちゃダメですよ」

「驚津。しばらく整備室で待機しておけ、職員会議が終わり次第向かう」

「ラジャー。なんか良く分かりませんが了解しました」

そして去っていく山田先生と俺に釘を刺してきた千冬先生の背中

を見送りながら掴んでるクリスを離す。悶えてるが知らん。

「今何時だ？」

「四時半とちよつとだな」

「食事まで一時間半か・・・一先ず俺は千冬先生に釘打たれたし言われた場所で待機してるわ」

「整備室でしよく私もいくよ」

「おー本音嬢、では共に行こうではないか！」

「まってね〜か〜んちやくん！」

かんちやくんつてのが誰か知らんが俺は本音嬢とのんびり行こうじゃないか。

「お前達すぐ仲良くなったな」

「どーだ！羨ましいだろ！」

「へっへっへ〜ドヤア〜」

「羨まけしからん！」

「クリスは何が言いたいんだよ・・・まあ直ぐに仲良くなれるのは羨ましいけどさ」

「そんなわけで〜私とワシワシは整備室に行くけど〜みんなはど〜する〜？」

「俺は・・・一先ず部屋に行く。荷物置きたいし、同室の人に挨拶しなきゃいけないし」

「俺もだな・・・流石にキャリアケース持ったままはな」

「じゃあ私も戻るわ」

「私も一回部屋に行くわ」

「ぶ〜私とワシワシだけ〜」

「まあまあ、楽しく行こうぜ！というわけで一夏君、クリス。谷本さんにさゆか嬢・・・連絡先教えてくれ」

「あ、そう言えば連絡先交換してなかったな」

「まるで数年来の友人と居る様な居心地の良さでスツカリ忘れてた」

「え、いいの！やったー！他の子達よりリードした！」

「実は私、男の人の連絡先は初めてなのよね」

さてと・・・うわっ・・・俺の携帯、古すぎ・・・？

原作ヒロイン（その七）と知り合いましたよ

自分の携帯と皆の携帯の世代差にショックを隠せないまま本音嬢ととぼとぼ廊下を歩いている俺です！

「そう言えば本音嬢、そのダボダボの袖は・・・サイズがあつてないのか？」

「ちがうよ！IS学園は制服を弄つてもへ〜きなんだよ〜」

「改造オツケーとかソレでいいのかIS学園」

「い〜んじやない？」

ふむ、では制服をアサシン風に改造してもいいのか！白と黒と赤の制服と白赤のアサシン装束は相性はいいだろうな・・・いや、改造するくらいなら下にパーカー着たほうが楽かね。

「ま〜常識的な範囲内〜って話だけどね〜」

「常識的な範囲内、なかなか難しい問題だな」

「服っぽかったらい〜んじやないかな〜」

「服っぽかったらか、フードは平気だよな・・・整備室で改造作業できるかね」

「購買にソーイングセットは売ってたよ〜」

「流石寮付きの学園だな、生活必需品は一通り揃ってる訳だな」

「あとはね〜下着とかも置いてたよ〜」

「男物の下着も早く入荷されるといいなあ」

「そ〜だね〜」

・・・あれ、この子つてもしかしなくても天然だよな。抜けてるなんて騒ぎじゃねえぞ！学校卒業した後とか大丈夫かこの子？

「か〜んちや〜ん！きつたよ〜」

そんな声を上げつつ少し先にある整備室へ走っていく本音嬢のダボダボの袖を目で追いつつ続いて整備室に入る。

中では本音嬢が空中に浮いたモニターに顔を向けている外に跳ねた青い髪と下縁眼鏡が特徴的な小さい子に話しかけていた。

俺の目的はそこじゃない！千冬先生に案内された時に中に入れてもらえてなかった整備室の状況を確認しよう・・・

といつても、教室にある机を少しゴツくした物が並んでいるだけの随分さっぱりしているモノだ・・・もつとなんかこう、油臭いのを想像してたんだが・・・そういやISって基本的にはデータがモノを言う代物だったな、こっちの方が正しい姿なんだろうが違和感を感じるのは俺が男だからだろうか。

「んくどくしたのくワシワシく？」

「んいや、整備室って聞いてたから工具の一つでもあるのかなって思ってたけど・・・よく考えてみれば部品自体は企業で作ってるヤツだし、そもそも自分用にチェーンするのって専用機持ちだけだしな、こんなもんか」

というかそもそも専用機持ちも自分でやるものじゃないだろうしな。企業だか国がバックアップなんだからそっちの道のプロが調整してくれるし、ヘタに手を加えたら悪化もするだろうし・・・

「本音・・・その人は」

「ああかんちゃん！ワシワシはねくワシワシだよ」

「紹介になってないぞ本音嬢。まあとりあえず自己紹介だ。第二IS男性操縦者の鷺津翔だ、本音嬢とか今日友人になった」

「ど、どうも・・・更識簪・・・です。本音とは、子供の頃から・・・です」

「これでワシワシもかんちゃんも友達だ」

「そんな訳でまあよろしく。ところで簪嬢、君のクラスは？」

「よ、四組だけど・・・どうかしたの」

「明日の昼休みから食事に誘いに行くからそのつもりで居てくれ」

「うん、私もかんちゃんと一緒にご飯食べたいよ」

「・・・ごはん、持ってきて」

「出不精の引き籠もりか！」

「ううくかんちゃんのやりたいことは分かっているけどくそれはく」

「学生的にどうかと思うぞ？・・・女子にとっての禁句だが・・・太るぞ」

「・・・体型なんかより、大事な事」

簪嬢が作業していた手を止め、突然顔を俺の方に向けてきたのでつ

い目を合わせてしまった。おっとりとした付きではあるが・・・うん、まあなんだ、言い方は違うが漢の目をしている。

さっきのハンデ云々を言っていた一夏と同じような目だ。

「オーケー気に入った。本音嬢の言う『簪嬢のやりたいこと』は知らんが俺に出来る事なら全力で手伝おう。ついでに勉強させてもらうぜ」「勿論私もね〜」

「うん、ありがとう・・・？・・・勉強？」

「俺はこれでも来年に整備科に入ろうと思ってるんだ。けど正直言つて・・・今、簪嬢が操作してる画面の三割程度しか理解できてないんだ。だから技術面で力になることは出来ないが・・・まあきつと役に立つだろう・・・た、立つよな？」

「だ、大丈夫だよ〜私よりは役に立つと思うよ〜」

「・・・本音は、居ると仕事が増える・・・」

「なにそれこわい」

「えへへ〜」

「褒めてはいない」

それからと言うものの、簪嬢が作業しているのを横目に本音嬢に制服の改造の仕方を教わったり、時折休憩に入る簪嬢と日常会話をしつつのんびり過ごしていると・・・

「鷺津、いるか」

手足が義肢の真っ黒い機械的な鎧に身を包んだ男のテーマが流れ始めた。

「お、織斑・・・先生」

「む？・・・ああ、更識簪か。作業は捗っているか？」

「え、ええ・・・順調、です」

「そうか。時に、もう時間が六時丁度だ、食堂に行って食事を取ると言い」

「え〜もうそんな時間なんですか！じゃあかんちゃん行く〜席が取られちゃうよ〜」

「あ、待って本音・・・引っ張らないで」

そう言つて簪嬢を連れて行った本音嬢に一つだけ疑問が湧いた。

ダボダボの袖のどこでどう掴んでだら簪嬢をひっぱれるんだ・・・？

「では鷺津、付いて来い」

「ラジャーです」

そして千冬先生に連れて行かれた先はなんとエレベーターに乗って地下へ行き、なんか知らんが受付のような場所に名前を書く。すると千冬先生が受付さんに何か小声で伝えると受付のカウンターの上に俺でも知ってるような拳銃が置かれ、生まれて初めて拳銃を見てフリーズしている俺を千冬先生が引きずって運んでいく。

「・・・スゲエ、射撃場だ。映画なんかでしか見たことねえや」
千冬先生に頭を叩かれ正気に戻った俺の目の前で広がっている光景は黒い板で個室のように区切られた場所と、その先に広がる真っ白な空間。所々紙製の的が上から吊るされているが・・・なんでそこだけアナログなんだよ。

「IS学園は様々な人種が集まる。それに、護身用の拳銃を持ち歩いている者も多い。更にはIS自体射撃を行う兵器だ、生身での経験はそのままISでの強みへと繋がる」

「何事も経験ってことですね・・・動かないで練習して動く相手に当てられますかね」

「そこはIS学園だ。これを付けてみる」

そう言っって千冬先生が差し出してきた保護ゴーグルを受け取り、恐る恐る装着してみると・・・

「なんだこりゃ、ゲームみてえ」

3Dデザインの的が射撃場の中を数個はフヨフヨと、数個は俊敏に、数個は瞬間移動をしながら移動をしていた。

「更識がつけていた眼鏡と同じだ、ゴーグル型のディスプレイと射撃場を管理しているコンピューターを繋ぐ事でよりリアルな射撃とスコアが表示される。とはいっても、先ほどお前も言った通りゲームのようなモノだ、実戦とは違うぞ」

「でも拳銃自体はコレ本物ですよね・・・」

「そうだな。それがどうした」

「・・・拳銃とか超怖いんですけど!」

「安心しろ。ISの方がもっと恐ろしい」

「そしてソレより恐ろしい千冬先生マジパネエ」

「・・・とりあえず撃ってみろ」

「了解しました」

一発、二発三発・・・ペ・・・ル・・・ソ・・・ナ・・・ッ!

「やめろ!」

「痛ア!」

なんとというか、ついノリでコメカミに拳銃当ててみたが千冬先生に引つ叩かれた。出席簿ではなく平手で。職員室に行つた時においてきたのかね。

「そんな事をすれば死ぬぞ・・・無論、私も同じだ」

「数少ない人間アピール要素ですもんね・・・人は撃たれると死ぬ」

「と言うか何故そんな事をしたんだ」

「いやー、なんと言うか現実味が無くてですね・・・拳銃とかまず触れる機会なんて無いですし」

「まあ普通に生きて居ればな。今日も言った通り、望む望まずにしろこういう世界で生きる事になるのだ、早く慣れろ」

「俺より早く慣れなきやいけない人間が近く居ますけどね」

「・・・ああ、アイツはな。鍛え直しの時期だ」

「・・・もう片方は?」

「アイツは企業所属だからな。元所属の日本代表候補に鍛えられたそうだから何とかするだろう」

「企業か、なら専用機も早く用意されそうだな」

「ちなみに一夏も早々に決まった。お前はまだだ」

「そりやまあ、俺は北海道の芋男ですし。一夏にいたつては『ブリュンヒルデ』でしたっけ?の弟ってネームバリューありますしねー」

乱射乱射!マガジン入れ替えて乱射!べっ別に嫉妬してるわけじゃないんだからねっ!チクショウ、ちゃんと両手で構えてるのに全然当たらん!

「しっかし上手く出来ないな、反動でブレるし・・・着弾までタイムラグあるし・・・正直殴った方が早いですよね」

「だが今回お前はそれだけだ」

「・・・別の武器って申請すれば貸してくれたりしませんかね」

「物による」

「手榴弾いっぱい威力の高い銃」

「手榴弾は分らんが、銃の方は段数が限られるが用意は出来るだろう」

「じゃあ頼みます。お仕事増やしてすみません」

「気にするな。ただ、手榴弾はどう使うつもりだ」

「まあ秘密で。銃の方は・・・形状は？」

「大口径のライフルになるだろう。拳銃でもいいが、まだブレるのだろうか？」

「銃底でしっかり固定しておいた方が使いやすいだろう、って配慮ですか？」

「そうだな。しばらく通うといい、他の生徒ならいざ知らず数少ない男の一人だ、気にせず練習しろ」

「・・・・・・つまり普通の家庭だと後で弾代請求されるわけか」

「国からしてみれば先行投資のようなものでいいのだろう。IS学園自体各国の援助によって成り立っているからな、各国の期待の表れなのか今年の援助額が跳ね上がったぞ」

「プレッシャーかけるのやめてくださいしんでしみます」

「お前は田舎の道場で竹刀振っている方が性に合ってるだろうからな」

「周りの事なんてどうでもいいんです、俺はただ何も気にせず体鍛えてたい」

「・・・そう言えば、今朝は奇妙な行動をしていたな」

「あ、見てたんですか？」

「そりやそうだよな、数少ない男が敷地内走り回ってたら誰だっけ見るよなそりや。」

「塔の頂上に登っていたな。次の瞬間見失ったが・・・どうやって登っ

「ただ」

「手をかけられる場所がアレばどこへでも。後は・・・飛び降りです」

「通りで消えたように見えたわけだ。だがこれからはやめておけよ、目立ちすぎる」

「ですよー」

全然手ごたえを感じなかったので早々に射撃場を離れ、千冬先生とも別れ、火薬の匂いが気になったので部屋でシャワーを浴びてから寝巻きのスウェットに着替えて食堂へ向かった。

食堂もどこと無く近未来的だが、まあ『ああ、食堂だ』ってぐらいの原型はある。

「時間ギリギリセーフ、危なかったな」

「お、鷺津もこの時間か？」

「クリス？そっちは何で？」

「いや、六時と六時半頃に二回来たんだが・・・女子がな」

「ああ、大量だったのか」

「今は落ち着いているとクラスメイトから聞いてな！」

「お前よく女子と話せたな」

「同室が夜竹さんでな！知り合いで助かったぜ！」

「お前もお前で大変そうだな」

「で、織斑先生に呼ばれてたけどなんだったんだ？」

「いや、代表候補との件でな。使うI Sと武器の制限を付けられた」

「へ？そんなに強いのかお前」

「まあ・・・普通？少なくとも俺の中の強い人達よりも断然弱い」

「いや織斑先生を比較にするなよ・・・そんなんじや強いやつも弱いぞ」

「そいや先生に聞いたけどお前は企業からI S提供されてんの？」

「あ、ああそうだよ。ここに来るまで一月弱そこで特訓してて、そのデータを元にして今専用機の調整中らしい」

「お前のハンデ、決めたのか？」

「遠距離攻撃禁止！お前は？」

「近距離攻撃禁止・・・拳銃とか使ったことねーよって話でな、さつき

まで射撃場に居た」

「射撃場とかあるのか！」

「千冬先生曰く、ISで使うよりも先に生身で慣れる……ってさ、あたらねーよクソが」

「話は後だ！時間がヤバイし食堂のおばちゃんが目線がヤバイ！」

「ああうん、さっさと仕事終わらせろって顔してるな……さっさと食べて帰ろう」

適当に頼んで適当に話しながら食べて食器下げてからお開きになった。クリスはクリスで「夜竹さんが部屋に友人呼んでたりしてたらどうしよう」とか震えてたが知ったこっちゃねえ。

一回部屋に戻り、スウェットからジャージに着替えた俺は今、

「砂が！砂があ！」

IS学園敷地内にある海岸でランニングしたり竹刀振ったりすぐそこにある森でフリーランニングしたり遊んでいる。

だってまだ七時過ぎちよつとだぜ？寝るには勿体無いし一夏とかクリスの部屋に行くのもなんか違和感を感じる今日この頃。

そして靴の中に入ってきた砂には異物感を感じる今日この頃。

だが他にも理由はある！決して遊んでるわけじゃないぞ！

なんか食堂からずつと後ろをつけて来てる人が居るんだよなあ……なんか手馴れてる感もあるし一体誰だよ。

原作ヒロイン（その六）は敵のようですよ

どうも、なんか一人で修行をするのに違和感を覚えて仕方ない俺です！

海岸に来てから一通りの修行を終え竹刀も袋に戻し、九時ごろだろうか、一休みしていたところどうとう動いた。

こつちくん、いやこつち来んな、マジで来んな。

「鷺津翔くん、よね」

来ちゃったよ、鷹の目で見たら金色に光る誰かさん。IS学園の女子制服に身を包み内側に向かうテンパの青い髪。自信満々な表情、何故か手に持っている扇子……

「どちら様ですか？」

見覚えはある、だが誰だテメエ状態。そんな俺の言葉を聞いてガツクリ項垂れる彼女。

「じゃ、じゃあ改めて自己紹介をしましょう。私の名前は更識楯無。この学校の生徒会長よ」

「どうも、改めまして鷺津翔です。更識って言うとは簪嬢の家族か」

「そうよ。妹がお世話になってるわね」

「ぶつちやけこれからお世話になるところだよ、知識面でな」

なんだろうなこの自称生徒会長、偽ってる感丸出しでスゲエム力つく。見てるとイライラしてくるんだがまあ一応年上だし我慢しよう。

「で、その生徒会長さんがこんな時間に何のようすで？随分とこつちを見ていたようすけど」

「あら、気付いてたの？なら話しかけてきてもいいじゃない」

そうやって彼女は扇子を片手で開き……『吃驚』と書かれている文字を見せ付けてきた。なんだよその仕込み……

「そう言うそつちこそ、気軽に話しかけるなんて簡単な事も出来ないんですかね。一夏とかだったら疑いすらしないでしょうが……率直に聞きますけど何の用ですか」

「そう焦らないの。せつかちな男子は嫌われちゃうぞ？」

もう帰るわ、我慢してみたけどダメだコイツ。特に問題を先延ばし

にするあたりが政治家っぽくていけ好かない。

「ちよつちよつとどこ行くのよ!」

「帰るんですよ。時間も時間ですし汗もかいちまいましたし」

「ま、待ってよ!待ちなさいよ!」

「じゃあ用件言ってくれませんかね。俺は茶番に付き合う気なんて無いんで」

「・・・全く、本当にせっかちなね」

帰る。

「だから待ちなさいって!ああもう話せばいいんでしよう!」

「おせえですよ。次ふぎけたらマジで帰りますからね」

「もうほんとに・・・じゃあ聞くわ」

俺は、次の言葉に衝撃を受けることになる。

「貴方は・・・『アサシン』なのかしら?」

衝撃は受けた。だが突然前世の記憶がインストールされた経験のある俺はうるたえる事無く、一度溜息をついてから察への足を進めることにした。

「違うのならそうと言って欲しいのだけど?」

「夜中に突然現れて初対面の相手に『暗殺者ですか?』って聞いてくる厨二病患者の知り合いなんて居ないんで話しかけないで下さい」

「ちつ違うわよ!本来の意味でのアサシンよ!」

「・・・本来の意味のアサシンってなんですか。『実はアサシンは暗殺者じゃなかったのさ!』『な、なんだってー』ってやり取りでもしたかったんですか?残念好感度が足りません」

「好感度が高かったらそんな反応されてたの!」

「知り合いなら『まあネタでやってんだな』くらいですけど・・・流石に友人の姉がやっているのを見ると・・・俺は簪嬢に報告しなければならぬ」

「君のお姉さん厨二病だけど頭大丈夫?」って聞くつもりなんでしよう!簪ちゃんに!簪ちゃんにっ!」

知り合いならネタに乗っても良かったけど・・・うわあ、うわあ・・・
「そ、そんな残念な人を見るような目で見ないで!」

「残念、これは非常に残念で手遅れな人を見る目です」

「悪化してるわよー」

一通り弄ってみたがなかなか反応がいい。そして自己紹介の時みたいに仮面は被ってない。まだ今の方が好感を持てる。

鷺津翔の 更識楯無に たいする 好感度が 上昇した

「んんっ！さて、本題に戻るわよ。朝の一件、あれは私達の知るアサシンなら出来る事。いえ、私達の知るアサシンしか出来ない事なのよ。それを、どうして君が出来たのかなって疑問に思ってるね」

「もし、俺がそのアサシンってのだったら？」

その言葉の直後、

「こうするわ」

そう一言呟いた彼女が、視界から消えた。それに反応して、俺の体は本能的に真後ろに飛びのいた。

少し広がった視界の中では先ほどまで俺のいた場所で畳まれた扇子を空へ掲げ、ドヤ顔から次第に表情を変える彼女が居た。

「あ、あれ・・・え？・・・な、なんで？」

「いやなんでって・・・ぶっちゃけこっちの台詞なんですけど？」

仮定の話をしたら喉を扇子で突かれそうになった件について。まあ避けなかったら完全に喉突かれてるよね。いやー師範にボコられてて良かったわ、山走り回ってるだけじゃ今の避けれなかったな。やっぱり物事経験ですな！・・・あの人の攻撃本能的にも避けられないのが多かったけど。

「俺が仮にアサシンだったら敵って事で、ファイナルアンサー？」

「ふ、ファイナルアンサー・・・」

「・・・あんたは妹の友人に扇子で殴打してくるような危険人物だと彼女に伝えなければいけません」

「ええ！違ったの！絶対そうだと思ったのに！」

「大体なんですかアサシンって、マジで厨二病？なんなの？その扇子が実は『聖剣が聖気を失ってる姿』とか言い出すんですか？風とか操っちゃう感じですか？」

「違うわよーわ、忘れなさい！」

「つてか大した確証もなく敵認定して襲つてくるとか完全に危ない人ですわ」

「なっ！だ、だって貴方が悪いのよ！大した確証も無いくせにアサシンの修行なんてしちやつてて！そつちの筋の人間が見れば勘違いして当然だわ！」

「そつちの筋とか・・・え、なにそれこわい」

「う、ううう・・・」

「勝手に勘違いして勝手に訳分からない事良い始めて、勝手に攻撃し始めて、勝手に厨二病暴露して・・・。簪嬢、君の姉は・・・」
「うわーん！いつか、いつか絶対何かしてやるんだから！覚えてなさいー！」

勝手に走って去っていく彼女の後姿を見送りながらそつと鷹の目を発動させて近くに誰も無いことを確認する・・・

「逆に俺に情報を渡すのが作戦だとしたら上手く行き過ぎてるな」

そんな事を考える俺は、きつと人間不信なんだろうか。

「そつちの筋つて・・・テンプル騎士団あるのかよこの世界」

楽しい楽しい学園生活が一瞬で絶望だよチクショウ！

「騎士団があるつて事は本物のアサシンもいるつて事か？じやなきや態々襲つて来たりしないだろうし・・・そもそも何で話しかけてきた？確証がないから確認をしに？けど知らないフリされれば判断もし辛いだろうし・・・。ダメだ、さっぱり分からん。元々俺は脳筋なんだ、次襲つてきたら遠慮無くぶん殴るとするか」

一先ず部屋戻つてシャワー浴びよう、そうしよう。

そして勉強もしなきゃならないんだ。さーて今日こそ『サルでも出来るIS整備！中級編！』を読破してやるぞ・・・いちいちムカつく書き方しやがってイライラするからさっさと終わるに限る。

翌朝、日の出と共に起きて竹刀袋片手に寮から出ると柔軟をしている千冬先生が居た。

「おはようございます先生。お早いですね」

「そういうお前もだ。規則正しい事は良い事だ」

「単純に子供の頃からの習慣ですよ。この時間なら母親も起きてないから思う存分山を走れますし」

「なるほどな。今からランニングか？」

「軽く走って、軽く森走って、軽く素振りですかね」

「ふむ、少し付き合え」

「．．．えー千冬先生と同じメニューすんの？俺死なない？」

「今は先生は良い」

「．．．．．へ？」

「まだ学業の時間ではないからな」

「分かりました千冬さん」

また思考読まれるしなんか許されたし．．．どうしてこうなったんですかねえ？

「時に驚津。 昨晚更識と一悶着あつたそうだな」

「ええー聞いてくださいよ千冬さん！あの人勝手に俺のこと秘密結社の手先扱いして攻撃してきたんですよ！やり返さなかつただけ大人だと思いません！」

「そう思われるお前も悪い」

「えー．．．千冬さんなら分かつてくれると思つたのになあ」

「何故やり返さなかつた？」

「そりや、やったらやつたで敵認定されるでしょうし、こつちからしたら戦う理由すら無い訳で．．．まあ俺も避けたんでね、追撃してきたらそりややり返してましたよ？」

あの感じからして攻撃したらしたで『やっぱりアサシンだったのね！この嘘つき、死ね！』ってなるだろうし．．．あれもある種の女尊男卑の姿なのだろうか、それとも仕事に目が眩んだ馬鹿？

「そうか．．．お前はしばらく強さを隠しておけ」

「またいきなりですね．．．なんでです？」

「昨晚のような事がまた起こるのを阻止するためだ」

「でも千冬さんとの戦闘データ、どこかに提出してるんでしょう？じゃあ意味無くないですか？」

「少なくとも、そうすれば相手がお前を甘くて見て全力で襲撃されるなんて事にはならんだろう。それとも全力の相手と戦いたいというクチか?」

「俺は刀が一振りあれば無双できるような人間じゃないですよ?」

「だがお前専用の装備があれば、話は別だろう?」

「……つまり、その状態を想定して相手が攻めてくるわけですか」

「装備不足に情報不足、そして数の差。今のお前ではまず勝てんだろうな」

「……はあ、やっぱ都会ってコエエ」

通りでゲームの中のアサシン達も服装も装備も変えずに街中を歩いてたわけだ。何時襲われるか分からないからだったのか……アサシンってメンタル凄いな。

「IS学園も一枚岩ではないという事だ」

「じゃあ今回の一件に千冬さんは関わってない、と」

「疑うのか?」

「いえ、千冬さんだったら真剣持って来た挙句俺にまで真剣渡してガチの殺し合いくらいするでしょう?」

「……お前は私のことをそんな風に思っていたのか?」

「ソレくらい男前だと思ってるって事ですよ。少なくとも生徒会長なんかよりよっぽど真っ直ぐ来てくれるし、サククリ決着付けてくれる」

「……アイツはそんな周りくどい事を?」

「後ろつけてきて、ソレをやめたと思ったら人のことを『アサシン』アサシン』呼び始めて……正直適当に相手してましたけどね。老人の戯言かってんですよ」

「……そうか。で、お前はそのアサシンとやらののか?」

「俺がアサシンなら師範もアサシンなんじゃないですかね。千冬さんがブリュンヒルデになってから二日前までずっと鍛えられましたから……ってかそもそもアサシンってなんですかね」

「広義的に言えば暗殺者、だな……まあその件については私も私で調

べてみよう。それとな鷺津、私からの入学祝だ」

突然何を言い出したんだ？と思ってみていると極々自然な感じで両手首、足首、そして腰から黒い帯のような物を取り出した。いや、取り外したのか？ってかなんで俺に入学祝い？

「これは私が愛用しているリストバンドだ。精々私と真正面から斬り合える程に強くなれ」

そしてその帯を俺に押し付けてきてからどこかスッキリしたような顔をして寮へと向かって行った・・・

ってか！

「重いっ！重いよ千冬さん！これ一体何キロあるんですかっ！千冬さーん！」

カムバーツク！マイティーチャー！・・・え、マジで戻ってきてくれない感じですか？いつもよりもきついメニューをこなした生まれたての小鹿のような状態なんですよ？・・・

鷺津翔は 拘束器具を 装備した しかし 呪われて しまった

原作ヒロイン（その一）は開発者の妹さんらしいですよ

なんか知らんが千冬さんから『こっこれで鍛えなさいよ！しよつ将来ライバルになつて欲しいだなんてお、思つてないんだからねっ！』的な意味合いが込められた（多分違う）錘を授けられた俺です。

「重い・・・重いよコレ・・・なんなの、馬鹿なの？」

今の状態で木なんて登れねえよ。あの人絶対リアルアマゾネスだよ。

「茶碗持つてる手が生まれたての小鹿のようだ、ヤベエ、ヤベエよこれ、千冬さんマジブリュンヒルデ」

なんで食事中に独り言を呟いているかと言うとだな・・・

「えー彼が二番目？地味なのね」

「でも三番目よりはマシじゃないからしら？」

「彼は彼でカッコイイと思うわよ」

「比較対象が二番目じゃあねえ・・・」

「それにしてもよく食べるわね。燃費悪いのかしら」

そんな声が聞こえてくるからだ。他人を飯のおかずにするのは勘弁してください。

「はあ・・・こんなんじゃ美味しい飯も美味しく感じなくなるぜ。いや美味しいけどね」

しつかり素材に拘つてる感じがするわ。俺は鍛えられた結果味覚まで優れてるのだ！・・・そういや味覚つてどうやって鍛えたんだっけ？

「お、翔も来てたのか」

「んー・・・おあなんだ一夏君か・・・もう俺食い終わつたぜ？」

「そうなのか？ゆつくり一緒に食べようつて考えてただけだな」

「俺よりその、隣に居る奴を構えよ。完全に俺の事を殺す気満々な女の子とどう接しろつて話だよ」

「え？ああ、なんか起きたときから不機嫌なんだよなー・・・で、どう

してだ？」

そう聞く一夏の言葉を無視して篠ノ之さんだか箒嬢だか知らんがムスツとした表情のまま何故か俺の隣に座ってきた。そして流れる様な動きでその隣に座る一夏君・・・なんかスツゲー自然だなお前。

「ま、俺教室行くからご両人、ごゆっくりどうぞ」

「おお、また後でな！」

一夏君は朝っぱらから元気だねー・・・

「あつ！ワシワシくおっはよく」

「おお本音嬢にさゆか嬢、そして谷本さん。朝飯ごゆっくり」

「うん！じゃあまた後でね〜」

・・・待て、俺本音嬢としか喋ってねえぞ。ああそうか、俺コミュニケーション低いのか・・・絶望した。

「鷺津、その服装はどういうことだ」

千冬さんが現れた。

「何って・・・パーカーですけど」

「何故パーカーを？」

「趣味ですかね」

制服の前ボタン全開にしてパーカーのファスナーを真ん中くらいまで閉めて・・・そして五体に重し。なんだこれ、なんだこれ？

「・・・改造は確かに許可されているが、それはどうなのだ？」

「グレーゾーンのな？誰か先生からなんか言われたらやめますよ、無言は許可と受け取ります」

「そうか、ではまた後でな」

そう言っただけで去っていく千冬さんを見送りながら思ったことは一つ。

「・・・まだジャージだったよ先生」

事が起こったのは三時間目の授業中。

「と言うわけで、ISは宇宙での作業を想定して作られているので操縦者の全身を特殊なエネルギーバリアーで包んでいます。また、生体機能を保護する役割があり、ISは常に操縦者の肉体を安定した状態

へと保ちます。これには心拍数、脈拍、呼吸量、発汗量、脳内エンドルフィン等が上げられ——」

「先生！それって大丈夫なんですか？なんか体の中を弄られているみたいでちよつと怖いんですけれど……」

ふむ、声的にガチで怖がつてるような雰囲気だ。まあ実際怖いだろうが……残念だがその道はすでに『サルでも出来るIS整備！初級編！』で通過している！

正直言つて、ただの保護機能の延長みたいなものだ。分かりやすく言うと『車の前に人が飛び出してきたら自動的に停止するシステム』と『車が塀等に突っ込もうとしたときに自動停止するシステム』の複合だ。

相手は守られ、自分も守られる。まあ過度な衝撃はエネルギーバリアでは抑えきれずに乗り手にダメージが通る。この辺は車のエアクッションのようなモノだろうか。

「そんなに難しく考えることはありませんよ。そうですね、例えばみなさんはブラジャーをしていますね。あれはサポートこそすれ、それで人体に悪影響が出ると言うことはいないわけです。もちろん、自分のあったサイズのものを選ばないと、形崩れして——」

あ、ドヤ顔で説明していた山田先生がとある一箇所で固まり、キョロキョロ顔を動かし始めた彼女とと目が合った。顔面真っ赤ですよん。

「え、えつと、いや、その、お、織斑さんと金城くん、鷺津くんはし、していませんよね。わ、わからないですね、この例え。あは、あははは……」

「大胸筋強制サポーターみたいなもんですよね！」

「パンツみたいなもんですかね」

「あ、分かるぜ翔、サイズ合っていないパンツって違和感感じるもんな」

「あれ、無視？俺のこと無視？」

クリスがなんか言ってるが気にしない。

「んんっ！山田先生、授業の続きを」

「は、はいっ！」

あの微妙な雰囲気を一瞬で閉めなおした、流石千冬先生パネエつす。

「そっそれともう一つの大事なことは、ISにも意識に似たようなものがありました、お互いの対話——つまり一緒に過ごした時間で分かり合うというか、ええつと、操縦時間に比例してIS側も操縦者の特性を理解しようします。それによって相互的に理解し、より性能を引き出させることになるわけです。ISは道具ではなく、あくまでパートナーとして認識してください」

意識がある機械、と言う事で『愛着の湧いた機械のような扱いをしろ』と言う話になってくる。正直専用機持ちでもない限りそこまでしなくとも良いのだがこの心構えをしつかり持つて操縦するのとしないとでは雲泥の差があるらしい。俺は正直『IS整備入門！中級編！』を読んで本当の意味で『意識がある』と言う事を理解した。

「先生ー、それって彼氏彼女のような感じですかー？」
「そっそれは、えと、その・・・どうでしょう。私には経験が無いのでよくわかりませんが・・・」

彼氏彼女のソレよりもっと良い関係だろう。少なくとも『お互いが理解しようとしている』という点では遥かに。

そしてキヤイキヤイ騒ぐな！山田先生の授業の邪魔だろうが！

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「な、なんですか？山田先生」

「こっち見て、まさか俺に惚れました!？」

「クリス、それは無いから安心しろ」

「安心しろってどういうことだよ！」

「あつ、い、いいえつ。何でもないですよっ」

そんなところでチャイムが鳴った。

「あつえつと、次の時間では空中におけるIS基本制動をやりますから準備して置いてくださいね」

そう言っって山田先生が教室を出て行くと同時に一夏君の所に女子達が集まっていった・・・ソレを見ていると、クリスが顔面蒼白でこっちに歩いてきた。

「なにあの地獄こわい」

「普通の男なら羨ましがるところなんだけどな」

「このトラウマさえなければ俺だって！俺だってなあ！」

「切実過ぎんだろお前」

「一人なら・・・いやお前が居れば二人までなら！」

「一生お前の彼女募集に付き合う気無いからな俺」

「お前流石に俺のこと馬鹿にしすぎじゃね！会って二日なのに扱いはどくない!?!」

「いや、じゃあしつかりしろよ」

「・・・無理です」

「だろうな」

なんて会話をしているとスパアアアンツ！と良い音が響いた。どんな擬音だよこれ。

「休み時間は終わりだ、散れ！」

文字通り蜘蛛の子散らす勢いで自席へと戻っていく彼女達。ついでにクリス。

そんな中、千冬先生はとんだ爆弾発言をかましてくれました。

「ところで織斑。お前のISだが、準備まで時間がかかる」

あーあ、言っちゃった。せめて二人の時間に言っただけよーやだー。

「へ?」

「予備機が無い。だから、少し待て。学園で専用機を用意するそうだ」

「は・・・え?」

一夏君はさっぱり分かっていないようだ。

「せつ専用機！一年の、しかもこの時期に!?!」

「つまりそれって政府からの支援が出てるってことで・・・」

「ああ。いいなあ・・・私も早く専用機欲しいなあ」

残念！ISコアは世界で467個！五百個を切るレア度だ。そんな物の一つを『欲しいなあ』とか呟いてるだけの奴に与えるわけが無かろうが。

「織斑、教科書6ページを音読しろ」

「は、はい。えーと『現在、幅広く国家・企業に技術提供が行われているISですが、その中心たるコアを作る技術は一切開示されていません。現在世界中にあるIS467機、そのすべてのコアは篠ノ之博士が作成した物で、これらは完全なブラックボックスと化しており、未だ博士以外はコアを作れない状況にあります。しかし博士はコアを一定数以上作ることを拒絶しており、各国家・企業・組織・機関では、それぞれ割り振られたコアを使用して研究・開発・訓練を行っていません。またコアを取引することはアラスカ条約第七項に抵触し、すべての状況下で禁止されています』・・・と、言う事は・・・」

「つまりそういうことだ。本来ならISの専用機は国家、あるいは企業に所属する人間にしか与えられない。だが、お前の場合は状況が状況なのでデータ収集を目的として専用機が用意されることになった。理解できたか？」

「え、ええまあおまかには・・・」

ダメだ理解できてねえよコイツ。後でしつかり教えてやらんといかん。

「あの先生。思ってたんですけど、篠ノ之さんって・・・もしかして篠ノ之博士の関係者なんでしょうか？」

「そうだ、篠ノ之はアイツの妹だ」

言っちゃったー！なんとなくそうなんじゃないかなーって思ってたのにこの人断言しちゃったー！・・・もう本当にこの人、剣と人を鍛える事以外には駄目な人なんじゃないかって思い始めてきたわ。

「ええええー！すつすごい！このクラス有名人の身内が二人も居る！」というか有名人その人が担任です。

「ねえねえ！篠ノ之博士ってどんな人！やっぱり天才なの!」素晴らしい物を作った人物もまた素晴らしい人物だと思えてしまう、この心的状態をハロー効果と言います！・・・いや篠ノ之博士自体知らんけどね。

「篠ノ之さんも天才だったりするの！今度ISの操作教えてよ！」天才の身内！天才って法則はやめて上げなさい。俺は前世の知識の中でも今世も一人っ子だから分かんが人によつてはプレッシャーら

しいぞ。

「私はあの人とは関係無いっ！」

いきなり大声出して机から立ち上がったから何事かと思っただけならそんな事か。まったく、他人の感情とかどうでもいいやって感じて土足で踏み込む連中が多いこと多いこと……

「……大声を出してしまつてすまない。だが私はあの人じゃない。教えられるようなことは、何一つ無い」

明らかかな不満顔をしながら自席に座る大勢のクラスメイト達……いや悪いのお前等だからね？不満そうな顔でできる立場じゃないからね？篠ノ之さん謝つてるからね？

「さて、授業を始めるぞ、山田先生！」

「はっ、はい！」

さて、楽しい楽しい授業だ。知らんことを知るの楽しいなあ！

四時間目の授業も終わり、とりあえずISの重要性を一夏君に教えてやろうと席を立ち上がったが俺よりも先に一夏君の元へ辿り着いた人物が居た。

「安心しましたわ。まさか訓練機でこの私と対戦しようと思つてなど居なかつたでしょうが」

せつ……せつ……私嬢だ。名前知らん。

「まあ、一応勝負は目に見えてますが流石にフェアではありませんもののね？」

「?……なんでだ？」

「あらご存知ないのですか？まあいいですわ、庶民の貴方方に教えて差し上げましょう。この私、セシリア・オルコットはイギリス代表候補……つまり、今の段階で専用機を持っていますの」

「へー、そりや凄いな」

「……馬鹿にしていますの？」

「いや、本当に凄いなって思っただけだけど……いや、何が凄いのかは分からないけどとりあえず凄いののは分かった」

「ソレを一般的に馬鹿にしていると言うのでしよう！」

うん、高そうな机叩くなよイギリス代表候補生。

「・・・こほん。先ほど授業でも言っていたでしょう？ I Sは世界で467機。その中でも専用機を持っているのはつまり、全人類六十億人超の中でもエリート中のエリートなのですわ！」

「・・・そうなのか」

「そうですわ」

「人類って六十億超えてたのか！」

「そこは重要ではないでしょう！」

まあた机を叩く。ソレも一夏君の机。やるならせめて自分の机でやれよな・・・

「あなた！本当に馬鹿にしているの！」

「いやそんな事は無い」

「だったら何故棒読みなのかしら！」

「何でだろうな・・・箒、クリス、翔」

「俺はお前じゃないから知らねえよ！」

クリスが反応してるっポイから俺はスルーでいいわ。『サルでも出来る I S 整備入門！完ッ！』を開いて勉強を始める・・・初級、中級と来て何で『完ッ！』なのかは分からないが、とにかく凄い自信だ。

「そう言えば、貴方方には言ってますんでしたわね。そちらのお二人の場合訓練機でも一才容赦しませんのでそのつもりで」

「あ、俺。所属してる企業から専用機用意されるんで」

「なっ！で、ではそちらの方は！」

「いや俺は訓練機。そもそも専用機なんて持つてる方がおかしいし、用意される方がおかしいし」

「そ、そうなのですか・・・ですが！容赦しませんわよー！」

「うん、良い試合を期待して訓練に励む事にしますよ・・・せ、せ・・・つせ？」

「セシリア・オルコットですわっ！」

「オルコットさん。では試合の時には全力で来てくださいな、今後の良い勉強になりますので」

「言われなくてもそのつもりですわっ！」

それだけ叫んで教室を出て行くオルコットさんを見送りながら、周りの女子の目線が集まっているさなか・・・

「本音嬢、簪嬢を迎えに行こう。彼女本気で食事しないかもしれないぞ」

「え〜昨日ちゃんと言っておいたからだいじょぶだよ〜」

「ああいう手合いは一回言い出したら聞かないぞ？きつと自分の席で作業中だ、連れ出してやろう」

「う〜ん、大丈夫だとおもうけどなあ〜」

極自然体を意識しながら本音嬢と教室を出た。

四組に向かうと、案の定、簪嬢は机でタイピングしていた。ぶんぷんかわいらしく怒る本音嬢によってこつちへ運ばれてくる簪嬢は物凄い不満そうな雰囲気を出していた。

そんな嫌そうな顔するな、確かに本音嬢を炊き付けたのは俺だ・・・

だが私は謝らない！

原作主人公は弱体化してるらしいですよ

簪嬢を引きずっている本音嬢の隣を歩きながら、俺はある視線に追われていた。チラツと振り返れば居る・・・そう、奴だ。

「うううう・・・妬ましい、妬ましいッ！アサシンめ、アサシンメツ！」
「落ち着いてくださいお嬢様、確定したわけではないのでしよう？」
「でも簪ちゃんに近づくのよ！これは明らかな宣戦布告だわっ！」

「本音の話ではお嬢様が話しかけるよりも前に知り合っていたと言う話ですが・・・」

「それすらもブラフなのよ！だって相手はアサシンなのよ！いいかしら虚っ！あいつらはねっ——」

俺のことをアサシンとか言う変なあだ名で呼んで来る青髪外はね厨二女が茶髪の黄色いカチューシャでデコ出し姿に眼鏡が特徴な女子に叫んでいた。なんかもう・・・ご愁傷様です。

「んん？ワシワシどうかした」
「なんも」

・・・ってこの子はなんか知らんがなんだろうな、この笑顔の裏側が実はラスボスでしたーとか言われても納得しそうになったわ。

「・・・驚津くん」

「簪嬢に関しては何も言うまい。飯は食べ飯は。その内ぶっ倒れるぞ」

「大丈夫・・・十秒チャージ」

「アカン、この子ガチで言ってる。これはアカン」

「そうだよね〜流石にご飯は食べないとね〜」

「日本人のメイン食材だもんな。米は偉大だ」

「うん〜色々かけて混ぜたらもつとおいしいもんね〜」

「・・・本音の食事は、おかしい」

「簪嬢が言うなら楽しみに待つところ」

結果？

「ま〜ぜませ、ま〜ぜませ〜」

ご飯の入ったどんぶりに納豆入れて、鮭の切り身を丸ごと乗せ、お

茶入れて、卵入れて味噌汁入れて・・・え、なにこの・・・え？

「言ったでしょ・・・おかしい」

「ああ、これはおかしい。食欲が失せるレベルだ」

「と、言いつつ食べてる・・・」

「そりやな、食べなきや腹減る。腹減ったら修行できなくなる！」

「・・・脳、筋？」

「まあ脳筋ではあるな。体鍛えなきや動きも鈍るし、何よりなんか：朝と夜に体動かさなきや違和感があるしな」

「・・・脳筋」

「やっべ、なんか弄られ方が確立しちゃった」

「あくなんか仲良くしてるゝ私もいれてゝ」

「・・・顔についてるご飯粒・・・とって」

「ダボダボの袖も捲ろうか、な？」

なんてやってると後ろから「ねえ、君も噂の子でしょ？」と言う声がかけてきた。

振り向いてみると胸元に見慣れない真っ赤なリボンをつけた女子生徒が二人いた。顔を戻してみると本音嬢と簪嬢のリボンは青色。

「リボンの色違うのは、何だっけ・・・入学式で説明で聞いたような・・・」

「学年ごとによって違うのよ、青色が一年生。黄色が二年生で赤色が三年生ってな感じにね？」

「ああ、じゃあ先輩方でしたか、これは失礼」

「気にしないでいいのよ・・・で、これからが本題なんだけど。代表候補の子と戦うんでしょ？」

「二日で情報回ってるんですか。近所のおばちゃん並の伝達力ですね」

「それ位なきや女子高生やれないって。でき、IS素人だよな？」

「まあ確かに素人ですけど・・・ま、平気ですよ。勝つのが目的じゃないんで」

「へー、他の子達とは違うみたいね」

「ええまあ、現状でとりあえずどの辺までやれるのかを知りたいなーって思ってます。一応言っておきますけど助言とかは要りま

せんよ?」

「そのつもりで来たんだけどねえ・・・やっぱり断られちゃったか」

「ま、先輩方の顔は覚えたんで何かあったら頼らせてもらいますよ。その時は全力で鍛えてやってください」

「うん、楽しみにしないで待ってるねー!」

このご時勢、なかなか話しの通じる女性達だったな。どこぞのオ
ルコットさんとは雲泥の差だ。まあ外面に出てないだけかもしれないが、それでも十分違う。

「・・・爽やか。脳筋、さわやか」

「脳筋やめれヒツキー」

「・・・ヒツキーやめて」

「むゝ二人とも私がお飯食べてる間に仲良くなりすぎ〜!」

うん、ラス・・・ボス・・・?まああの感情は忘れよう、なんかま
ともに本音嬢と会話できなくなりそうだ。

午後の授業は何故か平穩に終わり放課後を迎えた今、俺は剣道場に
いる。実際は二日前までよく通っていた場所にも関わらず何故か
数ヶ月ぶりのような感覚に陥るが気にしない。ただまあ違和感的な
物は感じる、だってこの剣道場女の子大量に居るんだもん、俺とクリ
スは端っここで座ってるだけ。といってもなんか女子達が離れてて微
妙な距離があるけど・・・それにしても俺の知ってる道場と違う。俺
が知ってるのは『俺と師範と剣道場、時々師範代』だったからなあ・・・
何故剣道場にいるのかって?そりゃ一夏君に「今から箒に稽古付け
てもらおうんだけど一緒に来ないか?」って誘われたからだ。

だがまあ、あらあら。

「どういふことだ」

「いや、どういう事だ・・・って聞かれても」

「どうしてここまで弱くなっている!」

幼馴染にフルボッコにされる一夏君を見てるのは非常に面白かつ
た。なんだろうか、本気になれてない一夏君は実に弱かった。

「受験勉強してたから、かな?」

「・・・中学では何部に所属していた」

「帰宅部。ちなみに三年間皆勤だ！」

「ドヤ顔して言う事じゃねーよ」

俺とクリスのダブル突っ込みに「あ、そう？」とか頭をかきながら返事してくる一夏君を置き去りにして「鍛えなおすぞ！」と幼馴染氏が叫んだ。

「これではIS以前の問題だ！これから毎日、放課後三時間！私が稽古をつけてやる！」

「え？いやそれよりもISの事について教えて——」

「だからそれ以前の問題だと言っている！」

まあ実際にISについて付け焼刃で覚えるより元剣道経験者なら体の感覚を取り戻す方が先だろう。それに覚えるよりもそっちの方が早いだろう。実際早い。

「情けない、ISを使うならまだしも、剣道で男が女に負けるなど・・・悔しくないのか一夏！」

いや、勝てねー相手はいるだろ。千冬さんとか、千冬さんとか、千冬さんとか・・・

「そりゃかつこ悪いとは思うけどさ・・・」

「格好？格好を気にしている場合か！それともなんだ！そっちの二人と同じく女子に囲まれるのを楽しみに来たのか！」

「女子に囲まれたら気絶しちゃうだろいい加減にしろ！」

「いや彼女は知らんと思うぞ・・・まあ俺も彼女に言いたい事はあるが、まあなんだ・・・」

「なんだ！言いたい事があるならはつきり言え！」

「・・・じゃあ珍しくはつきり言わせて貰うけどさ——」

俺は本当に、珍しく本当にはつきり物を言う事にした。

「オママゴト見るためにここに来たわけじゃないんだよね」

「なっ！ままごと！ままごとだと！」

「だって一夏君も本気じゃねーし、あー・・・君も本気じゃなかったし」

「私の名前は篠ノ之箒だっ！」

「あー、じゃあ篠ノ之さん。聞くんが、一夏相手に本気で竹刀振ったか？」

手加減してなかったか？一本取れる隙はいくらでもあったのに？それで本気だとしたら笑わせてくれる。それ以前に意識がまず相手に向いてない、これだけでもう落第レベルだ」

剣道ならまだいい。だがな、ISつてのはほぼ実戦だ。そんな場所で振るう剣が人を生かす『道』じゃ駄目なんだよ。戦いで振るうのは相手を殺す『術』じゃなきゃ駄目なんだ。つてのは師範の受け売りだ、師範あんたマジで何者だよ……

「一夏君も一夏君だ。久しぶりだからって手を抜いたろ？踏み込むべきところで踏み込んでないし、竹刀も弱い。いくらブランクがあるからってあまりにお粗末だろう。これはもうオママゴトだ、何も知らない子供が木の棒振ってるのと何も変わらない。お前も相手に集中してたか？本気で相手に向かって竹刀振ったか？……答えは言うまでもないだろ」

そこまで言うとはとまず立ち上がって、座り込んで一夏君に近づいて手を伸ばす。俺の意図を理解したのか竹刀を渡してくる訳だが……なんで手離さないん？

「男の意地、みせてやれ翔」

「……本来お前が見せるもんだぞ、ソレ」

漸く離れた竹刀を肩に乗せてから、一夏に千冬さんから渡された錘を全部外してから渡す。

「お、おもっ！なんだよこれお前コレつけて……ってあれ、これ——」

なんか後ろから敵意が飛んでくるがきつと女子の一人だろうと判断してから篠ノ之さんに切っ先を向ける。

「今から本気で打ち込む。精々防げ、半端者」

真っ直ぐ伸ばしていた腕をそのまま反転させて体の後ろに隠し、左腕を真っ直ぐ伸ばす。『今から攻撃しますよ』と言っている様な格好になるが別にその通りだし、竹刀を体で隠せばその分相手は次の一手を読みづらくなる。正直他の人がどう感じるかは知らないが、師範の剣から教わった構えの一つだ。

ワザとゆっくり敵意を出して行き、篠ノ之さんが構えたと同時に地面を蹴り飛ばす。

次の瞬間、目の前には竹刀の先を喉に突きつけられ、目を白黒させている篠ノ之さんの顔が目に入る。単純に竹刀で突きをただけにもかわらずこれだ。残念すぎるな篠ノ之箒、所詮剣道か。

「一夏君、俺はこれから別のところに行くからま、頑張れ」

「お、おう・・・翔って凄いな」

ポカーンとしたまま錘を体に乗せてる一夏君に竹刀を渡しながら錘を回収して装備していく。どこかで千冬さんが見ているかもしれない!・・・ねーか。

「なーに、師匠が良いんだよ。ただそれだけだ」

なんてつたつて訳分からん正体不明の師範に少しだけ世界最強からも指導を受けた身だぜ? 剣道とかルールがある代物じゃ負けるだろうがそれ以外なら負ける気がしないな。

いつでもかかって来いよ生徒会長。不意打ち上等、むしろ得意分野だこのヤロウ。

ありや、何故か女子達がモーゼごっこをしている。そんなに泣きそうな顔しないでよ、俺の顔ってそんなにブサイク? こつちが泣くぜ?

「あゝワシワシゝゝ! もくどこ行つてたのゝ」

「ちよつと同士の観察に。こつちは変わらず?」

整備室に戻ってきたら戻ってきたで空中に浮かぶモニターを凝視する簪嬢と暇そうに袖を振り回している本音嬢。よう本音嬢、暇つぶし要因が来てやったぞ。

「うん、かんちゃんってば一回集中し始めたらとまらないからねゝ」

「飯の時間になったら強制停止だ。ソレまで暇だな」

「なにするゝ? トランプ? しりとり?」

「他に何か無いのか?」

なんて話していると「本音」と彼女を呼ぶ声が整備室の入り口から聞こえた。

「あ、お姉くちゃん。どくしたのゝ?」

「お嬢様が呼んでいるから生徒会室に向かつて」

「うゝん、あ! なにか仕事で失敗しちゃったかな?」

「そう思うなら早く行きなよ本音嬢、仕事のミスは後に響くからね」
「うくん、ワシワシもこういつてるしく仕方ないな」

なんて言いながら去っていく本音嬢と対照的に溜息をつきながらこちらへ近づいてくる・・・デコ出しカチューシャ眼鏡さん・・・この人リボン付けてねえや、タートルネックみたいなを着てる・・・制服の下に服着るの有りならパーカーも有りそうだな、一安心だぜ。

「どうも初めまして、妹がお世話になってるようで、布仏虚です」
「これはどうも。初めまして虚さん。鷺津翔です。こちらこそ彼女には女子だらけの教室で助けてもらっていますよ」

「そう言っていただけと助かります。なにせ昔からあんな様子です」

「個性的で良いと思いますけどね。少し個性的過ぎな気がします
が・・・それで、何か用でしょうか」

「・・・何故そう思うので？」

「いえ、ただ自己紹介してきただけ、な感じじゃなかったの」

「そうですね、実はそうです。先日はお嬢様が申し訳ありませんでした」

「・・・お嬢、様？」

虚さんのどの言葉に反応したのか分からないが簪嬢がモニターから顔を動かしてこつちを見てきた・・・え、なにその無表情こわい。

「ええ、我が校の生徒会長です」

「・・・あ、あー・・・奴か。そう言えば昼休みになんか知りませんけどあの人に叫ばれてましたね」

「え、ええ・・・見てましたか？」

「あまりにも露骨にこつち見てたんでつい見ちゃいました・・・なんと
言うか、お疲れ様です？」

「ええ、本当に。ですので、簪お嬢様が思っているようなことはありませんよ」

「・・・そう」

「え、なに、なにその会話。俺が知らんところで何が起こってるの・・・」
「何でもありませんよ、ねえ簪お嬢様」

「・・・そう・・・脳筋くんは知らないでいい」

「脳筋言うなヒツキー、馬鹿にしゃがってチクシヨウ、脳筋で悪いかよ」

「引き籠もりで悪い・・・？」

「引き籠もりは悪いでしょ」

「引き籠もりは悪いですね」

「もうふたりして・・・っ！」

うん、なんだろう・・・簪嬢は弄るとかわいいな。まあ一人じゃ無理だろうけど。

原作ではないようですよ

初めは『初めての都会』でどうなるかとハラハラしていたが。クラス代表戦を前に、俺の生活は大分安定してきた。

朝起きて錘が付いているか確認し、走って木に登って、竹刀振って。時々千冬さんとあつて話したり一夏達と朝食食べたり。

昼休みは簪嬢を本音嬢と一緒に教室から連れ出して食事。

放課後は夕食まで射撃場で練習し、時間になったら整備室に行つて簪嬢と本音嬢と食事。

夜はもつぱら海岸で砂浜ランニングに森林フリーランニング。

あれ・・・リア充してる？俺つてリア充しちやってる！

とか思いながら本音嬢達と昼食をとっている時だった。真後ろから「鷺津、少しいいか」と話しかけられたのは。

振り向いたらそこにいるのは食事の乗ったプレートを持った篠ノ之さんと一夏君。

「別にいいけどどうかしたのか？」

「いや、あれから少し考えてな。もう一度、私と立ち会って欲しい。本気で」

「・・・本気ですか」

チラツと一夏君を覗き見れば必死になにやら頷いている。いや、分からんよ。分からんけど、

「今日の放課後でいいかな」

「ああ、頼む」

「翔、助かるよ」

ってか何でお前等はスツゴイ自然に俺の隣に座りますかね・・・いやまあいいけどね。

そして俺を挟んで会話し始めた本音嬢と一夏君を横目に簪嬢を見ていると・・・なんだろう、いつもの無表情とはベクトルの違う顔をしている・・・後で聞いてみるか、虚さんにでも。

時は過ぎ去り放課後。剣道場には胴着と、その上からパーカーを着

た俺と、胴着に剣道の胴だけをつけた彼女が向かい合っていた。ちなみに今の俺は錘を外している。正直軽すぎる体に戸惑っているところだ。

「さて、本気って言ったけど剣道的な意味でかな？」

「いや、私も少し調子に乗っていた。私の全力で行かせて貰う」

その目はどうにも本気のようなのだ。一夏君を鍛えている間に何かを掴んだのか、それとも何かを決意したのか。どちらにせよやることは変わらない。

のだが！

「周りの女子達どうにかありません？」

なにこれ、インディアンレスリングであつてたつけ？二箇所ほど空間が開いているが、そこには一夏君とクリスの二人と・・・何故かいる会長と虚さん、そして本音嬢の三人だ。おい会長、まさかお前まだ俺をアサシンだと思ってるのか！

「ならないな。私も何故こうなったのか分からないが、皆止まらなかつた」

「これからするのは剣道じゃないからためにならないと思うけどな」

「それでも彼女達からすれば興味津津なのだろう・・・私から言い出したのにすまないな」

「いやなに、これからの立会いを見て何か掴める物があれば彼女達にとつても僥倖なんだろう。実際、ここまで大勢に見られながら戦うのは初めてだが、まあ何とかなるだろう」

流石に三角飛びは封印だな、よし、じゃあこうしようか。

「一夏君、一本竹刀くれない？適当なのでいいから」

「え？ああ、分かつた」

そう言つて近づいて俺に竹刀を渡してから戻つていき正座をする一夏君。いや、投げてくれてもよかつただけど・・・

「二刀流か？」

「ま、少しだけどね・・・それにこれは剣道じゃない」

腕を垂らしたまま腰を下げ・・・ついでにフードを目深に被る。フード被るとなんか集中するんだよね、暗くて狭いところが落ち着くハム

スター根性なのかね。

そんな俺に対して竹刀を両手でしつかりと握り、正眼に構える篠ノ之さん。雰囲気はさながら五度ほど立ち会ったことのある師範代の様だ。別に師範が人外化しているからといって師範代も弱いわけではない。少なくとも剣の基礎は彼に教わったと言っても過言ではないくらいだ・・・しかしなんとまあ、

俺と同じ年で師範代レベルとは脱帽モノだ。どうやら俺は藪を突いて狼を出してしまったらしい。

そんな事を思っている俺とは対照的に道場の空気は静まっていくな。誰かが言った「ハジメツ！」の一言で俺も、篠ノ之さんも地面を蹴った。

真つ直ぐ振り下ろしてくる竹刀に対して左手の竹刀を逆手に持つて頭の上に持つて行って防ぎ、そのまま右手の竹刀を胴へと振るう。が、バックステップをされて避けられてしまった。

ふりだしに戻り、立ち居地はほぼ初期位置に戻った所で再びお互いが静まる。

左手の竹刀は逆手に持ったまま肘を曲げ、切っ先を篠ノ之さんに向けて、右手は体の後ろへ隠す。

そんな俺とは対照的に正眼から下段に構え呼吸を落ち着ける篠ノ之さん。

次に動いたのは俺だ。

体を捻り、左手を肩の上へと掲げ、竹刀を投げる。と同時に走り出し、右手の竹刀を両手で握る。

投げた竹刀は当然の如く振り上げられた篠ノ之さんの竹刀で弾かれ、下から首に向けて振るう俺の竹刀を振り下ろす形で防がれる。

罅迫り合いのまま力技へと持ち込んで彼女を女子達に覆われている道場の壁へと少しずつ押し込む。

それに対抗してか「くっ！」と苦しそうな声を上げながら篠ノ之さんも竹刀に力を込めて来るが残念、それが狙いだ。

「なっ！」

竹刀と体を半身に切り、力んでいた篠ノ之さんを受け流す。そして

そのままの勢いを抑えようと踏ん張って体制の崩れている篠ノ之さんの背中に向けて剣を振るう。

「ま、まだだっ！」

そう叫ぶと同時に、篠ノ之さんは開いている手を体を支え、体を回転させて俺の竹刀が見えているのかいないのか、ただ背後に向けて適当な感じで振られた渾身の竹刀。

それも手首を少し上げる事でかわし、竹刀を振ったことでこちらに向いている体の首筋に竹刀を軽く添える。

「敗因は・・・あれだ、俺の二刀流を許した事と張り合っちゃった事かな？」

「・・・また負けた」

「そりゃ剣道じゃないからな。剣道じゃ負けてたよ、今も正直上手く対応されてたら分からなかったね」

知ってるか？師範の剣道もアレだけど師範代の剣道も剣術も本当に最高レベルなんだぜ？師範いなかったら余裕で道場任せられるレベルに。田舎育ちつてすごい、そう思った。

「お疲れ様でした」そう言って差し出した俺の手を取って立ち上がった篠ノ之さんは凄いいい笑顔をしていた。

「これからも時々挑ませて貰っても良いか？」

「・・・時々ね、時々。俺って自分の戦い方が出来ないただの雑魚だからさ、その時も剣道じゃないなら喜んで」

「そうか、ならば良かった——」

そして次の言葉で俺は泣く。

「もう一本頼んで良いか？」

止めてくれよ、俺は断れない主義なんだからさ。

この後無茶苦茶立会いした。

篠ノ之さんからライバル認定されてから二日くらい。千冬先生の「お前の要望していたものが取り揃えられたぞ、付いて来い」と放課後に連れ出されました。

「ここがISS学園の倉庫だ」

「倉庫とかあるんですね」

「学食の材料や学園の備品、IS自体の搬送等も行っているからな」

そこは天井が五メートルくらいあるんじゃないかってくらいで、人もつめれば何千人も入れそうな場所だった。並んでいる棚やフオークリフトで倉庫に見えるが、無きや廃墟だ。

「こつちだ」と棚の間を通って先導する千冬先生についていくとシーツの掛けられた何かがあった。

「そしてこれが、お前の要望した高火力の銃だ」

千冬先生がそのシーツを片手で剥ぐと、そこにあっただのは・・・

長いなんてレベルじゃない銃身、ゴツイ機関部、同じくゴツイマガジンが十個。そして五十センチはあろうストック。そして機関部に添えられた申し訳程度のスコープ。そんな代物が防犯用なのだろうか厳つい鎖で重そうな台座に結ばれている。

どう見ても狙撃銃の形をした砲台ですありがとうございます。

「アンチマテリアルライフル、IS版と言ったところだろう。銃の事はある程度しか知らんが、七十口径で威力は強力だぞ」

「で、でしようねえ・・・」

これには流石の俺氏も苦笑い。まさかこんなのが作られてるなんて思いもしてねえよ、なんなの？ISってレーザー兵器とか作られてんじやなかったっけ？

「専用機や試験機等なら支給されることもあるだろうが、流石に量産期に乗せるのは相手側からも上からも否定された」

「・・・ライフルの練習も加えなきゃな・・・これもそうですけど手榴弾の方はどうです？」

「廃品になっていた物をいくつか渡された。そのケースの中だ」

指差された先を見てみるといかにも『旦那、俺、中のもので衝撃通しませんぜ』って面した高さで言えば二十センチ？長さは約一メートルと横幅は三十センチ程のケースが置いてあった。

「映画なんかでしか見たことないケースなんですけど・・・」

「危険物だからな、先方が配慮してくださったのだろう」

とりあえず開けてみたらケースの上下に衝撃を吸収するクッション

ンが敷かれ、そしてその上にベルトでしっかりと固定された手榴弾がざっと二十四個に柄付きの手榴弾が六つ。

「柄付き手榴弾とかちやんと機能するんですかね・・・」

「中身は全部確認したと連絡はあった。機能しなかったら訴えろ、勝てるぞ」

「どこぞの国に喧嘩なんて売る気起きませんって・・・」

ケースを閉じて、手に持ってみる。

「とりあえず、これは部屋で取っておきますけど・・・そっちは」

「大丈夫だ、アリーナ整備室に運ぶ手筈になっている」

「なんかもう仕事増やしてすみません」

「私がこれ程してやったんだ、無様に負けるなよ。負けたら錘を倍にしてやろう、嬉しいだろう?」

「全力で勝たせて頂きます!」

「うむ、では終わりだ」

錘が倍に?・・・いやいや、流石に体重超えますって。体重以上の物を身に着けて動くだなんてそんな漫画みたいな・・・

「まあそうだろうな。普通は」

「お、千冬先生?まさか・・・」

「フツ、知りたければ私に錘を外させてみる」

なにこのおっぱいの付いたイケメン・・・やだ・・・惚れそう。

そんな倉庫での会話を終えた俺は学園敷地内を練り歩き、ツナギの後姿をようやく発見した。長かった・・・見つけるまで時間かかりましたよ・・・

「どうも轡木さん、あれから大事ありませんか?」

「あ、鷺津くんでしたか。ええ、それはもう。空から生徒が降ってくるなんて事はないですね」

「・・・あの時は本当に済みませんでした」

「いえいえ、男の子は元気が一番ですから・・・それで、今日はどうしました?」

「ええつとですね、出来れば枯葉つて分けてもらえたりしませんか?」

「枯葉を？・・・なんでまたそんなものを？」

「ええ、ちよつと作戦に使う気でして・・・無理なら言つてくださいね、別の手段とりますんで」

「いいですが・・・あああれですか、一年一組のクラス代表の件ですか」
「そうですね、ちよつと面白い事してやろうと思つてまして」

「いいですよ。その代わりちゃんと使つたら掃除してくださいね？」

「勿論ですよ。その時は・・・掃除機借りてもよろしいですかね」
「いいですよ」

「やったー！ありがとうございます轡木さん！」

「いえいえ、同じIS学園にいる数少ない男のよしみですからね」

轡木さんええ人やわー、あんな第一印象だったのに・・・まあ警戒はされてるっぽいけどそれだけだし、大人な対応してくれるし。

その後、部屋に戻り枯葉に細工をし。いつも通り夜の訓練に出かけた。

原作ではないようですよく作者のチャレンジ番外編く

彼女、セシリア・オルコットは昼食をとるために食堂に向かつている最中にソレを見かけた。

「うううう・・・妬ましい、妬ましいッ！アサシンめ、アサシンメツ！」

そう叫ぶIS学園生徒会『会長』の更識楯無と、

「落ち着いてくださいお嬢様、確定したわけではないのでしよう？」

そう言つて宥め様としているIS学園生徒会『会計』の布仏虚だ。

そして、その二人の会話の一部に、セシリアは既視感を覚えた。

「でも簪ちゃんに近づくのよ！これは明らかな宣戦布告だわっ！」

「本音の話ではお嬢様が話しかけるよりも前に知り合つていたと言う話ですが・・・」

「それすらもブラフなのよ！だつて相手はアサシンなのよ！いいかしら虚っ！あいつらはねっ——」

彼女達の会話で所々に現れる『アサシン』という単語。これに非常に強い興味を覚えた。

（たしか、幼い頃に珍しくお母様とお父様が二人きりで話しておられ

るのをこっそり覗き見をしていた時に聞いた覚えが……アサシン、一体なんなのでしようか……)

一人、廊下で立ち止まり熟考するも数秒後、

(誰の事をおっしゃっているか分かりませんが、いつの間にか会長さん方も居らなくなっている事です。また今度機会があれば伺って見ようかしら)

そう判断し、彼女は再び食堂への歩みを進めた。

『アサシン』その単語がどのような意味を持つのかも深く考えずに……

原作戦闘イベント（チュートリアル）ですよ

修行に修行を重ね、普段やらない銃の訓練まで増え！そして簪嬢や本音嬢と戯れたり、時折背後から人が付いてきたり、篠ノ之さんと立会いしたり、授業中には山田先生を見て癒されたり非常に充実した一週間を過ごした俺です。

さてさてさて、やってまいりましたよ貴重な休みを潰してまで確保されたクラス代表戦！今、俺達は第三アリーナAピットに全員集合している・・・なんで篠ノ之さんまでいるんですかね・・・

「ではこれより、トーナメントの組み合わせの抽選を行う」

「え？抽選？」

「・・・抽選・・・だと・・・！」

「ちゆ、抽選ですか・・・」

「まあなんとなく分かってたよ。四人だもんね」

なんかドヤ顔していると悪いんですけど千冬先生・・・その格好で上の面に一箇所開いている穴に四本のアクリル製の棒が入れられている抽選箱は似合いませんよ。滑稽ですよシニールですよ。

「いいから引け、全員一緒にな」

「じゃ、じゃあ・・・これで」

「では私はこちらで」

「せっかくだから、俺はこの棒を選ばぜ！」

「余り物にはなんとやら・・・」

全員が掴み、一夏君とクリスの「セーの」という声で一斉に棒を取り出す。

俺の手にある棒は、④と書かれた丸い板が付いている。周りを見ると、一夏君が①。オルコットさんが②。そしてクリスが③・・・見事なまでに掴んだ順になった。

「では、①対②。③対④だ。一戦目は織斑対オルコットだ。公平を規すため他の二人は更衣室にでも下がっている」

「千冬先生、俺アリーナ整備室にいいですか？」

「そうだな、許可をする。金城は要望はあるか」

「ないです！出番まで普通に更衣室に引き籠もってます！」

「そうか、では行け」

そう言ってからこちらに背を向け、オルコットさんに『Bピットへ向かえ。準備が済んだら連絡を入れろ』とだけ伝え黙った。何故黙る、何故黙ったし。

「・・・翔」

「ん？なんだクリス」

「世界初の男同時のIS戦だ、本気で行かせて貰うぜ」

「おう、お互いハンデ持ちだが全力で倒させてもらう」

男同士の戦いに言葉は不要。お互い真っ直ぐ伸ばした拳をぶつけ合ってからピットを出た・・・まあ途中まで道同じなんですけどね！

アリーナ整備室に来たがやることは一つ。置かれていたネイビーカラーのいかにも量産機！な感じのラファール・リヴァイヴに運ばれていた狙撃銃型砲台を登録し、持ってきていたケースの中身も全部登録し・・・いやでもコレってどうやって量子化してるんだよコレ・・・物理的に大丈夫かよ、どんな天才だよ篠ノ之束。

さて、リヴァイヴの待機状態を選択したらネックレスになったがもう物理的なことは投げ捨てる事にする・・・まだ時間あるみたいだしコイツを首に掛けて座って瞑想でもしてるか・・・よしリヴァイヴ、少し話でもしようぜ？

目をつぶってひたすら頭の中で語りかけてるだけの時間も過ぎ去り、迎えに来た山田先生に連れられてBピットに入る。

「え、ええっと・・・織斑先生は『近距離武器の使用禁止』と仰っていましたが・・・」

「その通りですよ、調べてみたら案の定、この機体IS用ブレードが外されてましたよ。なんにせよやることは一つですし、クリスも似たような条件ですからトントンですよ」

「そうですか・・・が、頑張ってくださいね！」

「教師が一人の生徒をひいきするのってどうかと思うんですけどその

辺はどうお考えで？」

「え！あ、今のは無しで！無かった事にしてください！」

「えー、先生俺のこと応援してくれないんですかー」

「せ、先生をからかうのは駄目ですよ！減点ですよ！」

「うえっ！単位減点は勘弁してください！」

「・・・もうからかわないって約束しますか？」

「します。流石に単位は欲しいです・・・」

「ならいいです。ではISを装備してカタパルトについてください」

「ラジャーです」

両鎖骨の間でぶら下っているシンプルなネックレスに手を触れ、

「行くぜリヴァイヴ！勝利の栄光を君に！」

前世の記憶にあったロボ物のかっこいい台詞を叫びながらISを機動させる。たかが量産機、されど量産機。ISには意識があるのだ、尊重しようではないか。

「あ！聞き忘れてましたが服装はソレでいいのですか!？」

「え？ええまあ、これが一番気に入ってますし」

今の俺の服装はいつもの特訓用ジャージいつものパーカー。

「何より山田先生が一番知っているでしょう？これで千冬先生と相打ちになった男ですよ？むしろ絶好調です」

「な、ならいいんですけど・・・じゃっじゃあ行きますよ？」

「いつでもどうぞー！」

そう言った直後、俺は文字通り発射された。いや、いつでもとは言ったけど言い終わった直後はちよつとひどくないですかね、舌噛みそうになっただぜ・・・

そのままの勢いで地面に着地すると向かいの壁にある穴から文字通り真っ黒な人型のソレが飛び出してきた。

「それがお前の専用機か・・・ゴチイな」

「ハッハー！どうだ、カツコイイだろ！」

手足の延長の様な機械の手足と、その真ん中辺りに設置されている三つの砲身が並んだ砲台。そして肩から背中に背負っている地面に着きそうな程長い棒？のようなもの・・・

「どう見ても遠距離専用機じゃねえか！」

「しつ仕方ねーだろ！企業の社長が『完全移動砲台のISってカッコよくね？』とか言い出して決まったことなんだし！」

「なんでそんな機体で遠距離攻撃を禁止した！馬鹿か？馬鹿だろお前！」

「俺じゃねーし！それは兵器開発の人達だし！『近距離戦の練習して来い。ついでに近距離用の新作使ってきて』ってどういうことだよ！」

「知るか！どんな機体だよそれ！」

「コイツの名前は『黒船』ッ！世界に三人だけの『ISが使える男』が引き起こす波に乗る船は『黒船』が相応しいだろう・・・って社長の言葉だよ！」

「お前の所の社長頭どうかしてるぞ！」

「本当になー！」

『良いからさっさと始める馬鹿者共！』

「りよ、了解しました!!」

千冬先生には敵わなかったよ・・・

「さて、改めてやるとしますか」

「量産機の意地。見せてやんよ」

丁度俺とクリスの間の空間に青いパネルが浮かび上がり、⑤と大きく表示される。俺はそつと購買で貰ったレジ袋を取り出し、その口から伸びている紐を引っ張る。

そして『Ready』の文字が表示されると数が④、③と減って行き、①の次に『FIGHT』の文字と同時にパネルが消え去る。と、同時に巨大な剣を肩に担いだままこっちに突っ込もうとするクリスへと向けてレジ袋を軽く放る。

「これぞ現代忍法！木の葉隠れの術っ！」

叫ぶと同時にレジ袋が破裂し、中に詰め込んでいた枯葉が辺り一面に散らばる。

舞い落ちる枯葉の隙間から、ISのハイパーセンサーが捕えたのは驚いた表情をして急停止するクリスの姿。

ソレを確認してから紐で繋がった二つの手榴弾を取り出し、安全ピンを外してから頭上で振り回し・・・そして投げる。

そしてクリスの体にその紐が巻きついてから爆発した所を見たところで思わずニヤけてしまった。

確実に手榴弾を喰らわせるための作戦を考えている最中にネットを徘徊している時に見かけた物を流用させてもらったものだ。

せこい？最終的に、勝てばよかろうなのだアー！

「くそっ！せこいぞ翔この野郎！」

そう言つて真つ直ぐ突っ込んでくるクリスだが、真つ直ぐ振り下ろしてくる剣を、IS特有のホバー移動で横に動く事で回避し、そのわき腹を蹴り飛ばして体勢を崩す。

そして、狙撃銃砲台を取り出し、ストックをしつかりと肩に当て、左手で砲身を掴み、引き金を引く。一発、二発！さんは・・・避けられたので二丁拳銃に持ち替えて近づけないように牽制をする。

「うわっ！ちよ、なんだそれ！リヴァイヴの武装調べたけど見覚えないぞー！」

「そりやそうだ！千冬先生独自のルートで手配して貰った特注品だからなー！」

「何ソレ卑怯だぞー！」

「戦いに卑怯もらつきようもあるか！限られた状況で使える物を全て使つて勝てばいいのだよー！」

「超セコイ！せこいぞー！ダサイぞ翔！」

「恥も外聞も知るか！俺はな・・・勝たなきや・・・勝たなきや殺されるんだよおー！」

「なにそのやられ役みたいな発言！」

「自分の体重超える代物体に装備して動けるわけねえだろうが！」

「うおっ！何だよ突然意味分からないこと言うな！八つ当たりするな！戦えよー！」

「戦つてるだろうが！俺の戦い方はなっ！相手の得意な戦い方をさせない事なんだよー！」

「なんだよそのイヤらしい戦い方ッ！」

「これが・・・戦いの本質だ！死なないために！生き残るために！相手を殺すことなんだよお！・・・死なないけど」

「じゃあ真面目に戦えよ！」

「真面目に？真面目につつつた？この機体ブレード積まれてねえのにどうやって真面目に戦えって言うんだよ畜生が！何か？じゃあ殴つてやるよこの野郎！」

スラスターで加速しながら近づきそのままタツクル。そのまま吹き飛ばすクリスに向け両手の拳銃を乱射する。

「クソ、が・・・真面目にやれって言うてんだろがア！」

「真面目だし本気だ！」

クリスの素（？）が出たところで俺はいたって真面目だ。そう、今の口調は全て真面目な演技なのだ。勝つために使えるものは全て使う。それは相手もだ。相手の望んでいる事とは逆の事をして相手はイラつかせ、思考を狭ませる。そして視覚外から攻撃をする！

これが通じる相手って・・・いないんだよね。師範とかソレをさせてくれないし、師範代とかそれ以前に強いし。千冬さんは師範以上にそれどころの騒ぎじゃないし。

だから予想以上にハマっているのを見てニヤけてしまいそうになるが、頬を必死に押さえる・・・まだだ、まだ笑うな・・・

「オルア！殴ってこいやア！」

「だが断る！殺す気満々の相手に突っ込む馬鹿がどこにいる！」

「ここに居るー！」

「ただの馬鹿じゃねえか！」

クリスが叫びながら剣を無駄に振っている間に俺は拳銃でチマチマとシールドエネルギーを削っていく。

三回ほどリロードを挟んだところで『試合終了！』というプレートが空中に現れる。

その下には『勝者、鷺津翔』の文字。

「・・・ま、まさか・・・削り殺されたのか」

「フツ、計画通り」

「なっ！まさかその顔・・・翔、お前！」

「そうだ・・・全ては俺の手の中よ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・か、完敗だ。俺もまだまだ修行が足りなかったのか・・・今度の休みにまたあの猛特訓が待ってるのか」

その猛特訓とやらを考えてガツクリと項垂れているクリスには悪いが・・・俺だつて鍾倍は嫌なんだ、悪いなクリス、お前もまたトモだった・・・

「これより三位決定戦を行う！」

Aピットでそう叫ぶ千冬先生の後ろで、俺はベンチにオルコツトさんと篠ノ之さんに挟まれる形で座っていた・・・

「三位決定戦、やるんですね」

「お前等男連中はまだまだ経験不足だからな。少しでも経験を積ませる為だ」

「うむ、確かに一夏は実戦の中で進化していくからな。練習よりもこちらのの方が良いのかもしれない」

「そうですね！実戦の中で成長された一夏さんに私も敗れてしまいましたからね」

「・・・・・・・・え？オルコツトさん負けたん？じゃあなんでここに・・・」
「それは私から説明しよう」

キヤー千冬さーん！ここから出してください！

「織斑は機体性能をよく知らないままに扱ったから負けた、それだけだ」

「シンプルすぎませんか？・・・というか、今日来たんですよねあの専用機。仕様知らなくて当然ですわ」

「あれには私も扱った零落白夜が積まれているな、それがまた無駄にエネルギーを馬鹿食いする代物なのだ・・・見ろ」

そう言つて顎で差された先を見てみると画面の中で真っ白い刀の様なレーザーブレードを振るう一夏君と、ソレを必死に避けるクリスの姿が・・・クリス、まあお前は真っ直ぐ戦う方が楽なんだろうけど・・・千冬さんの口ぶりからしてなんかとてつもない一品を一夏が持つてるって事は分かった。

「あれは相手のエネルギーを消し飛ばす代わりに自分のエネルギーも大量に消費するのだ」

「つまり・・・最悪自爆、よくて相打ち、最高で勝利って武装って訳ですか」

「欠陥機だな」

「千冬先生 I S の事そう呼ぶの好きですよね」

「事実だからな」

そんな事を話している内に、クリスに一夏の零落白夜が当たり三位決定戦は終了した。

さて、いぎ一位決定戦！ってかき、なんか知らんがオルコットさんの態度がスツゲー軟化してるんですが一体何があったんですかねえ・・・

原作とは違う使命があつたそうですよ

「一夏君が機体を生かせずオルコットさんに負けたり、俺がクリスにセコク勝つたり、一夏君にクリスが負けたりという結果の中、俺は今、Bピットにいた。」

「鷲津、少し気を楽しにして戦え。これは実戦ではないのだからな」

「言つても千冬さん、俺気を抜いたままISに乗って戦つたら有事の時までスポーツとしてしかISを見れなくなっちゃいますよ」

「今のISとはそういうモノだ。お前は少し物を知らなすぎる。世間はISをスポーツとして見ている者が大半だ」

「その他はやつぱり兵器ですよね分かります」

「力を抜け、これで負けても錘は増やさん」

「じゃあ力抜きますわ」

「・・・まったくお前と言う奴は」

現金とでも思われてるんですね分かります。実際現金ですよ。お金が無きや何にも出来ませんからね。

「相手は制限付きのクリスと違って全力の代表候補だ。力は抜いても気は抜くなよ」

「聞けばなんとレーザー兵器だと言う話で」

「篠ノ之からか？」

「いいえ、本人からです」

「ならば良い」

「・・・いいんですか」

「ISの情報は公開が基本だからな、調べればある程度は出てくるぞ」

「ネット・・・恐ろしいっ!」

「未開の文明の人間かお前は」

「いや千冬先生も俺の故郷知ってるでしょう? 未だに薪で風呂沸かしてる家もありますからね」

「それは・・・なんと言うべきか」

「ま、その件は一先ず全力で投げ捨てて・・・ガチの遠距離戦闘のエリアに遠距離のみで勝つてと仰りますか」

「何事も経験だ。これに勝ったからと言って油断などするなよ」

「戦う前からなに勝ったときの事言ってるんですか千冬さん・・・」

「・・・貴様」

「すみませんごめんなさい調子乗りました!」

「・・・カタパルトに乗れ。全力の設定で飛ばしてやる」

「いやもうホント勘弁してください・・・」

「冗談だ」

ホントに? ねえホントに?・・・アーツ!

「駄目、これは吐く・・・久々に吐く・・・」

「だ、大丈夫ですか?」

そんな事を聞いてくるのはオルコットさん・・・スク水みたいな
着て青い機体に乗る手に持っている未来的なデザインのスナイパー
ライフル、そして空中に浮く四つの物体・・・まさか・・・あれはつ
!

「ファンネルか! いやビット兵器だったか! スゲエ・・・IS技術って
レーザーだけじゃなくってそんな事も出来るのか・・・知識としては
知っていたが、なんて言うかスゲエ」

「語彙力大丈夫ですか!」

「大丈夫だ、問題無い。じゃあ早速始めるとしますか」

ロマンを目の前にして逸る気持ちを抑えて拳銃を両手に取り出す。
相手が遠距離&中距離とか関係ねえ、女郎ブツ倒してやらあ!

『試合終了! 勝者、セシリア・オルコット!』

やっぱり国家代表候補には勝てなかったよ・・・

何が恐ろしいかって木の葉隠れがまったく通じなかった。木の葉
の中でひっそり移動してたにも関わらず木の葉の外からビットで攻
撃してくるとかヤベエよ。どんな状況判断力だよ・・・拳銃撃つても
当たらないし、分かりにくい無理ゲー。

「あ、あと少しで負けていたところですね・・・」

「そこまで追い詰められたのか・・・あんまし攻撃当ててないと思っただけ
どな・・・」

「掠った程度でもエネルギーは削られますので・・・それにしても剣はお使いになられませんでしたね」

「この機体何故かブレード積んでなくてね・・・いい経験になったよ、流石代表候補生。これで俺は更なる高みへ到れる」

「ど、どこを指しているかは存じませんが頑張ってくださいね」

試合後のトークを挿み、お互いのピットへ戻る。

「錘を増やさないと言ったな・・・あれは嘘だ」

戻ったピットで待っていたのは、千冬先生の無慈悲な一言だった。

あ、アイエエエエエエエ!

アリーナ整備室でリヴァイヴから狙撃砲と手榴弾を装備から外し、狙撃砲はISを使って台座に乗せてから鎖を巻きつけ頑丈な南京錠で閉じ、手榴弾はそのままケースへ入れる。

「ああ、この重みを何故か懐かしく感じてしまう・・・でもこれ、増えるんだろ?」

手榴弾ケースに入れていた錘を体に付けていくと、その重みでどこか安心してしまう自分がいるのが怖い。まあ一週間殆どの時を一緒に過ごした言わば『愛用品』・・・愛用品で思い出した。

「リヴァイヴもお疲れ様だ。勝利の栄光をとか言っておいて一勝しかくれてやれなかったな、不甲斐無い乗り手ですまなかったな」

狙撃砲とは別の台車に載せたりリヴァイヴを触りながら呟いてみるが・・・聞こえてるのかね。

「にしても何で俺お前等を動かせるんだろうな・・・」

ふとした疑問を呟いた直後、ISが起動した。グツタリとしていた肩(?)が持ち上がり、全体的に姿勢がよくなっていた・・・え、なんで、どして?どおちてえ?

「あ、あれ?誰も乗ってないよな、何で動いた・・・暴走か!」

『ふっふっふ、その疑問にはこの束さんが答えてしんぜよ』

「ISから声が!まさかこれがISの意思なのか!」

『それは違うよ!これは私がISに通信しているのだっ!』

「つまり電話みたいなもんか!ISを携帯代わりに使うなんてどこの

馬鹿だ！」

『この馬鹿さ！……って誰が馬鹿だ！謝りなさい！』

「アツハイすみません」

『うんうん分かればよろしく、人間素直が一番さ』

とか何故か腕を組んで首も無いのに頷いている動作を見せるラファール・リヴァイヴ。……ってこの人結構重要な事言わなかったか？

「た、束？……まさかその名前篠ノ之のお姉さんの名前か！」

『そしてISの開発者、篠ノ之束さんとはこの私のことだ』

「……で、どうやれば機動停止できるんだこれ」

『まったまったまった！君は気にならないのかい？鷺津翔君。いやしょーくん！何故君がISを動かせるのかを！』

「気になるには気になるが……ソレより行方不明のIS開発者が俺に語りかけている事の方が疑問に思う」

『その辺も含めてのこの会話さ！いや〜まさか本当にいるとはねー』

「ISを動かせる男がか？」

『いや、「リング」に選ばれた存在、が』

「……さて、コイツ今なんて言った？『リング』？リングってなんだ？」

『そう！リング。禁断の果実、エデンのリング。様々な呼び方があるよね』

「その、リングがなんだって？」

『いや〜わかってるんでしょ〜じやなきや山なんて走り回らないよね〜コナー君みたいにさ〜』

「……コナー、リング。この世界に生まれて十五年と少し。もう殆ど前世の記憶も薄れてきてはいるが、その繋がりはしっかりと覚えていた。」

ある一人の伝説の凄腕アサシンに様々な知恵を与え、人を意のままに操る力を持ったまさに『エデンの林檎』の名に相応しい謎の球体。まさか存在するとは思ってもみなかった。

「あさ……くり……」

『そうそうくやっぱり分かってたんじやないか』

「そのリングと、俺がISを動かせる事の関係はなんだ！」

『束さんはねくリングを手にして知識を得たんだよくその成果の一つがISなんだよね』

「・・・で、なんで繋がるんだ？」

『鈍いなくしょくんはくリングの知恵の一つがISで、この世界のISの始まり。言わばマザーだね』

「司令塔みたいなの？・・・でもなんでリングが俺をISに乗せたんだ・・・」

『リングはね、欲してるんだよく世界を救える人材を。それこそデズモンド君みたいな、ね』

・・・ISが動いたと思つたらIS開発者の篠ノ之束が動かして、そしてエデンのリングからISが作られて、そのリングが俺がISを動かせるように手配してて、世界を救って・・・超展開過ぎる上に世界救えとか頭が混乱して付いていけねえよ。

『いやくIS動かせてくれてよかったよ、じやなきやいくら束さんとはいえ気付かなかったからね！』

「いや待て世界救えってなんだよ！太陽フレアか！核戦争か！」

『なんだろうね、リングは束さんには教えてくれないんだよ。調べようとしてもプロテクトがかかっているみたいで開かないし、ただ一つ。「相応しい存在を呼び寄せた。彼に渡せ」としか表記されないんだよね・・・』

「呼び寄せた・・・って、待て待て待て待てどういうことだよ！」

『いやく察しはついてるんじゃないかな。ま、考えを整理していきよ！その内会いに行くからさ！』

「いや待て！まだこつちには聞きたい事があるんだよ！」

『残念、ちーちゃんが向かってきちゃってるんだ。やっぱりバレちゃったかく流石ちーちゃん！』

「呼び寄せたってなんだ！」

『最後に教えてあげる。リングは「失敗」したんだよ・・・じやあねしょくん！次に会える時が楽しみだよ！』

そう言い残すとISが待機状態へと変化し、虚しい音を響かせながら台車の上に落ちていった。

「失敗した・・・前世の知識の事か？・・・会いに来るってなんだ・・・
どういうことだ、まるで意味が分からんぞ！」

ただでさえ生徒会長との関係をどうするか悩んでるところに『リング』なんて爆弾落としてくるなよ、もうシレっと嘘付けねえじゃねえかよ。

「鷺津！大事無いか！」

爆音が二度ほど響いた後、目の前をドアが吹っ飛んで行き入り口から千冬先生が姿を見せた。

「あ、あー・・・凄い勢いですけどなんかありました？」

「・・・いや、何も無いならいい」

そう言ってから俺から台車の上にある待機状態のリヴァイヴに目を移動させた千冬先生・・・うん、絶対感づかれてるよねこれ、駄目だよねコレ。

「どうして待機状態なんだ？」

「これから起動させて放置しようかと思っただけ」

「そうか・・・先に戻っている」

「了解しました」

手榴弾を入れたケースを持ち上げふらふらと出口へ向かう・・・と、千冬先生とすれ違う直前腕をつかまれた。

「お前が言うまで何も聞かん、詮索もせん。だが束には気をつけておけ」

「了解です・・・あと、錘は何時取りに行けばいいんですか？」

「夕食後に寮長室に來い」

腕を放してくれたのでそのまま歩みを再開する。

完全にバレーテラ・・・さて、千冬先生にはその時にでも話してみるか・・・『俺、世界を救わなきゃいけないんです。そのためには篠ノ之束に会わなきゃいけないんです』どんなだよ。

幸いな事が一つ。

『俺の手元にリンゴがない』事だ。正直あつてもどうしろって話だけど・・・あつたらあつたで確実にテンプル騎士にもアサシンにも襲われる。

ロクな装備の一つすらなく、後ろ盾も、逃げる先も無い。そんな状況積んでるからな・・・手榴弾で自殺でもしろって？世界を救う人間が？

ああ、今回も駄目だったよ、次はこれを見ている人達にも手伝ってもらおうよENDじゃないですかーやだー・・・

「つてわけで話そうと思うんですけどこの部屋防音とか大丈夫ですかね」

「どういう訳かさっぱり分からんが、移動するぞ」

察長室来た意味が無いじゃないですかーやだー。

そして連れてこられた先はなんか無駄に広い地下室。やだ・・・デジャビュ・・・

「そして、なんだ。あいつに何を言われた」

「なんか知りませんが、救世主になれって言われました」

「・・・ひよつとしてギャグで言っているのか」

「その判断付かないからこうして話してるんですけど、その内会いに来るって言っていましたけどどうしたら良いんですかね」

「そうだな、ひとまず鍛えるか」

「・・・え？」

「世界を救うのだろうか？では何においても強さは必要だ。無ければ世界を救えんぞ」

「いやまあ正しいっちゃ正しいですけど」

「というわけだ、時間があれば朝の特訓に付き合おう。全力でな」

「よ、よろしく願います・・・」

そんな予定が決まった後で、錘が倍になりました。

「倍・・・倍じゃ俺の体重より重いんですけど、もう俺立つてられないんですけど」

「本来なら1.5倍にしようと思っていただけのだが、事情が事情だ。本当に世界を救わねばならないのか分からんが鍛える事は良い事だ」

少なくとも今の俺の力量を超えた修行をされましても・・・

「限界を超えろ」

「そんなスポコン漫画みたいなの・・・」

「お前が何を思って私に相談したのかは分からんが、お前が必要だと思っただろう。ならば頼られた側の私は私の出来る最大限で応じるしかないだろう」

「・・・俺の後ろ盾、ここにあったよ。いや、居たよ。世界最強とか言う化け物級の後ろ盾が。」

「千冬先生・・・もうホントに田舎に引き籠もってたいです」

「世界を救うのだろうか？救って見せろ。最低限で・・・私を超える事だな」

「何この人怖い。例えるなら、RPGとかで勇者に対して凄く友好的な魔王だよ、スタート地点に低レベルモンスター配置して、力量は測るために所々に中ボス配置して、最後に似たような台詞言っつて勇者発破をかける魔王様だよ。」

「そんな事言われたら俺・・・全力で応えるしかないじゃないか！」

原作三話への繋ぎらしいですよ

この世界にリンゴがあったり、何故かIS開発者が話しかけてきたり、千冬さんが稽古を付けてくれる話になり・・・俺は今、

「千冬さん、死んで・・・死んでまう」

「慣れろ」

「そんな、ご無体な・・・」

「さあ、まだまだ行くぞ」

「やめてくださいしんでしみます」

錘が倍に増えた翌日の早朝。

千冬さんが振って来る俺の竹刀を全力で逃げている最中だ。ソレも錘(1/2)付きで・・・相棒が寝取られた俺の気持ちなんて誰にも分からないだろうな!時々ヒットしてくる俺の相棒(竹刀)からは『ああこれだよコレ・・・振られてるって感じがする、もうコレ覚えちゃったら普通の人間じゃあ満足出来ねえよ・・・』という思いが伝わってくるのだ。

物理ダメージと精神ダメージの相乗効果で俺は身も心もボドボドダァ!

「どうした驚津!その程度で世界が救えるか!」

「まだまだ救えませんよチクショウ!もう俺の代わりに救ってくださいよー!」

「それは出来ん、何故なら私は教師だからだ!」

「大統領みたいな言い方しないでくれませんかね!」

まああつちは無理でも何でも全力でする化け物だが・・・って化け物しか合ってねえじゃねえか!

「余計な事を考えるな」

「あびやー!」

突然反応できない速度で鳩尾を突かれた。いや、貫かれた。多分コレ背中から衝撃波出たりしてるレベル。それ以前に五メートルを超えるくらいに吹っ飛ばされた。地面に足が付いていたにも関わらずにもだ。

「今のを完全に避けられるようになれ。でなければ私を超える事は不可能だ」

「ちよ．．．ちよ、ま．．．．．これは」

「ああ、今のを喰らつてもダメーが少ないのも必須だな」

「そ．．．それは、人間的に．．．ムリポ」

ガッ！

それが、その時の俺が聞いた最後の音だった。

起きたら何故か制服を着て教室の席で寝ていた。な、何を言ってるか分からねーと思うが俺だって分からねーし．．．

「お前達のランクなど所詮ゴミだ。私からしたらどれもこれも平等にひよつこだ。まだ殻も割れていない段階で優劣をつけるな」

チラツとこつちを見るの止めてください。一夏君が釣られて見て嫉妬丸出しにしています。正直、寝起きにこれはキツイなんてレベルじゃないですよ。何でお前クリスと闘ってたときより気迫出してるんだよ．．．シスコンって怖い、そう思った。

「代表候補生だろうが一から学んでもらうと前にも言っただろう。くだらん揉め事は十代の特権だが．．．今は私の管轄時間だ、自重しろ」
スゲエ、起きて直ぐだから状況分かんないけど沸き立ってたオルコットさんや篠ノ之さんを黙らせた．．．やっぱ恐ろしい人だ．．．修行したら俺もあなれんのかね？

あ、なんか知らんがおおとー！一夏君叩かれたーっ！

「．．．．．お前、今何か失礼な事を考えたな？」

「そ、そんな事はまったくありません」

「ほう？そうか」

「すみませんでしたー！」

「分かれば良いのだ」

何故かなんか何度も叩かれた一夏君が折れた．．．つか変な事考えてたのかよお前。

「一年一組、クラス代表は織斑一夏。異論は無いな」

そんな千冬先生の言葉に俺以外の全員が一斉に声をそろえて答え

た。

いや君等、仲良すぎない？・・・いや、入学直後のホームルームで似たような事やった俺が言えた立場じゃないけどさ。

昼食の時間、本音嬢に簪嬢を任せてクリスと飯を食べる事にした。アイツから誘われたつてのが大きいけど少し話したい事もあったからな、良いタイミングだったな。

「クリス、放課後なんか用事あるか？」

「いやねーけど・・・なんだ？なんかあるのか？」

「いや、銃の練習してえんだけど、やっぱ一人でやるのは悲しくてな。で、専用機が完全銃撃用のお前に教えて貰おうかと」

「つつても俺だつてISのハイパーセンサーで無理矢理やってるだけだから殆どお前と同じじゃないのか？」

「でよ、このIS学園。射撃場があるんだけど一緒に行かないか？」

「スルーしたよコイツ・・・つて射撃場？そんなところあるなら教えてくれよ！」

「敵に塩送る様なマネはしたく無くてなー。それにお前だつて一夏君に付き合つて剣道してたんだろ？ソレと同じだろ」

「いや、まあソレ言われるとそうんだけどさ・・・で、その射撃場つて誰に教わつたんだ？山田先生か？」

「千冬センサー」

「・・・お前、織斑先生と仲いいよな」

「そうか？俺のやる事に付き合つてくれる良い先生なだけだと思うけどなー」

「・・・ま、射撃場に案内してくれよ。俺も練習するからさ」

「ま、俺よりも有効的にあの場所つかえるだろうしなー」

「で、ホントに織斑先生とは何も無いんだよな・・・」

「あるわけねーだろ」

なんでそんな含みを持たせた言い方するんだよ、マジで教師と生徒なだけだからな・・・なんだその目はっお前信じてないだろ！

あつさりと放課後を向かえ、のんびりと射撃場へ向かう道中、

「そう言えばお前のあの大剣。なんだったんだよ」

「あ？あああれか。あれは・・・名前は伏せるが『斬撃を飛ばせる』って代物を想定して作ったらしいんだよ」

「なにそのロマン武器。つてか出来んの？」

「出来るらしい」

「で、なんで使ってこなかったんだ？」

「正直それどころじゃなかったからな！お前の闘い方のお蔭でな！」

「ハツハツハ！世の中には兵法という物があつてだな、ただ剣を振つてりや良いってわけじゃないのさ！」

兵法云々は師範代から教わった。師範も師範で脳筋だからな、ソレ思ったら俺つて相当詰め込まれてた？

しっかし、あの戦い方をして正解っぽかったな。近距離だけの相手だと思つてたら中距離攻撃をしてくるとかどんなビックリだよ。

「おっと、クリス、ここが射撃場の受付だ。そしてこちらが受付の坂山さんだ！」

「クラス代表戦も終わったつて言うのに熱心だね鷺津くんは、それと・・・金城くんだっけ？」

「どうもお初にお目にかかります。三番目の男性 I S 操縦者金城栗栖です。気軽にクリスとおよび下さい」

「私も一応 I S 学園に所属しているからね、流石に一人の生徒を名前と呼ぶわけには行かないんだ、ゴメンネ金城くん」

「そうですか。なら無理を言うわけには行きませんか」

誰だお前。もう一度言おう、誰だお前。

俺の目の前には爽やかな雰囲気を纏わせる金髪オツドアイのイケメンしかいない・・・こいつ誰だ！

「これからもこちらへ通うと思うので以後よろしくお願いします」

「分かったわ金城くん。それと、初心者用にこれね。初日はこれって決まってるのよ。それと、鷺津くんは今日は？」

「拳銃とアサルトライフルでお願いします」

「はいじゃあ記入お願いねー」

坂山さん（年齢〓三十五歳・既婚）は非常にとっつき易い人物である。口調もフランクな上に雰囲気自体も非常に軽いのだ。しかし、射撃の腕はオリンピックレベル。拳銃握ると性格が変わるタイプの非常に珍しい人間だ。頼むからISには乗らないで下さいね。

受付で銃と一緒に渡された射撃場訓練設定パッドを操作して保護ゴーグルに的を表示させる。

このパッド何が凄いつてゆつくり動く的のスピードを上げたり、瞬間移動する表的表示時間を変えることが出来る事だ。俺は表示より1.5割増しでギリギリ付いていけているが瞬間移動する表的が問題だ、五秒位しか表示されなかったのが三秒位に減っただけでもう当てられない……

「さて。じゃあやるか……」

「やるって言われてもどうしろと」

「適当に撃ってみてくれ、俺はそれ見て学ばせてもらうから」

「じゃあ今度お前の剣も見せてくれよ……」

「剣道場で散々見ただろ」

「ハッキリ言おう……見えなかったし分からなかった!」

「ハッキリ言う事じゃないだろそれ……」

「今度しつかり見せろよな、俺も今から見せてやるからさ!」

そう言って射撃し始めたクリス……おおすげえ!瞬間移動する表的も含めてきっちり当ててやる……

だが、やっぱ見てるだけじゃ分かるわけも無いか。だが今の實力は分かる、射撃戦じゃ負ける。

翌日、放課後を整備室で過ごそうと歩いていると虚さんと遭遇した。

「どうもお久しぶりです、お変わりありませんか?」

「これは鷺津さん、お久しぶりです。そちらこそ何かありましたか?」

いやーこの人もしつかり会話してくれるからいいわー、飯食ってる時に「邪魔よ、どきなさい」とか言ってくる女子とは違って良い人

だ……あ！なにかあったで思い出した！

「あの、答えづらかったら答えてもらわなくていいんですけど……夏君と簪嬢ってなんか訳ありだったりします？」

「え？……ええまあお答えしますが、何故そう思ったのですか？」

「一回食堂で二人が鉢合わせた時に簪嬢の反応が何か変だったのだから」

「え、ええつとですね。織斑くんのISがどこで作られたかはお聞きしましたか？」

「千冬先生がチラツと言った様な……確か、く……くら……く……らもつ？」

「倉持技術研究所、通称『倉持技研』です」

「……えつと、簪嬢が一人でIS作ってる理由ってまさか」

「そうです。簪お嬢様の専用機もその倉持技研で作られるはずでしたが……その途中で織斑くんのIS、白式の開発にシフトチェンジしてしまいました……それで彼を敵視されていられるのです」

「……アイツはもうホント、なんなんでしょうね」

「さあ、私にはさっぱり分かりませんので」

「ですよー……あ、聞きたい事はこれだけです」

「では、私からの質問もお答えできたらでよろしいのですがよろしいですか？」

「構いませんよ。こつちが聞いてばかりじゃ流石にムシがよすぎるなーって思ってたところですし」

「では……鷲津くん。貴方は本当にアサシンではないのですか？」

ああうん、テンプル騎士(仮)の会長のメイドさんでしたもんね。そりや気になりますよね。しっかし……聞き方の雰囲気が会長のソレとは違うんだよね、分からんけどなんかそんな感じだ。例えるなら……策士的な？」

「違いますよ。つてかそのアサシンってなんなんですか？ただの暗殺者……つてわけでもなさそうですよね」

「残念ながら、私がお答えできる範囲外なので、申し訳ございません」「いえいえ、初めに答えられなかったら答えなくていいですつて言ったのは俺ですから気にしないで下さい」

その後、日常会話で盛り上がりながら整備室へ着き・・・本音嬢を回収して戻って行った。回収するために向かってたんですね・・・お仕事、お疲れ様です。

「さあ！修行の時間だ！」

「夜中にどこ行くのか疑問に思っただけで話しかけてみたら・・・なんでお前そんなにテンション上がったんの？何？深夜テンション？」

「クリスに連れてこられたらなんか凄い事になりそうな予感が」

「・・・鷺津はこういう人間だったのか」

「クリス！一夏君！そして篠ノ之さん！ようこそ突発夜の鷺津ブーツキャンプへ！」

「ちよwwwおまwww」

「え、なに？・・・え、なに？」

「・・・ブーツキャンプか、良いな」

「これから行う事を毎日しっかり練習すれば君もいつかは世界的強者の仲間入りだ！ソースは千冬さん」

「なんてこつたい・・・情報源が確か過ぎる・・・こりややるしかねえ！」

「そうか、千冬ねえの・・・ってなんで翔が知ってるんだよ！」

「ふむ、ならばやってみようではないか！」

「いいか！ブーツキャンプは魂でやるんだ！それだけ心に留めながら付いて来い！」

「サー、イエッサー！」

「え、付いていけない俺が悪いのか？」

「さあ！まずは手始めに軽くIS学園敷地内ランニング十週だ！」

「それで軽くってどういうことだよ！IS学園どれくらい大きいからお前も知ってるだろう？」

「サー、イエッサー！」

「あーもー！さーいえっさー」

「どうした！声が小さい！！」

「サー、イエッサー！！！！」

翌朝、起きた俺は凹んでいた。

「なんであんなことやっただらう・・・」

久しぶりの大人数との修行だったからなのかな・・・夢、だったりしないよなあ。

「おはよう翔！昨日は楽しかったな！」

「おはようだ鷺津、昨日は実のためになるレッスンを付けてくれて感謝するぞ！」

「おっす翔！昨日は疲れたけど朝起きたら体が軽いんだ、これもあの運動のお蔭だな・・・これからは適度に体を動かす事にしたよ」

非常に晴れやかな雰囲気の一夏君に、どこかスッキリしたような表情の篠ノ之さん、そして爽やかなクリス・・・・・・助けて千冬先生、ああん、そんな『自業自得だ』みたいな目で見るの止めてくださいよ。これでも一応反省してるんですから。後悔はしてないですけど。

原作ヒロイン（その三） 来ISS学園ですよ

千冬さんに攻撃喰らったり、ポルポル気分を味わったり、クリスの銃の腕前が俺よりも優れていたり、虚さんに疑われたり、ビリー隊長になったりして少し過ぎ、周りの新入生気分が抜けつつある四月も下旬。

俺、というか一年一組の全員で校庭みたいところで女子はスク水みたいなISSスーツに、男子（俺以外の二人）は上と下は腹の辺りで分かれているスーツを着ていた。俺はジャージだよ！実際ジャージの方がいいんだけどね、企業や政府が手を回してる二人の事なんてうらやましくなんてないやい・・・

「ではこれよりISSの基本的な飛行操縦を実践してもらおう。織斑、金城、オルコット。試しに飛んでみせろ」

そんな事を千冬さんに言われている三人。俺？専用機もってねーし、別にうらやましくなんてねーし・・・

「早くしろ。熟練したISS操縦者は展開まで一秒とかからないぞ」

いや、オルコットさんはそうだろうけど一夏君とクリスは・・・まあ初心者ですから大目に見てあげてくださいませんかね・・・俺が出来た場合は是非大目に見てください。

「集中しろ。自分のISSをイメージしろ」

そう優しくささやく千冬先生ボイスに周りの女子はキャーキャー言い始めるが、別にいいじゃないか、千冬先生が優しい声を出したって普通じゃん。

そんな事を内心で思っている間に気が付けば一夏君もクリスもそれぞれ専用の機を纏っていた。ただ、クリスの装備が少し修正されている。

太股とふくらはぎの外側に三つの砲身を持つ砲台が付いているのだ・・・企業だから割と気軽にアップデートできるのかね？

「よし、では飛べ」

そう言われて空へと浮いていく三人・・・あれ、オルコットさん早くね？

「遅いぞ男子共、黒船はともかく白式はスペック上では白式の方が上だぞ。黒船もブルー・ティアーズよりも少し遅い程度だろう」

その後上の方でのんびり、多分会話でもしていると篠ノ之さんが山田先生のインカムを奪い取って『一夏ついつまでそんなところにいる！早く降りてこい！それと金城！お前も何をやっている！』と叫んでいる。・・・インカム取られてオロオロしてる山田先生もかわいいな。

「織斑、金城、オルコット、急下降と完全停止をやって見せろ。目標は地表から十センチだ」

そう言った後でいきなり降りてきて、いきなり地面の手前で止まるオルコットさん。・・うん、なんか見てるだけで内臓痛くなってきた。俺はジェットコースターとかフリーフォールとか苦手なんだよ！

その後、クリスが降りてきたはいいものの千冬先生に「遅い。まだ訓練が必要だな」と言われちよつと落ち込んでいる。

そんな中、一夏君が急降下し。・・そして地面に大穴を開けた。なんなの？馬鹿なの？馬鹿なの？シールドエネルギーがあつてよ。かつたな、無かつたお前死んでたぞ。

周りの女子も、確かに面白い面白いが君等がやっても多分結果は同じだと思うぞ。・・

「馬鹿者が、誰が地面に激突しろと言った。グラウンドに穴を空けて何がしたい」

「うっ。す、すみません。・・」

「情けないぞ一夏、昨日私が教えただろう」
篠ノ之さん、ソイツはきつと言葉で教わった程度じゃ覚えないうぞ。実戦で覚える人間だと思うぞ。・・実際クリスとの戦闘でも進歩して、たし、篠ノ之さんや千冬先生の話じゃそんな感じだったし。

「一夏貴様、今何か失礼な事を考えているだろう。大体だな一夏、お前という奴は昔から——」

「大丈夫ですか一夏さん？お怪我は無くて？」

おおっと！ここで篠ノ之さんの小言をオルコットさんがカットだー！

「あ、ああ。大丈夫だが。・・」

「そうですか、それならよかったです」

「・・・ISを装備していて怪我等するわけが無いだろう」

「あら篠ノ之さん、他人を気遣うのは当然の事ですわ。それが例えISを装備していても、ですわ。常識でしてよ？」

「貴様が言うか、猫かぶりか」

「あら、鬼の皮を被っているよりもマシですわ」

「あーっと！両者の間で火花が散っているー！これは熱い！今、IS学園で！織斑一夏争奪戦が熱ーいっ！！」

「おいそこの馬鹿者共、邪魔だ。端っここでやっている」

「つとここで千冬先生が両者の頭を掴んでカット！だが一夏君は救われるのか？」

「織斑、それとクリス。武装を展開しろ。それくらいは自在にできるようにになっただろう」

「は、はあ」

「サー、イエッサー！」

「返事は『はい』だ。いいな」

「は、はいっ」

「アツハイ」

「よろしい。では始めろ」

そしてその後、一夏君の手には白い巨大な刀が。クリスの手には近未来的なデザインのアサルトライフルが二丁。

「遅い。0.5秒で出せるようになれ」

そんな千冬先生の言葉にションボリする男二人。そんな二人を無視し、「オルコット、武装をしろ」と彼女に振り向いてから伝えた。

オルコットさんはオルコットさんで「はい、分かりましたわ」と言い、手を横に伸ばし、狙撃銃を握った。

アカン、アカンよオルコットさん。それは悪手だ。

「流石代表候補、流石だな・・・と、素直に言いたい所なのだが、そんなポーズで銃身を展開させて誰を撃つ気だ。正面に展開できるようにしろ」

「で、ですがこれはわたくしのイメージをまとめるために必要な――」

「直せ。いいな」

「……！……はい、分かりました」

反論したかったのだろうが、千冬先生の言う事が正論だし、そもそも千冬先生に反論なんて出来るわけがねえだろ！

「オルコット、近接用の武装を展開しろ」

「えっ。あ、はっ、はいっ！」

返事はとてもよかったのだが……よかったのだが、装備が出現する気配の欠片も無い……

「う、くっ……」

「どうした、まだか？」

「す、すぐです。——ああ、もうっ！《インターセプター》！」

しばらく頑張ってみても出せなかったからか、それとも苦手なのか、『音声認証』という『初心者用』のシステムを使って剣を呼び出したオルコットさん。どれだけ剣と相性悪いんだよ……

「……何秒かかっている。お前は、実戦でも相手に待ってもらうのか？」

「じ、実戦では近接の間合いに入らせません！ ですから、問題ありませんわ！」

「ほう。織斑との対戦で初心者に簡単に懐を許していたように見えたか？」

「あ、あれは、その……」

その後、オルコットさんが一夏君とクリスに目をやって……表情を変えながらもしばらく見詰め合っていた。

「さて、時間だな。今日の授業はここまでだ。織斑、グラウンドを片付けておけよ」

そう言って去っていく千冬先生と、鼻を鳴らして去っていく篠ノ之さん、話しながら去っていくクラスメイト達にいつの間にか去っていたオルコットさん……

「一夏君、流石に手伝うわ。俺IS無いけど手伝うわ」

「俺もいるぜ！そして俺はIS持ちだ！」

「しよ、翔……クリス……!?!」

俺とクリスマスに涙を流しながら抱きついてくんな・・・きめえ。

にしても・・・一夏君の事が好きなら俺等がやってる事を自分等がやれば少しは好感度が上昇するだろうに・・・男の方から好きになれっ
てか？これも女尊男卑の姿の一つなのかもしれないな・・・

「鷺津、頼み事があるのだが手伝ってくれるか」

休み時間を迎えると同時に、千冬先生が呼び出してきた。

「ち、お、織斑先生。なんで翔なんですか？」

「別に織斑でも金城でも良いのだが・・・お前等の中ではコイツが適任だからだ。納得したか」

「は、はい」

おいこつちに嫉妬の目線向けてくるな。お前がそんな目を送るからクリスマスが弄つて来るんだよ。マジ勘弁な！

「んで、なんですか？何か運びますか？」

クリスマスや本音嬢、さゆか嬢達に背中を押されて廊下へ出た俺はとりあえず千冬先生に質問してみた。教室からの目線がウザイ。

「なに、人を迎えに行つて欲しいのだ」

「それ教師でいいんじゃないですかね」

「人手が無い」

「IS学園エ・・・」

「もうすぐ駅に着くと連絡が来たのだ。流石に誰も送らないというのは失礼だろう」

「千冬先生が行けばどうでしょうか？」

「私では相手を威圧してしまう」

「・・・俺、これでも世界に三人しかいない貴重な男の内の一入なんですけど」

「私は世界に一人しかいない初代世界最強だ、分かるな」

「アッハイ」

こうして俺は、初日に訪れただけのモノレール駅に再び行く事になったのだ・・・ブツダよ、寝ているのですか！

「せ、先生、単位は・・・？」

「特別に後で補習だ」

「あ、アイエエエエエエ!?」

学園の不備で行かされるのにサボり扱いナンデー！ブリュンヒルデ
コワイ！

ブリュンヒルデは実際コワイ。あの後、考えを読まれて叩かれた。
あの人ヤバイ・・・っと、少しテンションが上がりすぎて忍殺語が出
てしまっていたな、落ち着こう。

頭の中がカオスな状況だが、千冬先生から渡された写真をモノレ
ル駅でのんびり眺めながら相手を待つ。

写真を見て分かるのは、一夏君と千冬先生と一緒に写っている茶髪
ツインテールの少女。おそらく彼女の迎えに俺を寄越したのだろう。
何年前の写真かは分からないが一夏君よりも身長が低いのも分かり
やすい。服装は：流石に違うだろ、まあ髪型と顔で判断するか。ア
イドル顔負けの美少女で、雰囲気からするとかわいらしい・・・だが、
一夏君と腕を組んでいる辺り活発そうな子だ。

そんな事をのんびり思っていると、改札から写真の子とよく似た、
脇を出すような改造制服を着た、大きなボストンバックを肩からぶら
下げている小柄な女子が出てきた・・・よく見ると配色がIS学園の
ソレだ・・・よし、話しかけてみよう。

「ねえそこの君」

「なに？ナンパ？だったらどきなさい」

oh・・・写真より活発そうな子だったよ。そしてもし本物のナン
パ男だったら喧嘩になってるな・・・このご時勢でもナンパする男っ
て一体何を考えてるんだろうね・・・

「残念、IS学園からの案内人だよ。どうも、鷺津翔です」

「ああ、よく見れば確かに・・・二番目だっけ？」

「・・・鷺津翔ね。覚えにくかったら適当に呼んでくれればいいから」
「じゃあ翔ね。私の事は聞いてるんでしょ？」

「中国代表候補、くらいしか聞いてないんですが」

「そうだったの？じゃあ改めて、凰鈴音よ。呼びにくいようなら鈴で

いいわよ」

「では、リン嬢と・・・ああ、この響きは実に君にあってるね」

「・・・口説いてるつもり？」

「いんや、単純な感想。じゃあ案内するから付いてきて」

「分かったわ、よろしくね」

鷹の目で確認してみたらリン嬢は青色だ、友好的な人物みたいだ・・・しっかし、角の影に所々青色に赤色がいたり・・・あ、金色。俺を付けて来る金色ってことは・・・生徒会長エ・・・

「千冬先生。任務完了であります」

「ど、どうも・・・お久しぶりです千冬さん」

「ふむ、久しいな。大事無いか？」

「は、はい・・・何事も無いです」

「それと、お前のクラスは二組だ。そちらには私の方で案内するから驚津はもう戻っていいぞ」

「分かりました。じゃあリン嬢、また今度」

「ええ翔。またね」

ここまで来るまでに少し話したが、彼女はなんと言うか。随分スツパリした・・・悪く言えば歯に衣着せぬ人間だ。こちらが少しイラつとする事でも気にせずに出てくる辺り、関わるには少し付き合い方を考える必要がある。

一夏君なら無自覚な嫌味に対して言い返すだろうし、クリスは煽るだろう。多分篠ノ之さんやオルコットさんとも相性は悪い。ただ、千冬先生にはビビッてたよな・・・写真を見る限り昔から交友はありそうなものなんだがなあ・・・

放課後、一年一組専用機持ちは最近、アリーナを借りてのIS訓練をしている。

何故か篠ノ之さんも加わっているが、ぶっちゃけ近距離戦で彼女に勝てるのって三人の中にはいないんだよね。そんな彼女がいることに違和感を感じない。それに彼女も打鉄を借りる申請を精力的に提

出しているからその内ISでの訓練に混じる事になるだろう。

俺？それ以前にメンタル鍛えてます。ISは『兵器』。兵器なのだ。俺が訓練している拳銃も同じく兵器だ。そんな兵器を使って人を殺すための心の準備の真つ最中だ。具体的に言えば、前世の俺が死んだ時を、その痛みを思い出し・・・『死にたくないから殺す』を貫けるために修行中だ。

今までそんな考えは浮かんでこなかったが、ある日銃を撃つてるときにふと思ったのだ。『なんで俺人殺しの技術磨いてるん？』と。

色々考えた結果が殺されなかったために殺す。知識としての『死ぬ程痛い』を知っているからこそ、こんな結果になったのだろう・・・

なんて事を考えつつ、今日も俺は整備室で『中級！IS整備技術。破ッ！』を簪嬢の側で時折本音嬢を構いながら読んでいる。

こんな考え、この二人に伝えたらどんな反応されるんだろうなあ・・・

原作的修羅場だそうですね

一夏君が地面に大穴開けたり、中国代表候補を迎えに行かされた。少しシリリアスになつてみたり……

そんな俺、もとい俺達一年一組全員は今、夕食後の誰も使わないであろう食堂をクラス一同で借りている。所々に見かけない顔もあるが、クラスメイトの友人なんだろう。

「一夏くんクラス代表おめでとー！」

「おめでとー」

「おめでとーさん」

「クエツ！」

おいクリス、それはねーよ。あれほど再放送見ててポカーンってなったのはロボットよりも強い人間達がロボットに乗ってバトルしてるアニメくらいだ。マシンは拘束具……一回言つて見たいモノだな。

そして女子に囲まれる一夏君はアリーナを借りての特訓後。専用機持ちであるクリスも勿論参加していたらしいが、彼曰く「一夏構われすぎ、俺放置されすぎワロエナイ」だそうだ。

「実際そんな？」

「そんな……オルコットさんはたまにこつち見てくれるけど篠ノ之さんは『何してるのそれおいしいの?』って感じだ」

「ま、彼女は良くも悪くも武人だからな……拳銃とか使う気ないんだろ」

「使えた方が色々いいと思うけどなあ……」

「お前のあの斬撃飛ばす剣貸してやれよ、きつと恐ろしい事になるぞ」

「……想像したらヤベーじゃねーか！」

「俺は彼女がIS乗ってるの知らんけど……そんな？」

「ぶっちゃけ今でも『避けたと思つたらダメージ受けた』って感じだ……なにあれ超能力？」

「多分早く振り直してるだけだ。その気になれば俺でも出来るし、千冬さんなら簡単に実演してくれるぞ」

「そんな簡単にできることなのか？」

「なわけねーじゃん。お前両手で拳銃撃つてまったく同じ場所に当てる事出来るか？」

「無理だろ、j k」

「だろ？普通無理だ。そんな感じの芸当だよ」

「……お前、出来るんだろ？」

「したこと自体は無いけど出来るんじゃないかな。そもそもする必要すらないから分かんけど」

相手が相手だから一回できつちりきつかり当てないと死ぬ。当てても死ぬ。そんな斬り返しの練習するくらいなら一振り目を早くする努力をする。そっちの方が建設的だ。

現代版燕返しは『一振り目と同じ軌道で素早く斬り返す』らしいからな。どつかの佐々木小次郎は『まったく同時に別々の軌道で相手を襲う』なんて事を生身でやってたからな……

いや、千冬さんなら出来るんじゃないか？

「はいはいその男子二人！新聞部です、取材に応じてもらってもいいですか！」

「いいですよ」

「申し訳ないんですが断らせてもらいます」

「あ、あれえ……ええ？」

唐突に話しかけてきた黄色いリボンをつけた女子。クリスはオツケーしたが俺は断る。だが何故か断った事が意外そうな反応された……解せぬ。

「な、なんで？」

「そういうの嫌いなんで」

「適当に脚色しちゃうよ？」

俺こういう手合い大っ嫌いなんだよね、まあ好きな奴なんていないだろうけど。やってる本人は楽しいんだろうが、人に迷惑かけちゃいけないよ……俺が言えた義理じゃねえけどさ。

「ま、適当に脚色でもなんでもしてくださいよ」

そんな事より最近ストレスたまりっぱなしなんだよね、生徒会長が

俺のことを付けて来てから・・・話しつけようと近づけば逃げられるし、逃げたと思つたらまた付けて来るし・・・

姉を愛するシスコン弟がいれば妹を愛するシスコン姉もいるのは道理だが・・・流石に二日に一回とかされるとイラつく。週一ならまだ我慢できる、だがそれ以上は無理だ。虚さんにでも相談するか？いや多分無意味だ、彼女もテンプル騎士団だろうしそこまで行動してくれないだろう・・・クソが。

「あ、う、ん・・・きや、脚色はしない事にするよ」

「そうですか？まあその方が助かりますけど・・・なんでまた急に」

「う、うん、私の勘がね、やめとけてさ・・・あ、あはは」

「そうですか、先輩は勘が鋭いんですね」

しかし、なんでだろうねえ（すつとぼけ）

「じゃ、俺はやる事あるから。まあ頑張れクリス」

なんか周りがキヤイキヤイし始めたし、後ろでは「じゃあ金城くん！よろしくね！」「あ、はあ。お手柔らかに・・・」とかやり取りが開始されたところで・・・特訓だ！

特訓を一通り終え、ベンチに座って一息ついてたら何故か簪嬢がやってきた。

「最近思考が随分と駄目な方向に向かつてる気がする」

「・・・脳筋が、無理に頭、使うから」

「うるせえヒツキー！俺は元々田舎でのんびり誰にも干渉されずに生きていきたかつたんだよ！」

「私より・・・ヒツキー・・・？」

「どーなんだろうーねー・・・考えなくていいことまで考えちまって・・・俺、気付いてないだけで疲れてるのかね？」

「私に、言われても・・・」

「だよなー・・・どっかでなんとかしねーと、気持ち切り替えねーとなー」

以上！突発！簪嬢、お悩み相談室！解決しないけどね！でした。

俺、この子に『君のお姉さん、少し話したんだけどさ・・・厨二病

だったよ』なんて言えない!・・・これは、いわば切り札だ!・・・いや、向こうにそう思われてんなら今のうちに手札をカラにして「テキジャナイヨ」ってアピールした方がいいのか?

なんて一人で押し問答してたらいつの間にか簪嬢がいなくなっていたでござるの巻。

機会はいつでもあるから別に今じゃなくてもいいんですけどさ・・・俺、多分明日になったら忘れるんだよなあ。

「織斑くんに金城くん!それに鷺津くんおはよう!ねえ転校生の噂聞いた!」

翌日。たまたま朝食が重なったのでそれ以降一緒に行動してた男三人組にクラスメイトがテンション高めに話しかけてきた。

「へ?転校生?なんでまた今の時期に」

「へー転校生か・・・翔なんか知ってる?」

「というか昨日千冬先生に呼び出された理由が彼女」

「じゃあ知ってるのか!どんな子だ!」

「お前女の子苦手じゃなかったっけ?」

「二人以上が苦手なだけだ!」

「もうホントお前ワカンネエや」

一夏君は一夏君でいつの間にか篠ノ之さんとオルコットさんに絡まれてるし、周りの女子達は『学食デザート半年間フリーパス』がなんだと騒いでいる。

「クリス。お前甘いもの食える?」

「太るのを気にしなけりや食える」

「女子かよ、女子かよ」

「大事な事なので二度言いましたっけか?」

なんてふざけてると教室の入り口から「——その情報、古いよ」とついこの間聞いた覚えのある声が聞こえた。

「二組も専用機持ちがクラス代表になったから、そう簡単には優勝できかないわよ」

「鈴・・・・・・・・?お前、鈴なのか?」

「そうよ、中国代表候補凰鈴音。今は宣戦布告に来たつてわけ」

ふむ・・・まあそりや幼馴染がどつかの国の代表候補になるなんて想像つかねえよな・・・それ以前に一夏君は代表候補自体知らんかったつて話だけど。

「何かツコつけてんだ、スゲエ似合わないぞ」

「んっんな!?何てこと言うのよアンタは!」

あ、こつちが素か。まあ案内した時とあんま変わらないけど昔を知ってる奴からしたら違和感あったのね・・・そんな事は置いておいて、デーンドーデーンドー、千冬先生のリングインである。

「鈴嬢。後ろ、うしろー!」

「あ?何よ翔!今はアンタと話してる暇は——」

「おい」

「なによ!」

バシユン!という発砲音にも似た乾いた音が響き、鈴嬢は頭を抱え、千冬先生は腕を組む。

「もうホームルームの時間だ。昨日案内した教室に行け」

「ち、千冬さん・・・」

「織斑先生と呼べ。さっさと戻れ、そして入り口は塞ぐな。邪魔でしかない」

「す、すみませんでした・・・」

なんとというか・・・千冬先生と相性のいい人間とか居るのかね。俺?ただ弄られてるだけで対等じゃないから本当の意味で相性がいいとは言わない、例えるなら『年上の親戚に構ってもらってる子供』みたいなもんだろう・・・そんな身近じゃねえけど。

そんな事を考えていると「また後で来るんだからねっ!逃げるんじゃないわよ一夏!」と言って去っていく鈴嬢。

ツンデレなのかかませ犬なのかイマイチ分からん台詞だな。

そんな台風のような鈴嬢の登場により篠ノ之さんとオルコツト嬢が一夏君に詰め寄るが千冬先生に叩かれて叱られていた。いつも通りの光景だと思えるのは俺が慣れたからなのか、それとも千冬先生がIS学園新入生の常識を汚染しているのか・・・後者じゃね?

「お前のせいだ！」

「一夏さんのせいですわ！」

授業が終わった直後に騒ぎ始めた二人はスルーして・・・

「本音嬢、さゆか嬢、谷本さんについてにクリス。飯食いに行こうぜ」

「いや・・・置いてっていいののか？」

「いいんじゃない？まだかかりそうだし」

「助けてくれよ！二人とも！」

「メンドイ」

「二人とも仲いくよね〜」

「まあそりゃ、アイツと違ってコイツはまだまともだし」

一夏君はそりゃ良い奴だけど時々なんかズレてるんだよな。いや、俺もクリスもズレてるんだろうけど・・・なんというか、生まれてくる時代間違えてるよコイツ。

「ぶっちゃけ俺等の中で一番まともなのって翔だと思ってるし・・・」
「・・・まとも？」

「さゆか嬢のその反応スゲエ腑に落ちねえんだけど、どう思うよクリス」

「解せぬ」

「いや、解せぬって・・・」

「谷本さん、これ重要な事なんだぜ。一言で簡潔に感情が伝わる」

「確かに分かりやすいけど・・・」

「ほら、他の皆も動き出したしついて行こうぜ。途中で簪嬢も回収して・・・いや最近ちゃんとか食べてるか」

「ワシワシ心配しすぎだよ〜」

「気を抜いた時に倒れられても困るだろ」

いやマジで。ストイックな奴って倒れるまでやり続けるんだよ。若いころの師範・・・ならまだいいんだけど師範は今でもぶっ倒れるまでやるからな。倒れても起き上がって再開するからな。翌日寝込んでる時もあるしもう馬鹿かどね・・・

食堂に着いたら着いたで鈴嬢が一夏君に絡んでいた。ラーメン乗ったお盆持って……

「鈴嬢、ラーメン伸びるぞ?」

「翔! あんたも来なさいよね!」

「え? ……え? なに? 俺アウトオブ眼中?」

「そりやお前、鈴嬢とまだ知り合ってすらいねーだろ」

「冷静に考えたら確かにそうだな。でも俺貴重なIS乗れる男の一人だぜ! なんかこう……なんかないのか!」

「中国代表ならあつたりしたんだろうけど代表。鈴嬢は鈴嬢で興味ない相手にはとことん興味なさそうだからってのもあるんだろうな」

同じ代表候補でも初対面時のオルコットさんみたいに敵意むき出しなのもおかしいけど興味ないのもおかしい。国からなんか言われてねえの?

特に俺とか。

パツと見て分かりやすい後ろ盾は一夏君は千冬先生が。クリスには企業が。俺? なんもねーし、仲良くなったらデータとか取れるぜ? 男でもIS乗れるようになるかもしれねえぜ? 俺的に国はインドとかいいね。企業なら宇宙系の……やっぱり宇宙進出は夢だよな!

随分話がそれたが、大盛りサラダにダブルハンバーグ定食(食堂のお姉さん達の好意で作られた特別メニュー)を持ってクリスと一緒に一夏君達に合流する。他の女子? いるよ。本音嬢と簪嬢は別のところに行っただけ。

そりやそうだ、簪嬢的に。不慮の事故で遭遇するのはギリセーフだろうけど回避できるなら回避しておいた方が精神的にいいからな。

「で、そっちが確か三番目だったっけ?」

「金城栗栖だ! 呼ぶならクリスで、どうぞ」

「じゃあクリス。一夏はどんな感じ? 翔ははぐらかすだけでね」

そりやそうだろ。言ったら言ったでまた面倒なテンションになるんだろ? 俺、テンション高めの時の人間ほど嫌いなものは無いんだよね……主に早坂さんのおかげだよ!

「多分君の知るとおりだと思うけどな……だよな?」

「だろうな。中学時代知らんけど昔からこんなもんなんだろう？」

「・・・む、なにか馬鹿にされてる感じが」

「してるからな」

「してるわね」

「やっぱりか！」

「だってほら、見てみろよ鈴嬢」

「あの二人・・・昔からあんな感じのに囲まれてるんだろ？」

「・・・ええ、そうね。昔からよ、変わらないのね」

ああ、鈴嬢がダークサイドに！

「ま、いいわ！一夏、あんたクラス代表らしいわね！」

「お？おう、成り行きでな」

こつち見んな。俺がオルコットさんに勝つてても辞退したぞ。

だって専用機無いんだもん・・・

「あ、あのさあ・・・あ、ISの操縦見てあげてもいいけど？」

「いいのか！そりや助か——」

「一夏に教えるのは私の役目だ。直接頼まれたのは、私だ」

「そもそもあなた二組でしょう？敵の施しなど受けませんわ」

「あたしはイチカに言ってるのよ、関係ない人はすっこんでてよ」

「関係ならばある。私が一夏にどうしても頼まれているのだ」

一夏ズ幼馴染の間で火花が散っている・・・あれ、オルコットさんどこ行った？

「一夏さんは一組の代表ですから一組の人間が教えるのは常識ですわ。あなたこそ後から出てきて何を凶々しいことを——」

「あたしの方が付き合いは長いわ。後からじゃないわよ」

「そ、それを言うのならば私の方が早いぞ！それに一夏は何度も家で食事をしているからな！付き合いは深いぞ」

「うちで食事？それならわたしもあるけど？」

なんか面倒な事になってきそうだったのでさっさと食べ終えて席を離れる事にした。クリスマスもクリスマスで逃げようと準備をしていたが喉に詰まったのか胸を叩いている・・・何とかコップを手にしたところでカラなことに気付いて絶望して倒れたみたいだ。

精々修羅場に巻き込まれるんだな、俺は逃げる。俺から見えないところ
で全力でやってくれたまえ。

原作的戦闘イベント発生のようですよ

一夏君がクラス代表になった宴をしたり、夜に簪嬢と少しお話ししたり、一通り数少ない友人を昼食に誘ったり、食堂が修羅場だったりした日の放課後。

放課後適当に射撃場で練習し、さっぱりしようとして自室へ戻ろうとしている所で、曲がり角から誰かが飛び出してきてぶつかった。

完全な不意打ちだったが・・・体が反応して思わず相手の首を鷲掴みしてしまった・・・あれ？どうして？

「ちよ・・・カツ・・・は、離しなさい、よっ」

足が地面に着かずにプラプラしてる鈴嬢・・・あ、離してやらなきゃ。

「正直すまんかった」

「すつすまんかったじゃ、ないわよっ！」

少し咳き込んでから殴りかかってきたが、スルーさせてもらう。そのままの勢いで床に倒れる鈴嬢を眺めるが・・・パンツミエナイ（・・・ω・・・）ミニスカなんてレベルじゃないミニスカなのに見える「悪いとは思ってるけど角から走ってきたお前さんも悪いだろ。お互い様だ」

「・・・ってだまされないわよ！どう考えても悪いのアンタじゃない！」

「俺は悪くねえ！だって咄嗟に体が動いちゃったんだもん！」

「勝手に動いてなんで首を掴むのよ！意味不明だわ！」

「まあなんだ、そういう訓練を受けてたからとしか言いようが無いな」
俺だって不意打ちしたら何度も首を鷲掴みにされてそのまま落とされた記憶もちらほら。

そんな事されてたら流石に慣れて掴み返せるくらいにはなる。というかなった。結果が今だ。

「どんな生活送ってたのよアンタ・・・」

「ずっと北海道の田舎で修行の日々。まあそんな話は投げ捨ててだ、なんで廊下走ってたん？ぶつかったのが俺じゃなくて千冬さんだっ

たらやばかったぞ」

「うつ……ね、ねえ、聞いてくれる？」

女の子座り&上目遣い&うつすら涙目……イケルッ！

「で、なんなん？俺の部屋か鈴嬢の部屋かどつかその辺のベンチで話す？」

「うん……ベンチで」

あ、ベンチなんだ……なんか告白もしてないのに振られたような、なんか負けた気分だ。

「できーアイツなんて言ったと思う！『毎日酔豚を奢ってくれてるって奴か？』なんて言ったのよ！あの時の、私が！なけなしの勇気を振り絞ってようやく言ったのにツツ!!」

鈴嬢、お酒も入ってないのになんか泣き上戸だ。渡したのおしるこで酒要素欠片も無いのに酔ってるよこの子……

「まあなんだ……なんで酔豚だったんだい？」

「それは……い、一夏が美味しいって言ってくれたから……」

あ、凄い早くテンションが変わった。さっきまでモテないOLみただだったのが今じゃすっかり恋する乙女だ。

「多分アイツなら他の飯でも同じ事言うんじゃないか？」

「……そうよね、よく考えたらそうだわ」

「でも、そう言ってくれて嬉しかったんだろう？」

「そりやそうよ！だって一夏のこと好きなんだもん！」

「うん、篠ノ之さんとオルコットさんよりも素直なのは良い事だ。あの二人はなんだかんだでうやむやにするだろうからなあ……ま、勇氣出して本人に言っても伝わらないだろうけど」

「アイツは昔っから鈍感のままだから……」

「ま、その辺は篠ノ之さんも同じ感想なんだろうね」

「……アンタは誰の味方なのよ」

「別に誰の味方でも敵でもないさ。明確に決めちゃうと余計な厄介事が増えるからな」

某悪魔を味方にしたり素材に使って悪魔を作ったりするゲームで

はニュートラル一択だ。それ以外に入ったらデータ消します。そんな俺だ。いやあれは余計な敵を増やしてるだけだけどき、『俺を振り回す奴等は全員死ねっ!』な感じで皆殺しだけどき……

今だってほら、テンプルかアサシンか……決めたらどっちかが確実に敵になるわけで。姿が目に見えてるテンプルもイヤだが、姿見えないアサシンを敵に回るのも正直死ぬる。

「ま、頼ってくる奴の味方って感じでいいよ。こっちから助言は出さないけどそっちから聞いてきたら答える程度でな」

「じゃあどうしたらいいと思う?」

「素直に言おう。話せばアイツも分かるだろ」

「分からないわよ、鈍感だし……それに」

「……に?」

「アイツを引つ叩いちやつたし引くに引けないわよ」

「なにその意地……女子は女子でメンドそうだなあ」

「……なによ、男もメンドイの?」

「面倒じゃないわけが無い。少なくとも俺はな、あいつ等は知らん」

「そりやそうよね——」

「して、貴様等は何をしている?」

「そりや……愚痴聞いてるだけ」

「愚痴ってるだけ……って誰?翔じゃないでしょ?」

「当然鈴嬢でもないよな……誰だ?」

「私だ」

後ろを振り向けば……あ、アイエエエエエ!千冬さん!千冬さんナンデ!いつの間に、コワイ!!

「つい先ほどだ。もう寮の門を閉める時間だぞ」

「……俺ってそんなに愚痴られてたんですか」

「……わ、悪かったわね」

「いんや、楽しかったから気にするな。で、千冬さん。まだセーフですよね?」

「後三十秒だ」

「い、行くぞ鈴嬢!」

「え、ええ！全力で走るわよ！」

そして俺と鈴嬢は寮に向かつて駆け出した。後ろから「私がいなければ門が閉まる事はないと言うのに・・・まったく」なんて呆れた声が聞こえるが知らん！今はこのノリが大事なんだ!!

俺達の学園生活はこれからだッ!!

翌日、学校の電光掲示板にでかでかと表示されたトーナメント表はこう記されていた。

『一年一組代表、織斑一夏VS一年二組代表、凰鈴音』と。

その横には『一年四組代表、更識簪』の文字・・・そういや日本代表候補だって本音嬢が言ってたな。じゃなきや企業から専用機の話が持ちかけられないか・・・いや、持ちかけた側が約束を白紙にするってのは中々聞かない話だよな。

ま、俺は友人として簪嬢を応援させて頂きます。

その日の放課後、千冬先生にフードを捕まれて引きずられ・・・なんかアリーナのピットで一夏君に対しての個人授業が始まった。勿論篠ノ之さんやオルコットさんにクリスマスもいる。

ISが欠陥機云々、零落白夜が云々・・・白式のワンオフアビリティー(その機体のみの特技の様な物。普通は一次移行では存在しない)零落白夜の性質は『相手のシールドエネルギーを無効化する』聞けば聞くほどチートだ。正直、ほぼ一撃当てれば勝てる武装だから俺のバトルスタイルにはピッタリで欲しいレベルだ。

「二つの事を極める方がお前には向いている・・・なにせ——この私の弟なのだからな」

はいカーツト！今いいシーン取れたよー、え？なに？カメラが回ってない？逆に考えるんだ、脳内HDDに保存した、と。

「そのためにコイツを連れてきた」

「ココで俺の出番ですよ！」

「・・・何のために連れてきたかと思ったらそういうことですか」

「え、なに？どういうこと？」

「俺とオルコットさん、そしてクリス！この三人による徹底した、休ま

せぬ攻撃を浴びせる事で・・・お前の回避能力と操作技術の向上を行う！」

「……………そういうことだ」

「いや…………でも翔、お前って専用機ないだろ？」

「無くてもお前を鍛える程度なら楽なもんさ。俺だけじゃねーしな」

「そうですねよ一夏さん、私もいますわ」

「俺だってな！あの機体でバンバンぶっ放したいんだよお！」

「……………わ、私は……………」

「貴様は見て覚えろ。見る事も経験だ」

「篠ノ之さんも戦うとなったらブレードオンリーだろうし、勉強にはなるだろ。んで、どこが悪いかのアドバイスを一夏君にくれてやれば成長にも繋がる。一夏君にも、篠ノ之さんにもだ」

「……………そうか、そうだな。私も演舞はよく見て学んだモノだ」

「翔、お前スゴイ手馴れてないか？」

「いや、俺が教わった事をそのまま言ってるだけだ。勿論すっかり実感したから言うのであつて適当に言ってるわけじゃないぞ！ホントだぞー！」

「別に疑ってたわけじゃないけどそんな事言われると疑っちゃうだろ！」

「言葉に意味は無い！」

「考えるな感じるのノリかよ……………嫌いじゃないわ！」

「……………あっちの二人は放っておけ」

「ああ、そうだな」

「そうですね」

「軽く手始めにオルコットと慣らし練習をすればどうだ？二人はその内止まるだろう」

しばらくそのままクリスと遊んでたら「いい加減にしろ」と千冬先生にシバかれた。サーセンした。

それから一週間、時々練習に参加しつつ五月に入り……………さあやつてまいりました、クラス対抗戦！そんなテンション上がっている俺が

今どこにいるかと言いますとね！

「自室ですが何か・・・」

『・・・私は来いと言っただろう』

千冬さんのモーニングコールでようやく起きた次第でござい
ます・・・クソネミ(☒ω☒)

『起きろ！』

「はいおきましたー、今起きましたよー」

『今すぐ来い』

ブチ切られたで御座る、解せぬ。

等と愚痴っている暇は無い！急いで制服に着替えねば！寝癖？・・・
いえ、知らない子ですね。

颯爽と着替え、颯爽と窓を開け、颯爽と目の前に見える木に飛び移
る。が、駄目。上手く掴めずに激突してそのまま地面に落ちる・・・
俺はなんだ？窓に激突する鳥か？いや、千冬さんにいきなり起こされ
たから動揺してたんだ、きつとそうだ。

・・・気を取り直して、普通に歩いていこう。

途中途中でベンチに座って自販機で飲み物買ってブレイクタイ
ム・・・でだ、これから女が溢れてる場所に行くんだろ？香水に化粧
の匂いでリバーズ確定ですわ。正直オルコットさんの側でもキツ
いってのにあんなのに囲まれたら・・・頭痛が痛い。

そんな休憩中に唐突に着信音がポケットの中から響く。ああ、この
着信音は千冬さんだ。分かりやすくラスボスのテーマ曲にしているか
ら直ぐ分かる。

「・・・はいもしもし」

『驚津だな。今すぐIS学園の倉庫に向かえ』

「へ？いや、アリーナに向かうんじゃないんですか？」

『不測の事態だ。私も閉じ込められていて動けん。とにかく倉庫に行
け、説明はそこにいる彼女が行う。出来る限り早くしろ』

あ、切られた・・・別に走りながらも会話くらい出来るつてのに
ちーちやんつてばせつかちさんだな！・・・やめよう、殺され

るかもしれんし、なによりキャラじゃない。

IS学園の倉庫ってあつちでよかつたんだよな？こういう時にフリーランニングが役に立つぜ！

電話から七分。普通に歩いたら二十分ほどの距離にある倉庫へと到着した。

「また世界を縮めてしまった・・・」

「あ、鷺津くん。話は聞いているよ」

「お！坂山さん！なぜここに？」

「いやー、織斑先生から緊急連絡があつてね。言われたとおりに準備してたんだよ」

「準備ってなんのです？」

「それはね・・・これさ！」

そう言つて彼女は直ぐ横にあつた布を取り外すと・・・両腰にISブレードを二本ずつ。肩に付属しているシールドの裏に同じく二本のISブレードが納められた打鉄が存在していた。

「直ぐに取り出せる場所にISブレードが八本。拡張領域にはこの倉庫に納めていたありつただけのISブレードを入れるだけ入れて全部で三十本！」

「いや、なんでそんなに有つたんですか」

「この打鉄のメンテナンスと、ブレードはもう廃棄してリサイクルに回す分全部を明日出荷する予定だったんだよね。そんなときにこの緊急事態！早くIS装備しないと織斑先生が怖いぞー？」

「・・・なんで俺なんですかね。俺より強い教師とかいると思うんですが」

「さあ？緊急時の指揮権は全部織斑さんに一任されてるからね、逆らえないのさ」

「・・・ま、何が起きてるか分かりませんが行つてから考えるか。なあ？打鉄！」

真つ直ぐ手を伸ばして打鉄の装甲に触れる。

次の瞬間には俺の視線が高くなり、視界も広がる。坂山さんが小さ

くなつたような感覚だ。

「じゃあISに位置データ送るよ。視界にマークがつくと思うからそれを追ってね」

そんな事を言いながらパッドを操作する坂上さんを横目に少し冷静になる。

ISブレード四十本弱で武装させた生徒をどうするか？答えは決まってる、戦闘だ。

そう意識した瞬間体中に鳥肌が立ち、腰のISブレードの柄尻に当たっている手が震え始める。

「恐かったりする？」

「いや・・・武者震いですよ」

「そう？じゃあよかった。データ送信完了、いつでも行つて良いよ」

視界に射撃場の的とよく似た物が表示された事を確認し、俺は足に力を入れる。

「二年一組、鷲津翔。打鉄。目標をとりあえず捕縛するっ！」

この一週間、練習してたのは何も一夏君だけじゃないってことを見せてやんよ！

原作とは違う戦闘ですよ

鈴嬢に愚痴られたり、一夏君と鈴嬢が戦う事になったり、一夏君に一組専用機持ちと一緒に訓練つけたり、寝坊したり、IS装備したり・・・大変な事になってる今日この頃。

現在進行形で空を飛んでいる俺です！

さて、意気揚々と飛び出してみたは良いもの・・・問題は一つ。

「ぶつちやけ勝てんのかね・・・」

勝敗条件を設定してみよう。

勝利条件は・・・相手はわからんが、どうせISだろうからシールドエネルギーを削り確保。

敗北条件は・・・シールドエネルギーを削られ、逃げられる。

こっちはほぼ素人。相手は少なくとも中級以上。オルコツトさん以上は確定。

「あれ、負け確でね？・・・いや、やるからには勝つけどき。お前だつて勝ちたいだろ打鉄よ」

なんてぶつくさ呟いている内に接敵。

黒つぶくも見える鉛色のメインカラーに要所要所が白く、黄色のラインの入った機体。

通常のISの様に『手足だけ』ではなく、全身満遍なく覆っている機械の鎧。

ゴツイ肩パーツと手のパーツに付けられているサウンドスピーカーの様な物。

例えるなら、黒い謎の球体に宇宙人殺せって言われる漫画のクリア特典アーマーのような感じだ。

駄目だ、どんな武装があるかさっぱり想像が付かん・・・その通常のISよりも太い手で殴ってくるのか？それともスピーカーみたいなのから何か飛び出るのか？パージして軽くなるのか？

等と考えている間に手の甲についているスピーカーからピンク色のビームを撃ってきた。

「ってビームかい！その発想は無かったわ！」

ビームって言ったたらビームライフルとかビームサーベルとかビツトだろ！ふざけんな！

「クソが・・・カツコイイなチクショウ！」

腰に下がっているISブレードを抜き放ち、構えると同時に、肩の盾も体の前に置きいつでもビームを防げるようにする。

さて、とりあえず相手がビームを出す事は分かった。けど俺の武装は盾が二つとブレード三十八個・・・ブレードを完全に使い捨てにしているなら大量消費するが・・・これ学校の備品だろ？使い捨てにしちやつて大丈夫なのか？・・・ヤツベ、一番大事な事聞き忘れてたわ・・・「まあいいや、説教は後で受ける!!」

両手のブレード振り上げ、相手の肩と胸部に向かって真っ直ぐ投げる。

ビームを使うまでも無いと言わんばかりに腕で弾かれるが、それでもシールドエネルギーは確実に減る。

振り下ろした両手に拡張領域からブレードを呼び出しながら近づくが当然相手も俺から距離を取るわけで・・・ブレードが実体化した時には最初よりも距離を離されてしまった・・・

ええい！これだから機械はっ！

と、少し前までの俺なら愚痴っていただろう。

「見るー！これが俺の・・・一夏君イジメで得た成果だ！」

背中を強く意識し・・・スラスターを爆発させるようなイメージで前方に向けて吹き飛ばす。

急速な加速に意識と内臓その他諸々含めて吹き飛ばされそうになるが、気合とIS本来の『操縦者保護機能』で無理矢理耐えながら、片方の盾を相手の真後ろに移動させ逃げ場を封じ、残ったほうを相手の顔の前に突き出し目隠しをしながら、無理矢理体を回転させ、速度の乗った両手の剣で切りつける。

通称『瞬時加速』と書いて『イグニッション・ブースト』と読ませる技術であり、IS操縦者ならば必須とも呼べる操縦技術・・・とは千冬さんの言葉だ。ぶっちゃけ、真っ直ぐ加速する技でしかないから読まれやすい代わりに読みやすい。更にコレを発展させた『二連瞬時

加速』やそれ以上もあるらしいが・・・無理だ。

「内臓どころか脳みそがシエイクされた感じた。と言うか内蔵千切れそう・・・相手さんも手応えあつたつてのにピンピンしてやがる。これだからISってのは・・・だがまだこの程度では終わらんよ！」

左手のブレードを一度拡張領域へ戻してから、三本のブレードを呼び出し、指の間に挟み、そのまま相手に投げつけ、その後を追いかけながら右手のブレードを両手でしっかりと握り締める。

ブレードの合間を飛んでくるレーザーを、盾を斜めにして当てる事で受け流し、三つのピンクの線の間を瞬間加速で抜け、その先にいた敵に速度を落とさずそのまま激突する。

体勢を崩した敵の腕を足で絡め取り、ついでに腰も足で挟んで固定し、振り上げたブレードで肩にあるスピーカーを突き刺す。

「俺も！一夏君みたいに！バリアー無効化出来ればねえ！楽なんだけど！なあ!!つと、あ、貫けた・・・って危ねえ！」

何度か振り上げて突き刺してを繰り返しているとスピーカーの真ん中をブレードが貫通した。

そこまではよかったんだが腕がこちらに向いてビームを放つてきたもんだから咄嗟に離してしまった・・・良いチャンスだったんだけど流石にビビったわ・・・

だつてビームが顔面に向かって飛んでくるんだぜ？いや、ISの絶対防御で大丈夫なんだろうけどこちとらまだISに慣れてないんだよ。気分的には一撃当たったら即死の難易度マックスでやってんに調子狂うわ・・・

「とにかく、一つは削った。残り三つ・・・」

シールドエネルギーを通り越してIS本体にダメージを与えられた理由は深く考えない！そんな余裕は無い！

「勝ち筋も見えたところで・・・少し本気でいきますか」

制服の下のフードを目深に被り、イメージをガラリと変える。

今までは『鳥が飛んでいる』イメージで機体を動かしていたが・・・師範と鍛えた俺本来の戦い方を、打鉄に伝えるように強くイメージする。

ブレードを片手で握り締め、膝を曲げ、足元にイメージした地面を蹴り飛ばす。

迎撃に真つ直ぐ伸ばした手の甲から飛ばされるレーザーも、横にステップする様にして回避し、レーザー発射口の真上を鷲掴み、もう一度空中を蹴って加速した足を、相手の首へと回し膝を曲げて固定する。

「もう片方も貰うぜー！」

掛け声と共に肩についている、先ほど壊した方の反対側のスピーカーにブレードを突き刺す、一度で壊れないようなら壊れるまで何度も突く！

四度目の突きで貫通し、それと同時に開いている手で胴を鷲掴みにされ引き剥がされる。

「マダアー！」

足は引き剥がされたが、手の甲を掴んでいる方の手は離れてはいない。

空いている手で盾からブレードを引き抜き、無理矢理掴んでいる腕を引き寄せ、手の甲の発射口へとブレードを突き刺し、グリグリとアイスをスプーンで穿るような手軽さで破壊する。

そして突き刺したブレードを引き抜き、俺を掴んでいる腕の関節部に突き刺す。

それに驚いたのかどうか分からないが、俺から手を離して開放したと思ったらジリジリと俺から離れるように間合いを取り始める・・・「逃げるのか？逃げるって事はヤベエって事だよなあ！なあお前IS乗りだろう？IS乗りだよな、逃げるくらいなら確保される。素直に投降しろ、身柄渡せ！」

ブレードを右肩に乗せ、指差してそう叫んでいると視界の隅に『通信：教師』と書かれたモニターが表示される。

『鷲津か？』

「なんですか千冬先生。今いい所なんですけど？」

『こちらからはそちらの様子が分かるのだが・・・良い情報だ。そのIS、無人機だ』

「……………無人機、了解しました。壊しちゃって良いんですよ?」

『可能ならな』

そう言つてモニターは消えた。・・良い情報なんだか悪い情報なんだか分からんが、とりあえず人が乗つてないなら壊せるな。

最後の一押し、ブレードを両手で握り締め、真つ直ぐ相手に向かって走る。

敵も迎撃に腕を向けて手の甲からレーザーを撃つて来るが……………残念、レーザー一つじゃ俺を止めれない。

「本日のビックリドッキリ戦法!」

俺と敵ISの間少し上に向けブレードを放り投げ、打鉄から飛び出してビームを回避すると同時に待機状態へと変更させる。

ブレスレットの様になった打鉄を拾つてから手首に着け、飛び出した勢いのまま、空中に投げたブレードを両手で何とか掴み取り射程内にいる敵ISに飛び掛り、握り締めたISブレードで胸部を切る。

「これが、人呼んでツ!ワシツスペシャル!!」

一通り叫んで満足してからブレードを離し、切り裂かれた胸部から漏れる金色の光の中へ手を伸ばして中にある『何か』をしつかりと掴んでから引き抜きISを再び起動する。

終わりつてのはいつだつてあつさりしてるもんだ……………

「……………あ?これつて……………」

金属特有のテカリ……………

表面に彫られた溝のような模様……………

金色に輝く球体……………

「リンゴだコレ!?!え、ちょ、ちよつと待つて!落ち着こう?リンゴつて篠ノ之束が持つてたんじゃなかったけ!?!……………いや待て、他にもリンゴはあるだろう?あるつて言つてくれよ!たばねー!」

混乱している俺をよそに、目の前で浮いている、胸の切れ目からピンの光を漏らす敵ISが壊れた機械のような音を出し始めた。

『ガッ、ガガッ……………ギガッ……………任務、完了を確認……………ッ……………データの削除ツを……………実行します……………』

「え？データ削除？ってかリングってコアじゃないの？まだISコア残ってるの!？」

『……データの、さくつじょツ……かん、りょう……しま……し、た』

そう言い終わると胸から光が消え、敵ISから力が抜けたように崩れて海へと落ちて行きそうになった所で右手を伸ばして掴み取る。

「……千冬さんに連絡するにしてもこのリングどうするよ？なんとかなったりしない？」

左手に持つているリングにポツリと眩いてみたが……

「そりやそうだよな、通じねえか……え？うおつまぶし！」

突如リングが光ったから目を瞑ってしまった……光が収まった様なので目を開けたら、右手には金色のドッグタグが握られていた。

「……待機状態か？ま、まあひとまず！」

ドックタグを首に掛け、ISのコンソールを呼び出して先ほど通信があった場所に折り返す。

『こちら第三アリーナAピット』

「あー千冬先生ですか？先ほど振りです」

『驚津か、終わったのか？』

『終了しました。いやあ敵ISは強力でしたね』

『それはお前がまだひよつこだからだ』

『また手厳しい……そっちの問題は片付きましたか？』

『ああ。無事とは言いがたいがなんとかな……お前が確保した無人機は打鉄と共に倉庫に運べ。山田君がそちらへ向かう』

『了解しました……ああ、ブレード結構なくしちゃったんですが大丈夫ですか？』

『元々が廃棄、または再利用される物だったからな、別に構わんぞ』

『では倉庫に戻ります』

『うむ、ご苦労だったな』

そう言って通信を切られたが……さて、倉庫に戻るか。

「あ！お疲れ様です驚津くん！」

「ええまあ、疲れましたね」

「本当なら私達教師が頑張らなきゃいけないのに生徒である鷺津くんにごんなことさせてしまつて本当にすみませんでした」

「いやまあ、千冬先生の命令でもありましたし。個人的にもいい経験にもなりましたし」

「そう言つて頂けると助かります・・・戦闘は見てませんがこれからは無茶しちや駄目ですよー」

「はい、分かりました。以後気をつけます」

しかし山田先生は相変わらずかわいいなあ・・・

なんて事を考えながら敵ISをその辺の台車に乗せてから打鉄を解除する。

「しつかし・・・慣れない事はするもんじゃないですね。瞬間加速使つたら内臓グチャグチャで吐きそうですわ」

「慣れない内は多用はしないようにしてくださいね、危険ですので」

「そうですよね、これ・・・あ、ちよつと吐いてきます」

「あ、はい・・・気をつけてくださいね」

トイレ・・・トイレはどこだ・・・

「おー翔。お前・・・大変だつたらしいな」

「そつちはなんか、無事じゃないつて話だつたっけか？」

「一夏がぶつ倒れたくらいだな。いや、十分ヤバいんだけどな」

「そりや心配だな、保健室か？」

「そうだけど、今は行かない方がいい。嵐がいる」

「・・・そつとしておこう」

「それより聞いてくれよ！ようやくあの大火力を全力で使えたんだよ！」

「そうか、で、戦闘データは残つてるか？」

「さあ？山田先生か織斑先生に聞けばあるんじゃないか？アリーナでの戦闘つて全部記録されてるんだろ？」

「・・・一応そういうのつて当人に許可取るもんなんじゃないのか？」

「……契約書にでも小さく書いてあったりしてたんじゃないか？」

「そりゃ詐欺だ……」

「書いてあったのに見なかった奴が悪いとか言ってくるぜあいつ等」

「なんてこつたい……田舎に帰りてえ」

「俺も、実家帰りたいたい」

二人して同時に溜息をつき、肩を落として寮へと向かう。いやしかしなんだ……つかれた。

原作二巻への繋ぎですよ

よく分からないISと戦ったり、戦い終わったあとに吐いたり、クリスと一緒に寮へ戻ったり。色々大変な一日だった。

が！まだ終了したわけじゃない！

「つてか・・・うん・・・俺馬鹿じゃね？」

自室に戻り、隠しカメラだとか盗聴器を探し、二組見つけて処分し終えた俺は、シャワーを浴びようと制服を脱いでいた時だった。

「錘つけたまま実戦とか・・・死ぬの？」

あまりにも体に馴染みすぎて忘れていたが、トータルで俺の体重よりも重い物を身に着けて戦闘をしていたわけだ。こんなんでよく勝てたよな俺・・・

「よくよく考えたら・・・俺、頑張りすぎじゃね？クリスの話じゃ一組専用機持ちと鈴嬢でアイツと同型相手にしたらしいし、俺だけ難易度高くない？」

ねえ、高くない？

シャワーを浴び、さっぱりした所で、ベットに座りながら錘をつけたり髪乾かしたり一息ついたりして・・・問題は、

「ゴイツですよ・・・」

リンゴだよりんご・・・と言うかりんごから変化したこの二枚式の成金ドツグタグ。ゴムカバーが付けられてはいるが、金色は駄目だろ、駄目だろ！とか思ってたなら金色から銀色に変化した・・・え、なにこれこわい。

「で、お前なんなの？篠ノ之束はISコアの元つて言ってたけどホントなんなのか？」

さつきも俺の眩きに反応したしきつと行動してくれるよな・・・と思ってたなら頭に異物感と同時に視界に巨大なモニターが表示された。

モニターには大きく『たばねさんぷれぜんつ』と書かれており、頭の方は触ってみたら鼻まで覆うヘルメットみたいなのをつけている

ようだ・・・ヘルメット？

そんな視界の中では文字が消え、リンゴの中に3と表示され、その数字が2、1、と減って行き・・・

『やつほーしよーくん！リンゴは無事に届いたみたいだねえ〜よかったですよ〜』

0と表示された直後、画面いっぱいには、画像検索で調べた『篠ノ之束』の顔が大きく写った・・・顔デケエよ、カメラ近すぎだよ・・・『なおーこの映像データは録画した物で〜自動的に消去されま〜す』なんだ、録画か・・・つまんね。

『今、しよーくんの頭に付けられているのはISのヘッドパーツ！そこに映像と音声を流しているから傍から見たらヘルメットつけてポカーンってしてる間抜けな光景だよ！ぷーくすくす、だ〜さ〜い』やかましいわ！そうさせてんのはお前だろ！

『まあ、しよーくんならきつともぎ取ってくれるって信じてたよ〜やっぱりリンゴと束さんの目に狂いはなかったね〜』画面の中で「うんうん」と頷いている篠ノ之束・・・いや、リンゴの目は認めるが以前の目は分かん。

『あ、ISパーツで完成してるのはそのヘッドパーツだけだよ。他は・・・リンゴが作るって煩かったんだ〜』何それ怖い。リンゴ、お前作るのが？

『あーでもでも、ISとは関係無しにパワードスーツ・・・外骨格攻性軌道装甲、通称『EOS』って言うんだけど、それは性能を引き上げた物が出来てるからISできるまでそっち使つてね！』EOS・・・よし、パソコン機動させよう、調べれば出てくるかね。

『後は・・・詳しい事はリンゴに教えてもらって！と言う訳で・・・リンゴさん！お願いします！』

画面の中の篠ノ之束がそういうと同時に急に頭痛を眩暈が俺を襲った。

『しよーくんにはこれからリンゴの知識を無理矢理入れさせてもらおうよ〜ちよ〜つと痛いから気をつけてね〜』

「先に、言え・・・メルヘン女」

後ろに倒れる感覚と、ベットに抱かれる感触を味わいながら寝た。かゆい・・・うま・・・

と、思ったら真っ白い建物が乱立する街中に立っていた。そして、俺の前には一人の人物が静に佇んでいた。

深く被られたフード、

目立つ赤い腰布、

その横に下げられている鞘に収められた剣、

腰と腕、それと肩に付けられている皮製の腹巻のような物と籠手と

肩当て、

磨耗しきった前世の知識がソイツの名前を知っている。

『アルタイル・イブン・ラ・アハド』

伝説のアサシンと呼ばれた、その男だ。

そんな男が手を背中へ回し、逆手に握ったナイフを構えた。

「え？戦うの？ちよつと待って俺の武装は？」

慌てながら体を触ってみると腰に剣、背中に背負ったナイフ・・・

殆ど武装同じじゃないか・・・

一先ず腰から剣を引き抜いて両手で構える。

「よくわからねえが・・・一手、稽古をつけてもらいます」

いざ、伝説へ。

「死んだ！今死んだ！俺死んだ！・・・って、あれ？」

俺は確か、あの白い街でアルタイルに殺されたはず・・・なんだ、ただの夢か。

「いや夢なわけねーよ、リングゴテメエやりやがったな」

いつの間にか待機状態になって俺の首にかかっているのが凄いいムカつくが、良い経験になった。

「さて、始めるか」

モニターを表示させ、少し設定を弄る。

分かる・・・分かるぞ！これがリングゴの力、ISの全てが手に取るように分かる！

「チートだなこれ。うん、立派なチートだわこれ。頭重いし、頭イテエし・・・」

アルタイルとの戦闘と同時に俺に知識を送り込んだのかりんゴは。精神的に技術を鍛えるのと肉体的に知識を教え込むなんて・・・恐ろしい事をしやがる。

「もう寝る、俺もう寝る・・・今日二回も戦ったんだぜ?・・・寝る」
ヘッドパーツを拡張領域に戻して布団に潜り込む。いやじやいやじや、もういやじや・・・田舎帰りた。

翌朝、俺は再びヘッドパーツを装備してモニターと睨めっこしていた。

「・・・武装が、アサシンだな。これで俺本来の戦い方が出来そうだ」
モニターには上から『IS：未定、現在ヘッドパーツのみ』『EOS』
目立つのはそれだけで他には剣とかナイフとか銃とか投げナイフとか・・・あ、アサシンブレード!?なんであるん?」

「ま、まあ装備してみようかな」

拡張領域から呼び出してみると、ベルトで腕に固定するタイプのアサシンブレード、デズモンドが使ってた物と同型ということか・・・
手首に固定して、手の甲を少し逸らすと手のひらより少し長いブレードが飛び出す。

「おお、これだよこれ・・・前世の俺が憧れてたのはこの感じだよな」
しかし、どうやって飛び出してるんだコレ・・・手首を戻したらブレードも戻るし・・・IS技術流用してるのか、そうとしか考えられないな。

深いこと考え出したらまた頭がパンクするから置いておいて。

「今日は、休みだよな。寝る・・・にしても多分またアルタイルに殺される事になるわけで・・・」

なんて貴重な休みをどう使うかを悩んでいるとおなじみのラスボスのテーマが流れ始めた。

「もしもし、鷺津ですが」

『鷺津か、私だ』

「ええ千冬さんですよね。どうしました？」

『今からお前の事情聴取をする』

「え？・・・え？」

『なに、上からな、お前にもしろと言われたのでな』

「で、俺はどこに行けばいいんですかね？」

『今から迎えに行く。寮室でいいな』

「アツハイ、待ってます」

電話も切れたところで・・・アサシンブレードを拡張領域に戻して制服の上着だけ羽織る。下は寝巻きのシャツにジャージだけど、まあこれでいいんじゃないかな？

また地下へとつれられ、なんだろう・・・取調室のような部屋に入られた。

「では、始めるか」

そういうのは目の前で椅子に座り、出席簿に似たバインダーを開く千冬さん・・・先生と呼んだら『休日だから良い』と言われました。

「その前に一つ。これってクリス達は受けたんですか？」

「やったのはオルコットと凰だけだな」

「えっと、国家代表候補だからです？」

「そうだな、織斑はまだ安静にしなければならぬ、金城も企業から学園に『こちらで話を聞いておきます』との事でな、そのことを上に伝えたら・・・『単独で戦った方からも話を聞け』と返された」

「なんとというか・・・お疲れ様です」

「うむ、精々さつさと情報を吐け」

「なんか生き生きしてませんか？」

「してないな」

嘘だ、少しテンション上がってるし、心なしかドヤ顔だし・・・ま、話すことは話そう。

「さつさと楽になったらどうだ？」

「千冬さん、実は楽しんでますよね」

「そんなことはない」

いや、嘘だ。だってニヤニヤしてますやん……上から言われたと
かも疑問に思いますわ……

「さて、これにて終了だ」

「お疲れ様です」

「しかし……案外忘れているのだな」

「必死でしたしね」

「必死にも程がある」

特に最後の方、リングゴを取り出した云々は流石に言っていない。ただ、打鉄から飛び出したって言ったら殴られた。グーで、グーで……本気で死ぬと思ったわ。

「誰があそこまでやれと言った」

「俺の魂……ですかね」

「完全に悪乗りだろう」

「あ、やっぱり分かります？」

「誰でもわかる、山田君でも分かる」

「それはまあ……分かりやすいですね」

「以後、気をつける。レーザー兵器など生身で喰らったら消し炭では済まんどぞ」

「消し飛ぶレベルですもんね、わかります」

……レーザー兵器って人間に当てたら実際どうなるんだろうか、教えてリングゴの知識さん……え？蒸発？蒸発なの？ジュツ、ってなるのか、レーザー兵器の取り扱いには気をつけよう！

「それと……もし相手が無人機ではなかったらどうしたつもりだ」

「倒して捕縛」

「それすら出来なかったら」

さて、相手はマジな千冬さん。へタな答えは見抜かれる……本音で返さねば。

「最悪、殺す。俺自身、別に強いわけじゃないですから……逃がして、また襲ってきたときに勝てるかどうかも分からない。だから、殺す。敵なら、殺す」

アレから考えに考え、そして・・・アルタイルとの戦闘で決意した。殺さなきゃ殺される。だから、殺す。

俺の意思を受け取ったのか、千冬さんは一度だけ溜息をついた。

「まあ、ISに乗っている限り殺す必要は無いのだがな。エネルギーを削り、ISを停止させ、ISを奪い取って捕縛すれば良い」

「それが一番ですよ、俺だってそう思ってますよ」

「・・・一つだけ、約束しろ」

雰囲気が今までのソレとは違い、有無を言わせぬ威圧感を、真つ直ぐ俺にぶつけてくる。想定はしていたが、実力が離れすぎている俺と彼女では・・・俺は黙って頷く事しか出来なかった。

「殺しはするな」

短く、簡潔なその一言が、重かった。

事情聴取が終わり、千冬さんに言われた事と、自分の決意を頭の中で反復しながら一通りの修行を終え、夕食の時間に食堂へ向かうと、「おお一夏君、もう大丈夫なのか？」

「翔！お前こそ大丈夫だったのか!？」

一夏君が普通に飯を食べていた・・・篠ノ之さん、オルコツトさん、鈴嬢に囲まれながら。リア充爆発しろ。

「俺はなんも。なんか倒れたそうじゃないか、なにがあつたんだ？」

「ちよつと無理しちまってな」

「ちよつと！あれのどこがちよつとだ!」

「かなり、のまちがいじゃなくて?」

「ま、いつも通りよね」

「・・・翔、どう思う?」

「その場にいた彼女等が言うならそうなんじゃないか?考えを改めてみる」

「とはいってもなー・・・あの時はああするしかなかったしな」

「反省も後悔もしてないって面してるな、千冬さんには?」

「もう叱られた」

「なら、怒られた事を思い出しながら寝ろ。俺も今日はそうする」

「……なんかさ、翔って千冬ねえと仲良くないか？」

「前にクリスマスにも言われたけど、そうか？普通に教師と生徒って関係だと思っただけだ」

「千冬ねえに聞いたぞ、朝一緒に体動かしてると話じゃないか」
「たまたま同じ時間に遭遇してな。ぶっちゃけ俺が一方的にフルボッコにされてるだけだ」

千冬さんの話題になったとたん、一夏君から……だけならいいんだが、女子三人からも嫉妬の視線が突き刺さってくる。一夏君は分かるが女子はなんで？

「それだけじゃ千冬ねえは一緒にトレーニングしたりしねえぞ」

「そう言えば何度か打ち合ったな。初対面の後もそうだし、入試試験もそうだったって言ったよな」

「それだ！」

「え？いやなにが？」

「千冬ねえが気に入ったのはソレだ！確か相打ちだったんだろ！」

「まあそうな、俺の中じゃそうなってる。でもISでだぜ？生身じゃボロクソだ」

「俺だって千冬ねえに稽古つけてもらったのなんてずっと昔なのに！」

「言ってみればいいじゃねえか」

「いや……でも、千冬ねえだって忙しいだろうし……」

「朝早く起きろ」

「……が、頑張つてやる……翔！お前には負けないぞ！」

「いや、なんの勝負だよ……」

「そうと決まれば早く起きれるように早く寝て明日に備える！じゃあな皆ー！」

そう叫んで走って行った一夏君を追っかけていく三人娘……
「青春してるなあ」

それを見送った俺は、そんな感想しか出てこなかった。

く作者のチャレンジ番外編 その②く

織斑千冬は、先ほど鷺津翔が出て行った扉を睨んでいた。

(あの覚悟、決して嘘偽りはなかった・・・それがお前の決意か、鷺津) 「強くなったようだが、その考えは危ういぞ・・・くれぐれも、道は違えるなよ」

そう呟いた彼女の右手は、知らず知らずの内に細かく震えていた。それが歓喜なのか、恐怖なのか・・・それは彼女しか分からない。

原作転校生らしいですよ

敵との戦闘中に錘着けてたのが発覚したり、リンゴから篠ノ之束メッセージが出てきたり、アルマイルと戦ったり、アサシンブレード手に入れたり、千冬さんに事情聴取されたり、一夏君に嫉妬されたりしましたが、俺は元気です。

そして、ノビノビと生きて生きて、夢の中でアルマイルに殺されながらIS学園で過ごし・・・いよいよ六！月！学園全体衣替え！夏服は良いモノだ・・・

今月頭にあつた休みに一夏君が『実家に帰るけど、一緒に行くか？』とか誘ってきたが、クリスは付いていき、俺は残った。

リンゴISの装甲とか作らなきゃなんか居心地悪くって、簪嬢と並んでISモニター弄くってた。

なんか二年の『整備課』の生徒もいたが、俺は純粹に『練習してる』と思われてるらしい・・・

あ、整備科って・・・整備課だったんだね・・・早坂さんエ・・・そんな日を終え、朝の特訓で千冬さんにフルボッコにされ気絶した俺は・・・引きずられていた。

「・・・あ、千冬さん」

「今は先生だ」

「千冬先生・・・俺の制服って」

「無理矢理着せた」

「・・・いやん」

「お前の考えているような事は一切ないぞ」

「え？俺の部屋入ったかって話だったんですけど？千冬先生一体何を想像したんですか？」

「フンッ！」

あへ・・・

「ツハ！俺は一体！」

「・・・山田先生、ホームルームを。鷺津、座れ」

「しかも美形！守ってあげたくなる系の!?」そうだね、華奢だよね。
「地球に生まれてよかったぁー！ー！」そうだね、感激だよね。

「あー、騒ぐな。静かにしろ！」

「みつ皆さん！お静かに！まだ自己紹介は終わってませんから！」

山田先生はともかく千冬先生の一言でも止まらない女子達のリビドーは一体どれほどののだろうか・・・俺は知らん。

ゆっくりと静まっていった所で皆がもう一人の方に注目をする。

腰まで届かんばかりの長い銀髪。

右目は赤く、左目には黒い眼帯。

腰から下がるナイフに加え雰囲気自体も冷たく鋭い。

そして周りの視線を向けられても無視を貫く・・・軍人だな。

初めて見たわ。

「・・・挨拶をしろ、ラウラ」

「はっ、教官」

言葉をかけた千冬先生に、敬礼を返しながら返事をする様は・・・
犬だな。

「ここではそう呼ぶなど言っただろ。私はもう教官ではない、それにお前もここでは一般生徒だ。これからは織斑先生と呼ぶように」

「了解しました」

そのやり取りを見るだけで分かる。彼女はドイツ軍人だ。そう言えはいつぞや千冬先生が『物を知らぬ子供に、物を教えられなかった。それだけが心残りだ』とか言ってたな、やけに堅苦しいし・・・もしかして彼女の事か？

「ラウラ・ボーデヴィツヒだ」

ドイツ語の苗字ってなんでこんなかつこいいんだろうな・・・いや、ドイツに限らず海外全般。デユノアとかライバルキヤラっぽい名前だよなあ。

「え・・・ ええっと、以上ですか？」

「以上だ」

山田先生が気を使って話を振ったというのになんだその反応は！
相手は教師だぞ！お前よりも多分強いぞ！なぜなら、千冬先生曰く

『日本代表候補』どころか『日本代表』に後一步まで届いた程の腕前：初めて聞いたときは驚いたが、かわいいは正義であり、正義とはそれ即ち強さだ。納得した。

口を噤んだボーデヴィツヒさんだったが、ある一箇所で表情が変化した。

一夏君だ……またお前か！

「ぎ……貴様が——！」

次の瞬間、一夏君に近づいたボーデヴィツヒが、彼を引っ叩いた。

「お、俺達に出来ない事を平然とやってのけた!？」

「そこに痺れる！憧れるウー!？」

ガタツとガッツポーズをしながら立ち上がったクリスマスと俺だったが、次の瞬間千冬先生に叩きのめされた。

「……え？」

「私は認めん！貴様などがあのお方の弟など……認める物か！」

スゲエな……これがブリュンヒルデ教の狂信者って奴なのか？

「いついきなり何しやがる！」

「ふん……」

まるで『眼中にない』と言わんばかりにツカツカと空いている席に真っ直ぐ向かっているボーデヴィツヒだったが……ついぞと言わんばかりに俺とクリスマスに目線を飛ばしてくる。

クリスマスは完全にビビッてたが……千冬先生に比べれば子供のやる事だ。お兄さんは大人なんです。受け流す余裕くらいあるのです。

とか思ってたなら何故か隣に座ってきた……いや、何故席を移動したよ隣だった人よ……千冬先生もおかしいと思わない？……あ、思わない、そうですか。

や、山田先生なら……あ、泣きそうな顔してる。やめたげよう。

「あー、ゴホン。ではホームルームを終わる。各人、直ぐに着替えて第二グラウンドに集合！本日は二組と合同でIS模擬戦闘を行う。では解散！」

……いや、着替えてとか言われても俺まだISスーツ支給されていないんですがやっぱりジャージですかね？……あの服装の群の中で

「ジャージだと逆に浮くんですよ。」

「おい織斑と金城、お前達はデュノアの面倒を見てやれ同じ男だろう……そして鷺津、来い」

「……俺もデュノア君と話したいで御座る。」

「なんて言い返せるわけもなく、俺は千冬先生に近づいていく。これ一夏君、そして女子達、さらにボーデヴィツヒ！お前等全員してこつちみんな！クリス、おめーはニヤつくな。」

「お前にはラウラの相手をしてもらう」

「で、ですよねー……でもなんでです？」

「他に適任がない」

「千冬先生がやればいいじゃないですかーやだー」

「私ではアイツと話し合いにならん。お前もキツイだろうが、出来るだろう」

「過大評価されるのは嬉しいんですけどね……ま、頑張りますよ。構えばいいんでしょう？構えば」

「ああ、それとな——」

「……ここまでではよかった！次の爆弾発言がなければな！」

「アイツをお前の隣の席にしたのは私だ」

「千冬さん……アンタって人はー！」

「ああ、付け加えると——」

「ニヤけながら言葉を溜める千冬先生に……俺は殴りたかったが、次の言葉でその気力すら失せた。」

「お前とアイツの寮室も同じにしておいたぞ」

「俺は、膝から崩れ落ちた。俺の城が……陥落した…….だと……!?!」

「次の時間、多少なら遅刻しても構わない。それだけのことをやったと自覚している——」

「だが私は謝らない」

「アンタが、何故それを……この世界に飯○ラ○ダーは無かったはずだ……」

「お前や金城がそう言っているのを見てな。私もやりたくなかった」
子供かよ……

重たい足を引きずりながら、ようやく、ようやく俺は更衣室に辿り着いた。

「……きやー！」

俯いたままドアを開けたら聞こえた声……え？

顔を上げたらそこにいるのは脱いだシャツを胸の前に持って体を隠しているデユノア君……君？

「え、なに今の女の子みたいな悲鳴？」

「え、な、なんでもないよー急にドアを開けられたからび、ビックリしちゃってさ！まさか女の子がきたのかと思っちゃったよー！」

「……え？なんでそこで女子？」

「さつき追われてたんだ……一夏とクリスのお蔭でなんとかあったけどね」

「あーお……まあこの女子は何故か餓えてるからな、気を付けた方がいいぞ？」

「そ、そうだよね？あ、あは、あはは」

「女子だってばれたら大変だからな」

「あ……え？」

カマ掛けたつもりだったんだけど顔を真っ青にするなんて露骨な反応されたらもう……拡張領域からそのまま腕に装備した状態でアサシンブレードを呼び出し、デユノアを壁に叩きつけてから飛び出したブレードを首筋に添える。

「うつくつ……！」

「ま、動くなや。俺もこんなところで人殺しなんてしたくないし、デユノアも死にたくないだろ？」

「というか、この間千冬さんに釘刺されたばっかだし。ていこうするなよーたのむからするなよー？」

「……殺してくれてもいいよ」

「……あ？今コイツなんていった？」

「貴様・・・死にたいのか？」

「その、方が・・・楽に、なれる・・・」

ブレードをそのまま拡張領域へと戻し、押さえつけていた手を離して、靴からジャージを取り出す。

「けほっ・・・な、なんで」

「死にたがりを殺す趣味はない。死ぬなら勝手に絶望して死んでろ」

多分だけど、コイツは今死ぬべき人間じゃない。根拠なんてどこにもない直感だ。きつと、生きてた方が楽しい事になるだろうし、コイツも楽になるだろう。

俺自身の決意も大事だが、千冬さんとの約束も大事だ・・・破ったらマジで殺される。今はまだ、破ってまで殺すときじゃない。きつと後悔する事になるだろう。一回クールダウンしろ俺。

「って言うかお前なんでワザワザ男装なんてしてIS学園に来たんだ？」

「そ、それは・・・」

「ああ、言いたくないなら別に良い。さつきはすまんかったな、いきなり刃物突きつけちまって」

「ま、まあ怖かったけど・・・大丈夫、気にしてないよ。あ、あと・・・」
「男装の事は言わんよ。面倒になるだけだし・・・それよりさつきと着替えようぜ？千冬先生に引つ叩かれるのはイヤだろ？」

「あ、あはは、それは痛そうだね」

一夏君とクリスは先に行ったのか？薄情な奴等め。

しかしなんだ、今のコイツは気に食わねえな。押さえつけてる時の方が本音だったな。まあそりゃ殺されかけたら本音になるのも当然だろうけど。

第二アリーナに着いたら、何故カリヴァイヴ装備の山田先生のたわわなモノを白式を装備した一夏君がワシ掴んでいた。

こいつ・・・殺すぞ。ああ、今なら良い。今コイツを殺してもきつと俺は後悔しない・・・とかやってたら既にオルコットさんと鈴嬢が行動していた。

なるほど、『ぶつ殺すと心の中で思ったら既に行動は終えている』って奴か。実際に見ると恐ろしいな。

が、オルコットさんのレーザーは一夏君が頭を下げる事で避け。鈴嬢が投げた青龍刀は山田先生が放った弾丸で打ち落とされた。うむ、千冬先生の言う通りの腕前だ。

その後、千冬先生の一言で山田先生VSオルコットさん&鈴嬢の模擬戦が行われたが・・・結果は山田先生の圧勝に終わったけれど、実に学ぶべき事の多い模擬戦だった。

特に多対一における立ち回りだ。即席コンビと言う事もあったのだろうが、オルコットさんの攻撃を鈴嬢に、鈴嬢の攻撃をオルコットさんに当てさせるように行動していた。

二人も二人で流石代表候補と呼ぶべき奮闘振りだったが、それでもやはり山田先生の方が五枚ほど上手だった。俺も戦ったら勝てるかどうか、いや負けるな。

何事においても『自分の出来る事と出来ない事』を把握している人間は強いモノだ。まさに歳の功である。

「さて、これで諸君等にもIS学園教員の實力も理解できただろう。以後はしっかりと敬意を払って接するように」

流石にあれ見て敬意を払わない奴はいないだろ。まあ、それとこれとは別なんだろうけど。

「さて、専用機持ちは織斑、金城、デユノア、オルコット、凰、ボーデヴィツヒだな。六、七人のグループになって実習を行う。各グループリーダーは専用機持ちだ、これは決定事項である。分かったら行動しろ」

・・・デユノアの所でもいいんだが、千冬先生の目線がしつこいのでボーデヴィツヒの元へ歩いていく。

見せてもらおうか、織斑千冬仕込のドイツ軍人の性能とやらをつ！

「まあなんだ、よろしくだボーデヴィツヒ」

「ふむ・・・真っ先に私の元へ来たお前は見込みがありそうだな、名前は」

「鷺津翔だ。指導のほうよろしく頼むぜ、ボーデヴィツヒ・・・えっと」

「少佐だ」

「了解、ボーデヴィツヒ少佐」

ま、コイツはコイツでクセがあつて楽しそうだ。よろしく頼むぜ少佐。

原作的実習ですよ

気絶してたり、転校生が二人来たり、片方と無理矢理生活を共にさせられる事になったり、転校生にアサシンブレード突きつけたり、一夏君を本気で殺そうと思ったり、転校生の班に入ったり。

俺は元気です。元気ですが・・・

「よ、よろしくね、ボーデヴィツヒさん・・・」

「・・・」

「え、えっと・・・どうしよう鷺津くん」

「俺に振っちゃおう？ねえ、俺に振っちゃおうの？さゆか嬢」

班の空気が最悪です。

ボーデヴィツヒは恐らく千冬先生の『では始めろ』的な言葉を待っている。忠実に、まさに忠実に。

しかし、女子達は色々聞きたい事があるのか聞きに行っては帰ってきてを繰り返している。女子高生らしく。

俺？泣きそう。目の前にボーデヴィツヒ、後ろに班の女子達、遠くから見つめる千冬先生・・・どうしろと、どうしろと・・・

「・・・あー、少佐。一言言ってもいいか？」

「いいぞ、なんだ」

「班員とは友好関係を築いた方が効率的だと思いが？」

「・・・馴れ合うつもりはない」

「純粋な作業効率の問題さ。早く終わればその分早く開放される。教師にも、良い印象を与えられるぜ」

「・・・仕方あるまい。よろしい、質問がある者は挙手をするように！」

・・・ブリュンヒルデ教つて千冬さんの名前出せば何とかなる連中の事なのか？まあ絶対数は少なそうだが、確実にいるだろう。

『強さこそ正義』そして、不動の『初代』の称号。そして現役IS学園教師。

正直言つて信仰に値しますな。現人神かな？

「鷺津！貴様は何かないか！」

「え？俺？なんで？」

「全員から一通り質問を受けてな。次が貴様の番だ。何かないか」

何かと言われても・・・なんだ？

「千冬先生カツコイイよな」

「やはりお前は話が分かる奴だな・・・しかし、何故下の名前で呼んでいるー」

「いや、千冬先生に許可されたからだけど・・・」

「そうか、ならば許そう」

・・・一体なんなんだブリュンヒルデ教！余計わからなくなったぞ！

「その、鷲津・・・私もそう呼ぶことを許してもらえるか？」

「いや、千冬先生に聞いてみるよ」

「・・・何故お前は許されたのだ？」

「その辺は俺もさっぱりだ。これで俺との話は終わり他の子どーぞ」

「あーじゃあ私、私！」

少し会話していると「この馬鹿者共が！ボーデヴィツヒの班以外は出席番号中に一人ずつ各グループに入れ！順番は先ほど言った通りだ。次にもたつくようならばISを背負ってグラウンド百周させるからな！」と千冬先生の声が響いた。

それに続いて「ええつと、皆さんいいですかーこれから訓練機を一斑に付き一機取りに来てください。数は打鉄が四機、リヴァイヴが二機となっております。好きなほうを決めて下さいねー・・・あ、早い者勝ちですよ！」という山田先生の声が響き、周りの女子達が焦り始める。

眼鏡をかけてない山田先生もかわいい・・・いや、凜々しい。

「ど、どっちがいいの！ボーデヴィツヒさん！」

「リヴァイヴじゃないの？数が少ないし！」

「・・・実際はどうなの？鷲津くん？」

「正直軽く慣らすだけならどっちでも変わらないと思うぞ。だから少佐、好きなほうで」

「ならば打鉄だな。まだ信頼出来る」

それは一体技術的な意味なのか・・・さる大戦で同盟を組んでたか

らなのだろうか・・・いや、千冬さんがいるからだな、そうに違いはない。

なんて結論が出たところで台車に乗った打鉄を運んできた。

「と言うわけだ、まずはある程度動かしていると聞いた鷺津から行く」

「え？俺からなのか？」

「何か問題が？」

「無いが・・・いや、グダグダ言っても時間掛るだけだしな」

何故か立ったまま不動のISのコックピットに向けて飛び上がり、そのまま装甲を掴んだり足を掛けたりして装着する。

「ふむ、手馴れているな」

「建物登ったりするのが趣味でな」

「では、慣れているだろうが手始めだ、歩いて向こう側まで行ってから戻って来い」

「了解少佐」

のんびり歩いてのんびり戻り、ちゃんと屈んでからISから出る。

「あー、皆も降りるときはちゃんと屈ませてな。じゃなきや・・・」

チラツと視界の端で一夏君と山田先生が話しているのが見えたのでそちらを指差すと・・・

クラスメイトをお姫様抱っこしている一夏君の姿が見えた・・・

役得だなおい。

「つまり、ボーデヴィツヒさんにお姫様抱っこされる事になる。気を付けるように」

「・・・つまり、鷺津くんの前に立たせたまま降りたら・・・」

「よし登る」

「だよね」

自分より身長低い女の子にお姫様抱っことか・・・戦うヒロインに守られる男ヒロインかよ・・・いやこの世界ならあながち間違いでも無いんだろうけど。

「・・・いやなのか？」

「いやそんな顔して聞くなよ少佐。したいのか？したいのか？」

「……いや、忘れる」

「アツハイ」

一瞬千冬先生にお姫様抱っこされたり、したりする想像したな。かわいいなこいつ。

「では午前の実習はこれまでだ。午後は今使った訓練機の整備を行う。各人格納庫にて班別で集合する事。専用気持ちは実機と訓練機の両方を見るように。では解散だ」

「聞こえたな。ではこれより格納庫へ使用した訓練機を仕舞いに行く。いいな」

「嫌そうな顔するなー、皆だってISには意識があるのは知ってるよなー、ISもその内拗ねて起動しなくなったら困るのは誰だ？俺達だろ！」

「なんでそこだけ熱血なの？」

「ぶっちゃけノリだ。でも事実だ、俺も一夏君との訓練の時にISに挨拶するとしないとじゃノリが違ったんだよな、思い通り以上に動いてくれるって感じでな。ISとの接触レッスンその一、『敬意を払え』。誰だって良い事したら感謝されたいだろ？それと同じさ」

何とか班員の意識を誘導して一緒に運ぶ事に成功した・・・一夏君とクリスは一人で台車を押していた。一方デユノアは女子達が運んでいた。蝶よ花よな感じだなありや・・・

男子三人＋男装女子と一緒にジャージから制服に着替え、一夏君に「屋上で飯食べないか？」と誘われたが遠慮した。だってその時近くに居た篠ノ之さんが怖かったから。クリス？屋上に行った。

今日はパンな気分だったので購買で適当に買って、その辺のベンチに座って優雅な昼食を味わっていると彼女が現れた。

「今、良いか」

「少佐。別に構わないが、どうかしたのか？」

「いやなに、少しお前に聞きたい事があってな」

パンを食べてる俺の前に仁王立ちになるボーデヴィツヒ・・・

「いや、話があるなら隣座るか？」

「そうだな、失礼する」

「……近くない？俺とくつつくくらい近いよ少佐。なんなのこの子、パーソナルエリア狭いの？」

「お前はこの学園の女子をどう捉えている」

「どうって……普通の女子が多いな」

「普通……とはなんだ」

「あー、日本の女子高生ってのは、さつきお前に色々質問したがってたら？あんなもんだ。ま、中には違うのもいるけどな」

「簪嬢とか簪嬢とか簪嬢とか……あれ？簪嬢しかいねえぞ？」

「……なるほど、やはり私の思ったとおりだったか」

「何が？」

「この学園の生徒達はISをファクションとしてしか捉えていない、と言う事だ」

「……一年生じゃ仕方ないさ。上級生にもなってくるとそりや変わるぜ？」

「整備課の先輩達なんてぶつちやけ俺より真剣に簪嬢のモニターを見てるからな。その辺はやっぱ個人差だろう。」

「そうなのか？ずっとあんな感じではないのか？」

「……人間は成長するんだぜ？今日ISを動かしてたクラスメイトも一年すれば考え方の一つや二つは変わる。それを表に出さなくても内面じゃ変化が起きてる。それが成長するって事だ。少佐にだって考えが変わった事くらいあるだろう？」

「……そうか、そうだな。確かに経験はある」

「俺は知らんが、昔の少佐と今の少佐も違うだろ？そういうことだ」

「……だが、私は」

「少佐は軍人だからな、受け入れられないところもあるんだろ。でもな、今の少佐はIS学園の生徒、様々な事を学ぶ立場だ。ドイツじゃ受けられなかった千冬先生の授業を受けてみな、千冬先生も先生で少佐に伝えたい事があると思うぜ」

「……そうなのか？」

「たまーに、朝早くにトレーニングで一緒になる事があるんだけど少しづついろんなことを話してくれるんだよ。多分少佐の事を言ってた事も知らないだけであったんだろうな」

昔の彼女とか、ISが出来てからとか、最強になってからとか、ドイツの生活とか、俺が入学する以前の学園の事とか。『他人の話なんて聞く価値も無い』なんて思ってる連中が可哀想に思えるほどに様々な事を学んだ。

師範も、たまに一緒になる師範代もこの辺の話はしなかったから俺にはとても新鮮な経験だった。

「一回、俺に聞いた事を聞いてみたら良い。俺とは違う答えが返ってくると思うけど・・・しっかり受け取ってしっかり考えて、自分なりの答えを出してみるといいさ」

パンも食べ終えた事だし、午後からの整備の準備をしよう・・・ま、準備するような物なんてないんだけど一応教科書とか必要だし。

っと、振り返ると悩んでいるような少佐の姿。なんか外見年齢に見合った悩み方をしていた。

「今こうしてる間にも少佐の価値観じゃ考えられないような事が起きてる。そしてその当人も成長してる。余裕があれば周りを見てみると良い、きつと面白いと思うぜ？」

さて、後は千冬先生のところに行って、色々聞いてみるのがいいだろう。

っと、根回ししておこうかな？

「と、言うわけです」

『・・・お前はなんと言うか、変に面倒見がいいな』

「え？そですか？」

『田舎育ちだと人当たりがよくなるのか？』

「いや知りませんよ」

時間は放課後。適当なベンチに座って千冬さんに電話をかけている。
一通り話したことを伝えたら妙な事を言われて混乱しています。

『まあ、アイツがお前にそこまで心を開いているのは何よりだ』

「なんでなんすかね？」

『人柄や人徳、後はタイミングが良かったのだろう。お前がアイツに認められたのもあのIS自習の時だろうか？』

「ええ、真つ先に彼女のところに行ったら何故か気にいられました」

『軍人のアイデンティティーなのだろうな。先ほども言った「有象無象の中に自分の実力が分かる者がいた」と嬉しくなったのだろう』

「いやそこまで酷くは無いと思いますけど・・・そんなもんなんですかね？」

『人間なんて単純なものさ。じきにあいつは「何故こんなところで教師等しているのですか」とか言ってくるだろうな』

「じゃあ俺その言ってくる方に賭けますよ」

『クッククク、賭けにならんぞ驚津』

「分かってて言いました。ま、彼女には彼女なりの答えを見つけて欲しいですねえ」

『そのためにも世界を救わんとな』

「・・・頑張ります」

『うむ、努力をし続ける。その内錘を増やしてやろう』

「わ、わーい、う、うれしーなあ」

『ああそうだ、もうじき男共も風呂場が使えるようになるぞ』

「え！マジすか！ようやく手足を伸ばして風呂に入れるようになって嬉しいなー！」

『さつきと声のトーンが違うな。嬉しくなかったようだな』

「・・・そんな事無いですよ、嬉しいですよ？修行がはかどりますね」

『そうか、嬉しいか』

「ええ、嬉しいですね」

『そうか、なら今の錘を倍にしよう』

「・・・物理的に潰れてしまいます」

『安心しろ、私は潰れてない』

「・・・まじすか」

『マジだ』

俺の錘が四倍（体重の倍）が確定しました。このままじゃ俺、テンプルとかアサシンとか世界救う以前に千冬さんに殺されてしまう。

「む？なんだ、鷺津だったか。同室なのか、これからよろしくな」

電話の後、一通り修行をしてから自室に戻ったら少佐がいた。そう言えばこうしたって千冬さん言ってたな・・・俺の城が。どこでリング弄れってんだよ・・・

いや、それ以上に。それ以上に・・・だ、

「なんでタオルだけなん？」

「風呂上りだからだが？」

「いや、俺男なんですけど？」

「・・・それがどうした？」

駄目だ、脳筋なんてレベルじゃねえ。俺よりレベルの高い・・・軍人脳だこれ。

「風邪引くといけないから服着て髪乾かして寝ような」

「そうだな・・・ところで鷺津、お前は入らないのか？」

「入るよ。入るけど・・・うん、入るよ」

「・・・？なんだ、要領を得ないな」

「気にせず服を着てくれ。行くから、風呂行くから・・・」

・・・・・・シャワー浴びた直後の女の子にそんな事言われたらちよつとR—18な感じじゃないか。俺はついこの間十六になっただばかりの少年なんだよ！

彼女いない暦Ⅱ年齢＋α（生涯独身の悲しい知識）なんだよ・・・水っぽい白い肌に濡れた白い長い髪、タオルに巻かれたスレンダーな体とか・・・目に毒なんだよ！生殺しかよ！

原作的一触即発ですよ

少佐と班員の仲を取り持ったり、少佐のお悩みを少し聞いたり、その内容を千冬さんに伝言ゲームしたり、錘が更に増える事が決定したり、寮の部屋が少佐と一緒にになった事で悶々としたり。

錘を増やされた事で初めは千切れそうだった腕も何とか落ち着きを取り戻し、少佐ともそれなりに仲良くやれていると思いつつ、五日間。

土曜の授業は半ドン（午前終わり）で、放課後はもっぱら専用機持ちによる一夏君フルボッコ祭に参加している。最近じゃデユノアが加わったのが大きいだろう・・・少佐？彼女は一匹兎なので。住み慣れた群じゃないと混ざってこないテリトリー意識の強い子なので。そして、ISブレードを生身で素振りしている俺と、その隣で打鉄を装備して素振りする篠ノ之さん。

目の前では模擬戦を終えたクリスとオルコットさんが録画映像を見ながら反省会をしており、上空では一夏君と鈴嬢が戦っている。

ああ、デユノアだけど、隣で二人の戦いを録画している。

俺が錘外して篠ノ之さんの打鉄のモニターを少し弄ってからブレードを軽々受け取ったのを見てフリーズしてたな。お蔭でオルコットさんと一夏君の模擬戦が録画されてないと言う事件が発生。その結果何故か俺がオルコットさんに怒られる事態が発生した訳だが・・・解せぬ。

あ、一夏君負けて帰ってきた。シールドエネルギーが無くなったって感じじゃないな、時間切れか？

「あーもう負けてばっかだな俺・・・」

「ざまあwwwイケメンざまあwww」

「え？俺のどこがイケメンだよクリス」

「はいはいお前等イケメンイケメン」

ツチ、これだからイケメンは・・・

「ええつとね、一夏が嵐さんやオルコットさんに勝てないのは単純な問題だよ。相手の射撃武器の特性を理解できてないからだよ」

「え？そ、そうなのか？一応分かってるつもりなんだけどもなあ・・・」
「じゃあ一夏！俺の射撃武器の特性はなんだ！」

「え？いっぱい撃てる？」

「いいや違う・・・大量に！正確に！即座に撃てる、だ！」

「なんだよそれズリイぞ」

「どつちかって言うとお前の零落白夜の方がずるいからな？一次移行だつてのにワンオフだし、それも姉弟とは言え過去に存在したワンオフと被ってる・・・研究しがいがありそうだな・・・今度見せるよこの野郎チクシヨウこの野郎」

リングゴ知識で丸パクリしてこれから作る俺のリングゴISに組み込んでやるぜ・・・フヘヘ、全てのISの始まりのリングゴに再現できない事などあるか！一撃必殺、魅力的な言葉だぜ。

「え？そうなのか？まあISに詳しい翔が言うならそうなんだろうけど・・・なんなら今すぐにでも見せてやろうか？」

「ヴァカめ！一夏、そうやすやすとISを見せるんじゃない！」

「え？なんでだよクリス」

「その辺は今度教えるとして・・・デュノア、あんな事言い出したって事は何かアイディアがあるって事だよな？」

「うん。一夏、ちよつと銃撃ってみない？」

「え？でも他のISの武装って使えないんじゃないのか？」

「ほう、一夏君にしちゃ勉強してるじゃないか・・・だがしかしまだ足りんなー！」

「・・・出来んの？」

「クリスエ・・・お前もか」

「ええと、二人とも今から教えるからちゃんと聞いててね？違うISの登録武装だからと言っても所有者が使用許可を出せば、登録した人皆が使えるんだよ。さつき翔君が篠ノ之さんの打鉄にした事見てなかったの？」

そうデュノアが話を振ると、

「見てたけど・・・そんな事してたのか、翔」まあお前の反応は分かる。

「・・・インテリぶりがあってこの野郎！」その反応は分からん。

「そ、そんな事をしていたのか」篠ノ之さん、お前さんは一応間近で見てたんだから少しは分かるだろ・・・

ああ、ちなみに一応普通に人に渡すにしてもそういう設定が必要になってくる。まず、常人じゃ持ち上げる事すら適わず潰れかねない。持てたとしてもすぐに落とす、そういうことを防ぐためだ。

あれ？俺って常人じゃないの？

「な、なんか落ち込んだ翔君は置いておいて、一夏、はいコレ」

とか言いながら一夏君にライフルを渡しているデュノア。一夏君は一夏君でなんか撃つたりデュノアが説明したり、遊んでたら周りがザワザワと騒ぎ出した。

「アレって・・・ねえちよつと」

「ウツソ、ドイツの第三代じゃない」

「まだ本国ではトライアル段階って聞いてたんだけど・・・」

両肩に扇風機みたいなのを浮かせる黒いISを装備した少佐が入場した。

「・・・鷺津、貴様」

「まあ、こいつ等も友人だからね。勿論少佐もマイフレンド」

「・・・そうか。おい貴様」

「なんだよ」

少佐の視線が俺から一夏君へシフトチェンジした途端クリスがこっちに来た・・・なんでできた？

「翔、仲いいのか？」

「同室」

「マジで！お前一人部屋って話じゃなかったのかよ！」

「千冬さんの独断」

「ああ、そういうこと・・・あんなんだけど実はいい子なのか？」

「まあとつき難いところはあるけどかわいいぞ。実に個性的で」

「お前の言う個性的は好意的過ぎるんだよ・・・」

「そうか？かわいいとは思うけどな・・・」

「だから・・・ってなんか大変そうだぞ？」

クリスにそう言われて顔を少佐に戻すと・・・右肩の上にある長方

形の砲身を一夏君に向けていた。

デュノアがカットに入ろうとしていたが、砲身が火を放つと同時に咄嗟にブレードを斜線上に投げ入れる。

発射された弾が地面に突き刺さったブレードの柄に衝突して斜め上へと逸れ、アリーナのシールドエネルギーで止められたのを見送ってからブレードに振り返ると・・・あら、熔けてる、ブレードの柄熔けてるよ！・・・良かった、生身で入らなくて良かった・・・。「こんな密集空間でいきなり戦闘を始めようとするなんて・・・ドイツ人は随分沸点が低いんだね。ビールだけじゃなくて頭もホットなのかい？」

「ビールも頭も、良く冷えてる方が良く効く。落ち着け少佐、まだ慌てる時間じゃない」

「・・・鷺津に、四人目ッ！」

「だから落ち着け少佐、まだその時じゃない」

ぶっちゃけ、まだIS完成してないから今喧嘩売られると・・・E OSで戦うしかないのか？千冬さん辺りに口裏合わせてもらう必要があるそうだな・・・使ったら、の話だけだな。

「生身にフランスの第二世代型如きで・・・私の前に立ちふさがるとはな！」

「未だに量産の目処が立たないドイツの第三世代型よりは、動けると思うよう？」

「IS乗ると弱くなる。それがこの俺鷺津翔だ！」

「貴様は一体どこに対して胸を張っている！」

「世界に！」

何故なら俺は、世界を救う男だからだ！・・・未来でな。

「やだ・・・かっこいい」

「かっこいいな、今度俺もやってみよう」

「男子は駄目ね。マトモなのはデュノアしかいないのかしら」

「いや、私は分かるぞ」

「・・・分かりましたわ、脳筋にしか分からない事なのですわね」

「ああ、なるほど・・・分からない私はマトモってことね」

チクショウ、また脳筋云々で弄られるのか。そこを弄るのは簪嬢だけにしてくれよな……

なんてふざけてる間に『その生徒達！一体何をやっている！学年とクラス、出席番号を言え!!』とスピーカーから怒号が響いた。アリーナや観客席にいる他の生徒達が連絡したんだろう……グツジョブ！

「ふん、今は引こう……だが驚津！夜にな！」

「おう、少し冷静になって話し合おう。そっちの方が建設的だ」

去っていく少佐を見送りながら……俺はさながら敵地に居るかの如き視線に晒されていた……

「翔、アイツの仲いいのかよ」

「個人の付き合い、大事。彼女は千冬さんが絡まなきや普通の軍人だよ……それにな一夏君」

「……なんだよ」

「お前はきつと、これからあんなふうな女性に絡まれるだろうな」

「なんでだよ」

「お前だけじゃない。俺にクリス……デュノアもだ。理由は男だから、一夏君の場合、千冬さんの弟だから」

「だからなんでだよ」

「ISつてのを神聖な物みたいに扱ってる連中や、立場が大事な女達。単に羨ましがる男、俺達を掻つ捌いてホルマリン漬けしたい研究者、俺等のスポンサーになって注目浴びたい連中。まだまだ居るだろう。特にお前の敵に回りかねない連中は少佐と同じように『織斑千冬を神聖視してる連中』だ」

少佐と知り合ってから色々調べてみたら……0チャンネルで盛んな連中が大体こいつ等だ。ホルマリン漬けはネタだと信じたいが、割と真面目に危ない連中だろう。

「……なんで千冬ねえをそんな目で見てんだよ」

『初代ブリュンヒルデ』だから、だよね翔」

「その通り、剣持たせたら最強。IS乗らせたら世界最強。そんな人間神聖視しないわけが無い。実際、俺の田舎でもあの人が世界最強に

なった時に『剣道ブーム』が巻き起こった。理由は……言わなくても分かるだろ」

「千冬ねえが剣道してたから、だよな」

「コレばかりは流石にお前に同情するぜ、一夏君」

「そしてお前はこれからそんな織斑千冬教の信者の相手か……」

「ブリュンヒルデ教マジコエよ……仲良くなれば楽だけど敵だとマジ厄介」

「だってさ一夏」

「……勘弁してくれよ」

「代わりに味方もいるぞ……俺達を『男の星』として捕らえている……男達だ」

「男しか味方いねえのか!」

「逆に考えるんだ一夏……世界の半分は味方、だと」

多分実際に味方なのは三分の一くらいだろうな、ホルマリン漬けにしても研究して男でもISに乗れるようにしたいって連中も男だろうから。

少佐の一件が終わり、そのまま解散の流れになった俺達は、更衣室に向かう連中を横目に寮へ向かっていた。これから少佐と個人面談か……

「あ! 鷺津くん! 今一人ですか?」

「あれ? 山田先生、そんなに走ってどうしました?」

重たい足を引きずりながら歩いていると正面から山田先生が走ってきた。

「今月下旬から大浴場が使えるようになりました! 時間帯別にするど……その、なにかと問題も起きそうなので週に二回の使用日設ける事に決まりました!」

「おお! 今月下旬とな! 山田先生ありがとうございます!」

「はい、先生頑張りました!」

「山田先生最高!」

「ええ、どうも」

「山田先生素敵！」

「え、ええと、もうその辺りで……」

「山田先生美人！」

「え……ええつと……」

「山田先生！」

「山田先生！」

「山田先生！山田先生！！山田先生！！！」

「うっさいわね！イジメかあんた等！」

いつの間にか加わってきたクリスと一緒に山田先生マンセーしてたら鈴嬢に怒られたで御座る。

何はともあれ、もうしばらくしたら風呂が使えるようになるのは嬉しい事だ。とノリノリで寮室に戻ったらガイナ立ちしている少佐が居た……ああ、スツカリ忘れてたわ。

目の前で正座をする少佐に対して、俺も正座していた。なんで正座なんですかねえ……

「で、あの時の『まだその時ではない』と言うのはどういう意味だ」

「そのままの意味だ。あの状況で戦っていても教師達が出てきていただろう」

「ふむ、確かに邪魔立てされるのは望むところではないな」

「ついでに言うと、この学園には様々な行事が用意されている」

「詳しく聞こう」

「今月末、学園別トーナメントが行われる。上位陣に入るのは専用機持ち達だろう。その場で当たってぶちのめせばいい。あまり過度な事をしなければ邪魔は入らないだろう」

「……… 鷲津、貴様は一体誰の味方なのだ」

「誰の味方でもねえな……強いて言うなら、俺は俺の味方だ」

世界を救うのも、自分のためだ。救われた世界を見てみたい、ただ単にその感情だけで修行をしている。

「面白い物の味方……と言うわけか」

「ま、今回のトーナメントで応援したい奴はいっぱい居るね」

簪嬢とか、少佐とか、鈴嬢とか、ついでにクリス。一夏君？いいえ、知らない子ですね。

「少佐も頑張つてな。やりたい事があるのはいいことだ、俺に出来る事なら……ある程度なら協力するぜ」

「……ならば！」

そして早速力になれそうなことを言われたわけだ。

そんなわけで、翌朝。

「と、言うわけで少佐も一緒にお願いします」

「よろしくお願いします！織斑先生！」

「ふむ、こうしてお前と会うのも久しいな。ラウラ」

「はい、教官がドイツを去って以来であります！」

「教官ではない」

「ハッ！申し訳ありません、織斑先生！」

「ああ、千冬さん、ついでになんですが……少佐のお願いを一つ聞いてもらってもいいですか？」

「ふむ、聞いてから考えよう。で、なんだラウラ」

「え、ええと……千冬先生と呼んでもよろしいでしょうか！」

「却下だ」

「………鷺津、何故だ」

「さあ？……なんでですかね、千冬さん」

「直感だ」

「………鷺津、齒を食いしばれ」

「ちよつと待とうか少佐！そりゃ横暴だぜ！千冬さんも何か言つてやってく下さいよー！」

「一夏に聞いたぞ、昨日錘を外したようだな」

「あ、あれは……ISブレード素振りするために……」

「あれくらい錘をつけていても振るえる様になれ……やれ、ラウラ、私の見てない間の経験を見せてみる」

「はい織斑先生！」

「や、やめ……マジで止めろチクショウ！」

結果、十数分粘ったが最終的に間接極められ捕まった。最後三分、千冬さんも参加して来て無理ゲーと化した。三分持った俺を誰か褒めてくれ。

原作突発戦闘イベントですよ

暗い。暗い闇にソレはいた。

光の無い空間に、銀髪の、赤い右目が鈍く光る、彼女。ラウラ・ボー
デヴィツヒがいた。

(目指すのは・・・あの人のような強さ)

生まれ着いてから、闇の中で、影の中で育った彼女にとって、織斑
千冬と言う存在は、まさに一筋の光であった。

意味の無かった自分に意味を持たせ、恐怖、感動、歓喜、その他諸々の感情を与えてくれた彼女を見て、こうなりたい、と切に願ひ、追いかけた。

絶対であり、理想であり、師であり、彼女になりたいと思つた存在。

そんな彼女の輝きを阻害する者・・・

(織斑一夏。教官の唯一の汚点、拭わねばならぬ汚れ・・・排除する、
なにをしても、なんとしてでも。私の、全てを使って・・・)

彼女、ラウラ・ボーデヴィツヒは気付かない。

ただ一筋の光にのみ目を奪われていたからか、一つの考えに妄執していたからなのか、自分のすぐ後ろで、淡く輝く光に気付かない。

放課後特訓したり、その最中に少佐がエンカウントしたり、今月末に風呂に入れる事が分かったり、少佐と正座したり、千冬さんと少佐に殺されかけたりしましたけど、何とか生きてます。

「なんか皆浮き足だつてんなー」

「ふん、所詮こんなモノだ」

死に掛けた朝錬を無事終え、朝食を少佐と共にしてから並んで教室へ向かつている最中に、廊下の端々で、教室の中から、『学年末トーナメントで優勝したら』という単語が聞こえてくる。肝心のラストが聞こえないが・・・背中がゾクゾクしてきた、なーんか嫌な予感がする。先に席に座っていた篠ノ之さんがスツゴイ後悔してる雰囲気をもし出している・・・なんかやらかしたのかこの子？

「あー、篠ノ之さん。おはよう」

「・・・あ、ああ驚津か。おはよう」

とりあえず情報を集めるために知ってそうな篠ノ之さんに話しかけることにした。少佐はさっさと席に座って目を瞑って腕を組んでいる、ブレないなこの子。

「ってかこの騒ぎ、何事？」

「ああ・・・そうだな、お前には教えておかねばな・・・」

そしてポツポツと語り始める篠ノ之さん、話の内容は『大会で勝ったら一夏に「付き合え」と言ったが、誰かに聞かれてたのか「大会で勝ったら織斑一夏と付き合える」と言う事になっていた』と言う事だ。『大会で勝ったら』なんて負けフラグ建てちゃってまあ・・・

「君も難儀なもんだな・・・」

「それだけならよかったのだがな・・・お前等三人の中で好きな相手と付き合える・・・と言う話にいつの間にかなっていた」

「伝言ゲームかよ！ってかクリスは知ってるのか？」

「恐らく知らないだろう・・・」

「後で教えておいてやろう。一夏君は・・・まあいいか」

「・・・いいのか？」

「篠ノ之さんから言っておいてくれ。俺はついでに千冬先生にも伝えてみる・・・まあ耳には入ってるだろうけど一応な」

「そうか・・・頼む」

「そっちこそ、頑張って伝えてくれ」

篠ノ之さん、ちゃんと一夏君に言えるかな・・・心配だ。

さて、放課後になったわけだが・・・最近授業がつまらない。何故なら！リングゴの知識が教科書や専門書を凌駕しているからだ！授業受けてても「あ、ここリングゴで知識ぶち込まれた中であつたな」ってなっちゃうんだよ！どこのゼミだよ！

ふっ、所詮は凡人が必死に理解しようとする数式や定義を当てはめただけの代物・・・ISの母体そのものから情報を与えられたこの頭脳には追いつけないのさ！

「・・・言ってて虚しい、もうここに居る意味は・・・いやあつたわ」

とぼとぼと射撃場に向かおうと足を動かしていると少佐が見えた。うむ、人間関係を構築するのも大事な事だ！

「少佐ー、つていねえ！」

話しかけようとしたらもう居なかったで御座る。．．．じゃあ別にやる事やりましようかね。

「もしもし鷺津ですが」

『．．．何か用事か』

電話をかけたなら不機嫌そうな声の千冬先生が出た。こりやあの情報知ってるな。

「千冬さんの耳に入ってると思うんですが、一応報告をば」

『優勝したら、の一件だろう。聞いている。こちらでも対処はしているのだが．．．だがな』

「女子高生の行動力がすさまじいって事ですな分かります」

『あの有り余った情熱を別のところに向けられない物か．．．』

「無理かと」

『．．．で、それだけか』

「ああ、後一つ。少佐が物々しい雰囲気出して．．．多分アリーナに向かってました」

『アリーナに？．．．一応付いていけ、こちらも用が済んだら向かう』
「ラジャーです」

電話を切って、少佐が消えた角へ向かう。多分．．．第三アリーナかなー？

第三アリーナに着くと．．．少佐が鈴嬢とオルコットさん相手に無双していた．．．そりゃね、軍人VS代表候補二人でも、軍人じゃね．．．戦い方がチゲエと．．．なんて思っていると携帯がラスボス音を響かせた。

『鷺津か、どうなっている』

「あー．．．無双してます、ドイツがイギリスと中国フルボッコにします」

『．．．国の問題になりかねんな、止めろ』

「IS無いんで無理かと」

『私なら出来る・・・錘を外す事を許可する。それと、近くに訓練機はいるか』

リミッター解除宣言されると同時に辺りを見渡すと、居た。打鉄装備した女子。

「ちよつと借りてきますね」

『許可する、後で私が始末書を書こう！私が行くまで持たせろ』
「精々頑張りますよ」

電話を切つて、錘を外して、近くの打鉄の子に話しかけて打鉄に乗ってブレード握つて・・・さて、いっちょあのブレードの柄溶かした砲撃でも喰らいに行きますかな。頼むから守ってくれよ打鉄。

「しよーさ、少し俺と遊ぼうぜ？」

『驚津・・・貴様、邪魔をするか！』

「まあそつちからしたら邪魔だろうけど、俺からしても少佐の今の行動は邪魔なわけよ」

主に俺の平和な学園生活のな！問題が出たら出たで色々大変な事になるだろ！IS学園解体とかなったら俺どこで高校生活送ればいいの？保護無いんだよ？何時襲われるか分からないんだよ畜生！

『まあいい、邪魔立てするなら容赦はしない！』

何か嫌な予感がしたのでスラスターを噴かせて真横に逃げる・・・
何かが通り過ぎたわけでもない、鈴嬢の空気砲とはまた違う武装なのか？

『ツチ、AICを避けるか・・・流石だな驚津』

『お褒めに預かり光荣・・・AICか、なるほど』

リング知識をすこし漁ると出てきた。ISに使われるPICの発展型であり、強制的に相手を止める機能のことだ。なお、使用には一定以上の集中力が必要である。

「俺に二度、同じ技は通じないぞ！」

『ふん、それはどうかな』

再び嫌な予感がしたが、ブレードを少佐に向けてブン投げてからソレを追うように走る。

『なんの！』と声がし、目の前でブレードが止まったのを確認して俺はジャンプする。

「ブレードではなく俺を止めるべきだったな！」

『なっブレードを踏み台にした！』

空中で止まっているブレードの上を走り抜けてからもう一本の拡張領域に入れられているブレードを取り出す。

『まだまだ！避けれまい！』

必死な掛け声と共に六本のナイフが飛んで来るが・・・その攻撃は、アルマイルで見た！

いや、アルマイルも人間だし同時に六本投げってくるほどではないが・・・投げナイフへの対処法なら覚えている。

ブレードを三回振り、ナイフを外側へとはじき出し、瞬時加速で一気に少佐へ詰め寄る。

『だが！まだこれがある！』

少佐が振り上げた手刀が青く光り、振り下ろしてくるが開いている手で手首を掴む事で止める。

ついでにもう片方の腕もブレードで牽制しておく。

「落ち着け少佐。言っただろう、学年別トーナメントまで待ってろって」

『ふん、私は私のやりたい様にやるだけだ！』

無理矢理体を捻り、俺の手から抜け出し距離を取られた・・・やっべ、あの砲撃が来る。

『それ以上、やらせるか！』

『ふん・・・感情的で直線的、絵に描いたような愚図だな！』

と、突如突っ込んできた一夏君に全て持っていかれた・・・あ、一夏君止められた、かっこよかったのになあ・・・

つと、砲身が一夏君に向けられたと思ったらデユノアが拳銃撃つてフォローした。デユノア、いい腕してるなあ、銃勝負じゃ俺が負けるな。

『ちい、雑魚が』

そう呟く少佐と、倒れているオルコットさんと鈴嬢へ近づいていく

一夏君。そして一夏君と入れ替わるように少佐へ近づくと俺。

「割と楽しかったのに邪魔が入っちゃったな」

『私は楽しくなどなかったが、それでも不快だな』

『また始まるならついでに僕も混ぜてよね！』

デユノアがエンカウントしました。

右肩の砲台で攻撃されたり、デユノアが止められたり、途中で一夏君が乱入してきたり。

と、一夏君が手刀を喰らいそうになったところで……

「まったく、やれやれ。これだからガキの相手は疲れるんだ」

千冬さんがブレードを片手に持ってISでの攻撃を防いでいた。ただのスーツでだ。

貴方は……俺にこうなれと仰るのですか……それなんて無理ゲー……

「ちっ千冬ねえ！」

「模擬戦をやるのは構わんが、教師として黙認しかねる。この決着は学年別トーナメントでつけるように」

「はっ、教官がそう仰るのなら！」

「教官ではない、織斑先生だ」

「分かりました、織斑先生！」

「織斑、デユノア。お前達もそれでいいな」

「あ、ああ……」

「返事は『はい』だ。目上の言葉にはそれで答えろ馬鹿者が」

「はっはい！」

「僕はそれで構いません」

「では、学年別トーナメントまで私闘を禁止する……鷲津、お前はあの打鉄の件がある、ついてこい」

「分かりました千冬先生」

「では、解散だ！」

そうやって両手を合わせた千冬先生だが、その音がすっごい響いた。

山田先生から渡された書類に記入し、千冬先生に渡したり、返されたり、をして一時間が過ぎた。

「これで終わりだ」

「やったーこれで帰れるー!」

「幸いお二人のISのダメージレベルもCまで届いていないようでして、お手柄ですな驚津くん」

「だが、大事を取って大会は休ませる。山田君も、一応その旨を伝えてきてくれ」

「わかりました。では失礼します」

一度頭を下げてから職員室から出て行く山田先生を見送り・・・

「疲れましたね」

「そうだな、書類は強敵だからな」

「ぶつちやけ、少佐よりも手ごわいですわ」

「ご苦労だったな驚津。これでお前が入らなかつた場合よりもイギリスと中国からの苦情が減る」

「まあこれを出してダメージレベルCになったりしたらこっちの責任になりますしね」

「それにしても・・・データを見たがこうまでとはな」

「あまりに一方的過ぎますよね、この画像が洩れたらドイツが調子乗りますね」

「コーヒー飲みながらモニターを眺めてる千冬先生にあわせて試してみる・・・しかしこう見ると、AICツエエな。」

「それだけではない、お前もだ驚津」

「え?俺?なんでです」

「イギリスと中国の代表候補生を一方的に遊んだドイツ代表候補生と量産機で打ち合ったんだ、洩れたら大変だぞ・・・洩れたら、な」

「・・・や、やだなー千冬先生。誰も洩らしたりしないでしよう・・・しませんよね」

「私や山田くんは、な」

「なにそれこわい、もうやだ・・・」

「クツク、楽しみだな」

「映像洩らす気満々じゃないですかーやだー」
「なに、私はドイツにいる友人に連絡をするだけさ」
「勘弁してください」
「まだ私は何もしてないぞ？」
「・・・楽しんでますよね」
「人間、ストレス発散をしなければな」
「俺のストレスは溜まる一方なんですすがそれは」
「知らん。自己責任だ」
「ブラック企業かな？」
「学園だろう」
「・・・実際どうなんです？」
「給料はいいが、仕事内容はな・・・」
「聞きたくなかった」
「ココを卒業したらそういう話が持ちかけられるだろうが、まあほどほどにな」
「大学に就職先まで勝手に決められるとかなにそれ怖い」
「喉から手が出るほど欲しいのだろう。なにせ三人しか居ない男だからな、一人でも手に入れる事が出来れば御の字だろう」
「開放してください」
「私を知ることじゃないいな」
「ただし一夏君を除くですね分かります」
アイアンクローされた。
「山田くんにも言ったが、私は身内の事で弄られるのが嫌いなんだ」
「先生、しつてますか？ぼく、しにそうです」
「死んだら楽になるぞ」
「なにそれうれしい」
「だが殺さん」
「あべし」
まるでブレーカーが落ちたように意識が真っ暗になった。あ、死んだ。

気付いたら真っ白い森に突っ立っていた。

目の前に居るのはトマホークを片手でクルクルと回している、白と青のカラーリングをしたフード付きコートを着た肌の黒い人影。

ラドンハゲードンことコナーさんじゃないですかー・・・俺、まだアルマイルさん倒してないんですけど・・・うわっ、こっちきたー！

黙って河原でビーバーでも大量乱獲でもしてください！拳銃撃つてくるな！ロープ付きダーツ投げないで下さい

原作タッグトーナメントですよ

学年別トーナメントに纏わる噂話を聞いたり、授業が余裕になったり、少佐とプチバトルしたり、事後処理手伝ったり、コナーさんに襲われたり、俺？元氣じゃないです。

あれからほんの少しすぎ六月最終週、学年別トーナメントから学年別タッグトーナメントと姿が変わったりした。

タッグと言う事になった直後、少佐から「私とのタッグで提出しておいたぞ」とドヤ顔で言われ、それからトーナメントまで彼女と生身で訓練を始めたわけだ。今日が本番前の最後だ。

しかし流石軍仕込み・・・篠ノ之さんもしつかり基本が出来ていたが、それ以上に恐ろしい錬度だ。

「相変わらず一般人の貴様が良くついてこれるモノだな！」

「そりゃ俺だって色々あるからねえ！」

お互いにゴムナイフ一本で、早朝の体慣らしを行っている。お互い寝起きでボーっとしていた頭を覚ますにはいい運動だ。

「そう言えば、織斑先生から聞いたのだが・・・鷺津、今錘はどのくらいだ」

「体重」

「・・・は？」

「イコール体重」

四倍になっただらなっただあまりにも重すぎたので「まずは慣れろ、その後増やす」と千冬さんのありがたいお言葉を貰った・・・この後増えるんですよ、体重越えちゃうんですよ？死ぬわ。

「し、しかし・・・よくそれで私についてくれるな」

「言っても少佐、そこまで本氣じゃないでしょう？」

「ふっ、分かるか？」

「その眼帯、明らかに手抜いてるでしょう」

「・・・これは、もう慣れた」

「でも、外したら強くなるんでしょう？」

「・・・知りたければ、外してみろ！」

うおっ急に本気で攻撃してきた!

間接と急所を狙って振るわれるゴムナイフ、動きを阻害するように振るわれる手足、鞭のように使ってくる髪・・・うむ、全身凶器。けど・・・まだ師範代レベル。アルマイルと最近コナーにボコられ着実に危険察知能力が上がってきている俺に甘い所が多々見える。まあ見えるだけなんですけどねー! ええい、体が重い! 主に錘で体が反射神経に追いつけねえ!

朝練も終え、朝食をのんびりと少佐と並んで食べて居る。

「この後は確か、トーナメント開始まで忙しいのだったな」

「そうだな。会場の整理だとか、見に来る連中の案内とか・・・面倒だな」

全生徒強制で手伝いだからな。サボったら千冬先生の出席簿だし誰もサボらないだろう。半ば独裁で強制参加とかIS学園人手足りないなんてレベルじゃないだろうこれ・・・

「だが、各国から代表候補が集まるこの学園ならではの客が来る。顔を売るのも手だ」

「顔ねえ・・・面倒事になりそうだから勘弁してもらいたいぜ」

「なんならドイツにでも顔を売ったらどうだ?」

「ドイツ・・・ドイツか、まあそれもそれで楽しそうだな」

「そうか、そう思うか」

なんか声色の変わった少佐を横目で見てみると・・・溢れんばかりの笑顔を噛み潰しているような表情をしていた。褒められたけど素直に喜べない子供か!

なにこの子・・・かわいい。

箒で掃除したり、張紙張つたり、ジャージに着替えたり。今は人混みの中で埋もれている。観客席をのんびりと眺めているが・・・埋まりすぎでしょう? おまけに黒服着たガタイの良い男達に囲まれているテレビで見たことあるような人達が席に座っている・・・豪華すぎねえ? テロ起きたらどうすんの、テロ起きたら・・・ああ、そのため

の隣に居る軍人か。

「しっかし、案内した時も思ったけど人多いなこれ」

「視察もかねているのだ。一年は素質を、二年は錬度を、三年は完成度を。各国は各々の人材を確保するために動くだろう」

「まあ国の代表候補になれば安定するもんな・・・」

「そうなのか？」

「山田先生曰く、忙しいけどやりがいはあるそうだ・・・って少佐、ドイツ代表候補じゃなかったっけ？」

「軍からの命令だ。正直言って、なる前と後で給料は変わらない」

「なにそれブラック。ドイツ軍マジブラック」

「ってか冷静になって考えたら・・・ドイツってこんな子供軍人にしちゃっていいの？少年兵、もとい少女兵ってアカンとちやいますか？とかのんびりしている間に生徒が眺めている大型モニターに文字が表示された。」

『一組一回戦。織斑一夏&シャルル・デュノアvs 鷺津翔&ラウラ・ボーデヴィツヒ』

直後。周りに居た女子生徒全員がこちらへ振り向くと同時に一歩下がった。

「わ、鷺津くん・・・顔怖いよ？」

「うんさゆか嬢。オラワクワクしてきたぞ」

「だから・・・こわいよ、ボーデヴィツヒさんと一緒に居るとなおさら怖いよ」

「ワシワシわっつい顔してるね」

「こんな目に輝いてる鷺津くん・・・初めてみたわ」

「本音嬢、谷本さん。全員の事を応援してくれるとありがたいな」

「もつちろんさく四人ともがんばれ」

「鷺津くんもボーデヴィツヒさんもがんばってね！」

「わ、私は織斑くん達応援させてもらうね・・・ご愁傷様って・・・」

そんなクラスメイト三人の暖かい(?)声援を受けながら、指定されたアリーナのピットへと向かう。

「まさか一回戦からこの間の続きが出来るとはねえ・・・何が起こるか

わからないもんだな」

「なに、この間は敵であつたお前が私の味方なのだ・・・フランスは任せるぞ」

「ホントの事言うと、俺も一夏君と戦いたいんだけどねえ・・・お姫様に合わせると思いますよ」

「ふん、そんな軟弱な存在と一緒にされたところで嬉しくもないぞ」

「そう？じゃあなんかあつたけな？」

「まだ、少佐で良い」

「ラジャー少佐。後ろは任せろ」

「通しても良いぞ。私なら対処できるからな」

そんな頼もしい言葉を聞きながら俺は自分の使う訓練機の事を考えた・・・確かデュノアってラファールのカスタム機だったよな。だつたらリヴァイヴで戦つてみたいもんだな。ブレード増し増しオナシヤス！

「え・・・ええと、本当にこれでいいんですか？」

「大丈夫です。ってか山田先生、分かつて聞いてますよね？」

今俺が居るのはあいも変わらず第三アリーナ（と言うか一年はココのみ使用する様にされている）の整備室。

「確かにリヴァイヴは操縦者に合わせてカスタム出来ますが・・・」

「人の可能性とは闘いの中にあるんですよ。新たなる可能性を開くためにはそれに身を投じなければならぬ、逆境の中でこそ人は輝くのだ！」

「あ、熱くなってるのはいいんですが・・・しつこいようですが、大丈夫ですか？」

「大丈夫ですよ。実に俺らしい武装に仕上がったわけですよ」

目の前にあるのは、グリーンがメインカラーのリヴァイヴ。

その機体に添えられているのは『後ろ側にブレードを二つマウントした打鉄の盾』が右肩の上一つ、その下に連結されるようにもう一つ。

そして機体の左側にライフルが二つ並んだ物と、拳銃が同じく二つマウントされている二つの非固定浮遊部位。

拡張領域にはマガジンが数個入れられているだけで武装は目に見えるだけ。

リヴァイヴの設定を山田先生と一緒に少し弄ってラファール・リヴァイヴを急造俺カスタムに仕上げた。

「まさか打鉄の盾をリヴァイヴに入れちゃうなんて・・・」

「いやー出来るもんですねー。しかしこの寄せ集め感、たまりませんな」

「先生は女性なので分かりませんが、鷺津くんがそういうのならそうなんでしょーうね」

「じゃあ行ってきますね」

「がんばってください・・・あ、先生は一人の生徒を応援するのを禁止されてるんです」

「ま、帰ってきたらねぎらってください」

そして俺は急造カスタムのリヴァイヴを待機状態にし、ピットへ向かう。

アルタイルやコナーと戦って分かった事なんだが・・・拡張領域に武装が入っていると気が緩むというか、なんとというか・・・やはり武器は直ぐに手に取れる場所に無ければ気が締まらない。

例えば、盾にマウントされてる刀を抜くのに掛る秒数と、拡張領域から取り出す秒数。圧倒的に前者の方が早いのだ。にも関わらず、拡張領域から取り出さなければいけないのは・・・明らかに油断しているからだ。

リングを載せていた無人機を相手にした時の反省点は生かす。そして新しく出てきた反省点を、次回に生かす。夢での戦闘と千冬さんとの訓練も生かす。全てを糧にしてやる。

リングコールの後、機体を纏ってゆつくりとアリーナ入りをした俺を待っていたのは、様々な反応だった。

『・・・ありなのか？』

『出来てるならありだろう。実に面白い発想だ』

『わが国の機体に他国の盾をつけるとは・・・』

『俺の国の武装・・・添えられてるだけじゃん!』

『どんな戦いをするのか、見ものですな』

等等など、ISのハイパーセンサーが捉えた声を、リング知識によって翻訳する。と、同時にシャットアウトする、雑音以外の何物でもない。

『よもや一回戦で当たるとはな。待つ手間が省けたというものだ』

勝手に翻訳する言葉とは違い、開放回線で発している少佐の声はISを装備している俺に嫌でも届く。しかし、やる気満々だな少佐。

『そりや何よりだ、こつちも同じ気持ちだぜ』

『あー、デュノア。少し付き合ってもらうぜ?』

『いやだよ、これはタッグ戦なんだよ?スイッチして戦う相手入れ替えていこうよ』

戦いの前の軽い挨拶を終え、モニターが表示され、五から順に数字が減っていく。

『叩きのめす!!』

表示が0になったと同時に、異口同音を発しながらも、まったく別の行動を取った。

一夏君は突っ込んでくる。少佐は手をかざす。

恐らくAICの効果なのだろう、相当の速度を出していた一夏君が突然急停止した。ふむ、ただのカカシですな。

『開幕と同時に突撃か。実に分かりやすいな』

『ツハ、以心伝心で何よりだよ』

『ならば、次を取る私の行動も分かっているだろうな』

言い終わると同時に、少佐の右肩の砲塔が動き、リロードを完了させる。

『流石にさせないよ!』

そう言つてデュノアが一夏君の頭上から飛び出して砲身に向け発砲するが・・・同じようにして少佐の前に飛び出し、上の盾から引き抜いた刀で弾く。

そしてその勢いのまま、デュノアへと向かって飛ぶ。

「避けたら一夏君に当たるぞ」

回避行動を取ろうとしていたデュノアに対してそう言ってみると、踏みとどまり、ナイフを取り出した。

ブレードを両手で握り、真つ直ぐ振り下ろす。デュノアもナイフを頭の上で構え、空いている手もナイフの峰に添えて堪えているが、その隙だらけの右脇腹に左足で蹴りを加える事で、少佐の射線上からずらす。その上で、俺もデュノアを追いかけて射線から出る

『なっ！翔、お前！』

「悪いが、これも勝つためなんだな」

『そういうことだ織斑一夏。全力を持って、倒させてもらうぞ』

体勢を崩しているデュノアに向け、左手を伸ばす。非固定浮遊部位を手の上を持ってきて、拳銃一つをパージ、落ちてくるソレを手に取って発砲する。後ろで轟音が響いたりしたけど気にしない。集中力切らさない。

『し、翔は剣に比べてこっちは甘いんだね』

「銃は余り上達しないが・・・だからと言って、篠ノ之さんよりはマシンなつもりだぜ？」

右手に剣を、左手に銃を。案外このスタイルが俺の戦い方なのかも知れない・・・投げナイフの方が個人的にはロマンがあつて好きなんだけどなあ・・・

『まあ僕じゃマトモに戦つても負けるだけだけど・・・こっちが甘いよ！』

一瞬で手元に拳銃を呼び出したデュノアが、俺の右脇を通り過ぎるように発砲するが、右腕を横に伸ばして打鉄の盾を移動させる事で、恐らく少佐に向けられた弾を防ぎつつ、左手の銃を撃つ。

「悪いが、今日の俺はシールドをチマチマ削ろうと思ってるんな」

『じゃあ・・・そっちの剣はブラフなのかな？』

「そうだ・・・とか言った方が深読みしてくれたりするか？」

『ま、どう答えても結局考える事になるんだけどね』

「あっちの決着がつくまでのんびり遊んでようぜ？」

『それは受け入れられないなあ！』

お互い中距離戦に入る、両手の拳銃を撃ってくるデュノアに、盾で

防ぐ俺。時々近づいて避けられて、少佐狙われたり、ソレを盾でカットしつつ……ついにその時が来た。

俺の瞬時加速を、デュノアが瞬時加速で逃げたのだ。

「なっ！予想外な事するなデュノア！」

『戦いの中で進化するってね！』

「悪い少佐！そっち行っただぞ！」

危ないぞ。飛び出した、IS急には止まれない。

ブレードを地面に突きつけることで速度を落とし、何とか止まったと思ったら開放回線で少佐の声が届く。

『なっ！瞬時加速だと！情報には無かったはずだ！』

『だってさつき使えるようになったんだからね』

『何！驚津との戦いで覚えたと言うのか!?……だが、私の停止の前では無意味！』

その直後に響く発砲音。振り返ると一夏君が膝立ちでライフルを構えていた……なるほど、注意を逸らしてAICの妨害をしたのか。一夏君が銃を使えるとか、デュノア講座は複線だったか！

もう少し止まるのが早ければ阻止できたと言うのに俺のバツキヤロウ！

『俺が居る限り、AICは使えないな！』

「いや、一夏君俺のこと忘れてない？」

『こっの……死に底無いがあ!!』

女の子が使う言葉遣いではないな……。だがしかし、気持ちは分かんなくてもない。死に底無い云々は知らんけど、ぶん殴りたい気持ちは分かる。

『これで、僕の間合いだよ！』

『だがその程度だ！第二世代の攻撃力ではこのシユヴァルツェア・レーゲンを落とせるもの——！』

盾を構えて瞬時加速で近寄るデュノアを見て言いよどむ少佐、なんだ？隠し玉でもあったのか？

『この距離なら……外さない！』

次の瞬間、盾が弾け飛び……中からリボルバー式の火薬と……

その銃口から覗く刺のような物……

『「盾殺し」……だどつ!!』

少佐の叫び声と、一夏君とデュノアの雄たけび。そして噂に聞くパイルバンカーが火を噴いた。

いやー……なんかアニメ見てるみたいでつい静観しちやつてたけど、少佐……痛そうだな。シールドエネルギーはある程度しか衝撃吸収しないからなあ……うへあ。

そんな事を思っていると、ダメ押しと言わんばかりにもう一度パイルバンカーが火を噴いた……

少佐の体が機体ごと大きく傾き、ISが強制解除されようとしていた。

「デュノア！少佐のシールドエネルギーはもうゼロよ！やめたげてくださいよ!!」

そう、『されようとしていた』。

そして、俺の知らん所であらかじめ蒔かれていた種が、目を覚ます。悪い形で。

原作的暴走ですよ

トーナメントの名前が変わったり、少佐と手慣らししたり、リヴァイヴを俺カスタムしたり、一夏君&デュノアコンビと戦ってたり、少佐がパイルバンカーで落とされたり。今俺は、戦いの真っ最中です。「二対一・・・少佐には悪いが、良い修行になりそうだ」

『翔って本当に脳筋だよねー』

「やかましい！脳筋で弄るのやめーや」

『だってそこくらいしか弄るところないしな・・・な、シヤル』

『だよね、翔頑張りすぎだよ』

「うるせーよシスコンにホモ疑惑野朗。一体寮の部屋で何してたんですかねえ・・・」

『な、なにもないし！』

『あ、あるわけないだろ翔！男同士だぞ！』

・・・あれ？デュノアって俺が正体知ってるって一夏君に言ってるのか？知っててこんな反応するほど一夏君も器用じゃないし、本気で知らんのか？

「ま、そんなどうでもいい話は投げ捨ててだ・・・やりますかね」

『翔には悪いけど、二人で勝たせてもらうよ』

『・・・翔は、なんかムカつく。特に千冬ねえとの関係にムカつくから全力で行く』

「私怨じゃねえか！これもうただのリンチだよ！」

なんてふざけてると後ろから叫び声が響いた。いや、開放回線で届いてるんだけど・・・これ確実に開放回線じゃなくても届いてるよこれ・・・少佐の喉潰れるんじゃないかねえかと。

って、振り向いたらなんか・・・少佐の機体がドロドロに溶けていき、彼女の体を覆っていく。

『・・・翔、お前知ってるか？』

「知らん。奥の手があるならそう教えて欲しかったものだな」

『いや翔・・・多分そんな優しい物じゃないと思うけどなあ・・・』

しかし、さらっと見ただけのリンゴの知識でも良く分からない代物

とはな、外付けか？いや、もっと深い部分なのか？

なんて思考している間にも、少佐を覆うドロドロの黒いタールの様な物は形を整えていった。

形状は全体装甲。この間の無人ISの様なソレではなく、もっとスマートな。

手足の装甲は添えられているだけのような最低限。

頭部はフルフェイスのアーマーに覆われ、目の辺りからは赤い光が洩れる・・・バーサーカーかな？

そして特徴的なのはその武装。

刀が一振り。それも、カラーリングこそ違えど、どこかで見覚えのある。

なんて記憶を探っていると『「雪片」・・・!?』そう開放回線で届くと同時に俺の脇を駆け抜けていく白い影・・・

「ちよ！分からん相手に突っ込むな！馬鹿か！」

『いっ一夏！』

「デュノア！援護射撃頼むぞ！」

返事も聞かずに瞬時加速を使い、一夏君の後を追う。

抜刀術の様な構えから、そのまま振り切った『黒い機体』の一振りで一夏君の体制が崩され、振り切った刀を上段に構える。一夏君が突然バックしてきたので、彼の上を飛び越えるようにして、振り下ろされる刀を盾で受け止めつつ斬り付ける、が先ほどの一夏君のようにバックされて避けられた。

「翔！邪魔すんな！」

「うるせえ！・・・っってお前白式解除されてんじゃねえかよ、そんな様で何が出来るってんだ！」

後ろを見つつ、目の前の黒いのに向かってブレードを構える・・・もうなんか呼称が安定しないな。少佐モドキでいいかな？

「それがどうした！退け！あいつふぎげやがって・・・ぶっ倒してやる！」

「だからお前に何が出来る！デュノア、そいつ捕まえといてくれ！」
「離せシャル！アイツは、俺が倒さなきゃ駄目なんだ！」

『落ち着いて一夏！生身じや何にも出来ないよ！』

「でもこの間翔はやってただろ！俺にも出来る！」

『それは翔だからだよ！おかしいんだって、普通の一夏じや無理だつてばー』

「ちよつとお前さん！今聞き捨てならない言葉が聞こえたんですけど！」

『翔は黙ってソイツの相手してて！』

「………あい」

デユノアこえー……でもアイツもこえー……正体不明って怖い以外の何者でもないだろ。

「何はともあれ邪魔するならシャル！お前だつて——」

『だから落ち着いて一夏！』

後ろでハタクのような音が聞こえたが……しかし、動きを見せないな。なんだ？敵意むき出しの相手にしか反応しないのか？

『で、一夏………どういうこと？』

「あいつは……千冬ねえのデータだ。いや、千冬ねえそのものだ。あれは……千冬ねえだけの物なんだよ……チクシヨウ」

「しかし……ホントシスコンだなお前。ちよつと引くわ」

「だけじゃねえよ。あんな訳分からねえのに振り回されてるあいつもあいつだ、気に入らねえ。ISもラウラも、両方殴ってやらなきや気がすまねえよ」

俺は前向いてるけど……まあなんだ、一夏君らしいね。脳筋の俺とは違って、感情一直線の彼らしい。

「どのみち、あいつをぶん殴る。そのためには、ISをどうにかしないとな」

「敵ISは任せろーバリバリ」

『やめてー！』

なんてふざけてみたけど、うむ、さつきつから知識漁ってるのにソレらしいものが見当たらない。一夏君の言葉もヒントになるかと思っただけど抽象的過ぎて分からん。

少佐モドキは千冬さんの戦い方のデータを模しているって事か？

別に真似るくらいなら俺にだって出来るわけだが・・・うん？動きを、真似る？調べなおさねば・・・

『緊急事態命令！トーナメント全試合は今を持って中止とする！状況をレベルDと認定し、鎮静部隊を送り込む。来賓、ならびに生徒の全員はただちに避難するように！繰り返し！——』

「だってよ一夏君。IS使えないなら避難したらどうだ？」

「お前こそ、生徒全員だってよ・・・ココは俺が何とかするから避難した方がいいんじゃないか？」

『もう二人とも何馬鹿なこと言ってるのさ！鎮静部隊が来るんだから皆で逃げようよ！』

「少佐は俺のパートナーだぜ？良く分かんねえけど相棒を放って置けるほど薄情でもないんでな」

「違うゼシヤル。俺が『やらなきゃいけない』んじゃない。俺が『やりたいからやる』んだ！鎮静部隊だとか、翔がやるとか、知ったこっちゃねえ、んなこと知るか。ここで引いちゃったら俺じゃねえ！引いたら・・・織斑一夏を名乗れなくなっちゃう！」

『・・・ハア、ホントはやりたくなかったんだけどなあ。一夏、僕のリヴァイヴのエネルギー使ってよ』

「・・・なるほど、コア・バイパスでエネルギーを送るのか。出来るのか？」

『出来るよ。そう、僕のリヴァイヴならね』

「本当か！じゃあ早速やってくれ！」

『けど！約束して、絶対負けないって』

「おう、任せろ！ここまで言っただけ飛び出すんだ、負けたらそいつは男じゃねえ！」

『じゃ、負けたら一夏は女子の制服着て通ってよね』

「あー、ついでに下着も女性物にしたほうがいいか？」

「・・・パンツはイヤだぞ・・・やるにしてもブラジャーだけで頼む」「おう、女の子の気持ち思い知れ」

「負けるのが前提で話してたのかよ翔！絶対負けないからな！負けないからな!!」

『じゃあ準備するよ』

「おう一夏君。俺はこの機会を逃がす気は無いんだ」

「?・・・なんの機会だ?」

「ほぼ全力の千冬さんと戦える機会。さっさとエネルギー回復させないと俺がアイツ倒しちゃまずいぜ」

後ろから「いやまて翔!ふざけんな!」という声と『ちよつと一夏!動かないで!』という声を聞きながら少佐モドキ、もとい千冬モドキに近づいていく。集団行動?なにそれおいしいの?

「ビヤツハー、良い稽古相手だぜー!」

ブレードを両手で構えて突っ込む。銃?知るか馬鹿!相手の正体は『ヴアルキリー・トレースシステム』。弱いのなら『強い奴の動きを真似ればいいんじゃないやね』という発想の元生まれた機能だ。つまり、モドキとは言えモンド・グロツソを勝ち抜いた千冬さんだ、ヘタに小細工しても負ける。なら、こうするしかないだろう。

抜刀術の構えから振られる刀を受け流し、お返しに振ったブレードを受け流され、盾で受け止め、受け流されをしばらく繰り返している。後ろから「そこまでだ翔!」という言葉が掛けられたのでバックステップで振る割れた刀を避けつつ下がる。

下がった先に待ってたのはブレードと右の前腕部分のみ白式を装備した一夏君。なんか逆にカツコイイな。

「随分な格好だな一夏君」

「そういう翔こそ、カツコつけたくせに倒せてないじゃないか」

「それはあれだ・・・花を持たせてやろうとね。なんか最近頑張ってる一夏君へのプレゼントさ」

「・・・で、実際俺だけでやれそうなのか?」

「実際、厳しい。だから、俺について来い。俺の横からでも、俺の後ろからでも、俺を踏み台にしても好きに攻撃しな。アイツの攻撃はこっちで防ぐから攻撃する事だけ考えろよ・・・あーほんと零落白夜欲しいな」

「俺はお前の強さが羨ましいぜ。どうやったらそんなになれるの?」

「気合。んじや、いきますか」

「おうよ翔！」

後ろから聞こえる頼りがいのある声を聞きながら、俺は下の盾に収まっている日本のブレードを左手の指に挟むようにして引き抜く。

「レッツツア、パーリィー！」

一夏君と離れすぎないように前に進んで行き、振るわれる刀を二つのブレードの間に誘導し、手首を捻って固定する。おまけに右手のブレードも腕の内側にねじ込んで、こじ開ける。

「今！」

「じゃあ行くぜ偽者野郎！零落白夜、発動!!」

俺の肩を踏んで上に飛び上がった一夏君が、その白く輝くブレードを振り下ろす。

モドキの左肩から右足の付け根の辺りまでバツサリ斬りつけ、そのままの勢いで俺にも当たりそうになるが、エネルギー不足だったのか俺に当たる直前で光もブレードも消えていった。

前方でドサツと土囊が地面に落ちるような音と、ISの切り口からゆっくりとでてくる少佐をブレードを放した左手で受け止める。目の前では千冬モドキがドロドロと溶けて地面に落ちていく。キメエ！

「・・・まあ、ぶつ飛ばすのは勘弁してやるよ」

「えー、一夏君殴らないの？じゃあ俺が殴っちゃおうよ？」

「いや、やめてやれよ。鬼畜か」

「有言実行！・・・ん？」

「?・・・どうした？」

「んいや、なんでもない」

首に下げているリングGISからモニターが表示され、『プライベーター・エリア、侵入しますか』と書かれていた・・・その下には『YES』と『はい』・・・拒否権ねーじゃん！

次の瞬間。真っ白い空間に立っていた。いつものアルタイル、コナーとの戦いの場所とは違ってすっきりしている。

「わ、鷺津か」

「おお少佐か。ここどこ？」

「私にも何がなんだか分からない」

「だろうな、俺も知らん・・・」

さーで、どうしましょ、なんて悩んでいると「鷺津、私はこれからどうすればいいのだろうか」と問われた。

「いや、それこそ知らんがな」

「・・・だろうな」

「だけど、一つだけ言える事はある」

「それはなんだ」

「少佐、アンタのやりたいことをやればいい。好きなことをすればいい。周りなんて関係ない、千冬さんに追いつきたかったら努力すればいい、ドイツ軍に戻るってんなら戻ればいい。ここにいたかったらここにいればいい」

「そんな事でいいのか？」

「そんなもんじゃね？まあ選択権も決定権も少佐が持つてるんだ、少佐しか持つてないんだ。自分で悩んで、ゆつくり決めて行動してみな」

「・・・自分で、決める」

そんなところでリングゴからモニターが表示された。書かれているのは『次のお客様が並んでいます』・・・なんだ？ここは行列のできる名店か？

「ま、俺に聞きたい事は終わったろ？ここいらでお暇させてもらおうわ」

「そ、そうなのか？なんか残念だな」

「なに、そんな感情は次に来る奴の相手で忘れちまうだろ」

「次・・・？」

「そ、次。つてわけで、俺はこれで。何かあれば次は現実でな」

そう言い終わると俺は現実へと戻っていた。

その後、やってきた鎮静部隊が持つてきた担架に寝ている少佐と何故か寝てる一夏君を乗せて、事情聴取する事になった・・・うん、皆さんお疲れ様です。

翌日、食堂で何故か凹んでるクリスと一緒に食事をしていると『先日、IS学園で行われたトーナメントですが、事故により中止になりました。ただし今後の個人データの指標と関係するため全ての一回戦は行うようです。場所と日時の変更は各個人端末でのご確認の上——』と言った辺りで誰かがテレビの電源を消した。

「イーヤツホオーウ！戦えるのか！」

雄たけびを上げながらクリスが唐突にガッツポーズをしながら立ち上がった・・・あ、まさか・・・

「凹んでた理由ってそれかよ」

「社長がまた新しいのを作ったらしくてな、そのテストがてらトーナメントで使おうって考えてたんだが・・・使えるようになったよかったですー！」

「まーた奇妙な武装なのか？」

「タンク！」

「・・・足じゃなくてタンク？」

「完全移動砲台完成だ！社長曰く『これも次のステージへの一歩である！』らしい」

「お前のところの社長絶対頭おかしいって、ISでタンクする意味が見えん」

「俺も分からん。だがロマンだ！」

「いやまあ、確かにロマンだよな。デュノアのパイルもロマンだった、今度貸してもらおう」

「その時は俺にも使わしてくれよな！」

「デュノアに聞け」

「だよな！聞いてくるわ！」

元気良く立ち上がったクリスを見送りながら・・・後ろからの「し、翔」という声に振り返ってみる。

そこに居たのは少佐。相変わらずガイナ立ちかと思いきや・・・なんかモジモジしてる。

「お、お前は『やりたいことをしろ』と言ったよな」

『やりたいことすればいいんじゃないかな？』くらいのニュアンスだ

けどな」

「わ、私なりに考えてみた結果なのだが——」

突然胸倉掴まれて引つ張られる。その先に待ち構えるのは少佐の顔……咄嗟にアイアンクローをかましてしまった。

「なっ、何をする!」

「少佐こそ、何しようとした」

「キスだが」

「何故!？」

「お前を嫁にする!」

「フアツ!」

その後、少佐はホームルームで一夏君に同じ事を言いながらキスをしていた……。逆ハー狙いのビツチかな? 誰だ彼女に自分なりの行動しろとか言った奴! ……ああ、俺か。この状況作つた悪い奴、俺か……。ウツダシノウ。

原作三巻への繋ぎですよ

二対一かと思っただら少佐が暴走したり、少佐モドキだと思っただのが千冬さんモドキだったり、一夏君とちよこつと協力して倒したり、真っ白い場所で少佐と少し話したり、クリスが凹んだり、少佐にキスされそうになったり、少佐から一夏君と同じ扱い受けたり・・・解せぬ。

そんな俺は、アリーナの席に座ってタッグトーナメント（一回戦だけ）を売っていたポップコーンとメロンソーダを両手に観戦している。

授業も昨日の少佐暴走でずれたトーナメントでつぶれ、一部の生徒が歓喜している中・・・我等一年一組は「明日。倍進める」との千冬先生のありがたいお言葉でテンションが下がったり、しなかったり。

隣に座っているのは少佐、そしてその反対には何故か簪嬢。本音嬢？クリスと一緒に谷本さん&さゆか嬢コンビと戦っている。

「……………本音、私と組む……………はずだった」

「ホントの事言うと、俺……………簪嬢と組みたかったんだよな」

「なに！私とではなくてか！」

「実はね。本音嬢と組むだろうって思って少佐の申し出を受けたけど……………」

その簪嬢だが、スツゴイ凹んでるのだ。もうほつといたら両膝抱えて俯いてブツブツと言いついて黒いオーラを纏いそうなくらい。

試合の方は……………クリスが爆笑しながら全身にある砲塔から発砲し、ソレを何とか避ける二人、そして避けた直後の隙を本音嬢が撃ってシールドを削る、そんな戦法を取っている。あ、地面に落ちた谷本さんがタンクで轢かれた……………ひ、轢かれた！

「し、少佐、あの戦い方どうよ」

「……………呆れるほど有効な戦術だ」

「……………私も、あんな感じの専用機……………作ろうとしてる」

「俺達凡人は使えるもの全て使わなきゃ勝てないからな……………」

「凡人の意味を考えさせられる言葉だな」

「脳筋は凡人じゃ・・・ない」

「二番目の男ですが、友人の女の子達が辛辣です・・・」

「・・・多分、皆も言う」

「うむ。断言できるな」

「・・・そんな？ねえそんな俺って凡人じゃない？」

「凡人はまず体重と同じ重さの錘をつけない」

「・・・え、なにそれ・・・やだ・・・脳筋・・・」

俺だって好きでつけてるわけじゃねえよチクシヨウ、世界救ったら
焼却処分してやるクソが。

「・・・一夏君にでも話したら高値で売れるかね」

「なに？どういうことだ？」

「これ、千冬先生から渡された物なんだよ」

「私に売れ！」

「まだ売らねえよ！何取ろうとしてんだよ、やめ、おいやめろ！やめな
さい！！」

まるでオモチャを取り上げられた子供のようにグズリだす少佐：
あくそ、なんか知らん内にクリスマスと本音嬢勝ってるし！タンク！俺
にもっとタンクを見せろ！

「・・・なんかツマランな」

クリスマス&本音嬢コンビの試合の後・・・特に目立つタッグ戦も無く、
簪嬢もなんか普通の打鉄だったり・・・試合が終わったのに帰ってこ
なかつたり、暇していた。

だって皆打鉄カリヴァイヴのどっちか。

「ISに触れて半年未満では、まあこんな物だろうな」

「・・・なんか少佐、寛容になった？」

前なんて「ファッションとか思ってる連中死ね！」だったのに随分
とまあ・・・お兄さん嬉しいよ。

「私もな、色々考えたのだ。考えて考えて・・・その結果！私はお前を
嫁とする！」

「どうしてそうなった・・・どうしてそうなった！」

「私なりに好意をどう表現すれば良いか考えてだな・・・ドイツ軍の友人に相談してみたのだ」

「おい、その相談相手誰だ」

「クラリツサだ」

「・・・ごめん、俺にも分かるように教えてくれない？」

「ドイツ軍のクラリツサ・ハルフオーフ大尉。彼女は部隊の中でも日本通で有名でな、日本の文化を彼女に教わったのだ」

日本通、そして嫁発言・・・間違いない、オタクだ。いや、確かに海外でオタク文化が流行つてると言う話だが・・・勘違いも多いらしい。まさに今のそのクラリツサとか言う奴の事だよ！

「・・・分かった、良く分かった。今度しつかり教えてやるからその知識は投げ捨てろ」

「む、何故だ。せつかく同僚が快く教えてくれたというのに」

「確かにソイツは日本通だろう・・・でも違う、そうじゃない」

「・・・違うのか？」

身長、もとい座高の差で上目遣いになるようにこちらを見上げてくるが・・・違う、そうでもない。

「なんで睨みつけてきてんだよ」

「？これはジト目という物ではないのか？」

「ああそういうことか。今度ソイツと話させてくれ」

「む？構わないが・・・何故だ？」

「少し、少佐以外のドイツ人という物を知りたくてな」

「そうか！ならば今度伝えておこう！」

少佐曰くジト目だった目を爛々と輝かせてニヤニヤし始める少佐、それはいいんだが・・・少佐、チョロくね？

その後、少佐が「ちよつと一夏の所に行つて来る」と言つて席を立ち、そして空いた席にクリスが座ってきた。

「乙カレー」

「おー、疲れたわ。友達と戦うのはつらいな」

「そうか？楽しいじゃないか」

「これだから脳筋は」

「お前までその弄り方するのやめーや」

だつて実際楽しくない？お互い全力でぶつかるとかどこのスポコンかヤンキー漫画だよ。いや、ISは一般にはスポーツとして見られてんのか、そういやそうだったな・・・どこの世界に重火器撃ち合うスポーツがあるんだよ！良く考えたらおかしいだろ！

「で、どうだったよ」

「ああタンクな。素晴らしいモノだ・・・途中で轢いたよな」

「・・・悪気は無かつただけけど・・・つい跳ね飛ばしちゃった」

「他の奴にはやるなよ？」

「いやー、ウチの社長からは好評だったんだけどなー」

「だからお前の所の社長は頭おかしい」

「ハッハッハ！それは褒め言葉として受け取っておこう！」

後ろから爆笑が聞こえたと思えばクリスが「あ、この声・・・」とか言つて頭を抑えた。

嫌な予感がして振り返ってみるとスーツ姿のグラサンでゴツイ・・・どう見てもヤーさんが立っていた。その後ろに居る、人の良さそうな細いスーツの男が雇い主で、その人のボディガードに見えるが・・・「あー、翔。この人な、ウチの社長の有澤和一さんだ。後ろに居るのは秘書の森さん」

「君が二番目だな！昨日の戦い見せてもらった、ウチのテストパイロットにならないか！」

「いえ、しばらく無所属でいいです。卒業してあてが無かつたらその時はよろしくお願いします」

「うむ、優秀な技術者候補とも聞いている！あのような奇抜な発想が出来る技術者は大歓迎だ！」

握手した腕を上下にブンブンと振られ、非常にパワフルさを感じさせる有澤和一さんは「社長、お時間の方が」と言う森さんの声で俺から手を離れた。

「いつでも待つてるからなー」と手を振りながら、森さんに引きずられ

ていく和一さんを見送り……

「なんか、悪いな。社長が……」

「いつもあんなのなんか？」

「あんなの。まあ社長一代で今の会社建てて成功してるし……優秀な人なんだよ」

「まあなんだ、世の中で成功する人間ってのはどこかしらぶっ飛んでる人間……って聞いたことがあるような」

「俺達じゃ無理だな」

「俺はともかくお前は……何とかなるんじゃないやね？外見からして奇抜だし」

「……好きでなったんじゃないやい」

「ま、まあなんだ。分からんがドンマイ」

神様にでも無理矢理させられたのか？なににせよ分からん事ばかりだな。有澤……有澤……前世の知識で覚えがあるような、無いような……

「あの社長……四脚作ってくれとか言ったら作ってくれるかな」

「四脚とか止めろよ、せめて逆関節だろ」

「いやいや、逆関節とか無いわ」

「逆関節キモいとか、四脚の方がキモいから」

「いや俺逆関節キモいとか言ってるから。そう言ったって事はキモいって思ってるって事だから」

「上等だお前、久々にキレちまったよ……屋上行こうぜ」

「お前ホモかよ！キモいわ！」

「ホッホホホ、ホモじゃねーし！」

「キョドんな余計怪しいわ！」

「やめろ、離れないでくれ！周りには女子しか居ないんだ離れないでくれ！」

「寄るなホモ疑惑野郎！疑惑が晴れるまで近寄らねえぞ」

面白そうな試合もやってないし、早々にアリーナから。ついでにホモクリスから逃げる。

後ろで叫んでるクリスや、なんかザワザワしてる周りの女子達。疑

惑が加速しそうだが、知ったこつちやねえ！疑惑がガチだったら俺掘られるじゃねえか！

逃げた先、俺を待っていたのは千冬先生のアイアンクロードだった。自分から伸ばされた手の平に突っ込むように。

「廊下は、走るな」

「ふ、ふあい・・・ふひまふえん」

多分、ギャグマンガみたいな光景になってるだろうな。だって、足が地面についてる感覚ねえもん。プラプラしてんだもん・・・

「よろしい。そうだ、お前に伝える事があった」

突然手を離されて地面に落下。ええ落下ですよ、足から文字通り落下。アシクビラクジキマシター。

「一人部屋に戻る事になったぞ、良かったな」

「千冬先生、足くじいたんですけど？超痛いんですけど？」

「そうか、風呂に入ってゆっくりほぐせ」

「ご助言ありがとうございます・・・で、一人部屋に戻るって事ですか？」

「その通りだ。ちなみにラウラだが、デュノアと同じ部屋になるな」

「なんだ、デュノアか」

そう言えば、いつの間にか女子用の制服着てたんだよなあいつ。本当に気がついたらだ。

「あいつの事だが、知っていたのか？」

「実は初日にすこし・・・」

「程ほどにな」

「そう思うなら今後無理矢理ペアを組ませないで下さいね」

「却下だ」

「そのお蔭で俺と一夏君が少佐を取り合ってるみたいになってるんですけどそれは」

「私の知ったことではない・・・が、私からも少し言っておこう」

・・・ああそうだ、一応知ってるけど立場的に聞かなきゃならんことが一つ。

「あの、少佐が千冬先生の I S になったのはなんだったんです?」「ラウラから聞いてないのか?」

「正直、態度が変わった事のインパクトが強すぎまして」

「・・・あれは、ヴァルキリー・トレースシステムとってな。モンド・グロツソ部門優勝者の動きをトレースするという物だ」

「部門優勝者全員分再現できたら敵無しなんじゃ・・・」
「欠点は『当時の行動しか再現できない事』だ。その行動の弱点となる行動をされたときに対応が出来ないのだ」

「あー・・・過去の行動しか出来ないって事ですね」

能力バトル漫画でそんな能力あったような・・・結構強かったような。最終的に主人公に負けてたような。主人公が割りとチートだったような。いや、どうでもいいわ。

「まあ、千冬先生くらいの猛者でしたら刈りやすい獲物ですね。実際に戦った連中なんですし」

「過去とはいえ、手強い事には変わりはないがな。腕の鈍った私で勝てるかも分からん」

「・・・今、鈍ってるんですか?」

「鈍っているな。現役、ドイツ軍時代ほどトレーニングを重ねられてなくてな」

「いや、チラって俺見ないで下さいよ、何期待してんですか」

「いやなに、弱くなっている私なら超えられるだろう?」

ドヤ顔で何を仰る。無理に決まってるでしょう、正直貴方の存在バグなんじゃないかな? って疑問に思ってきてるんですから。実は転生者・・・だったりしません?

「む?なんだその目は」

「いやなんでも。とりあえず、俺は今日からまた一人部屋って事ですね」

「その通りだ。早めに風呂に入っておけ。早い時間に閉めるからな」

「トレーニングの後はシャワーで済ませてくださいね分かります」

「その通りだ。では、私はこれから書類仕事がある」

「お疲れ様です」

「以後、廊下は走るな・・・とは言わないが、気をつけるように」
「はい、済みませんでした」

突然だが、武装が増えた。リングゴ入手時よりも増えた。理由は簡単だ。『リングゴが作ってる』からだ。

前は剣とナイフと投げナイフとアサシンブレードだけだったのが。リストガン、リストフック、ワイヤーガン。ワイヤーガンどっから湧いて出た。

リストガンとフックは、エツイオが使ってた物でいいのだろうか。ワイヤーガンは・・・過大解釈すればコナーのロープダートか？俺まだエツイオと戦えてすらいらないんですけど武装開放しちゃっていいんですかね。

そして俺は、ワイヤーガン片手に森の中を走っている。

引き金を引けばフックが飛んで行き、もう一度引けばワイヤーが巻き取られ体が浮く。更にもう一度引けばフックが爪を緩める。

「なにこの超技術こわい」

着地してから一人呟く、一回解体すればリングゴの知識ブーストで何とか理解できるんだろうがそんな気もまったく起きない。

「お前はダ・ヴィンチか。シークエンス終わったらいつの間にか奇妙な作品作ってるレオナルドか」

・・・このリングゴなんも話さないしな、まだ自由人だけど気の良い友人のほうが付き合いやすいわ。

その日の夢に出てきたのは海の上に立つ街で、左肩にかかるマントが特徴的な人物だった・・・ええ、ご存知の通り即行で死にましたよ。

原作三巻スタートですよ

女子二人と話してたらタンクのかっこよさを見れなかったり、社長がゴツかったり、クリスがホモ疑惑浮上したり、千冬さんにアイアンクロー喰らったり、最強のアサシンに即死させられたりしたけど、今の俺は混乱しています。

目が覚めたら全身に重みを感じ、布団を剥いでみれば・・・全裸眼帯の女の子の肉布団で寝ていたで御座る。

サラサラの銀髪に、白いフリルのついた眼帯。そしてチラツと見える左足にはレッグホルスターの様なものが見える。

「……………なんだ少佐か」

捲っていた布団から手を離し、持ち上げていた頭も枕へと落とす。

「っっておかしいだろー!」

ついさっきまで最強さんに殺されては生き返らせられ、殺されては何故かコナーと殴りあったり、死んだらまた最強さんに殺されたり…………を繰り返し、メンタルが削られに削られ、磨り減った俺の心は、更に磨り減りそうな状況に一瞬スルーしそうになったがこりやアカンでしょ。

「ん、むう…………なんだ、もう朝なのか?」

「いやいやいや、おかしいでしょう?なんで居るの?」

「ドアならピッキングで開けたが、それがどうした」

「そんな軽く言うなよ、平和な日本じゃピッキングは犯罪です」

「…………そうなのか」

「千冬さんに言ったら現行犯でアイアンクローだ…………洩れなく俺もな」

「二人で共にアイアンクローされるのか…………」

目を瞑ってハアハアしだして…………やだなにこの子、ドM?

「うむ、だがあれは痛い…………思い出しただけで頭がズキズキしてくる」

「ま、パーカー貸すから部屋戻って制服着て来な。んで飯食おうぜ」

時間的にも朝練できそうも無い時間なのだ。妥協して提案してみると「うむ、そうだな。では戻るとしよう」と同感してくれるラウラにパーカーを渡すと…………なんだろう、サイズが合っていないからブカ

ブカでなんか本音嬢を思い出す。

「私と居るときに他の女の事を思うとは……まったく嫁は甲斐性がな
いな」

「そんな言葉どこで覚えた」

「シャルロットに教わった」

あんにやろう……あいつはなんだ？男装したりスパイしてたり、な
んだ？実は悪女だったのか？いっぺん引っ叩く。

なんて一人で脳内裁判（一人）の判決を下している間に少佐はさつ
さと部屋から出て行ったようだ……シャワー浴びよう、夢の中で何
度も死んだせいか汗が気持ち悪い。

食堂に着くと、一夏君とクリスに挟まれたデユノアが居た。拳句の
果て俺に対して凄い笑顔で「おはよう、翔」とか言ってきた。問答無
用でチョップだこのヤロー。

「えーちよつといきなりなにをするの翔！」

「うるせー、お前さん少佐になんか変なこと教えただろ……打ち殺す
ぞウーマン」

それに加えてなにさらつと逆ハー状態なんですかコノヤロー。
てつきり一夏君が何かやらかしただけだと思ってたけど……なに？
クリス、お前も何かやらかしたのか？

「変な事って……ラウラから聞いてきたから教えただけだよ」

「まずは女心を理解させるところから始めなさい！今のままじゃ乙女
どころか漢女だ！千冬さんみたいになっちまうだろ！」

「ほう、私の様にとはどのようだ？」

「そんなの決まってるでしょう！筋肉この彼氏みたいな感じ……
で……いや、いや、筋肉こそ彼氏は過剰表現だな。刀こそ彼氏だっ
たわ」

「そうか、そう思っていたのか」

「いやーだって……間違ってるって思います？」

「……残念な事に、私にできることはただ一つだ」

途中で現れた千冬さんにアイアンクロー喰らい、そのまま激痛と共

に意識が薄れていった。

なんか最近こんな落ちばっかりだな・・・チクシヨウ、いつか真正面から回避してみたいぜ・・・ガクツ。

目が覚めたら千冬さんと少佐に両腕抱えられて引きずられていた。

「む、起きたか」

「起きますた・・・今コレどういう状況で？」

「ホームルームを終え、保健室に向かっているところだ。だが起きたのなら保健室に向かう必要性もないな」

「では織斑先生、ここからは私が」

「うむ・・・鷺津、明日の朝練、楽しみにしておくように」

あ、俺明日死んだんじゃね？

「私も参加していいでしょうか！」

「よろしい。では共に鷺津を鍛えよう」

「はい！嫁を教官と背中を合わせて戦えるように鍛えて見せます！」

お前のやる気のベクトルはなんかおかしい。絶対おかしい。

なんてやっている間に少佐に首根っこ掴まれて引きずられている間に千冬先生から「来週から校外学習授業だが、羽目を外したり、忘れ物などしないようにな。学園を離れる事になるが・・・くれぐれも、羽目を外したりしないようにな」というありがたいお言葉を貰った。何故二回言ったし・・・なんだ、そんなに俺って羽目外しそうに見えるのか？

「だそうだ、気をつけるようにな」

「少佐は少佐で意味分かって言ってるの？」

「さっぱり分からん！」

「そのままの君で居て」

「？なんの事か知らんが断る！私は進歩する女なのだ！」

止めてください俺がハゲそうだ・・・一夏君？いやあいつはハゲないだろ。鈴嬢に聞いたとおりの鈍感っぷりだぜ？女に振り回されるだけ振り回されて、思いが伝わらず女の方が勝手に折れるイメージしか浮かばねえわ。

そんな状況、俺なら耐えられんな。

ひっさびっさの、虚さーん!

というか、整備室に入ったら本音嬢を掴んだ彼女と出会った。それだけ、挨拶したらそのまま出て行ってしもうた。

「最近は何も行かなくてもちやんと食堂に行ってるみたいでおいーさん感激だよ!」

と明るく振舞ってみたが、凄く冷めた目を向けられた。

「最近、来てなかった・・・」

「ああそうね、少佐の一件とか、訓練とか。色々やらなきゃならないことが多かったからなあ・・・というか現在進行形で増えてるからなあ」

「・・・ロリコン」

「え?・・・なんで?」

「・・・私、その、ラウラって子。本音、二組の凰さん・・・だっけ・・・」

「まあ確かに仲はそれなりにいいと思うが、どうしてそうなった?」

じつと見つめられ、ため息吐かれた。ちよつと意味が分からないんですが・・・え、なに、どういうこと?」

「俺鈍感じゃねーぜ!」

「うん、そこはね」

「そこは!他は!?!」

「・・・自分で考えろ」

「ここまで言ってるなんて、ご無体な・・・もういいよ、体動かしてればいいんだろ」

「脳筋」

「だからそこ弄るなや!もうやめて、俺のメンタルライフはゼロだ!」

「・・・死体に、鞭打つ」

マジで止めるテメエ、知ってるぞおい、姉が一人でIS作ったから頑張ってる一人でIS作ってるんだろテメエ、一人でIS作って凹ませるぞテメエおいこら。

とか言いつつも設計図は出来てるんだよな。後は素材があれば何とかなるレベルだ。

クリスと有澤社長がゴツイ&武装過多路線、一夏君と倉持技研はなんか知らんがスマート&武器一本路線。よろしい、ならば適度な機体に適度な武装だ。

何事も求めすぎと極めすぎはよくないだろう。俺のような器用貧乏には程々が一番なんだ・・・特訓はやりすぎだ、器用貧乏はこうでもしないと一点特化には追いつけないんだよ。分かれよ。

「・・・ほら・・・今もへんなこと考えてる」

「え？悪いのつてこういうところなのか？」

「他にも・・・まだまだ」

「何とかせねばならんな」

「無駄な努力」

「お前さんただ俺を煽りたいだけだろ！」

「ソナナコトハナイヨ」

「なんで片言なんだよ、喧嘩売ってる？実は喧嘩売ってる？実は俺のこと嫌いだったりする？」

「そんな事は無いよ！」

あ、咽た。慣れない声出すから、ほら水飲みな？大丈夫か？ゆっくり息吸って、吐いて。落ちついたな？大丈夫だな、ならよし。仕返しのチョップだてめえコノヤロー。

だが後ろで見てくる奴、テメエは駄目だ。殺気向けてきてる仕返しがチョップなんて生易しい物では済まさんぞ。

いつかな！

翌日以降、朝訓練で千冬さんと少佐にぶつ殺される以外なにも変化しない日々を謳歌し、週末の休み。

俺は今日、シヨップピングモールに来ている。一人で。

一人で来たはいいが、

「ワシワシくおごつて〜」

「そういわれてもなあ・・・」

「ほら本音ちゃん、鷺津くんだって女の子に奢るお金なんて無いと思うんだけど」

「さり気なく馬鹿にされた気はするがまあ置いておいてやろう谷本さんや・・・実際、奢れるだけの金はあるんだけどなー」

俺の金の入手先だが、IS学園が俺のデータを各国や企業に売っぱらって居るらしい。そしてその金額の二割を運営費に当てるという所業をしているが、まあそのお蔭で金が手に入るならまあいいだろう。全て千冬さんに教わった事だ。

お蔭で俺の口座にはもう数字がビッシリと・・・コレ大丈夫？もう企業でもおっ建てちゃった方が楽になれるんじゃないかね？つてレベルの金が手元にある。いや、実際あるのはその辺の銀行で落とした十萬程度だが・・・アカン、金銭感覚狂ってる。十萬を程度とか、これはヤバイ。実際ヤバイ。

「つてか、本音嬢たちは何を買いに？」

「水着だよく少し前のはもう着れなくなっちゃって〜」

「そうなのか？身長が伸びたのか。いいことだな」

「ううん、胸だよ」

・・・あ、あれ？なんでガチ顔してんの？怖いよ？ちよつと待って、こつち来るな、マジ顔のままこつちくん！腕組んで胸強調するな！唐突にやられると心の準備がががが・・・

「やめて！私へのあてつけなの！」

谷本さんが本音嬢の頭を叩いた事で止まったが・・・谷本さん、言うほど無くはないだろ。

「なにー！」

「いいえなんでも」

これはこれでさつきとは違って怖いな。

時間も良かったので入った喫茶店での食事も終え、再び買い物へ戻ったわけだが・・・

水着売り場の所で千冬さんが山田先生と一緒にあって正座している一夏君とクリスに説教している。お相手は・・・篠ノ之さんとデユノア。近くの柱にはオルコットさんと鈴嬢、そして少佐。

「・・・鷺津、女子生徒三人連れとほいい身分だな」

「いや千冬さん、買い物に来たら遭遇したんですよ」
「そくです！誘ったわけじゃありません！」

俺と本音嬢の言葉を聞き、千冬さんの目線は後ろへと向けられる。後ろの谷本さん&さゆか嬢コンビが必死に首を振っている音が聞こえる。

「そうか。水着は男女別で買うように」

「彼女でもない女性の肌を見るわけには行かないでしょう」

「ラウラのはいいのか？」

「アカンでしょう」

「そうか、そうか・・・では刑を執行する」

「俺まだ新しい水着買ってなぎやあああああああ」

俺、こつちに来るときに水着なんて持ってきてないってのに・・・

「し、翔！お前が気絶したら俺が買っとくぞ！」

「い、一夏君・・・たのむ・・・」

「なんで頼むのが言い出した俺じゃないんだよ！いい加減にしろ！」

「なんでクリスがそんなに怒ってるのかわからないけど、頼まれたの俺だから」

なんでお前さんは、そう意味も泣く挑発するような言い方をしますかねえ・・・

「醜い争いを見たくないのここで止めておく」

なんていいながら手を離してくれた千冬さんが女神に、いや、戦乙女に見えた。だってこの人と戦切り離しちゃいかんでしょ。

「あ、ありがとうございます」

「所で、お前は何故ここに来たんだ？」

「ちよつとチエーンソーが欲しくて」

「チエーンソー？なんでそんな物を？」

「ちよつと数欲しくてですね。まあ度肝抜いてやりますよ」

「・・・あまりやりすぎるなよ」

「技術者志望の相手に何を仰る。奇抜な物作ってこそその技術者冥利に尽きるつてもものでしょう？」

「・・・あまりにもひどい物ならばストップを掛けるからな」

「やっべ、ストップ掛けられるかもしれないです」

「そんな物を作ろうとするな！」

言われてもさ、俺のリビドーが叫ぶんですもん。リンゴ知識を使つて『アレ』を作れと。そりや衝動に身を任せますよ、男の子ですもん。「まあいい、一回使ったらお蔵入りにするように」

「そのまま死蔵ですな分かります」

なんて会話をしている最中に、山田先生の説教は終わったようで、「はい、では解散です」との声で水着を買い終った連中は学園へ、買つてない俺達は千冬先生の監視の下水着をかうことに・・・なつたはいんだけどなあ、

「やはり黒・・・いや、青か」

「黒じゃないですかね。イメージ的に」

「しかしだな、私もそろそろそのイメージを払拭したいと思つていな」

何故か千冬さんの水着選びをガチで行っています。俺の水着？まあ普通のトランクスタイプだ。流石にここでブーメランを選ぶよなネタに走りきれないわ。

「では黒に近めの・・・紺、とかどうでしょう？」

「黒に近いか・・・個人的にはもつと明るい色がいいのだがな」

「あえてピンク！」

「・・・ないな」

一瞬考えましたよね？手元にあったから取ってみたピンクに白いフリルのついたビギニで、悩みましたよね？

「なんだその目は、なにがおかしい」

「いえ、着てみたいのなら試着してみれば良いかと」

「着ないぞ」

「了解です・・・じゃあ他には？」

「こう、逆に黄色などはどうだ？」

それから一時間ほどの会議の末、決まらずに黒に決まった。しかし俺はしっかりと見ている。

ピンクのフリルの奴も買っているのを。まあ美人ですしねえ、似合

うんじゃないですか？どっかの進撃系腹筋アイドルも似合ってはいたし、腹筋なかったらもつと似合ってただろうし。いや、筋肉万歳。

原作的登場ですよ

朝起きたら少佐とベットインしてたり、千冬さんにアイアンクロ―で落とされたり、朝練で死ぬ事が確定したり、虚さんかと思つたら簪嬢だったり、一人で買物と思つたら三人娘と遭遇したり、千冬さんの水着を選んだりと、色々ありました。色々作ったりして時間を過ぎ、校外学習当日の早朝、俺は今……助けて。

「確かに、錘は外して良いと言つたが……ここまで動けるようになっていたとは」

「……私でも、本気を出してようやく攻撃を掠らせる程とは……：：：錘があつてようやく互角、教官！私にも錘を！」
「うむ、考えておこう」

死にすぎて攻撃に対する反応がよくなつたはいいが、紙装甲なのは変わらない。というか、千冬さんの攻撃が素で零落白夜なのだ、つまり、俺が鎧を着ていたとしても普通に死ぬ。余裕のオーバーキルですよ、火力が違います。

少佐はそうでもなかったが……やはり千冬さんは別格ですわ。モンドグロツソ出場者のレベル的に言えば千冬さん以下、少佐以上、つて所か……生身でな、ISは知らん。

「死ぬ、死んでしまう……肋骨がズキズキする……折れた」

少佐から逃げてる最中に横からのトライデントタツクルですよ。完全に油断してたし、視覚外の攻撃だつたし……直感が発動した文字通り刹那の衝撃。体がくの字どころかもつと収納できそうな感じになってしまった。例えるならパイプ椅子だな。

「人間には二百を超える骨がある、肋骨の一つや二つなんだ」

「折れる場所が悪すぎワロエナイ」

肋骨とか、ヘタしたら肺に刺さつて死にかねないでしょうが。

「そう言えば、この間言つていたチェーンソーを使った兵器だが、完成したのか？」

「イエッス！市販のチェーンソーと轡木さんに貰つた廃材を組み合わせただけの仮設だから名前は決めてないんですけどね」

「データはあるか？」

「設計図ならここに！」

今ポケットに折りたたんで入れていたのを取り出した、様に見せながら首に掛けてあるリングGISの拡張領域から取り出す。

取り出した紙、設計図に描かれているのは、六つのチェーンソーが二列三本で並んでいる図と、右矢印が書かれた先にある六つのチェーンソーが円を描いて並んでいる。記憶を元にした落書きだ。

「これから作ったのかお前は」

「落書きから作るとは・・・なんというセンスだ」

「設計図は・・・頭の中にある！」

単に絵心が無いだけだ。そりゃ本気で書いたのはリングGISに3Dにして、機動シークエンスとか諸々データとして残ってるが、それ見せるわけには行かないだろ。リング、仮にもGISだし。

「実物は？」

「・・・さあ？」

「どこだ嫁よ、これを見てみたいぞ！」

「まあ、じきに見れるさ。今はまだその時じゃない」

俺の勘が訴えるのさ。まだ使うなど。一回使ったら壊れるからまだ使うな、と。そりゃ調整に調整を加えたけど、壊れるのは分かっている。丈夫さ的に明らかにオーバーワークになるのだ。使ったら部品壊れるわ溶け出すわと色々大変な事になることは分かっているからな、まだ駄目よ。

目立つ場面で使つて、『アイツにはアレがあるぞ！』って思わせて警戒させる。そこで、普通に戦う。相手からしたら何時切り札を切ってくるか分からない状況にしてやれば戦い易くなるだろう。楽しみだなあ・・・楽しみだなあ・・・

「まあいい。汗を流して来い。そして、それは嚴重に仕舞っておくように」

「技術者として当然ですな。情報漏洩駄目絶対」

「嫁よ、嫁よ！私にも何か一つ、作ってくれ！」

「え？少佐に？・・・何でも良い？」

「なんでもいいぞ、私が使えそうなものならばな！」

「少佐が使えそうなものでか・・・少し考えてみるからさっさとシャワー浴びて校外実習の仕度済ませようぜ？」

「ふっ、甘いな嫁よ。私はもう済ませている！少し眠かったりするぞ」
ああ、遠足前の子供状態か。ウキウキしながら準備してたらいつの間にか時間がやばかったりするしね。あるよ、俺もそんな経験。

師範から「今から山籠りして修行するから、十分以内で必要な物を三つ用意しておけ」って言われて焦ったからな。結果？替えのパンツと竹刀とシャーペン。結局役に立つ事は無かったシャーペン・・・山でどう使えっつてんだよこれ・・・

「行きはバスだから、寝るのならその中で寝るように」

「はい分かりました織斑先生！」

「せんせー、錘は外していいですかー？」

「駄目だ」

なんでや！なんで俺の四肢見殺しにするんや！

「ああ、お前等が泊まる部屋だがな。教員、すなわち私と山田君と同じ部屋だ」

「・・・どうしてでしょうか」

「お前等を三人纏めておいたら良い餌だろう？」

「ああ、なるほどそういうことですか」

餓えた猛獣しか居ない森の中で野営とか、食ってくださいと言わんばかりだもんな。

そんなこんなでバスに乗り、揺られる事一時間。一番後ろの五人掛けの座席に座ってのんびりとしていたところ、隣に座っていた少佐が俺の膝を枕にして眠り始め。逆隣に座っていた本音嬢がその隣に居る二人娘と仲良くガールズトークしている。配置で言ってしまうと、一番窓際が少佐、次が俺、本音嬢、谷本さんさゆか嬢となる。タイロガタタレター！

座席越しに頭が見えるからクリスと一夏君の場所は分かるが・・・一夏君の隣に黒いポニーテール、クリスの隣に並んで金髪。

トンネルを抜け、海が見えたことにテンションが上がっているクラスメイト達を横目に、俺はひっそり少佐の寝顔をガン見していた。

思う事はただひとつ。この眼帯の下どうなってるんだ？つぶれてるのか？それとも普通にあるのか？ファッション的な意味なのか？信念的な意味合いなのか……ック、静まれ俺の左手！抑えるんだ俺の右手！

「ワシワシ……なにやってるのかな〜？」

「本音嬢、君は気にならないか？少佐の眼帯の下はどうなっているのか……いや、プライバシーだしここで取るのは流石にNGだが、気にならないか？」

「気にはなるけど〜駄目だよ〜」

「だよな、流石に駄目だよな」

まあ、人には秘密にしておきたい事の二つや二つはあるだろ。当然だ、俺だって前世の記憶が知識としてあるなんて人には言えねえさ。

なんてやってる間にも、千冬先生の「全員！そろそろ目的地に着くのでおかしな行動をしないように！着くまでちゃんと席に座っているように！」なんて声があったり、その声で少佐が目を覚ましたり、到着と同時に全員が軍人のように揃って席から立ち上がったたり、千冬先生から泊まる場所『花月荘』を紹介されたり、

「あら、そちらの方々が噂の」

と、千冬先生に紹介された女将さんがこっちに話題を振ってきた。よろしい、ならば自己紹介だ。

「初めまして女将さん。鷺津翔です、何かしでかしそうですが、大目に見てください」

「どうも初めまして、金城クリスです。短い間ですが、よろしく願い致します」

「お、織斑一夏です。よろしく願います」

「あらあら、どうもご丁寧に。清洲景子です」

「……ウチ一人変な挨拶をしたようで、申し訳御座いません」「いえいえ、男の子が元気なのは良い事ではありませんか。ですが、あまりやり過ぎないようにしてくださいね？鷺津くん？」

「できる限り、抑えてみます」

「あら？何かする側じゃなくてされる側なの？大変みたいねえ」

「従業員の皆様方には迷惑を掛けないように致しますので」

「織斑先生も居る事だし、そんな大変な事は起きそうになさそうですけどねえ」

女将さん、俺は大きさに言ってるわけじゃないんだぜ！だってさ、良く考えてみろよ……

一年一組クラス代表決定プチトーナメント↓無所属の一夏君が専用機ゲット。

クラス別トーナメント↓無人機来襲。

タッグトーナメント↓少佐暴走。

今、校外実習……今回もなんか起きるだろ！分かってるよ、そういう星の元に生まれてきたんだろ？一夏君よ……死んでしまえ。

「それにしても、今年は男子が三人も居るせいで浴槽分けが難しくなっちゃってしまい申し訳ありませんでした」

「皆さん良い子じゃないですか。織斑先生に言われる前に挨拶も出来ましたしね、しっかりした感じがしますよ」

「感じがするだけです。この馬鹿者共は」

「あらあら、織斑先生は随分と厳しいですね」

「いつも手を焼かされてますので」

なんとというか、したたかな大人の会話だ。千冬さんが恐らく心の底から敬意を払う相手、実はかなりのやり手？いや、ただしっかりとした大人なだけか？うむ、わからん。

「では、皆さん。お部屋の方へどうぞ。海へ行かれるのなら別館の方で着替えられるのでそちらをご利用なさってください。場所が分からないようでしたら、いつでも従業員の方へ伺ってくださいね」

そんな女将さん、清洲さんの一声に女子達は一斉に返事をして旅館へと入っていく。

初日は完全自由だから女子達はこの後直ぐにでも海へ行くのだろう。俺も……この自然を目の前におあずけされるのも気に食わないから海でタップリ遊びながら修行をしてやろう。

俺の中で決定をした直後だった、「おりむくりにリスリスくそれにワシワシくさつき聞きそびれちゃったんだけど、三人の部屋はどこなの〜?」という聞きなれた声が届いた。

「俺は知らんな．．．一夏、知ってるか?」

「さっぱりだ。廊下にでも寝るんじやねえの?」

「廊下! そりやないだろ流石に!」

「そくだよく、ろうかなんて冷たいよ〜」

ああ、知らないって事はいい事だなあ。廊下より更に冷たい場所で寝るかもしれないってのにこいつ等は．．．

「ああ、織斑、金城、鷺津。お前等はこっちだ」

「じゃあのほほんさん、またあとで」

「水着姿期待して海に向かうからな」

「．．．まあ知らんことはいいいことだ」

千冬先生に、勇者のお供の様に付いていく俺達。もう、剣士（千冬さん）だけでいいんじゃないかな。勇者（一夏君）なんていらんかったんや!

『教員室』と書かれた部屋は、とても広くて綺麗だった。

一通りの説明を受けた俺達は水着やタオルや替えの下着を持って部屋から出た。中では千冬さんが山田先生を叱っている声が聞こえる．．．何も聞いてない、俺達は何も聞いてない。

途中で篠ノ之さんと遭遇し、彼女をパーティーに加えたりしていた俺達を待っていたのは、本館から別館へ続く道の隅に、生えているウサ耳だった。

もう一度言おう、ウサ耳だった。

「これなんだ?」

「お、おう．．．コイツア．．．」

「な、なあ箒。これ抜いていいか?」

「知らん、私に聞くな。関係無い事だ」

そう言つてそそくさと道を進んで行ってしまった篠ノ之さん。うん、これって．．．もしかしなくても博士だよね?」

混乱している俺をよそに、「おーい、抜くぞー?」と叫ぶ一夏君と、「知らん!好きにしろ!」と叫んで角へ消えてしまった篠ノ之さん。

「え・・・えつと、ぬ、抜くぞ?」

「おう、あくしろよ」

「俺しーらね、しーらねったらしーらね」

そうしてウサ耳を掴んだ一夏君だが、そこまで強く固定されてなかったの間抜けな声をあげ、ウサ耳片手に尻餅をついた・・・男がこれやつてもなあ・・・

「あら?皆さんご一緒になにをなさっているのかしら」

「お、セシリアか。いや、このウサ耳を——なっ」

「一夏が引つ張ろうとしたら間抜けな声上げて尻餅付いたんだよ、ぷくすくす、掴んだ時点で分かるだろ」

「あ!ちよ、一夏さん!」

「え?なに?なに?」

制服のスカートを通つ赤な顔して慌てながら押さえつけ、そして後ろに下がるオルコットさん・・・一夏君、ラッキースケベとか・・・

「処す?なあ、処す?」

「何怖いこと言い出してるとんだよ翔!」

「で、何色だった?」

「白のレース・・・て、あ」

「一夏さん!」

「あーこれはもう、処すしかないかー」

「そうだなー、セシリアさん、やつちやいなさい!」

「いやいやいや!聞いてきたクリスも同罪だろ!」

「答えてしまった一夏さんが悪いですわ!こっこれはも、もう責任を取ってもらうしかありませんわね!」

「まあそのへんはどうでもいいとして、一夏君、そのウサミミってなんなの?」

「ああ、これか?これは東さんの——」

一夏君がいいところまで言った辺りで、ミサイルが飛んでくるよう

な音が近づいてきたと思つたら、先ほどまでウサ耳が生えていた場所に何かが振つてきて粉塵を巻き上げた。

土煙が晴れてきて見えたのは、オレンジ。そしてシルエットは長い逆三角形・・・皆も良くご存知の野菜。

「二に、にんじん?」

「カカロットオ・・・」

貴様が抵抗の意思を見せなければ、この星を破壊しつくすだけだア。つてか?こんあデフォルメ調のにんじんに破壊なんてされてたまるかチクショウ。ついでに言うとしてめーはどちらかと言うと地球守る側だ。なんて口に出さずに一人問答していると、

「あつはつはつはー!見事にひっかかったね、いっくん!」という声が響き渡り、にんじんが縦に割れ、中からメカニツクなウサ耳つけたメルヘンな服装の巨乳が飛び出してきた。

「うーん?しよーくんもなにか反応してくれないと束おねーさんこまっちやうぞ!」と星を出しそうなウインクをしてこちらへ近寄ってきた人物。リングを俺に渡すように計画した人物であり、恐らく俺がどんな存在かを知っており、俺が世界を救うなんて事を言い出した人物。

篠ノ之束が、そこにいた。

原作的海イベントですよ

バスに揺られたり、寝てる少佐を眺めたり、泊まる宿の女将さんと話したり、一夏君が地面に生えてたウサ耳引っこ抜いたら空から人参が振ってきたり、その中から篠ノ之東が出てきたり・・・カオスです。「いやー、相変わらず元気そうだねいっくん！最後に会った時から変わりはないかい？」

「お、お久しぶりでです東さん・・・でもなんで上から？」

「いやー、前にね。ミサイルで飛んでたらどっかの国の戦闘機に打ち落とされそうになったんだよー。それ以来ミサイルには乗ってません！東さんは学習するのだアー！」

とか指を空に向けて宣言しているところ悪いが、まずミサイルは移動時に乗る物ではない。

なんて内心で突っ込んでたら一夏君と話してた東博士がこっち向いた。こつち見んな！

「ではしよーくん！一緒にほーきちちゃんを探しに行こうではないか！」

「ハアーなんで俺！一夏君でも連れてけよ！」

「まあまあ、よいではないかよいではないかー」

まったりとした言葉ながらも俊敏な動きで首根っこを掴まれて引きずられていく。俺は敵意や攻撃の意思が無い行動に対して反応できないんだよー！そういう風に師範に鍛えられたからな！

「おのれ束ー！は、離せー！」

「少し話したい事もあるのだー、来たまえー」

「来たまえって、引っ張ってんじゃねえか！」

「細かい事は気にしなーいのっ」

気にしろ、気にしてないからアレだ、ISが変な使われ方されてんだよ。ヴァルキリートレースとか完全にアウトだろ、アレ何とかできただろアンタ。

って言うか両足で踏ん張ってるのに引きずられるとか、あんた一体どんな筋力してんだよ！

曲がり角を曲がり曲がり時折角にぶつかり、ようやく手を離された俺は咳き込んでいた。いや、途中から首に下げてるドックタグ型リングをワシ掴んでたし、首に食い込んで後でも出来てるんじゃないかと……

「よしー！リング回収完了ー！」

「リング回収してどうすんのさ……」

床に大の字になって束博士を見上げる俺……ロングスカートで見えぬ……しかしなんだ、ワザと腰を振ってスカートの裾ヒラヒラさせて挑発すんな、まくるぞ。小学生の如く捲くるぞ。

「いやー、リングを渡したはいいけどね？肝心のISを用意してなかったのさ！一つ作ってきて、それを今から入れようとしてるんだけどー……おー？」

リングISのモニターを開き首を傾げる束博士。

「これはまた……おっもしろい事考えるねーしよーくんはー。よし、この束さんにまっかせなさい！明日には完成品渡すからねー」

と言ってから束博士は「ほーきちやーん！」と叫びながら、黄金のリングを片手に持ち、俺にドッグタグを投げ返してきた……それ、分裂できるんかいな……あ、でも拡張領域になんも入ってねえ、これじゃあただのドッグタグだ。

さっさと別館に向かって水着に着替え、夏用の半袖パーカーを羽織りいざ海へ。

「お、翔。箒は見つかったのか？」

「途中で博士とはぐれちまったんだよ。あの人フリーダム過ぎるだろ、知り合いなんだろうなとかしろよ」

「俺じゃ無理だ。千冬ねえでようやく感じてだよあの人は……って翔こそどこで知り合ってたんだよ、あの人行方不明だったんだろ」

「IS動かしてしばらくしたら家に来たんだよ。なんか気に入られて、今に到る。連絡なんてまったくしてこなかったのに今更何でだろうな」

当然の如く嘘を吐いたわけだが。いや、リングとか、無人機の事と

か、流石に言ったらアカンでしょ。

「つてかなんでパーカーなんて着てるんだよ」

「いや、これ脱いだらさ・・・怪我とか見せちゃうことになるんだよ、ダセエだろ?」

「そうか? 傷つて男の勲章だろ?」

「いやまあなんだ・・・一方的にフルボッコにされた傷だからな」

「なんだ? 喧嘩か?」

「修行。お前のねーちゃんにも傷付けられてんだよこちとら・・・喧嘩の方がマシなレベルでな」

「・・・朝、千冬ねえに会えないんだけど」

「知らんよ。本人に聞けよ」

そういうとブツブツと言いだしたのでとりあえず軽く柔軟する事にする。一通り終えた辺りで、鈴嬢が一夏君に飛び掛っていた。というかタツクルしていた。

「なーに真面目に準備運動なんてしてるのよこの男共は」

「お前もちゃんと準備運動しとけよ、おぼれてもらねえぞ」

「海はな、怖いぞ・・・準備運動しても不足な程にな」

「何怖いこと言ってるのよ・・・それに大丈夫だって、私はおぼれた事ないわ。きつと前世は人魚だったのよ!」

とか言いながら一夏君に登っていく鈴嬢・・・どう見ても前世はサルですありがとうございます。

そのままどっか行ってしまった。監視塔とか云々聞こえるけど、まあスルーだ。

「ワシワシ居たくみんなこっちだよ」

一人で手持ち無沙汰になったと思ったら本音嬢が現われた・・・現われたはいいんだけど、え?・・・え?・・・え?

「なんで着ぐるみ着てるん?」

「えへへ〜かわいいでしょ?」

「まあ、かわいいけど」

全体的には黄色、おなかの部分は白。そして黄色の付け耳。どこかで見たようなかわいらしいキャラクターの様な着ぐるみなのは別に

いい。

「その下、水着だよな・・・？」

「試してみる？」

「ノーサンキュー。あまりそういうことは言わないように」

なんか知らんが本音嬢からのブーイングをされながら適当に遊んでるときゆか嬢と谷本さんが合流した。

「やだ・・・筋肉・・・」

「お前まで筋肉で俺を弄るのか・・・谷元さん、覚悟は良いか？俺は出来てる」

「えっ待って！どういうこと！」

「お前は俺を怒らせた、おこだよ。激おこだよ！」

「なんか良く分からないけどごめん！」

「許す」

「今日の鷺津くんなんなの!？」

俺も正直分からん、突然現われた東博士のあのテンションにすっかり調子崩されたわ。

この盛り下がった気持ちをどう盛り上げようかと悩みつつ、本音嬢の頭を撫でたり叩いたり付け耳とって二人に付けて見たりそれなりに楽しんでると真っ白い何かが現われた。

「・・・よ、嫁よ・・・どうだ」

「その声は少佐か・・・にしても、どうだと言われてもな」

ミイラ状態でそんな事言われても・・・反応に困るわ。本音嬢は本音嬢で「わくいらうりくとおそろいだ」

とか話しかけてるし、少佐も少佐で「う、うむそうだな布仏よ」とかまんざらでもなさそうな声出してるし・・・ふむ、これを期に少しずつ日本の文化を・・・

「いやまで本音嬢に少佐・・・着ぐるみは日本の文化じゃないぞ」

「そうなのか！こんなにかわいらしいのに！」

少佐、この一ヶ月で随分変わったな。前は「かわいい？なにそれおいしいの？」な感じだったのにこんな反応してくれるなんて・・・

「え、ちよつとなんで鷺津くん泣きだしたの！」

「いや・・・なんだ、少佐がな・・・良い子に育ってくれてるようで嬉しいんだよ」

「お父さん！いやお兄さんか！」

「だって俺、少佐が学園に来てから少しだけ寮部屋同じだったんだぜ、当時の彼女と比べたら・・・お前等だって分かるだろ、初めのあのコミュニケーションする気なかった状態から本音嬢と話せるようになったんだぞ！凄い進歩だと思わないか！」

「いやまあ・・・今はバスタオルグルグル巻きの妖怪と化しているがコミュニケーション能力は外見と一致してないはずだ。」

「で、少佐・・・なんでお前さんぐるぐる巻きなんだ？」

「・・・・・・恥ずかしいからだ」

「・・・ああそう、良くわかんないけど頑張れ」

「・・・うむ、そうだな・・・頑張ってみよう！」

そう叫びながらバスタオルをかつこよく脱ぎ捨てた彼女の服装は、黒いセパレート水着だった。それもフリル特盛りでかわいらしい代物だ。うむ、初日に見た風呂上り全裸の時と比べて大して身体的成長はしていないようだ、よきかなよきかな。

「うん、実に良く似合ってたかわいらしいぞ少佐」

黒なのは、趣味なのか、千冬さんに合わせたのか、ISカラーリングからなのか。まあ知らなくていいか、多分趣味だ。

そして目の前で「えへ、えへへ」とかニヤニヤしながら両手を頬に当てて顔を左右に振っている少佐・・・なんか感情表現古くない？いやかわいいいけどさ・・・

その隣で本音嬢が不機嫌そうなのが気がかりだがあれだろう、着ぐるみ同盟から早々に脱退した奴がいるからだろう。

「では私は一夏の方にも行って来る！また！」とバスタオルを回収してから笑顔で走り去っていく少佐を見届け、谷本さんとさゆか嬢に連れられビーチバレーしている女子の団体にお邪魔する事になった・・・そして始まる俺無双。

錘付きの俺&本音嬢対三、四人でも余裕で勝てるとか・・・おかしくね？俺の体。とはいっても、両手伸ばして全力でジャンプしてネツ

トギリギリ超える程度だし、何故勝てたし。接待か？俺も接待のつもりで手は抜いてるんだけどねえ……

なんてやってると一夏君達が合流。そして始まる男三人vsありったけの女子達。途中で乱入してきた黒水着装備の千冬さんによつてパワーバランスが崩壊し、山田先生の提案で千冬さん&少佐with俺対その他へと変貌した。

俺と少佐と言うハンデがありながらも俺達を気遣える余裕のある千冬さんはマジにチートですわ。そして一夏君、お前はスマッシュの時に俺の足を狙ってくるのを止めろ、そして千冬さんの悪乗りで始まる俺だけセパタクロー縛り、何故か一夏君まで始めて意味が分からん対抗心を燃やすな。

その後、昼食へと向かったクラスメイト達を見送り、千冬さんの監視の下ビーチバレーに使った器具の回収や返却に追われ、殆どが食べ終えている食事どころに向かい、飯を食って、再び遊びに駆り出した。具体的に言うと、チェーンソーや水着を買ったショッピングモールで買っておいたデジカメで撮影会。勿論後でプリントアウトして皆に配る予定だ。

途中でクリスに貸したり、少佐に貸したり、山田先生に貸してみたり：：グलगル回つて、俺の元に帰ってきたのは夕食の時だった：：データが、データが：：水着の女子達で溢れている：：だと：：！？

まあそんなデジカメは、画面をガン見してたところに遭遇した千冬さんに押収された。「こちらでプリントアウトし、学園にデータを保存し、後にこれのデータは処分する」との事。まあうん、異存は無い。「あれあれば売れたのになー……ちよつと残念」

主にあの新聞部の人間や、百合百合している生徒さん達に割りと高値で売れるはず……そんな俺の横から「何を売るのが分からないけど、本音にパーフェクトジャンボパフェ二回も奢れる財布があればもうお金要らなくない？」という浴衣姿の谷元さん。と言うか、俺も浴衣だ。

実際、その他大勢、一組だけじゃなく食堂に集まっている一年全員

は実に多種多様だ・・・国籍より取り見取りの美少女達の浴衣姿・・・浴衣、実に良い物だな。普段は見えないし、今も極稀にチラッと見える程度だが健康的な太股。普段じゃ見る機会もないが、風呂上りだからなのか髪を上げているため見えるうなじ。日本最高。

なお、PJP（パーフェクトジャンボパフェ）とは一つ税込み二千五百円するあのショッピングモールの目玉商品。普通は五人くらいで分け合って食べるモノだが、本音嬢はサラッと一つ食べて「まだ足りないよ」とのたまったがな。

その光景が面白くてついもう一つ奢っちゃまった。

「しかし、うまいな。出先で食べるからか、本当に上手いからなのか、その両方なのか・・・」

逆隣から聞こえる「多分両方だよ」そんな緩い声を聞きながらも黙々と箸を進める。

旅館名物の一人用鍋、刺身。二種類の添えられている山菜とおしんこそして味噌汁に・・・そして美味しい白米！お櫃に入られているとこののに炊きたてそのものがグッド！刺身に添えられている肝にわさび、カタカナのパチ物ではなくひらがなの。これもう政治家が食ってるもんだよ・・・あーあーみんなそんなにがつついちゃって、食事ってのは優雅に楽しむもんだぜ？

「確かにこりや両方だ。新鮮だからなのか刺身もウメエ、味噌汁も多分単純に美味しい。そこまで料理に詳しいわけじゃないから表現しづらい・・・くそ、俺のスキルの無さに絶望した！」

「簪ちゃんがいつてたよ〜こういう時って脳筋っていうんだね〜」

簪嬢、今度見かけたら何が何でも眼鏡取ってやる。知ってるぞ、素颜見られるの苦手なんだろ・・・虚さんから聞いたぞ。

「本音、その話題はNGだよ。気にしてるから」

「うんわかったよ〜」

「たまに朝早く起きたときにトレーニングしてるの見かけるけど・・・そんなにイヤならやめればいいじゃん」

「習慣みたいなんなんだよ・・・ガキの頃から朝起きたら山走り回ってたからな、三つ子の魂百までってやつでな。寝起きに体動かさな

きや気がすまない」

「え？やだ・・・おじいちゃん・・・？」

「誰が明け方に散歩してる爺さんだ。そこまで歳とってないわ！」

前世の俺が生きた年齢と俺の年齢足してもまだ爺さんって程じゃないわ！いつてもおっさん止まりだわ！・・・ってか、なんだあいつ等は。俺の目の前でイチカ君はオルコットさんと、クリスはデユノアとイチヤイチャしやがって、アーンとかなに？何がしたいのお前等？あてつけ？あてつけなの？ハニトラ警戒してる俺の前でそんな事してるとか喧嘩売ってるって見ていいんですね、アイエスファイト、レディー・・・

「鷺津くん、箸折らないの」

「・・・わ、割り箸だし・・・怒られないだろ」

「いや・・・割り箸普通に持つてるだけじゃ折れないからね、何が鷺津くんをそこまで駆り立てたの」

言えない、男の嫉妬なんて醜いこと言えない。モテない男の僻みなんて言えない・・・その察した顔止めてくれたまえ谷本さん、お前の口にわさびを全てぶち込むぞ。

原作宿夜イベントですよ

東博士に引きずられてリンゴ奪われたり、海で遊んだり、ビーチ巴厘ーのはずがビーチセパタクローになったり、嫉妬に駆られ割り箸へし折ったり、色々ありますが、まだ臨海学校初日です。夜です。

今俺は、普段は中でもう一つの部屋と襖で分かれているが、今は大部屋となつている教員室で、クリスマスと二人で神経衰弱をしている。

後ろでは一夏君が千冬さんにマッサージしている。マッサージさ、ただのマッサージ・・・だからクリスマス、止めろ、その顔はどう見ても変態のソレだ。アウトだお前。

お互い無言で黙々と賢者モードを維持しながらの真剣衰弱の最中、千冬さんが「一夏、少し待て」と言った事で状況は変わった。俺も千冬さんが動いた事でようやく気付いたのだ、襖の前に何人かいる・・・当然だが、俺もまだまだ修行が足りないな。

なんて思つてるうちに、千冬さんが問答無用で襖を蹴り飛ばし、篠ノ之さん鈴嬢オルコットさんの三人が女子にあるまじき声を上げて尻餅をついていた。

千冬さんが彼女達と話してる間に俺とクリスマスは神経衰弱を終わらせにかかる。

「他の連中も来たし、そろそろ終わりにしようぜ」

「そうだな、場所ももう覚えたぜ・・・ラストスパートだ！」

そして始まる不毛な神経衰弱。いつの間にかいなくなった二人と、後ろから聞こえるマッサージされるオルコットさんの声と、千冬さんが下着が黒だとか、淫行がどーの・・・俺は何も聞いてない。だからクリスマスお前の顔はアカン。

「ほいラスト」

「・・・あ」

「俺の勝ちな、なんか飲み物奢れよな」

「くそ・・・織斑先生とセシリアに気をとられた！」

「それはただの自業自得だ諦めろ」

財布を探ってるクリスマスとトランプをシャッフルする俺。そして

こつちに来る一夏君。

「千冬ねえが男三人で風呂行つて来いってさ」

そんな言葉を聞きながら千冬さんを見てみると・・・うん、そうなんだ、アイコンタクトで伝わるんだよ。

「クリス、女子会が開かれるらしいぞ」

「なに！早めに帰つてこなければ！」

「いや、千冬さんに殺されるぞ？」

「お、お風呂はゆつくり入りマシヨーネー」

「クリスに何があつた！」

「いや、千冬さんって免罪符が効果覲面なだけだろ」

「実際怖い！生存重点！」

「いや、流石に千冬ねえでも殺しはしないだろ」

そしていつの間にか集まっていた一年専用機持ちズに見送られて風呂場へ向かう俺達であつた。

「ああクリス、風呂上りの牛乳奢れよな」

「フルーツか？フルーツがいいのか？」

「コーヒー牛乳一択だろ常識的に考えて」

「シンプルに牛乳だろそこは」

「オーケーだ、風呂場で存分に語り合おうではないか」

「ホモは無理です」

「ホモじゃねーし！」

道中クリスを弄りつつ、風呂上り至高の牛乳に会話が湧いた。

「ん？・・・お？おおう？」

なんか知らんが風呂場にある大きな鏡の前でクリスがポーズを取っている。勿論腰にはタオルを巻いている・・・どうやらホモじゃなかつたようだ。

「？クリス、どうかしたのか？」

「いや、随分筋肉付いたなーって思つてな。いやそりゃ翔には負けるだろうけどよ」

「俺の筋肉と一緒にすんなし。体重より軽いとはいえ錘付きの生活と

朝夜の訓練、密度がチゲエよ」

「まあ、俺からしても翔はおかしいからな・・・」

軽く筋肉がついてる一夏君とクリスと比べたら俺は本気で細マッチョを名乗れるレベルだ。もはや細がいらぬレベルのマッチョだ、服着たら細く見えるだけの着やせするマッチョだ。と、この二人を見てたら思う今日この頃。

「俺より千冬さんの方がおかしいだろ、水着姿見たけど筋肉殆どついてねーじゃん！技術なのか？技量の差なのか!？」

「技術でISの攻撃受け止められるならお前だつて受け止められそうだけだな」

「ISの攻撃とか・・・受け流すので精一杯だと思うけどな。そもそも生身で戦うもんじゃねーし、生身で達人級の人がパワードスーツみたいなを着て互角な感じだと思うぞ」

「あの織斑先生見てたらなー、生身でもいけそうな気がするけどな」

「相手が素人なら勝てるんじゃないかなあの人・・・候補生までなら生身で何とか出来そうで怖いな。相手が代表の場合・・・代表レベルを知らんからなんとも言えねえな」

「当たらなければどうということはない!」

「当たったら死ぬからな。千冬さんと言えど銃弾受けたら死ぬからな?」

「・・・死ななそうだけだなあ」

「一夏君、弟が言う言葉じゃないなそれ」

「・・・自分の姉を何だと持つてるんだコイツは。いや、まあ、世界最強の超人で腹に穴開いても生きてそうだけど、もう剣とか使わずに素手でISぶっ潰せそうだけだよ、俺の攻撃でもちゃんと当たる人間だからね?ダメージは通ってなさそうだけだな!」

「でだ、クリス・・・お前さん何時の間にデュノアと仲良くなったんだ?」

「ん、ああ・・・あれ?知らなかったっけ?一夏、お前は言ったか?」

「俺は言っていないぞ、シャルから聞いている物かと思つてたけどな」

「正直どうでもいいんだけど・・・てつきりデュノアは一夏君の事を好

いてると思つてたんだけどなあ」

「……………? どういうことだ?」

「お前には期待してないから黙つてろ一夏君」

「失礼な奴だな翔は、俺だつて相手の好意くらい分かるぞ」

「……………ああうん、好意はな。好意は分かるつて事にしとくよ」

しつかり好意が分かつてるなら自分に向けられる視線の意味も分かるだろうにこの男は……………よし、好意は分かるとしても恋愛感情はさっぱり理解出来てないつて事にしよう。

「つてそういう翔こそどうなんだよ、ラウラか? ラウラなのか?」

「少佐か……………個人的には一夏君のところにも行つて欲しいんだけどなー、こつちくんなつて感じだよ」

「お前、それでいいのか?」

「それどころじゃねーのさ俺は。忙しすぎてそこまで手回んねえつてのが現状だよ」

世界救うとかどうしろつてんだよ、一回世界滅ぼせば平和になるんじゃないか? とか考えて悩んで……………まるで意味が分からんぞ、教えてくれよ近くに居るんだろ篠ノ之束エ!

「せめて終わつてからにしてくれ……………」

「一体いつ終わるんだよ」

「いつだろうなあ……………まだ先だつてのは分かるけど正直分からん」

「ストイックとかかなんというか……………馬鹿か」

「多分真面目なんじゃないか?」

「なんとでも言えい! 俺は好きに生きるぞ!」

いや、好きに生きるつて言つても好きに生きれない現状なんだけどね……………いや、逆に考えるんだ俺。好きに世界を救つてもいいんだ、と考えるんだ。

我、天啓を得たり。

「こうしちやいらねえ! 早速行動してやろうじゃねえか!」

せつかく篠ノ之束という共犯者が近くににいるんだ、今しか出来ない事をやつてやろうじゃないか!

後ろから聞こえる男二人の声をガン無視し、着替えてからドツグタ

グを首に掛けながら飛び出した。

俺の世界救済計画はこれからだッ！

「いねえ．．．いねえよ、篠ノ之束いねえよ．．．どこいんだよあのメルヘン、流石にもう宿には残ってねえのか」

本館から別館まで駆けずり回ってみたはいいいが見当たらない、あの人参も見当たらない。ウサ耳は当然の如く見当たara．．．あ、あつたわ。なんでこんな極自然に．．．天井から逆さまに生えてるんだよ、流石にこれはおかしいだろ．．．まあ引っこ抜くんですけどね！

おかしいぞ、俺はウサ耳を引っ張ったと思つたら天井が開いてアブダクションされた。何を言ってるかわからねーと思うが俺自身訳が分からなかった。引っ張つたら上に行つたとかどういふことなの？

「やつはろーしよーくん！束さんを探してたみたいだけど自力じゃ見つからなかったね、ねえどんな気持ち？今どんな気持ち？」

真つ暗な部屋の中で、青白いモニターに照らされる篠ノ之束．．．目線だけこつちに向けているが手が空中に浮いてるキーボードを叩いている。

「．．．なんで屋根裏なんだよ、忍者かよ」

「そんなどーでもいーことはほっておいて．．．しよーくんはなんで束さんを探してたのかな？」

「そうそう、具体的にさ．．．世界救うってどうすんの？」

「あー、そう言えばこうして直接会うのは初めてだったねーうん、質問したい事も山ほどあるはずさ！そして第一の疑問に答えてあげようではないか！」

内心「ああ、ようやく悩み事が解消される」とかホツとしていると．．．心臓に悪い言葉が聞こえた。

「遺跡だよ」

．．．アサクリ、遺跡．．．リンゴ。あ、俺、死ぬんだ。世界救うと俺死ぬのか．．．

「ってマジかよ！俺死ぬのか？死ぬんだな！」

「まあそうなるねープギャー」

「軽いなおい、煽るなおい・・・で、遺跡は確保してあるのか？」
「バツチリさー！他にも遺跡はあるけどそこは・・・奴等が占拠してるからなあ・・・束さんは無駄な敵を作らない主義さー！」

「どの口が言うんだどの口が・・・まあ流石にアサシンにテンプルの占拠地に進んでいくほど馬鹿じゃなくてよかったよ」

「たくさん殺すと面倒だしね・・・死体の撤去とか、血とか、他のどうでもいい人間とか」

「ああうん、狂人だったわ。馬鹿じゃなかったけど狂人だったわ」

「しょーくんも片足つつこんでるけどねー」

「俺がそうなら千冬さんとか完全に両足突っ込んでんじやないですかーやだー」

「ちーちゃんは狂ってないよー、狂ってるのは世界の方だよー」

「ああうん、確かにそりやそうだ」

どこぞの魔法少年だって「世界はいつだってこんなはずじゃない事ばかりだよー」って叫びたくもなるわ。本当に何でだよーって事ばっかだよ。

「・・・あー、死ぬのか」

「原理的に言っちゃうと、地球をシールドエネルギーで覆って、熱量をそのままどっかに送るって感じだけど・・・色々弄くってみただけど人間がキーらしいんだよね。無人機でシミュレーションとかもしてみただけど何度も失敗に終わってるんだ、その度にリングが『人間使え、甘ったれるな』って煩いんだよねー」

「リングスパルタ過ぎねえ？」

「リングにも出来る事が決まってるらしいからねー、譲歩して人間一人ってことなんだと思うんだよねー」

「さて、死ぬ準備をするか」

「後ろ向きだねーしょーくんはー、もしかしたら生きれるかもしれないじゃない」

「何とかしてくれんのか？」

「考えてはいるよ、リングも万能じゃないからね・・・しかし！この束さんは万能なのだー！」

「まあ期待してるよ。俺だって出来れば死にたくないからさ」

とりあえずまあ唯一の疑問も解決したつばいなので帰ろうとしてみたが「東さんの技術力は世界一イイイイッ！」とか言う叫び声と共に後頭部に激痛が走った。頭を擦りながら振り返ると東博士がピースしていた・・・

「リング返却さ！もうISも、しよーくんの凶形通りの兵器も作つていたよー！」

「マジで技術力世界一」

後ろを指差されたから見てみるとリングが転がっていた・・・拾ってからドッグタグに収納して、ついでにモニターを開く。

表示されているのは『IS』と書かれた欄に『白影』と『クリード』：：なんで二つ？

「普段は白影使つてね！クリードは名前を見れば分かると思うけど・・・そっち系でね」

「ごめん、わかんね」

「まあ追々ね・・・東さんだつてちゃんと考えているのさ！」

「良く分からんけど、まあ頼ってるよ」

「まっかせなさい！このまま東さんルート突入だよ!？」

ねーよ、東博士ルートとか・・・ねーよな？

部屋に戻ったら酔っ払った千冬さんが一夏君に絡んでた。やつかいな絡み方している。

横を見てみればクリスが二人以外と仲良くトランプしている・・・

「おい、混ぜろよ」

「お、どこ行つてたんだよ翔！一夏君助けてやれよ！」

「無理だわ、マジ無理だわ。どうしろと」

「お前が行けば何とかなるだろ」

「・・・まあ行くだけ行つてみるさ。何も出来そうに無いけどな」

そんなこんなでクリス達に見送られてワザワザ回避した地雷原に突っ込んでいく・・・少佐、敬礼すんな。その前に・・・ふむ、もう寝ろって時間なのか。にも拘らずなんで教員室にこいつ等がいんだ

よ、戻れよ、寝ろよ。

「し、翔……助けてくれ……」

「む？なんだ驚津か……どうした」

「どうしたもなにも……そろそろ消灯の時間じゃないんですか？見回りもあるんですよ、そろそろ水でも飲んで酒飛ばした方がいいですよ……」

「私は酔ってなどいないぞ」

「酔ってはないでしょうけどお酒が入ってる状態じゃ生徒達に示せるものも示せませんって。主に威厳とか威厳とか威厳とか……」

「威厳……威厳か……刀か？」

「物理じゃなくて態度です」

「態度……真耶くん、威厳を見せてみる」

「えっ、ええ！わ、私ですか!?!」

「茶番も始まった事だし俺寝るわ、やっぱり無理だったよ……後頑張れ」

「いやいや翔！状況引っ掻き回すだけ引っ掻き回して寝るとかなんなんだよ！」

「お前が言うからやるだけやってみたんだろ！結果無理そうだったから寝るんだよチクシヨウ、邪魔すんな！」

「分かった、もう寝ろ！疲れてるんだよお前！」

「おう寝るわ！寝させてもらおうわ！……っってお前等退け、そこは俺の布団だ！」

布団の上でトランプをしていた専用機持ち連中を退かして布団に入る。少佐、布団に入ってくるな。浴衣を脱ぐな、風邪引くぞ。ああ千冬さん、少佐撤去してくれてありがとうございます……クソネミ。

原作的戦闘イベントまでの繋ぎですよ

一夏君がマツサージしてたり、部屋追い出されたり、風呂に入ったり、天井裏に引き込まれたり、グダグダ寝たり・・・今俺は、おはようございます。

二日目！専用機持ちは丸一日武装のテストとかなので一箇所に集められている。

一応俺も篠ノ之東製専用機を昨日から持つてはいるが、知られてないので俺は黒一点な状態で女子達に囲まれている。

大広間でスクリーンにプロジェクターで写された映像をメモを取りながら見ている、だってこれレポート提出しないといけないんだぜ？と言う授業の様な状況だ。出先だって言うのに授業だ。だがなんというか・・・一組以外の女子達の視線が結構こっちに向いている。

一夏君もクリスも専用機持ちだしなあ、仕方無いっちゃ仕方無い。真つ暗い部屋なんだから見れるものも見れないでしょうに・・・

一箇所に集められていると言ってもあくまで学年の半分だ、片方が集められてメモを取り、もう片方は野外で体育の予定だから周りの女子も俺もジャージ・・・普段見かけない他のクラスの女子達もジャージだから味気無い、浴衣なら俺もやる気出たんだけどなー、ジャージだからなー。

やる気が下がっている俺をよそに、スクリーン内ではIS企業を訪問したり、とある企業の社長、企画者、技術者、使用者とISが作られるまでの過程を本気で映画化したような作品だった・・・もうこれ売れるんじゃないやね？多分劇場公開したら男で埋まるぞ。

そんな映画を見ながらしばらくすると、暗くてよく分からないが山田先生と思しき人影が部屋を出て行った。

事件でも起きたのかー、とか考えながらメモを取っているとドア、というか襖がスパーンと映画かドラマのように開けられた。

廊下の光が逆光となって顔は見えないが「驚津はどこだー！」という千冬さんの声で立ち上がった。

立ち上がった方がいいが、「直ぐに来い。他の者は変わらずメモを取

りレポートを提出するように」そう言って部屋を出て行った千冬さんの後を他の生徒からの様々な感情の入り混じる視線に晒されながらも追う。

とつとと廊下に出て、小走りで前方を歩いている千冬さんの隣に並ぶ。

「何故言わなかった」

「いやまあ・・・千冬さん酔ってましたし、篠ノ之束製ですし・・・そうそう言い出せないでしょう」

「武装は」

「この間の設計図の奴と、設計してた奴が数個。近中遠何でも御座れ・・・一発限りですけどね」

「燃費が悪いのか」

「どれもこれも『シールドエネルギーをぶっ壊して更に機体もぶっ壊す』がコンセプトなんで・・・まあ俺はあくまで企画、作ったのは彼女、それだけは忘れないで下さいね」

「企画した者も悪いに決まっているだろう大馬鹿者が」

「ですよー」

俺一人じゃクオリティも信頼性も低い一度使えば即オシヤカになる残念装備で終わるけど篠ノ之束が作ったとなると・・・何度も使えるであろう最悪兵器と化す。使いたくないなー、これ、使いたくないなー・・・チラッ

「・・・使う可能性はある」

「え！あるんですか！」

「空中でこの間のアレを使えるか？」

「PIC制御をマニュアルにして気合で機体制御すればなんとかなるか」と

「ぶつつけ本番なのか」

「生身でアレ使ったら俺死にますよ？」

「何故そんな物を作ろうとした」

「いや、ISでの使用が前提ですし。対IS用汎用兵器ですし・・・まあ、まだ仮称の段階でしたが名前がつけられててビックリしました

よ」

「ふむ、で。名前は」

「デロリアン」

「意味の方は」

「かつこよく言うのと『これまでの常識を破壊する』ですかね」

この世界自体にあのタイムスリップする車が登場する作品は無く。名前自体も「タイムスリップなんて不可能」と言う常識をぶち壊した事からだ。コイツを使えばあら不思議！車の屋根にでもつけて起動してISに突っ込めばISを壊せる代物となっているのさ！不可能をぶち壊せ！

・・・由来の方はこじ付けだ、何を思っただ篠ノ之束がデロリアンと付けたのか、俺には分からない。この世界にあの映画が無いとするとリンゴの知識で知ったのか・・・リンゴ、一体なんだお前。

「格好悪く言うとうなる」

「パクリ」

「突然実も蓋も無いな」

「そんなもんですよ、発明品なんて。過去を漁れば誰かが似たような発想をしているもんですから」

ISに例えて言ってしまうえば、PICの技術なんかは名前こそ違えど発想や方程式自体は探せば手軽に見つかる。まあ、当時は机上の空論とされていたがISの登場で認識された技術だ。

ISってのはそんな検証すら出来そうもない過去に埋められた科学技術の塊なのだ。だがしかし、そんなの所詮似通った現象を探して当てはめてるだけだ。PICの様なことを書いた書物は見つかるのだがどれも似たようで違い、たまたま一番近かったのが今のPICなだけって言うのが事実。誰だって現象に説明を付けたいだろ、俺だって幽霊が出たらプラズマとか疲労から来る幻覚とか言い出すぞきつと。俺だって技術者の端くれだ、本当に出てきたらそれっぽいこと言ってる。

なんて頭の中で誰に向かって言うでもない主張をしているといつの間にか目的地に着いたようで、千冬さんが襖を開けていた。

「あ、翔・・・お前なんで黙ってたんだよ」

開口一番、言ってきたのは当然一夏君、正義馬鹿というか生真面目と言うか、馬鹿というか・・・不正とか嘘を許せない男だからな、今更ながら正直言おうと嫌いなタイプの人間だ。ま、日常生活では面白い奴ではあるがこういう状況じゃ面倒この上ない。

「いやまあ、言う必要もないだろ。専用機持ちともなると模擬戦やら実戦やら色々出てくるだろ、自ら進んで手の内晒す必要がどこにある・・・例えるなら、大貧民やるときに相手の手札教えるか？って事だ」

「いや・・・まあ教えないけど」

「俺はブラフとして教えるぜ！」

「一夏君はその馬鹿を見習いたまえ、少し智恵働かせなきゃ勝てるもんも勝てないぞ・・・お前は手札が二、三枚しかないんだからな」
「む、馬鹿にされた気がする」

「その内一枚がジョーカーで、後は三とか五のカードだから使いどころ間違ったら完全に負ける、負けたくないきゃ頭使え」

俺だって脳筋なのに頑張って頭回してんだ。リングってチート使っても思考回路や頭の回転は改良されなかったから自前の出来損ないの脳みそ使って頑張ってたんだよコツチは。

ちなみに、千冬さんは手札全部がジョーカー。手加減しても最弱が絵札系、勝てる訳が無い無理ゲーだ。

っと、なんか言いたそうだけど我慢した一夏君から視線をずらしてみると・・・篠ノ之束、また貴様か。

「しよーくんしよーくん！しよーくんのも第四世代だからね！」

「いや、いきなりなんの話？」

「鷺津、お前のISの話だ。今が何世代で開発が止まっているかは知っているだろう」

「確か・・・第三世代でしたっけ？鈴嬢のがそれだって話を聞いた記憶がうっすらと」

「第三世代はワンオフアビリティー等の特別な武装や技術をワンオフが発現した機体だけではなく誰でも使えるように、と言う思惑の元作

られた機体だ。そして第四世代は展開装甲、パッケージングによる追加ではなく予め備えられている武装を状況に応じて装備する事で如何なる状況でも行動できるという機体のことだ」

第四世代なんていわれてもパツとしなかったが説明受けて「ああ、通りでなんか色々入ってる訳だ」って納得したわ。まあ入ってる武装の殆どが俺の設計図が元だったりするんだけどね。

「ちなみに有澤重工はその第四世代の開発発に躍起になって俺の黒船を作ったんだぜ！今の黒船の姿を聞いて驚け見て腰ぬかせ！話戻すけど黒船はパッケージングじゃなくアップデートって形で少しずつ第四世代に近づけて行ってるんだ。けど・・・篠ノ之束、やはり天才か・・・」

「束エ・・・」

「ISは犠牲になったのだ・・・時代の犠牲にな・・・」

俺とクリスと一緒にあって束博士に視線をやるとドヤ顔していた。やはりリングゴはそっち系の知識まで与えているのか・・・どういふことなの。

「だからねしょーくん。いや、しょーくんだけじゃなくって、ちーちゃんにいつくんにほーきちちゃん。手伝って欲しいって言ったら手伝ってくれる？」

なんかシリアスな雰囲気出してる所悪いんですけど・・・周りの反応は「私はIS学園教師だからな。無理だ」や「私はまだ修行中のみですし」とか「千冬ねえが手伝うなら俺も」等々辛辣な言葉の数々。

打ちのめされたのかずっとモニターの前に居たって言うのに「しょーくん！」とか叫んで抱きついてきた。

「ああうん、まあ程々に手伝うよ。程々に」

「ホント！嘘じゃない!?ホントに嘘じゃないっ!？」

「嘘じゃない嘘じゃない。道民嘘つかない」

「道民パネエ！」

「コレが信頼度の差か!？」

「うるせーぞクリス」

「なんでそんな言い方！ひどくない！」

「いつも通りいつも通り」

なんか知らんが束博士が胸板にスリスリ顔擦り付けて来ているがなんだ？マーキングでもされてるのか？・・・しかしなんだ？鈴嬢とかオルコットさんが信じられないような顔してコッチ見てる・・・なんだ、なんなんだ？

「束はな、親しい人間以外には殆ど興味を示さないのだ。先程もオルコットがあしらわれてな、こうしているのが信じられないのだろう」
「本音と建前がカオスな事になってるな、まあ興味を示されてるだけマシだと思っておきますよ」

「あまり親しくしていると厄介事に巻き込まれるぞ」

「注意して取り扱います」

「束さんは危険物じゃないですよー！こんなに美人な人捕まえてなに言ってるのさー！」

「現在進行形で捕まってるのは俺なんですけどね」

「細かい事は気にしなーい！」

勘弁してくださいませ。とか思ってたら千冬さんが襟首掴んで引つpegがしてくれた。

「お前はお前の仕事をしろ」

「もー終わったもーん」

・・・終わったから遊んでたのか・・・浮いてるモニター見ても、いや分からんわ。第四世代と言われた白影のデータ自体じっくり見ないからさっぱりだ。

「後はブリーフィングで伝えた事を守れ・・・鷺津、お前には移動しながら伝える。束、お前は山田君に鷺津のISの武装について教えてやってくれ」

キビキビと動き出す少佐とデュノア、鈴嬢とオルコットさん。それに続いて動くのは俺と千冬さん。続いてドヤ顔で解説し始めた束博士と相槌を打つ山田先生。どこか不安げな一夏君と明るく話しかける栗栖、そして遠足前の子供の様な篠ノ之さん・・・嫌な予感しかしねえよコレ！

移動しながらの作戦を軽く聞き、場所は変わりサスペンスドラマの最後の方で見かけるような海際の崖。飛び込むのか？誰か自白して飛び込むのか？とか思ってるうちに篠ノ之さんが真っ赤なISを身に包んだ。

「コレが篠ノ之のIS、紅椿だ」

「一夏君と合わせて紅白か・・・縁起がいいな」

「お前のISも白だろう」

「読み方が違うでしょう？」

「紅椿も違うだろ」

「まあそこはノリで。それにほら、二人つて幼馴染みじゃないですか。今更俺が割って入る余地なんて無いに決まってるじゃないですかーやだー」

「数年のブランクがあるが？」

「千冬さん、遊んでるでしょ」

「お前なら妙な気も起こさんだろうからな」

限界分かったた稽古したり、扱い方把握してるからイジったり・・・やだなにこの人タチ悪い。

「それよりも、作戦内容の確認をする。言ってみろ」

「先行部隊として一夏君を乗せたこの中では最速の篠ノ之さんがまず接敵。同時にその次に速い俺が万が一作戦失敗した時のバックアップとして後を追う。その他は、作戦失敗時にプランBとしてこの場所から出動する・・・ですよ」

穴だらけすぎねえ？皆一緒に出動すればいいってのに・・・いやまあ、指揮系統千冬さんが一任してるし言えば何とかなるか？・・・あ、駄目だ、他の連中作戦通りにやる気満々だ。俺は連帯行動できる人間だ、そして長い物には巻かれ、数の多い者の味方だ。

「不満は分かるが、上からも圧力が掛かっていてな。私も言いたい事だらけだ。だが、組織に所属すると言うのはそういうことだ」

割り切れて事ですな分かります。俺とかクリスなら何とか割り切れるだろうけど一夏君はなー、無理だろうなー・・・

とかぼんやり思ってたなら「一夏！鷺津！直ぐに出るぞ、早く準備を

しろ！」なんてウツキウキな声を出してこちらを急かして来る。

「ああ、言い忘れていたが」

「分かってますよ、篠ノ之さん・・・アレ、駄目なパターンですかね」

「駄目なパターンだろう。気に掛けてやってくれ」

「了解です。俺だって落ちたくないですからね」

「相手の機体情報も覚えているな」

「銀の福音でしたっけ？暴走してるんですけどよね」

それくらいしか教わってねえよチクショウ！

「うむ・・・詳しい情報は移動中に通信を入れる、相手は軍用ISだ、シールドエネルギーは通常のISよりも多い、注意しろ」

「注意する事多すぎませんかね」

「不注意で落ちるよりよほどいいだろう？それとも貴様・・・落ちたいのか？」

からかってるだけだと判断してサツサとISを起動させる・・・ああうん、随分しつくり来るな。コレが専用機と量産機の差か・・・こりや誰だって専用機が欲しくなるわな。

原作的撃墜イベントですよ

授業っぽい何かを受けてたら呼び出し喰らったり、千冬さんに自分設計の兵器の説明をしたり、一夏君が残念だったり、東博士がオタツキーだったり、懐かれたり、篠ノ之さんのISが真っ赤だったり、渋々俺もIS起動したりしようとしています俺ですが・・・割とアンニュイな感じですよ。

そして起動した俺の機体、俺も3Dデータでは見たけど実物を見るのはこれで初めてだ。

白地の機体で外縁が黒く、そして縁から黒いラインがあちらこちらに走っている。

腰の周りには棒状の装甲が所狭しとスカートの様にぶら下げられており、頭はまったく覆われてなくチョーカーのような物が首に巻かれている。首輪付き・・・ではないな・・・。

「なんというか・・・似合わんな」

「ですよ、俺もちよつとそう思います」

千冬さんに苦笑いでそう言われたが自覚はしている。白黒が似合わないんだよ、白黒がさ。

多分、もう一つの方なら希望はあるんだろうけど・・・あつちは使わなつて東博士に言われたしなあ・・・しかし、見れば見るほど厨二つてるなあこの機体。

「このスカートなんて表現すればいいんだ？」

「騎乗様の鎧の様な、それでいて違うような」

「パク・・・おおっと、リスペクトしますた！」

直後、個人通信で『リスペクト先は赤い弓兵さー！』とか言われたが・・・ああそうか、どっかで見た覚えがあると思つたらあの腰布みたいなのか・・・そう言えば某格ゲーのラスボスがこんな愛用してたよな。

「武装の方は一通り目を通してと思うけど常備展開装備はまだ分からないだろうから移動中に連絡するよ」

「なんというか、オペレーション頼みます」

「この束さんにまかせんしやい！」

頼りがいのある返事を聞きながら紅椿の隣に立つ。少し遅れてやってきた白式を纏った一夏君が丁度白と白で紅を挟む形になった……なんだこれ？新手の戦隊物か？やだ……ドロドロしてそう……バレないように現実逃避している俺の隣は隣で「男が女の上に乗るなど認められないが、今の私は気分がいい。許してやろう」「お、おう……頼む」とか、「私とお前だ、何でもできるさ」とか、まあなんだ……自称スーパーサイヤ人2時のMハゲ並みの篠ノ之さんに一夏君もついていけない模様。

俺も油断したらあんな感じに慢心しちまうのか……IS専用機、おそろしい娘ツ!!とか遊んでたら『織斑、篠ノ之ついでに鷺津。聞こえるな』と千冬さんからの開放回線ことオープンチャンネルで通信が入った。

『作戦の要は織斑、お前の零落白夜による一撃必殺だ。初接敵時にミスをして焦るな、そのための鷺津だ』

俺の扱いどうなってるの？千冬さんの中で俺どんな扱いされてるの?!パシリ？体の良いパシリだよー！

『篠ノ之はそのサポートだ。勿論、鷺津が着く前に倒しても構わないが……初めての实战だ、抜かるなよ』

『はい、自分の出来る範囲で対応します』

『よろしい』

通信が終わったと思ったら直ぐに『織斑、鷺津』と二人を指名して通信をしてきたのでそのチャンネルに合わせる。

『はっはい』

『どうかしました?』

『鷺津には先ほど言ったが、篠ノ之は現在浮かれている。何か仕損じるかもしれないから注意しておけ、いつでもサポートに入れるようにな』

『分かりました……』

「まあ俺の仕事が増えたー、勘弁してくださいよやだー」

『ほう?では更に増やしてやろうか?』

「本気で勘弁してくださいお願いします」

通信が終わったら背中に一夏君を乗せた篠ノ之さんが空に浮き上がり、隕石みたいな速度で飛んでいった・・・作戦通りに俺も同じ位の高度まで浮き上がる篠ノ之さんが向かった方向を向きスラスターの準備に入る。

いい景色だなーとか言ってたら今度はプライベートチャンネルでかかってきた・・・なんなの？なんなの・・・？まあチャンネル合わして出るけどさ。

『錘は外していいぞ。むしろ外せ』

「・・・そんなヤバいんですか？銀の福音って」

『広域殲滅型の機体としてオールレンジ攻撃をしてくる。と言うか、ほぼそれだけの機体でもある』

「ファンネル？またファンネルなんですか？」

『ビット兵器ではない。背部に背負った大型スラスターとエネルギー射撃武装を融合させた移動砲台だ』

それと同時に俺に銀の福音のデータが送信されてきた・・・カタログスペックと実験時の映像データを見てみたが・・・

「これもう砲台ってか爆撃機じゃないんですかねえ・・・」

『軍用だからな。それ相応の機能が無ければ設計すらされなかっただろう』

「誰だよこんなIS考えた奴馬鹿じゃねえの？」

『それを超える奇妙な発想の武器を設計したのは誰だ』

「僕です本当にすみませんでした」

『まあ敵機体のデータは渡した・・・後は、気をつけろよ』

「任せてくださいよ、錘を外した俺の戦闘力は2.4倍くらいですよ！」

『やけに中途半端だが・・・まあ期待しておくぞ』

そんな言葉を残して通信を切られたので篠ノ之さんの後を追う・・・チラツチラツとなんかテレビ電話みたいなモニターが視界の端で束博士の顔を写したり写さなかったりなんか忙しい事になってる。構ってちゃんかな？

「で、なんです東博士」

『やつと構ってくれた！ひどいんだよみんなして！いつくんにも通信送ったのに出てくれないし！ほーきちちゃんもそうだし！ちーちゃんはアイアンクローしてくるし！あの緑色の子のおっぱい揉んだらちーちゃんにアイアンクローされるし！もう東さんの頭蓋骨のライフはゼロよっ！』

「日頃の行い、プライスレス」

『・・・やつぱりしよーくんもそう思う？でも東さんは東さんである事をやめないよ！現実には屈してなるものか!?!』

「現実とは上手く適度な折り合いをつけて過ごしましょうねー・・・とここで東博士、コレってタイミング良すぎませんか？俺にリングゴ寄越したときみたいに」

『こつ今回は東さん本当に何も関わってないんだよ！嘘じゃないよ、信じてよねっ！だってこんなのと戦ったら紅椿あるとはいえほーきちちゃんでも負けちゃうし』

「あ、そんなやばいんだこの銀の福音。名前の割りに悪魔みたいな性能してるしな」

『ほーきちちゃんがまだ紅椿に慣れてないって言うのもあるけど・・・相手の方は凡人の努力の結晶、かなー・・・まあ東さんやしよーくんまでは行かないけどいい発想してるよね。オールレンジ攻撃なんて口マンあるねー、わかるねー』

「多分こいつ等効率しか見てないと思いますけどねー・・・で、俺の武装について教えてくれるんじゃないかなったでしたっけ?」

『せっかちな男は嫌われるよー？まあ東さんは好きだけどね！じゃあ早速いってみようか！まず腰のスカートみたいになってる棒、全部で三十個あるんだけどー・・・聞きたい？ねえ聞きたい?』

「なんすか、もしかしてマルチプルパルスなんすか？一夏君達巻き込んじゃう感じですか?」

『しよーくんの設計図通りにそれしても良かったんだけどねー・・・それ、ファンネルだよー』

おかしいな、『三十個のファンネル』が腰についてるって理解したん

だけど・・・そんな使えないだろ。リンゴ？あれは純粹に知識与えてくれるだけだし、脳の回転よくするわけじゃないし。

『音声コードで色々な働きをしてくれるよ。用意しておいたのは『操影』で任意の個数のファンネルを思い通りに動かす。『撃影』で三十のファンネルが自動的に相手の攻撃に対して標準を合わせて落とすとしてくれる迎撃システム。『爆影』で全部のファンネルが敵に向く火力一点集中モード。『追影』で五つのファンネルが相手を自動で追尾して攻撃してくれるよ』

「すごい自然にファンネルって呼んでるけどコレ本当にファンネルでいいの？ビットとかじゃなくてファンネルなの？」

『束さんの中じゃファンネルだよ！ビットなんてダサイ呼び方なんてした覚えはないよ！いいね!!』

「アツハイ」

なんだかしらんが、自分の作品が変なところで勝手な呼び名を付けられてたらそりや嫌な思いもするよな。前世の記憶の奴は文化祭で友人達とノリで作ったキャラクターが奇妙な名前で呼ばれていて憤死しかけたらしいからな、そういうもんだらう。

「そろそろ接敵みたいだ、切ってもいいか博士」

『いいよー、衛星の目を奪ってみておくから』

さらつとすごい事を言いつつも消えたモニターに溜息をつきつつ、ハイパーセンサーで強化された目に映るのは銀色が放つ弾幕の間を縫って飛ぶ紅と、青い水面に向け落ちていく白だった。

そのままの勢いで一夏君が一つの弾幕に追いつき、を切り裂いたが意味が分からん。と混乱している俺の感情を代弁するかのようには開放回線で『一夏！何をしている、せつかくのチャンスだと言うのに！』と言う篠ノ之さんの叫びに対して『船が居るんだよ！会場は先生達が封鎖したはずだつてのに！』そう返すイチカ君の言葉に従って海上に目を移してみたなら確かに船だ。コンテナとか積んでるし、各国には連絡行ってるはずだし・・・ああ、密輸か。

と結論を下したところで一夏君の持つ白いエネルギー刃が消えていく。プランCへ移行とするか。

『馬鹿者！犯罪者共のためにチャンスをついにしたのか！』

『箒ッ！．．．そんな寂しい事は言うなよ。刀を手にしたら弱い奴の事が見えなくなるなんて．．．どうしたんだよ、箒らしくないぜ』

『わ．．．私は．．．』

「口論してる場合じゃないぞご両人！プランCだ！撤退しろ！」

実戦だつてのに武器はなして顔を覆ってるんじゃないよ！．．．つて、篠ノ之さんが手放した刀が消えた。具現イジ限界、つまりエネルギー切れです。

視界の端では銀色が翼の様な装甲を動かしその先端に光を溜める。

それを見かねたのか一夏君が刀を捨てて加速した．．．ふええ、作戦がめっちゃくちゃだよお．．．

「ともかくコード『撃影』！」

一夏君が勢いそのまま篠ノ之さんを抱きしめ、背中で銀の福音の弾幕を受けようとしているのを見て先ほど聞いたばかりのファンネル迎撃モードを機動する。

棒状の装甲が腰から離れ、俺を中心に円を描き、各々が緑色のレーザーを白いエネルギー弾に向かって放つが、手数が足りないのか、火力が足りないのか、一夏君の背中を白い弾幕が襲っていく。

「弾幕薄いよ！何やってんの！．．．ああくそ、自前の力に頼らないからか！やつぱ与えられたばつかの物じやうまくいかないよな！」

水面へと落ちていく抱き合った二人の姿を見ながら、拡張領域に入っていたワイヤーガンを取り出し、まだ装甲の残っている白式に向けて引き金を引く。装甲にがちりと爪が掛つた事を確認してワイヤーを巻き取りながら全力で撤退する。時々白い弾が掠ったり背中にぶつかったりするけど気にしない！背中が焦げるような感覚がするけど知らん知らん！

ワイヤーが完全に巻き取られた事を確認してから、一夏君の名前をずっと呼んでる篠ノ之さんと、グツタリしている一夏君を両手に抱えて速度を落とす。

プランA、プランCも失敗．．．プランB？んなもんねえよ！プランD、所謂ピンチです。

コレ帰ったら俺の失敗にもなるんですかねえ・・・連帯責任ですよ
ねーわかります。

意気消沈で戻ったら攻めるような言葉は無かった。むしろ皆揃って密輸船（仮）をデイスって行くスタイル。友人落とされた原因なんだからそれなりに恨みつらみもあるだろうけど、それはそれでイヤだったがまあ仕方無い。ぶっちゃけると、篠ノ之さんの言うとおり犯罪者なんだから放って置けばよかったんだ、そこで攻撃に巻き込まれ死んだとしても自己責任という奴だ。にも関わらず庇いに行つた一夏君・・・人間として善人で信頼できる彼だが、実戦で背中を預けるのは無理だ。口論してる間に背中から敵にズドンとかシヤレになんねえ。

「おかげで俺まで負傷だよ・・・地味にグロかった、ジャージもオシヤカだしついてねえ」

治療してくれた山田先生はなんか涙ぐんでたし、その時鏡越しに見ただけ背中がR―18だったし、ジャージは熔けて丸い穴が出来ちまった始末。

「ま、しゃーなしだな。悪いのは誰でもない、運が無かった全員だ」
そう割り切って、教員室で一人、ISのモニターを弄っている俺です。

今回の俺の悪い点は、ファンネルに頼った事だ。いや、ファンネルに頼るのは悪い事じゃないが、過信しすぎた。

故に！俺は今威力の底上げを行っている！具体的にはエネルギー消費を増やして火力強化、音声コードによる役割も増やす、まだまだ、まだたりんよ・・・

「ゴスペル殺すべし、慈悲は無い」

次、会ったらアイツ問答無用でデロリアンでデストロイ。

「殺すな。人も乗っているのだぞ」

「あ、千冬さん。尻尾丸めて逃げ帰ってきてすみませんでした」

いつの間にか部屋に入ってきていた千冬さんに、頭を下げる。作戦の一端を任された人間として、作戦を果たせなかった事に対する謝罪

だ。

「妥当な判断だろう。あの状況で囿も無くあの武装で一か八かに賭けるより、次のアタックに向け人員の確保に向かうべきだった、故に間違いない」

その後、少し溜めてこう言い放った。

「お前を少しでも引き止めた私の責任だろう」

いやそのりくつはおかしい。

原作的第二次移行ですよ

篠ノ之製のIS装備したり、篠ノ之さんが暴走してたり、千冬さんから何度も連絡が来たり、東博士に武装の説明してもらったり、一夏君が落ちたり、回収して撤退してる最中に落とされそうになったけど、俺は元気です。

今はなんか、千冬さんが負の方向にスパイラルしているが・・・

「いや千冬さん悪くは無いですよ。いや、悪いでしょうけど悪くは無いですよ」

「お前は一体何を言いたいんだ？」

「悪いのは世界ですよ」

「せ、世界・・・？」

「全部世界が悪いんですよ。暴走した銀の福音とか、入ってきた密輸船とか、もうね、ツイてない全員が悪いんですよ。総じて世界が悪いんですよ・・・」

「一体どうしたんだ鷺津、戻って来い鷺津」

「世界はいつだってこんなはずじゃないんですよ。アサシンのテンブルだのリンゴだの俺のしらねえところで勝手に巻き込んだりんだりしやがって、俺は田舎で生きて田舎で死にたかつたんだ、今度目が覚めたら俺は小学生・・・ISなんてなくて野山を駆けずり回ってるはずなんだ・・・そうだ、コレは夢なんだ・・・ははっ」

「戻って来い馬鹿者！」

「あびゃー！」

脳天チョップされたわけだが、出席簿よりも痛いってのはどういうことなんだよ、出席簿の方が硬いんじゃないのか・・・？もしかして覇気でも使ってるのか？

「まったく、一体何が言いたいんだお前は！」

「つまり世界が悪い！って事です。千冬さんが悪かったら俺も悪い。俺が悪かったら篠ノ之さんも悪い。篠ノ之さんが悪いと言えれば一夏君が悪い。一夏君が悪ければ銀の福音が悪い。銀の福音が悪ければ密輸船が悪い、密輸船が悪ければ東博士が悪い。東博士が悪ければ

ば山田先生が悪い」

「真耶君は関係ないと思うんだが・・・？」

「だから世界が悪いって言ってるでしょう！つまり全員が悪いんですよ。普通密輸船なんて助けねえだろうがクソが」

「先ほど言った事と違う事を言い出したぞ馬鹿者が」

「んでもって撤退した俺も悪い。調子乗ってた篠ノ之さんも悪いし、作戦立てた千冬さんも悪い。はい全員悪い。この話はこれで終わりです、次考えましょう、次」

「次、と言つてもだな・・・」

「多分他の連中は動いてますよ、確実に」

時計を見てみれば戻ってきてから三時間が過ぎようとしている。調整に夢中になって時間気付かなかったが、今頃行動を始めたとしたら遅いと罵れる程だ。

「ッターン！とホログラムっぽいキーボードを叩いてからモニターもキーボードも消す。ファンネルだけじゃなく一応デロリアン使う準備もしておいたのでコレで準備万端・・・よろしい、ならば戦争だ。」「んじやこれからお礼参りと行きますか」

「待機命令が出ているぞ」

「俺はただの高校生ですよ、そんな事知ったこっちゃねえ！」

「そうだよ、俺はIS動かせるとか、IS学園に通っているとか前世の記憶みたいなものがある以前にただの高校生なんだよ。ガキなんだよ、やりたいことをやって何が悪い！」

「と言うわけで千冬先生！後で説教でも何でも聞くんでは何も言わないで下さい！」

返事は聞かずに部屋を飛び出し、ISで個人回線を開いて東博士に掛けてみる。

『もすもすわたすです！』

「どーも博士、俺です」

『え？俺俺詐欺？・・・え、でも電話番号着信するはずがないんだけど・・・なにこれこわい』

「着信するはずの無い電話番号とかなにこれこわい」

『じよーだんだよ冗談！東さんになにかようかねしょーくん！』

「銀の福音、今どこいるか分かります」

『いっくん落としたあのクソツタレだね。場所はISに送っておくから、後は流れて』

「相撲業界じゃないんで八百長はないです」

『一体いつから相撲じゃないと錯覚していた？』

「なん・・・だと・・・!?!」

ISってジャンル：相撲なのか・・・いや、SUMOUか。空とか浮くし、日本発だし。

なんて馬鹿な事考えてるうちに『じゃあ切るよ！東さんも色々忙しいのだっ！』とか言つて切られ、俺もいつの間にか宿の外、サスペンス崖。

「蒸！着！！」

シールドエネルギーは自己修復したしたのかハイオク満タン。

既に右腕に装備されているはデロリアン。

腰にあるスカートは形が変わり、俺の体の真後ろについているような形状。

「今の貴様をISとは認めん！ただの暴走した試作機だ！試作機とは何のためにある？・・・そう、壊すためにある！」

一周どころか三周して更に半周回転させた俺の脳内はさながら火力発電で回るタービンの様！うおオン！誰も今の俺を止められないしこの勢いをやめれない。

今から行かんとしているところに「嫁よ、なぜそんな物々しい雰囲気を出している」と声が掛った。呼び方と声から少佐だと言うことは分かる時間もおしいので一言で簡潔に伝える。

「今すぐ出動して銀の福音を倒す事を・・・強いられているんだ！」

「さっぱり分からないぞ嫁よ！」

「つまりそういうことだ！」

「あ！待て嫁よ！」

止める声を聞きもせずに飛び出し、ついでに彼女のISに銀の福音の位置データを送信しておく。ただしお前等が到着する頃には銀の

福音はボロ雑巾だろうけどな！

銀の福音を視界に捉えると、向こうもこちらを視認したらしく移動を止めてこちらに振り向いた・・・が、弾幕を撃って来ない。もしかして射程範囲外なのか？暴走してるならコツチに来て適当に弾でも振りまくもんだと思っただけど・・・？

「まあいいー俺を撤退させやがってこの屈辱、晴らさないでか・・・野郎オブクラツシャー！」

デロリアンにシールドのエネルギーを回し、エンジンを掛ける。グワングワンなって普通にシールドエネルギー削り始めるよ！

ファンネルの出力をそのままに、射出口のみを大きく設定しチャージを始める。チャージ音が心地良いよ！

PICの設定を弄り、慣性を働きやすくして滑りやすくする。ぬるぬるするよ！

「ひゃっほーうー！」

スラスターでの加速、更にファンネルの全砲門から一度だけ射出されるレーザーによる反動、そしてPICによる慣性によって通常の二倍とも言える程の速度のまま、銀の福音に真っ直ぐ飛んでいく。

暴走しているとやえど、遠くから俺を眺めたりするほどの知能のある銀の福音。ギリギリまでひきつけられたまま真上に避けられた。

が、それも計算の内。

体を捻り、空と一つの銀を一望するような体勢のまま瞬時加速で追いかけて、

「残念それは悪手だ！」

上空で俺を迎撃しようとして翼を広げていた銀の福音の胸元へと飛び込み、ドテツ腹にデロリアンを叩きつける。

火花の様な物が空中に散らばり、ISの装甲が具現維持限界によって消えていくのを確認した直後、右腕を引き、銀の福音から出てきた金髪の女性の腕を左手で掴んで落下を阻止する。

「あーあー、もしもし千冬さん聞こえてますか？」

デロリアン専用右腕を拡張領域に仕舞い、通常の右腕に戻してから

旅館に通信を入れる：：旅館でいいんだよな、千冬さんへの連絡先つてコレで合ってるんだよな？と不安になっている俺をよそに『こちら織斑千冬。鷺津か？』という返事が返ってきた。

「銀の福音墜落。操縦者は回収完了です」

『・・・アレを使ったのか？』

「ちよつと無茶したんで内臓痛いですし、エネルギーも三分の一くらいになっちゃってます」

『たった一回の使用でそれほどか、他のISには乗せられないな・・・だが、あいつ等がそちらに向かったばかりだぞ』

「あいつ等の出番は残念ながらありませんでしたねー」

なんてケラケラ笑っていると、視界の端が光り輝いた。

「うおっ、まぶしっ！」

思わず右手で顔を覆ってしまったわけだが、直後に襲われた衝撃によつて左手を離してしまった。

『どうした鷺津！』

「いや・・・これはちよつと・・・ねえ？」

視界に映るのは目の前で浮かぶ純白の翼を生やした、物々しい雰囲気纏う銀の福音・・・

「右翼ですか？」

「どうやら返事は無い。」

「左翼ですか？」

「またも返事は無い。」

「りよ・・・両方ですか・・・？」

肯定するように一度頷いた銀の福音・・・

「もしかして弾幕ですかーッ!？」

その言葉に反応して白い翼から大量の弾幕を俺に向かって撃つて来た。どこでネタ仕込んできたんだこの野郎！

全力で撤退するが、弾幕が休まる事は無く、むしろ増えている。おまけに離れない。

「待て待て待てちよつと待て！一回エネルギー完全に削ったはずなのになんで再起動してるんですかねえ！」

『待て鷺津！どういうことだ！』

「ゴツチが聞きたいですよ！あいつ等に急ぐように伝えてもらえませんか！遠距離攻撃手段がある奴は遠距離に徹しさせてもらえますか！」

『分かった、伝えておく・・・他にはあるか？』

「エネルギー切れそうなんですけど！」

『気合で耐えろ』

「無理ですわ！」

『私はそれでエネルギーがなくなり続ける零落白夜を使いモンド・グロツソを勝ち抜いた』

「あなたの戦い方はおかしい、絶対におかしい」

なんて言ってる間も弾幕を避けたりしつつ三回くらい当たったり掠ったりしたが、僕は元気です。

なんてやっていると俺の逃走方向から飛んできた何かとすれ違い、少しだけ弾幕が止んだ。

『初弾命中確認！続けていくぞ！嫁よ、そのまま囷になってくれ！』

「無茶言うなあ・・・」

『それだけ信頼してるって話だよ、翔』

「いやいやデユノアさんや、俺今シールド三分の一くらいしかないんですぞ？遠距離に徹していいですかね？」

『遠距離は俺に任せろー！バリバリ！』

「やめて！」

軽口叩いているが、実のところ言うのと頼もしい。

近・中距離の篠ノ之さんと鈴嬢。中距離のデユノアと少佐、遠距離のオルコットさんにクリス。そしてボロ雑巾の様な俺。どう考えても俺が明らかに足引つ張つてますありがとう御座います。

「まったく・・・俺に期待すんなよなー、俺にできることなんて・・・一夏君にだってできることだぜ」

『一夏君にだってできることだぜ（キリッ）じゃねえよ！一夏居ないし十分だわ！』

「よーしやっちゃうよ？篠ノ之束製対IS武装が火を噴くぜ？・・・あ
あでもシールド少ないからマトモに特攻できそうもねえや」

『役立たずじゃねえか！』

「俺が銀の福音をココまで削るのにどれだけ苦労した事か！」

正直脊髄反射みたいな戦い方だったけど俺にはあれしか出来ない
んだよチクシヨウ、俺だってエレガントな戦い方してえよ。

っと、銀の福音が少佐に向けて突撃を仕掛ける。その手が少佐の機
体に掛ろうとする直前、上空からの青い影が銀とぶつかり、動きが止
まっている敵機を申し訳程度だがファンネルで攻撃する。

こう書くとファンネルアタックしているように聞こえるだろうが、
文字通りだ。突撃からのゼロ距離でのレーザー発射。その方が確実
に攻撃が当たるだろう？

「って待った待った！こっちくんな！」

『鷺津、お前は一度撤退しろ。空域を離れてシールドの回復を図れ』

「了解千冬さん！じゃあまた後でなお前等！」

『別に・・・あれを倒してしまっても構わないのだろうか？』

「あかん、クリスそれフラグや！」

『死亡フラグを乱立すれば生存フラグになるってもんよ！』

「ああ、そういう思惑・・・まあ頑張つて俺の仕事を減らしてくれ」

そう言い残して真下に下りる、いや落ちる。

そのままゆっくり着水し海面へと消えていく。

神秘的な光景に癒されつつ、じっくりゆっくり回復していくエネルギー
ギーを横目に・・・え？なんでこんな急にエネルギー回復してるの？

『しよーくんしよーくん！そいつぁリングのおかげさあ！』

「オマエノシワザダノカ！」

『でさ、じっくりくんがそろそろ復活しそうなんだよね』

「え？なんで分かるの」

『いつくんの白式がセカンドソフトしかけてるのさ！操縦者とISの
意思が重なったときに進化する様になっているのさ・・・束さんの技
術は世界イチイイ！』

「で、一夏君が復活するまで俺は待機ですか？」

『彼女達が危なくなったら行っても良いよ。東さん的にはほーきちちゃん以外どうでもいいけどしよーくんやいっくんにとつては大事でしよっ。』

「まあ俺も少しサボ・・・ゲフン、小休止したいですからね。福音が油断するような最高のタイミングで仕掛けますよ」

『アサシンっていうか狩人だねしよーくん』

「アサシン要素皆無なんですすがそれは」

『気にしない！・・・で、ほーきちちゃんのISも出来ればワンオフ発現させたいんだけど、どー思う？』

「ま、いいんじゃない？俺が飛び出さなかつたら適当なタイミングでゴーサインでも出してくださいな」

『分かったー！それまで東さんとお話しよーぜー？』

「そんな場合じゃないとは思うんだけどなあ・・・まあまだ少しならあいつ等も持ちそうだしな」

ハイパーセンサーで海上の様子も手に取るように見えるが・・・苦戦はしているが何とかチームプレイして粘っているようだ。それと張り合える銀の福音もおかしな状況なんだけどな・・・一夏君ー！早く来てくれーっ！

原作的戦闘終了ですよ

千冬さんと話してたら暴走しちゃって、宿から突撃しちゃって、銀の福音落としたと思ったらなんか知らんがパワーアップしちゃって、エネルギー切れそうなところで仲間たちが集合して俺を海へ逃がしてくれるなんて・・・まるで王道展開じゃないか！

と、まあ海中でそんな訳でのんびりとして篠ノ之さんのワンオフアブリティー発動するまでのんびりさせてもらおう。

いや、ISのシールドの上から俺の背中を焦がしたり一夏君を昏睡させたりしてる攻撃に囲まれてる友人達をのんびり見てるだけってのはなんかこう・・・俺の中の悪魔が囁いて来るような奇妙な感じだ。何かが腐っていくような・・・こんな光景見続けたらクズになりそうだ。

そしておもむろにモニターを出して装備の確認をする事で現実逃避に入る。

「束博士、誰か落ちそうになったら呼んでください」

『うーん・・・わかったよ、しよーくんの頼み聞くから今度束さんのお願ひも聞いてねー！いいねー！』

「アツハイ」

さて、デロリアンは燃費が悪すぎし、他には・・・なんか良いのあったかな？

『しよーくんしよーくん！ポールブースターはどうだい！』

「あー・・・アレか」

ポールブースター・・・例えで言うなら電柱にブースターつけただけのお手軽装備。ゲームに登場したマスブレードと言う武器を適当に設計図に起こしたただけのものだったのだが・・・まあ勝手に作りやがったなこの兎。

ちなみに、俺がイマイチ乗り気でない理由は簡単だ。弾丸並みの亜音速で振るわれる電柱の威力を想像してみてください・・・出来ないでしょう？そういうことだ。

にしても・・・普通こんな発想しねえし作りもしねえよ。こんなの

作った奴等と、素でリングゴ並みの知識を持つてたレオナルドマジ人外。

「個人的には射撃武器を使いたいお年頃なんですがねえ」

「水中からじゃ・・・ビームライフルくらいかな？」

「え？そんなのあるの？」

『元々は零落白夜を弾にして発射するみたいなのを作ろうとしてるんだけど、その副産物として出来たのを詰んでおいたのさー！』

「ビームライフルとかロマンですな。テンション上がってきたぜ！」

『ビームだからほぼ射程無限だよ。まあそれだとエネルギー喰いすぎから設定は行けて五百メートルくらいまでかな？』

「それで、エネルギーは？」

『マガジンとして用意してます。一マガジン五発』

「ビームスナイパーライフルかな？」

『これから発展する分野だからね、束さんも今調整中だし・・・でもさ、マガジンにしてるだけマシだと思えばきだよー！』

「ファンネルとかシールドエネルギー直結だし・・・長期戦には向かねえよなファンネル」

『本来ああやって使う物だろうからねー・・・ファンネルじゃないけど』
海上では純白のエネルギー翼が露骨な肋骨！の様に曲がり羽先を

自分の懐に居る見覚えの無い機体に向け、弾幕を放った。

機体は上半身はゴテゴテと銃身を付けれる場所に徹底的につけたようなさながら全身砲台。

下半身は・・・どう見てもUFOですありますがどう御座います。

背中からはバランスおかしくね？って思う程の長い砲身が二つほど生えている。

以上の情報から・・・ああ、クリスカ。脚部フロートとは・・・流石だな有澤。

『彼はいいの？』

「アイツ死んでも生きてそうだから別にいい」

『・・・人間？』

「千冬さんと束博士・・・あと一応俺よりは人間なんじゃないかな？」

『なーんでしょーくんに一応がついてるのかなー？お前も人間じゃねえ！』

「嘘だと言ってよたばねー！」

なんて言っただけで遊んでるんだけど・・・まだゴーサイン出ないんですかね東さん？

・・・ゴーサイン出なさそうだし、そろそろ誰か落ちそうな頃合だしいいかな？

『むー、今のままじゃあワンオフ出そうに無いなー・・・好きなタイミングでいっていいよ、戦ってる最中で出てくるかもしれないし。でもいっくんの見せ場は用意しておいてね？』

「ラジャーラジャー、では早速参ります」

スマートなデザインのビームライフルを取り出し、なんか知らんが少佐を狙っている銀の福音に狙いをつけてー・・・

「狙い撃つぜー狙い撃つぜー！」

狙って当てられない男の真似をしながらビームライフルの引き金を引き、同時に海上へと飛び上がり、開いている左手にISブレードを呼び出して何故かすぐそこで停止していた福音を切りつけるが・・・翼で防がれた。実体ないエネルギーで剣防がれるとかどうということなの？

開いている方の翼が曲がり、翼の先を俺に向けてきたのでやられる前にビームライフルの銃口を胸に押し付けてそのまま引き金を連続で引く。丁度四回引き金を引いたところで逃げられたがリロード必要だしありがたいことだ。ダメーじ覚悟で攻撃されてたら落ちてたところだったわ。

『鷺津！もう戻ったのか！』

「なんか知らんがエネルギーが結構な速度で回復してね、ちよつと早めに戻ってきたのさ」

確かにリングのお蔭で何故かエネルギーは回復した。ちよつと早めと言うのが嘘、ゆっくりさせてもらったと言うのが事実。

あーもう、結構な頻度で嘘をついている自分に嫌気が差す。ま、バレなきや嘘は嘘じゃないんだ・・・モニターしてるのも東博士だけって

ISも教えてくれてるし安心して嘘が吐ける。

『じゃあ俺遠距離に徹していいよな！いいよな！』

「とっつき持ってこーい」

『反撃されて撃墜確定じゃないですかーやだー』

「俺がやったときはまだあんな状態じゃなかったしなー」

なんて会話をしている最中にも飛んでくる弾幕を避けながら反撃にリロードしたビームライフルを撃ってみるも余裕で迎撃される。普通に撃ったビームの先端に弾幕四発当てて帳消しにするとかおかしくね？

そんな俺達をよそに『行くぞ！』と刀を振りかざして銀の福音に特攻した篠ノ之さんが、次の瞬間失速して福音に首をワシ掴みされた。いや、なにがしたかったんだよ篠ノ之さん……

『しょーくんそのままステイ！』

「俺は犬か！」

『良い子だから待って！』

「犬の次は聞き分けの無い子供か！妙な例えやめーや」

なんてやってる間も篠ノ之さん死にそうなんですが……あーあー、ストップ掛けた理由ってまさか……そんな事に気づいた時には隣を白い影が通り過ぎ、その後をまた白い影を追って行った。

一つ目の影の体当たりで銀の福音は吹っ飛び。その衝撃で離れたのであろう篠ノ之さんを、追いかけていた白い影が抱える。

『俺の仲間は誰一人、やらせねえぞ！』

「遅いぞ一夏君！」

『やだ……かっこいい……』

「やっぱりホモだったじゃないか！」

『チゲーし！ネタだし！ノーマルだし！』

なんて遊んでると鈴嬢から『あんたたち頼いわよ！』と叱られたのでこう返してやった。『フヒヒ』『サーセン』と。

しかし……一夏君、なんか左手ゴツくなつた？そのまま爪でひつかくの？なんか使い勝手悪そうだねー。

「っと、お前等一夏君に見惚れてんじゃねーぞ！今のうちに叩け叩け

！」

『高火力攻撃は任せろーバリバリ』

「やめて！」

『そー！ふざけないで下さいまし！』

今度はオルコットさんから叱られた・・・解せぬ。

仕方ないだろ！通信で一夏君と篠ノ之さんのイチャイチャしてるの間かされてるんだよ！個人回線にしてやれクソリア充爆発しろ！と行き場の無い感情をビームに込めて引き金を引く。

『再戦しようぜ！シルバリオ・ゴスペル！』

『ただし味方が居る』

「あの時も俺と篠ノ之さん居たからね！」

『やり返してやろうぜ翔！』

「俺はさつき一発やったから次は一夏君の番だぜ！」

『そうか？じゃあやらしてもらおうぜ！』

右手に持った白いビームソードと、左手から出ている白い三つの爪で攻撃している。あ、爪の方が当たった。

『敵機情報を更新・・・攻撃レベルAで対処します』なんてマシンボイスと共に蒔かれた弾幕を、『そう何度も簡単に喰らうかよー』との掛け声を上げて銀の福音に突っ込んでいく。

なんか策でもあるのかなーって思ってみたらゴツイ左手が変形し光の盾を作り出し、その盾に弾幕が掻き消えていく・・・リンゴの知識の自動検索で光ノ盾が零落白夜だと教わるが、もうホント欠点が燃費が悪いしかないチートだな。

「って呆けてる場合じゃないな」

雄たけび上げて突っ込もうとしている一夏君と『現状に最適な行動を検索。最大攻撃力で対処します』そんなマシンボイスを出して翼を広げる銀の福音。

「何したいのか分からんが、阻止させてもらおうぜ！」

ビームライフルを構え、エネルギー翼に向けて連発すると続けてクリスもミサイルを翼に向けて撃っている。視界の端では一夏君が鈴嬢に蹴られていた。個人回線にしているのか何も聞こえなかったの

だがまた一夏君が馬鹿やったんだろうなーと思っていると再び一夏君が銀の福音に突っ込んで行った。

俺のビーム、クリスのミサイル、一夏君の零落白夜を受けたエネルギー翼は切れたり、穴が開いたりするものの直ぐに元通り、だが確実にエネルギーは削れているだろうという希望を元に翼に攻撃を続ける。

「一夏君！エネルギーどれくらいだ！」

『残り二十パー、起動時間は後三分だつてよ』

「ならちよつと下がれ！確実に当てれる隙出来るまで待つてな！」

『そうそう、俺達が頑張るより一夏が一発で終わらせてくれれば俺達は楽だもんなー』

「というか俺眠いから早く帰って寝たいんだよ！」

『なんで翔の睡眠のために俺が頑張らなきゃいけないんだよ！』

「俺だけじゃないぜ、銀の福音の操縦者さんもだ。落とされたって悔しさも分かるがさっさと助けてやれ」

『・・・おう、そうだな』

スィーつと下がっていく一夏君を見送り、クリスに目を移す。

『お前は？』

「俺はまだ七十パーはある。そつちは？」

『さつき喰らって四十三・・・ま、まだやれるぜ（振え声）』

「ホモじゃん」

『だからホモじゃねーし！』

「後で話そう、まずは倒す！」

『そうだな、さっさとやって飯を食べる！』

睡眠欲と食欲が合わさり最強に見える。

なんてやってたら雄たけび上げて一夏君が通り過ぎて行った。

『ばっ！まだ隙あるタイミングじゃねーだろ！』

「行くぞ！この流れ逃したら一夏君落ちかねないぞ！」

『それは大丈夫だ！そしてお前達にもだ！』

唐突に現われた篠ノ之さん・・・なんか金色ですが水の一滴でも見えたのか？うそだろ、ここ海の上だぜ。

『つてエネルギー回復した!』

「え、マジで・・・マジだ!」

『紅椿のワンオフのようだ』

『銀の福音だけだと思っただら箒まで、あと一夏君もだろ?まるでワンオフのバーゲンセールだな』

「ワンオフ発現してない俺達蚊帳の外過ぎワロタ」

『言っている場合じゃないぞ、行くぞ』

『俺だつて主人公だ、野朗ぶつ殺してやらあああああ!』

「まあせつかく回復させてもらった事だし、フオローくらいには使うか。ゴー!ファンネル!」

音声機動ではなく持ち前の脳みそとリングを直結し人間TASモドキとなる。

一夏君に向けられるエネルギー翼の先端を攻撃をし続け攻撃しやすしい状況を作る。

『箒イ!』

『後顧の憂いは断たせてもらう!』

篠ノ之さんが片側のエネルギー翼をサククリと切り裂き、それに合わせて一夏君も回し蹴りで銀の福音の体勢を崩し、そのままの流れで残っている翼も切り裂いた。

ブレードを降りぬいた体勢のまま固まっている一夏君に復活させた翼を向けた銀の福音だったが、複数回の爆発によって直ぐにエネルギーが霧散したと同時に一夏君の白いエネルギーブレードが銀の福音の胸に叩き込まれた。

具現維持限界の光を出しながら今にも自然落下していきそうな金髪の女性の脇の下や股下にファンネルを支えとして移動させ、残りのファンネルを組み合わせて作った即興担架モドキの上に寝かせる。

『・・・あのまま張り付けみたいにするんじゃないかってちよつと警戒しちやっただわよ』

「フウーハハハ!実は俺が銀の福音を暴走させたのさ!・・・とか言ったら面白かったかな?」

『やめてよね、お前が俺と戦って勝てるわけが無いじゃないか・・・俺

「がな！」

『負けるのあんたなのね』

『勝てるわけねえーだろ！』

「いや、ワンチャンあるだろ」

『おーいみんなー、帰るよー！』

『空気だったな、私』

「なんで少佐凹んでるん？」

『エネルギーが残り少なくて後ろでひっそり砲撃しているだけだった・・・死にたい』

「ネタじゃなさそうなのが怖いんですがそれは」

『シユバルツェ・ハーゼの一員として情け無いばかりだ！武士の情け、一思いにやってくれ！』

「落ちて少佐！ISの上からじゃナイフで切腹できないぞ！篠ノ之さんも刀構えるな！なんで目がマジなんだよアンタ！」

「なんか戦闘よりも疲れるんですけど・・・千冬さーん！早く連絡入れてくれー！事件は会議室で起きてるんじゃない・・・現場で起こってるんだ!!」

原作的三巻終了ですよ

海の中でのんびりしたり、海から飛び出したり、一夏君が復活したり、暴走したISを無事倒せたり、かと思ったら友人が暴走し始めて混乱していた俺です！

夕日を浴びながら帰還したわけですが、今？

「作戦完了、と言いたいところだが・・・お前達は緊急時だと言うのに独自行動をし重大な違反を犯した。学園に戻ったら反省文の提出と特別メニューの懲罰風トレーニングを用意しておいてやろう。どうだ？嬉しいだろう？」

ムカ着火ファイヤーな千冬さんに皆仲良く正座させられています。ちなみに山田先生は山田先生でかわいく激おこしている。抱えてる医療箱で応急処置をしてからの説教だが・・・まあ動いた事で焼けた背中がちよつと悪化したから助かった。

「・・・あ、はい」

「わーい千冬さん特別メニューだー」

「これは死ぬるぜー！」

まだ元気なのは男三人だけ。他？暴走してた二人は千冬さんアイアンクロー喰らって生まれたての子鹿の様に震えている。それを見てホラー映画見ている最中の様にガクブル震えているのが三名ほど。

正直に言おう・・・死にそうです。

「で、千冬さん・・・なんで俺だけ石抱きさせられてるんですか？」

先述したように普通に正座をしているだけだが・・・何故か俺だけ拷問の様に膝の上に石の板を載せられている。枚数も言うほど無し足の下に刺が無いだけマシだがそれでも足が死ぬ。

「お前がさっさと終わらせていればこんな事にはならなかったのだが？」

「なんで激おこなんですか！」

「分かりやすく言うのならムカ着火インフェルノだ」

「ちよつとマジでどつからネタ仕入れてきてるんですか！」

「お前と金城の会話や束からたまにメールに纏められて送られてく

る」

「束！貴様もか！」

なにこの織斑千冬ネットスラング多用化計画・・・一体何をどうしたいんだよ・・・

「織斑先生、もうその辺りで止めにして上げたらいかがですか？怪我は一応手当てしたとは言っても応急処置程度ですし」

「……………それもそうだな。よろしい、では後日と言う事にしよう」
平気で立ったり足が痺れてつらそうなが奴いる中、俺だけ解放されないのはおかしいでしょ。

「お前が一番馬鹿をやらかしたからな、もう少し反省していろ」

「一人で反省してるのは別にいいんですけど、せめてこの石どかしてくれませんか？」

「一晩反省していろ」

「やめてくださいいしんどしまいます」

「冗談だ。石は退かすがしばらく反省しておけ」

「助かったと考えるべきか、当然だと怒るべきか・・・」

「怒ったところでなんになる」

「石が増える」

「よく分かってているな、ではお前だけ学園に戻ったときの反省文とトレーニングは倍だ。どうだ？嬉しいだろう」

「わーい、すてきなていあんだなー」

朝トレーニングが本格的になったのが倍になる？死ぬんじゃね。

「しかし・・・なんだ・・・まあ、よく無事で帰ってきた」

そんな後ろを向いてぶっきらぼうに言う千冬さんに他の皆はなんかむずがゆい顔をしていたが・・・俺には何かフラグ染みたものに聞こえた。

俺、本気で死ぬんじゃなからうか。

気付けば夕食の時間・・・なのだが、なんとも言えない雰囲気の中、俺は一人離れて飯を食べていた。

首にかけられた『反省中にて触れるな。織斑千冬』と書かれた背中

と胸にそれぞれあるプレートがもう印籠と化している。本音嬢ですら接してこないとかどんな効果だこれ……

周りに女子達がキヤツキヤと専用機持ちズに『なにがあつたの？』『おしえてよー』とか聞いている。別に俺から言ってもいいけど……監視でもつくんじゃないかなあ？

しかしなんだ、刺身が上手い。とかまったり食べてる所でなんだ、少佐がチラツチラツとコツチを見てきているんだが一体何故だ？なんかやらかしたっけなあ？

ああ、あれか？出発した時にテンション上がっててろくに構って上げれなかったのが不満なのか。なるほど、犬か？

……一夏君とクリスがデュノアとイチヤイチャしてる。ああなんだ？一夏君今度は篠ノ之さんとイチヤイチャし始めたぞ？爆発しろ。鈍感よ、破碎せよ。

あーもうご飯がおいしーなー、なんか視界がぼやけてきてるけどよ。りご飯が美味しく感じるぞー？五感の一つを潰すことで他の五感が敏感になるってよくある話だよね！

俺だつて世界救えとか言われてなきや……いやねーな、ねーよこれ、言われて無くても変わんねーわ。

なんか夜に宿を出て行った一夏君をクリスと一緒にこつそり追いかけてみたら……白い水着を着た篠ノ之さんと逢引していた……

「おいマジか一夏……」

「マジか……おいマジか……アイツ、そんな素振り見せてなかっただろ」

「キムチかな？キムチでもいい？的なの？」

「よくねーだろ、キムチじゃ無理だろ……男心欠片も揺さぶられねえわ」

「でも手作りだったら？」

「ねーよ。確かにばーちゃんの手作りキムチとか漬物とか上手かったけどねーよ」

「それが美少女のだったら？」

「あれ不思議？……ってねーよ。今時の女の子の手作りキムチとかどうなよ」

「お婆あちゃんっこんなじゃね？」

「……なあ、今気付いたんだけどさ……この話題、無駄じゃね？」

「イチヤイチヤしてる奴等見ながらこんな会話してる俺等ってなんなんだろうね……」

「いやまあ……脇役なんじゃね」

「そんなわけあるか！俺が真の主人公だ！野郎ぶっ殺してやらあああああああ！」

あー走って行っちゃったよ。なんか知らんが専用機持ちズがどっかから登場してきて牛追い祭みたいになってるし一夏君死ぬんじやねーかな……大丈夫かあれ？ビームとか衝撃砲とか生身で喰らったら死ぬだろうし、いやまあ遊んでるだけだろうし……

あれ？これってひよつとして……マジ？マジでやってんの？いやいやいやいや待ってって、織斑君死んじやうぞ。だから待ってって……素直にエンダーイアーさせてやらないとかさ、お前等さ。

「スタアアアアアアアアアップ！」

「うおっ！え、衛兵だー！衛兵が来たぞ！」

「お前達はこの旅館とI S学園の生徒達に対してな罪を犯した、何か釈明はあるか」

「逃げる逃げる！織斑先生のところに連行されるぞ！」

「ゲッ！逃げるわよ！」

「また説教はいやですわ！」

「待て、その顔……見覚えがあるぞ！」

「逃げてても無駄なら抗うまでだよ！」

「嫁と言えどもう一人の嫁の火急の用件だ。全力でやらせて貰うぞ！」

その後、何故か皆で仲良く水を掛け合ってキャツキャウフフという謎展開になった。いやー、いい夜だわー。

なんて遊んでたら千冬さんが来て全員仲良く正座させられて説教

を受けたが何事も無く解散となった。

なお、俺だけ後ろ襟鷲掴みにされてどこかへ運ばれる模様。ボスケテ。

引きずられていると、どこかから鼻歌が聞こえてきた。なんというか、作業ゲーの最中に暇になったから暇を持って余してって感じの鼻歌だ。

「それにしても白式には驚かされるなく。まっさか操縦者の生体再生まで行えるだなんて・・・」

「まるで白騎士、のようだな？コアナンバーファーストにして初の実戦投入機。開発者が心血注いで作った一作品目さながらだな」

「やー、ちーちゃん」

「おう、来たぞ」

なんて友人同士の気軽な会話の中にもう明らかにおかしい要素しかなかった。いやうん、白騎士操縦者が千冬さんなんじゃないかなあ？つてくらいには思ってたけどこの感じじゃ確定じゃないですかーやだー。

「さーてちーちゃんにしょーくん、第一問。白騎士はどこに行ったのでしょーか」

「白式を、そのまま読めば答えだろう」

「な、なんだってー！姉弟で同じコア使いまわしてるとか・・・ひよつとして、おさがり？」

「さっすがーわかってるー。方や白騎士を乗りこなし日本を救った人間と、方やこれから世界を救う予定の第二男性IS操縦者君だねー」
「その話も詳しく聞きたいのだが・・・？」

「いや、俺見られても困りますよ？プラン丸投げしてるんで」

「うふふふふ、例えばの話だけだね、IS同士がコア・ネットワークを使って情報のやり取りをしてるって仮定してだよ？」

旧声優バージョンの機械仕掛けの青狸みたいな笑い方をしてからの例え話。未来の道具で何でも叶えてくれるのかな？

「ちーちゃんの最初の機体、白騎士と。愛機である暮桜がね、同じワン

オフアビリティを開発してたっておかしくない話なんだよねえ」

俺には口外に『この世にたった一つとされるワンオフアビリティもコア・ネットワークを使えば量産できる』って言ってるように聞こえるんだよねあ・・・いや、千冬さんがどう受け取ってるかなんて分からないけどさ。

千冬さんは勿論俺まで黙っていると「それにしたって不思議だよねえ、あの機体のコアは解体した時に初期化してるはずなんだけどな・・・私からしたらあのコアは完全に初期化されてるはずなんだけどなあ」そんな東博士の呟きの真意も「不思議な事もある物だな」と返す千冬さんの胸中は分からない。

ただまあなんだ。俺に分かるのは『世の中訳分からねえ事だらけ』ってことだ。凡人たる俺はその『訳分からねえ事』を理解しようと必死になったりするが、それすら必要としないのがこの二人なのだろう。千冬さんは色々考えた末に『まあ、束のやる事だしな』って感じで投げ出してる感があるけど、その境地には普通到れない。俺は到りたくない。

「面白い話を聞いた代わりだ。私からも一つ、例え話をしてやろう」

「へえ、ちーちゃんが例え話なんて珍しいね」

「例えばだ、一人の男子中学生の高校受験場所を意図的に間違えて連絡できる程の天才が居るとしよう。そして本来男では動かせないISを、その男子中学生が触れたときだけ動かせるようにしておく。そうなればISを使える男の出来上がりだろう」

「ん、ん・・・でもそれだとその時だけでそれ以降は動かせないよね？」

「そうだろうな。お前は一つの物にそこまで長い時間を掛けない性質だからな」

そんな千冬さんの例え話に天才は「えへへー、飽きちゃうからねー」なんて気軽に笑つてるところ悪いけど、天才で飽き性とか本当にタチ悪いだけだからね。

ってか一夏君のIS動かした経緯ってそんなだったのか。大体しか分からんが、俺はてつきり大いなる意思とやらでも働いているもの

かと思つてたぜ・・・あれ？つまり俺の時もそんな裏事情が？

「で、どうなんだ？意図して情報伝達を阻害できる程の天才」

「どうなんだろうね・・・実際、なんで白式が動くのか、しょーくんがIS乗れるのか、あのヘタレっぽい男がIS動かせるのかって私にも分からないんだよね・・・みーんなISの開発に関わってるってわけじゃないのにね」

「ふん。まあいい、次の例え話だ」

「今日は多いねえ」

「嬉しいだろう」

千冬さんの言葉に「違うないねー」と返す東博士・・・今更だけど、俺って場違いじゃね？それだけはわかるってばよ・・・

「ある天才が大事にしている妹を世の中へとデビューするに相應しい晴れ舞台を用意しようと思いついた。そこで用意するのは新型の妹専用機と・・・強力などこかのISの暴走事件。そして事件解決の折に新型の高性能機のスペックを世に公開することで新型の操縦者が妹である事と、世間から注目されていると言う後ろ盾を作る。これで晴れて妹は専用機持ちとしてデビューに至ると言うわけだ」

「へー、すっごい天才もいるもんだねえ」

「ああ、本当に凄い天才が居たものだ。過去に十二カ国の軍事コンピュータにハッキングをし、歴史的な事件を自作したと言う・・・とんでもない天才がな」

途中まで『それなんて自画自賛？』って思ったけど『それなんて自作自演？』に変わった俺ガイル。もしかして↓日本ミサイル集中砲火事件？

「ねえ、ちーちゃん。それにしょーくん・・・今の世界は楽しい？」

唐突に振られた意味深な話題に「まあ、そこそこにな」とクールに答える千冬さんに続いて「結構楽しんでますね」と言ってみる。俺は十六歳、年齢的にはむしろこれから面白くなってくるところだ。

千冬さんと俺の答えを聞いた東博士は「そうなんだ」とだけ呟き。突然吹いた突風に、その続きこの言葉と視界がさえぎられ、そしていつの間にか東博士は居なくなっていた。

と忠恕消えた親友に対して思うところがあつたのだろう、千冬さんは真後ろにあつた木に背を預け・・・そして聞こえ無いほど小さな声で何かを呟いた。

唇の動きからして「アンパン食べたい」とかじゃない事は確かだし、キヤラ的にありえない。

ただ、しばらくすると立ち直つたのか「もう寝るぞ。これ以上の夜更かしは教師として認めん」と言つてまた俺を掴んで引きずつて宿に向かつた。

後ろ襟をつかまれたことで自然と手すりのあるサスペンス崖のほうを向く事になつたが・・・俺の目には未だに海に向かつてその手すりに腰を掛け、怪しく微笑む東博士の姿が焼きついてた。

翌朝、さつさとバスに乗り込んで窓から他のみんなを眺めていた俺の目に映つた光景は、一夏君とクリスが見覚えのある金髪の美人さんに頬にキスされ、その後嫉妬した専用機持ちズにペットボトルを投げられているシーンだった。

その光景を見てIS学園だなーとよく分からない感想を抱きつつ、やっぱ俺にシリアスなんて似合わねーわ。と、昨夜のことを思い出して改めて認識した。彼らと適当に馬鹿やってIS乗つてりや何が起きてもどうにかかなりそうな気がした十六の朝。

原作的じゃない夏休みですよ

宿に戻ったら説教が待ってたり、石抱き拷問モードキさせられたり、一人で残念な夕食したり、夜の海でキャツキヤウフフしたり、マジモードな千冬さんと束博士の中で浮いたり、一夏君とクリスがペットボトル投げつけられてるの眺めたりしたけど、俺は元気なんじゃないかなあ？

そんな俺は無事何事も無く一夏君達の二倍の反省文と同じく二倍懲罰トレーニングを終え、学生为天敵期末テストも乗り越え、いつも通りのジャージで北海道に帰省している。

帰省、とは言っても祖父母の住む実家には帰れず（付いてきた黒服がNG宣言してきた。まあアレだろ、保護法関係だろ）適当なビジネスホテルに泊まって（俺はネカフエで良かったんだが、またまた黒服が（ry））。

そんなこんなで俺は今、とある門の前に立っている。

これまでの人生の三文の一は過ごしたんじゃないかなろうかと思われ
る師範の道場だ。

突発訪問だが・・・まああの人なら平気な顔して『そろそろ来るだろうと思っていたよ』とかいいそうだなー。

そんな感じで閉じてる門に手を伸ばして、ドーンと開けそのまま砂利道を歩いて道場へと向かう。

黒服が後ろに居たら止められるだろうが、幸い今は俺一人だけだし
どうでもいい事だが・・・理由？泊まってたビジネスホテルの窓から
逃げた、それだけ。

まだ半年も経っていないのにどこか懐かしく感じる道を進み、懐か
しい玄関に付き、靴を脱いでから上がる。

「・・・ん、あれ？師範代じゃないですか。お久しぶりです」

そこに居たのは想定していた人物では無く、どこの大学にでも居そ
うな袴姿の好青年一人だけだった。実年齢は大学生とはとても呼べ
ないけどな！ぶつちやけると千冬さんは超えてる。若作りつてレベ
ルじゃねーぞ！

「あ、あれ？驚津くん？こんなところに来ちゃっていいの？」

「護衛からは逃げ出して来ました！・・・で、師範は？」

「驚津くん護衛とか要らないと思うんだけどなー・・・って、ああそっか。驚津くん知らなかったね」

そしてその師範代は爽やかな笑顔のまま度肝を抜かれる発言をした。

「師範ね、旅に出るってさ」

「・・・は？」

「だから、旅に出るって」

「いや・・・いやいやいや、いい歳したおっさんが旅とか何考えてるんだよ」

「それでさ、実は師範から『時期が来たら郵送しろ』って言われて物が あるんだけど・・・せつかく来たんだし渡しちゃうね」

「ノリ軽くないですか？」

「まあそれがこの道場のいいところだからねえ」

ケラケラ笑いながら道場の奥に入っていく師範代を見送り、俺は修行時代の疑問を思い出した。

普通の剣術家からしたら邪剣とか呼ばれる俺の剣をおおらかに笑い、むしろそれを伸ばすように修行を付けてくれた師範・・・もしかしたらアサシンなんじゃね？という物だ。

今の今までスツカリ頭のどこかにすっぽ抜けていた大きな疑問が道場に來た事で疑惑がどんどん湧き上がったのか溢れ出てきている。体中からジュンジユワーである。

師範も居ないし、俺だけの疑問なので解決するわけも無く悶々としていると「あったあった、神棚に置いてたって事スツカリ忘れててさー」と師範代が戻ってきた。そして親戚にお年玉あげるような軽い感じで茶封筒をポンと渡してきた・・・なんか違うねーか？

いや、金属が擦れるようなチャリチャリ音が聞こえるからお年玉って表現もあながち間違いじゃなさそうだ。

「で・・・これだけですか？」

「それだけ」

「……とりあえず開けますね」

「僕が見てもいいもののかな?」

「いいんじゃないですかね」

とりあえず封筒の上を千切って逆さまにして金属を出す。手のひらに落ちてきたソレを師範代と一緒に凝視し……

「鍵?」

「どう見ても鍵ですよねコレ」

「金庫なんてあったっけな?…他には?」

師範代にそう言われて茶封筒に手をつ突っ込むと……紙が入っていた。

メモ用紙位の大きさの紙には住所と、何故か俺の生年月日とその後ろに付いた左矢印、『渡せば通じる』と言う短い分。

「なんなんですかねこれ」

「まあ、書いてある住所に行ってみれば?」

「……時が来たら郵送しろって言ってた割にはこの辺って言うね」

「二度手間だね……ちよつと待ってて、この辺りの地図持ってくるから」

数分して戻って来た師範代と一緒に住所を探し、ネットで調べ、道場を後にした。

移動に一時間!途中に昼飯を食べて一時間半!時々携帯に連絡が来たりしたけど俺は基本的に知らない電話番号には出ない主義なんだ!
だ!

「それにしても、なんだこれ……」

俺の目の前にある建物は、なんと言うか……ガラクタの城だった。白い看板に青で書かれた『大森廃材点』という文字が目立つが、それ以上にうず高く盛られた廃材に目が行く……

しばらくポカーンとしてたら「なんだガキ!うちの店に文句あんのか!」なんて怒号が響き、ドスドスとガラクタの奥から足音が近づいてきて、スパーン!とガラクタに埋もれて少ししか見えなかった引き戸が開けられた。

「なんとというか・・・ジブリに出てきた動く城みたいな感じですね」
「屋根に風船つけたら空飛ぶぜ！」

頭に白タオル巻いた白髪のおじいさんが豪快に笑いながら近づいてきた・・・いちゃ、ちよつと、友好的に接してこられると逆にこわいッス。

「で？ここいらじゃ見ない・・・いや、何度か見た覚えがある顔だな。どこだったか・・・」

「多分テレビじゃないですかね？」

「ウチ、テレビはあつても起動しねえんだわ！廃材屋だからな！」

そして俺と爺さんとのアメリカンドラマみたいな「H A H A H A」の合唱。

「で、用があんだろ？当ててやろうか？自転車が壊れたか？」

「いやいや違いますよ・・・はいコレ、頼みます」

封筒の中に入ってた紙を渡すと「なんだ？発注か？」なんてニヤニヤ笑顔で受け取った直後、メモ用紙を見て直ぐに真顔になった。

「なるほど、どつかで見たことあると思つたら通りで」

「ええつと・・・師範のご友人、で合ってますか？」

「大正解！ま、付き合い事態は最近だけだな」

その後、「付いて来な」とガハハハ笑いながら店の中に入っていった爺さんの後を追つて店に入る。勿論引き戸は閉める。

店の中まで子供が積み上げた積み木の様な、指で突けば崩れそうなガラクタの山を縫って歩いていく爺さんの後を追うのは中々に厳しかったが何とか抜けれた。

「コレだこれだ。本当なら貸金庫にでも任せとけって言つただけだな・・・アイツが『お前のところが良い』って言って聞かなかつただよ」

俺が追いついた頃には既に爺さんはやる事を終えていたらしく、床の一部が取り外され、その下にあつたのだろうと思しき上に取っ手の付いた大きめの銀色の金庫が爺さんの直ぐ側に置いてあつた。

「お前さん、鍵は預かつてるんだろ？」

「これですね、渡しますよー」

ポーンと軽く投げると何故か悲鳴を上げながら受け取った「つたく最近のワケエ連中はコレだから・・・」とかブツクサ言いながら鍵を差し、鍵穴の横のある数字を打ち込んでいく。

「ほれ、開いたぞ。後はお前さんの物だ・・・ケース持つてくるからその間に見とけ」

「ありがとう店長！」

両手を挙げて感謝の気持ちを表現すると「そう褒めんじゃねえよ」と笑いながら店の奥へ行ってしまった。

さてさて、開けられた金庫を物色しましうかねえ。

中身は非常に単純そのものだった。

白をメインに、縁を青で特徴付けしたフード付きのコート。

茶色の籠手の様なものが二つ。

コートを持ち上げた時にこぼれ落ちた白い封筒。

所々苔の生えた古銭の様なもの。

あれ？これ鍵じゃね？遺跡の奥を開けるアレじゃね？なんで師範が持ってたの？

アサシン装束に、籠手は少し弄ってみたけどアサブレだし・・・じゃ鍵は？ゲーム内じゃアサシンからテンプル騎士が奪って、最終的にアサシンの手に渡ったけどどうだ？

もう師範がテンプル騎士なんだかアサシンなんだかわかんねえな。

っと、封筒開けてみよう。流石にまた鍵と住所が入ってるわけないだろ。

『君がこれを読んでいると言うことは、私は既に旅に出た後だろう』
等とよくありがちな文章からスタートした文には、俺を混乱される文字が続いていた。

『早速だけど、私はテンプル騎士団の一員だ。今の君ならこの意味がわかるだろう』

・・・俺、師範と戦って勝てる気しねえんだけど。ってかなんで知ってんのさ。

『とは言っても、元だ。再召集されるであろうことも考えて、私は旅に

出ることにしたんだ』と書かれていてさらに混乱した。なんで再召集されるなんて発想になったんだ？

『弟子と生死をかけて戦って、その事をテンプル騎士団にもみ消されて歴史に残らない。なんて事になるから私はもう彼らと関わりたくないのだ』とりあえずテンプルだったけどイヤになったから脱退したって事でおk？戦っても勝ちが望めないからありがたいんだけど。

『私がテンプル騎士を辞めたのと同時期にアサシンを抜けた男と知り合ってね、コレは彼のモノだ。別にアサシンの誰かを殺して奪ったわけではないから安心して欲しい』というかもうなんか普通に殺す殺されるって話が出てきてるけど俺もこの先そんな物騒な事を体験する事になるのか・・・イヤだな。

『たまたま現れた君が彼の様な戦い方を、たまたま見かけた移動の仕方が彼とそっくりだったのは驚かされたが・・・それは同時に私にとっては希望でもあった。テンプル騎士の野望を止められる人物が現われたのだと』いや、止められねーよ。無理だわ、束博士を上手く使えば何とかなるんだろうけどそんな芸当俺には無理だわ。心労で死ぬわ。

『その件について、君に鍵を渡しておこう。アサシンとテンプル、両方が欲している物だ。肌身離さず持ち歩いて欲しい』そうだね、ハイザムも常備してたしね・・・ドッグタグに通しておくか。

『最後に。君はこれから様々な事に巻き込まれるかもしれない。今はテンプル騎士も、アサシンも全盛期よりも大分縮小化しているが、それでもテンプル騎士達が幅を利かせているのは間違いない、狙われることになるだろう。そんなときは、アサシンを頼ると良い。君の力になってくれるはずだ』正直に言おう。テンプルにもアサシンにも頼りたくは無い。だっていいように使われてソレで終わりだ、俺は死ぬ前から自分の意思で死にたい。前世の記憶の俺が事故死で死ぬ前に後悔していたからこそ、自分の意思で死にたい。

『P.S. 二年前、冷蔵庫のプリン食べたの私だ。すまん』

「あれ食ったのアンタだったのか！練習終わりに食べようと思って

取っついたのにチクショウ！」

シリアスな雰囲気だったのにどうしてこうなった！つと、まだ下にまだ書かれてるな。

『PS2. 人を殺す覚悟をしておけ。常に戦場に居るように心構えをしておけ』

最後の最後に師匠らしい事書いてあったけどキャラじゃねーよ師範。

ジャンク屋の爺さんが持ってきたブリーフケースみたいなのにアサシン装束とアサシンブレードを入れ、ドッグタグの鎖に古銭を通して首に下げ直す。

「何があんのかしらねえけど、気張れよ若いの」

「どうも。あと、動くテレビ買つとした方がいいですよ」

「銭湯のサウナのテレビで十分だ！」

そんなどうでもいい会話をして別れた。

泊まってたホテルに戻ろうと歩いていると道半ばの所で俺についできた黒服二人が慌てて走ってきた。

「鷺津さん！テレビ見てください、テレビ！」

「テレビ？なんか有ったんですか？」

「とにかく！ワンセグでも何でもいいですから！早く!!」

なんか本当にのっぴきならない状況なんだろうと判断して、その辺にある電気屋に駆け込み、法被を着てた店員さんの元に駆け込み、黒服が状況を説明して陳列してあるテレビの内の一つのチャンネルを変えてもらった。

チャンネルを回していると、黒服達が「「そこ！」」と言ったところで止められた画面には東博士が映っていた。

画面の右上には『大発表！天下の天才、篠ノ之束による重大発表！』の文字・・・なんぞこれ。

そしてテレビの中の束博士が携帯を取り出し、耳に当てた。

その直後、俺の携帯の着信音が響く。テーマ？なんかのマーチ。

ディスプレイには『みんなのらぶりーウサギちゃん』と表示されて

おり、恐る恐る出てみると『あーしょーくん！みてるー？やつほー！』とテレビの音声と携帯の音声がサラウンドで頭に響いた。

「あー、はい束博士。何やらかすんですか？というか何やらかしてるんですか！」

『いやー・・・前にさー、手伝って欲しいって言ったら手伝ってくれる？って聞いたら「うん」って言ってくれたじゃん？』

「あー・・・そういうえ言いましたねえ。程ほどって付け加えましたけどねー！」

『でさでさ！束さん今から会社作るんだけど手伝ってくれる！』

「勿論喜んで！俺と束さんの仲じゃないですか！で、テストパイロットでもやればいいんですか？」

『それもあるんだけどー・・・ちよつと宇宙行ってみない？』

俺も黒服達も法被来た店員さんも開いた口がふさがらなかつた。テレビの中で笑顔の束博士と大量に焚かれるフラッシュが、非常に対照的だった。

原作的じゃないお話ですよ

帰省したけど実家に戻れなかったり、黒服二人がすぐ側で待機して
るホテルから脱走をしたり、道場に行ったら師範代しかいなかった
り、師範が旅に出てたり、封筒渡されたり、封筒の中にあつた住所に
行ったら廃材屋だったり、ノリのいい爺さんと楽しくおしゃべりした
り、爺さんの店の床下から出てきた金庫にアサシン装束があつたり、
遺跡の鍵があつたり、回収して黒服と合流したらなんか慌てて、そ
の辺の電気屋はいつてテレビのチャンネル回してもらつたら束博士
が記者会見っぽいこととしてたり、なんか爆弾発言してきたりとまあ怒
号の超展開ですが、俺は元気です。

現在進行形で口を開けて放心しかけてる俺と黒服二人、そして法被
を来た店員。

騒ぎ立ててるテレビの向こう側の記者、というかマスゴミ達に、と
いうか多分テレビの前の俺にドヤ顔ダブルピースしている束博士。

場所は違えど実にカオスである。というか、あの人完全にこつちの
こと見えてるよね？

「・・・で、どういうことですか？」

『いやねー、束さんは我慢の限界なのですよ！束さんは人類の進歩の
ために宇宙空間で活動できるISを世に送り出したと言うのにみー
んな世界のためになんて思わないだもん！束さんおこだお！激お
こだお！』

「いや、作品って受け取り手次第だから仕方ないんじゃないですか
ねえ」

『で！束さんは考えたのですよ！開発者本人が動けば世界は動くので
はないのか！ってね』

「世界ってそんな単純でしたっけ？」

『・・・そう信じたいね、しよーくん』

え、なんでいきなりそんなテンション下がってんの？ちよつと怖い
よ？

『そんな訳で！しよーくんには宇宙に行ってもらいます！』

「すみません話が飛びすぎて訳分らないです」

『もー察しがわるいなーしよーくんはー、しよーがないなー』

あ、電話切られた・・・でもテレビの中の東博士はまだ電話掛ける・・・え？なに、なに？

そして携帯電話をどこかへ仕舞った東博士は、テレビの中で『しよーくん、すぐにその電気屋の外で待っててねー、見ればすぐに分かる乗り物で迎えに行ってもらったからー』と笑顔で手を振っている。

とりあえずポカーンとしている店員に感謝の気持ちを伝えてから店を出る。

外に出た直後、俺の目の前に何かが降って来た・・・文字通り、降って来た。

なんというか、前足とか後ろ足とか無い、雪で作ったウサギみたいな感じの何かがそこにあった。

カシャつと音を立てながら目つぽい場所が開き、綺麗な白髪に半開きの赤目という出で立ちの少女の顔が目に入る・・・そんなどつかで見ることあるような外見している彼女が口を開いた。

「鷺津様、束様の命によりお迎えに上がりました」

「え！ってことはコレ車なのか！タイヤの無い車！まさか現実で見ることになるとは！」

SFの代名詞、なんかよく分からない力で浮いて、そして移動する車つぽい何か。俺は感動した、IS技術を流用すればSFカー作れんのか、まあIS自体浮いてるから今更だろうけど・・・でも、だがしかし！

そんな言いようも出来ない感情を胸の中で溢れさせていると、「お乗りください」と非常に冷たい声でSFカーに乗る事を催促されたが・・・

「どうやって乗ればいいんですかね」

「・・・申し訳御座いません、出入り口出し忘れてました」

アルビノジト目恐らくクール属性持ちがドジっ娘要素を見せながら窓を閉めると、雪ウサギの横っ腹に丸い穴が開いた。

恐る恐る入ると入ってきた穴がふさがり、突然動き出した。突然の事でバランスを崩して柔らかいクッションの上に倒れた。

外から見たら真っ白だが、内側から見たら車の窓っぽいのがあった。マジックミラーに限りなく近く超越した技術だって事は分かった。それ以外は分からん。

「どうも、クロエ・クロニクルです」

「あ、どうも、鷺津翔です。え、ええっと・・・よろしく、でいいのかな？」

「そうですね。束様の建てられた会社の社員は私と束様の二人ですし、鷺津様はテストパイロットとなりますからね。よろしくしなければなりません」

「・・・えっと、なんか言葉に刺があるように感じるんですけど」

「鷺津様は私の様な体型の女性がお好みと聞きましたので」

「どこ情報だよ！ソースだせよソース!!」

「束様がIS学園に入ってから鷺津様の行動を監視していた結果ですが」

「・・・ま、まあ確かにIS学園だけを見れば・・・そうなの、か？」

俺が学校生活、日常生活含めて良く話すのは本音嬢と簪嬢、鈴嬢、少佐。千冬さん。こちらに友好的な女子生徒達不特定多数。

「いや、クロニクルさんと本音嬢の体格は違くないか？」

「胸なんて飾りです！偉い人にはそれが分からないのです!!」

「・・・ネタ提供したのは博士だとして、その束博士は今のセリフに關しては」

「あ、束様は別です。溢れんばかりの母性の象徴なので」

「束博士、母性なんてあったのか・・・」

「既に溢れておりますね。お胸がしぼんでしまうほどに」

「・・・やっぱ嫉妬してない？」

「・・・してません。してませんとも」

ああうん、なんとというかこの子。人のこと言える立場じゃないけど・・・ちよつとメンドイ。

なんかブツブツ呟き始めたクロエ・クロニクルの真後ろで揺られる事数十分。暇だったから携帯見てみたら中学の友人達や、IS学園の友人達からメールに着信がわんさか来てた。

何が一番ビビッたかって？千冬さんからの着信に決まってるじゃないですかーやだー。知らない電話番号から何度か来てるけどそっちはどうせ黒服達だし、別にどうでもいい。

千冬さんに電話を折り返すかどうかを悩んでいると動きが止まり、真横の壁に穴が開いた。

「来たねしょーくん！ウエルカムさー！」

「どこどこですか？」

雪ウサギから降りて周りを見た感じ・・・ビルの屋上？なに？作業用クレーンでも渡って光るルービックキューブでも強奪すればいいの？

「早速だけど、これから宇宙に行ってもらいます」

「これから殺し合いをしてもらいます、並みのインパクトあるな。スケールが違いすぎる」

とりあえず、色々察したので首に下げてるドックタグを投げ渡す。

「あ！ちよつとしょーくん！コレどこで手に入れたのさー！」

「あ？あー、鍵？知り合いが俺にくれた」

「これ持ってたとかどんな知り合いなのさー！」

まあうん、その感想は良く分かる、俺だって焦った。だがなんというか・・・ まあ、師範だし？的なの？

「とりあえず、コレは拡張領域に仕舞っとくね。連中がテレビ中継見てる時にコレ見つけたら殺してでも奪い取る、だからね」

「というか東博士が持ってればいいのでは？」

「実際に鍵を開けて、世界を救うのはしょーくんの仕事さ。ソレまでの色々な手回しは東さんの仕事さー！」

「・・・これも、手回しの一環で？」

「半分アタリ半分ハズレ！まずはしょーくんを有名にさせる事であつちの手が出しにくい状況にする。世界の天災東さんの助手的存在に

なったしよーくんに危ない事をしたらすぐにマスコミがたかるだろうからねー」

「けどそいつ等どうせ金と権力と暴力で押さえつけられんでしょう？無意味やん」

「だから半分さ。もう半分は・・・東さんげきオコスティックファイナリアティぶんぷんどリームだお！もうどうにも止まらないお！」

「その語尾止めてください」

「お、おう・・・マジだ、真顔でマジ声で言われたのなんてちーちゃん以来だよ」

「まあ手伝うよ。俺がやらなきゃ一夏君がやるんでしょうこれ？」

「ほーきちゃんかいつくんかなーって所。しよーくんがやってくれば百人力さ！なんてったって東さんの次にISを理解している人間だからね！」

「情報に脳みそがついていけないけどな」

「脳の記憶容量が何メガならISの情報は何百テラだ。処理以前にインストールすら出来てない状態だ。ま、インストール自体は何故か済んでるんだけどな。どういうことなの？」

「IS技術に触れて慣らして行けばその内東さんと一緒にIS作れるよ！」

「なんだその理系カップルのデートみたいな例え・・・なにか？彼氏に『ミレニアム問題一緒に解こうよ！』って誘う彼女か？残念だな、彼氏は脳筋だ」

「もう彼氏彼女なんて気が早いなーしよーくんは！早い男は嫌われちゃうよー？」

「俺の最速兄貴は別にモテてない訳じゃないだろ！」

「早すぎると一周回ってモテるんじゃない？」

「俺が遅い！俺がスロウリイ！・・・いやまあ、その通りんだけど」「そんな遅いしよーくんに取って置きプレゼントさ！」

「男に早いとか遅いとか言うな！凹むだろ！」

そんな感じに良く分からない方向に暴走している俺をからかっている東博士はニヤニヤ笑いながら兎ミミから光の粒子を出し、そして

それが形になっていき・・・

「なにこれ、ロケット?」

それにしては・・・なんだ、ロケットっぽくないな。ミサイルが四本・・・いや六本鉄骨で固定され、先端にはランドセルと称されるバツクパツクみたいなのが付いている・・・いや待て、嫌な予感がしてきた。

「まさか・・・アレか!名前出てこないけど強制的に加速させる奴!」

「その通り!ヴァンガード・オーバード・ブースター。略してVOBさ!」

「やっぱりか!作内で特に出番の無かったアレだったよ!」

記憶の中には友人の「別に使わなくてもよくね?」という発言に対して「ロマンだよ!」と返していた前世の俺、確かに、ロマンは大事だ。だがしかし、それは果たしてリアルでも必要なのか?

「じゃ、しよーくん。これ仕舞ってから白影に接続してから装備して!」
「まさか・・・この場で垂直出撃?」

「白影と同期させたカメラで人類初!宇宙の様子を世界にカラーでライブ中継さ!」

「・・・泣けるぜ」

咄嗟に某ゾンビゲームの二作目主人公のセリフが出てくるくらい泣ける状況だ。

『しよーくん!バイタル不安定だよ、何やってんの!』

「何やってるって・・・現実逃避」

簪嬢と並んでISの調整してる場面・・・当時の俺には無理だったが今の俺なら出来るって言うのが現実だから、実質ただの現状逃避。

だって今、真上向いてるんだぜ俺。背中の一部に圧迫感、さながら鉄骨の上に落ちて貫かれたエグイ死体の如く手足をプラインとさせている俺だぜ?

何も知らない人が見たらコレ完全に宇宙葬か宇宙漂流の刑とかだよこれ・・・コレ流すの?この光景全世界にライブで流しちゃうの?もっとおめかししとけばよかったな!。

ま、東博士は恐らくいつも通りの一人お茶会な服装で空中のモニター見てるし、俺もジャージでよかったみたいだ。

『鷺津様、コレが我等が、いえ、東様の会社、東無限大工業の旗揚げになるのです。派手に行きましょう』

「漢字にしたら無限大を束ねて工業として生かすって受け止めれるけどさ……読みがタバネ・アンリミテッド・インダストリってどんなだよ、マッポーめいてやがる……ZBRアドレナリンをくれ」

『作ってもいいけど……実際ヤバイよ?』

「売り出そうぜ。タバネの技術ですって言つて。きつと馬鹿売れしやすわ」

『ツハ!クーちゃん量産化計画!……ジュルリツ!』

「やつべ、この人マジでやりかねないわ」

『私、量産……ツハ!私、オリジナル!』

「駄目だこの博士と助手、どうしてこんなになるまでほつといたんだ!」

　　というか、飛ばすならさつさと飛ばしてくれませんかね?

『あ、それ自分の意思でしか出発しないよ?』

『逆バンジージャンプ……斬新』

「空に落ちるとか何ソレ変態ですか?」

『へーんたい、あそつれへーんたい』

「変なコール止めれ!」

『えー上に落ちない?』

『上に落ちないで許されるのはRTAまでだよねー』

「TASさん早く来てくれー!」

　　この音声は流石に世界に放送されてないよな……されてたら世界の人はどんな顔して見てんだろうな。

　　今日の方向性さっぱりわからないんですけど、そろそろ真面目にならなきゃ駄目?ですよねー。

「じゃあそろそろ行くとします」

『鷺津、行きまーす!』

『私、気付いたんです。彼が宇宙の心だったんですね』

「真面目に行こうとしてるところにチャチャ入れないでくれませんかね！」

『あ、本当に行くの・・・え、本当に?』

『束様・・・この人頭おかしいんじゃない?』

「なんだよその反応! ちょっと本気で拗ねるぞ! みつともなく怒るぞ!」

『ごめん・・・ちよつとちーちゃんよりノリがよくって嬉しくなっちゃってやりすぎちゃったみたい』

『・・・私は束様以外と話すのなんて殆ど初めてでして・・・すみませんでした』

「お、おう・・・なんか、ゴメン」

『さーじやあ行こうかしよーくん! シールドエネルギーはこつちから送り続けるから安心して飛んじやって!』

『カウント、五からスタート・・・』

「え・・・俺のタイミングで行くんじやないの? 俺の意思じやなきや行かないんじゃないの!」

『ゴツメーン、それ嘘』

『三、二、一・・・点火』

「オ・ノーレー! 凶つたなっ! 篠ノ之束えええええええええええええええええええええ!!」

『いってらっしやーい』

視界に浮いている速度メーターと高度メーターが恐ろしい速度で0を増やしていき、シールドエネルギーが減っては増え減っては増えを繰り返してバグったような感覚に陥る。

さらば、地球よ。初めまして、宇宙。

『ムチャヤシャガツテ・・・』

させたのテメエらだよクソが・・・流星の鷲津君でも堪忍袋が有頂天だよ、戻ったら本気でキレてやる。

原作的じゃない宇宙進出

テレビ見てたら迎えを寄越され、ロリっぽい子の運転するSFカーに乗り込み、着いた場所には東博士がいて、割とマジで宇宙に飛ばされる事になって・・・本当に飛ばされたけど・・・俺は今泣きそうです。

現在進行形で宇宙に向け真っ直ぐ飛んで・・・いや、飛ばされてる俺です！

『しよーくん、気分はどうだい？』

「最悪だ。あのSFカーは心地よかつたけど・・・飛行機ってこんなのかなのか？」

『え？乗った事無いの？』

「生まれてこの方北海道で引き籠もってたしな。都会に出たのも新幹線だったし戻ってきたときも新幹線・・・」

前世の記憶？ソレはスルーで。記憶があっても体験してないからさっぱりだ。

『今度乗せてあげようか、飛行機』

「個人的にはへりに乗ってみたい。飛行機は金出せば乗れるだろうけどへりはなんかレアイイメージ」

『ふーん、そんなもん？・・・でき、VOBはどんな感じ？』

「ISのシールドで完全に守られてる感じ。シールドってスゲエな！」

『VOBの感想聞きたかったんだけどどうしてそうなったの？』

「ああうん、VOB？二度と乗りたくない。加速していく風景をハイパーセンサーが無駄によく見せてくれるせいで酔いそうだし」

今だっってもう宇宙目前なんだが・・・少し後ろを振り返ればもうヤダ。世界の悪意が見えるよ・・・

『あー・・・なんか内戦してるっぽいねー』

どっかの国で火の手が上がってる。これさ・・・レーザー出力最大にしたら衛星軌道からの狙撃とかできるんじゃないやね？実はレーザー兵器が出回るのがって軍事的にアウトなんじゃないやね・・・？

『その心配はご無用さ！何故なら束さんがレーザー積んだ衛星が飛ばされる度にハックして自爆させていたからさ！そしてコレからはそんな事も無い・・・しよーくんが宇宙に行った。そしてこの後にね、しよーくんも知ってるだろうけど現存する凡人が作った中では最高レベルのISを月に置くからねー』

「待とうか、ねえ待って・・・嫌な予感しかしないんだけど」

『しよーくんがVOB実験成功させたから今から送るからねー』

「やめて・・・マジでやめて・・・本当にやめて！」

俺が知ってて世界最高レベルのISって言ったらもう・・・銀の福音じゃないですかーやだ！トラウマだよクソが！

『彼女はもう意思を持っている。この束さんが閉じ込められていた場所から開放してあげたのさ！持ち主のところに居たいっていったけど気晴らしに空でも飛ばしてあげたついでにねー』

「・・・え？・・・か、会話出来るの？」

『まあ文字だけだけどねー。中々面白いんだよー』

「あんたの言う面白いは当てにならないさうだから期待しないぞ」

『そう褒めないでよー、これ全世界に生中継してるんだからさー』

「これ音声入りで流してんの！流すのって視覚情報だけじゃなかったのかよ・・・馬鹿じゃねえのか！いや馬鹿だろ!!」

『コレ流れてるけどいいの？』

「画像だけだろ？」

『音声付で。国によつては字幕が付いてるっぽい・・・』

「うっ・・・ええい、今更だ！つてか生中継で流しちやっていいのかさっきの発言」

『束さんは誰にも干渉なんてされないのだ！』

「それっぽく言ってるけどガンスルー決め込んでるだけだろ・・・」

フワフワ宇宙漂ってますが、月とか行く気起きんです。だからと言つてチキユウダイスキするのも・・・大気圏突入がこわいんです。驚津です。

『いやいや、しよーくんには月に行つてやっつて貰わなきゃいけないことがあるんだけどー』

「・・・何やりやいの?」

『ちよつと月に拡張領域に入ってる旗刺してきてよ』

「月に旗?・・・いやいやいや、喧嘩売る気ですか?関係ない俺を巻き込まないで下さいよ」

『ちよ!今更他人のフリしても遅いよしょーくん!』

「・・・確かにさ、都市伝説として聞いた事はあるよ?アポロン本当に月にいったん?ってさ・・・」

「・・・行けばいいんだろ、行けば・・・ハア、重力とか大丈夫かね」
『月なんぞ所詮は地球の六分の一程度さ!』

「重力がね。その他は別に六分の一ってわけじゃねーからね?」

『やだなー、分かってるよしょーくん。人工が六分の一だったら大変な事になるからねー』

「将来的に六分の一になったら楽しそうだなあ。未来に乾杯」

『『未来に乾杯!』』

『素敵な言葉ですね、東様』

『そうだねくーちゃん。東さんは人類の未来のために頑張るのだよ』

『そのためにも鷺津様。馬車馬の如く働いてくださいね』

「適当に言った言葉がいい感じで纏まったと思ったらコレだよ!イイハナシダツタノニナー」

「君が俺を嫌いだってことは良く分かった。でも少しくらい歩み寄ってくれないんじゃない?」

『鷺津様に歩み寄ったらそのまま食べられてしまいますから。物理的に』

「・・・え?物理的?ちよつと言ってる意味がよく分からないんだけどどういうことなの!」

『男は狼です』

「これ全世界生配信だからね!俺の評判下げないでくれない!」
『すみません。故意です』

「分かってるから言ってるんだけどその辺どう思う!」
『ざまあ。この一言に尽きます』

もういやこの娘。悪意の塊じゃねえーかよコイツ・・・もうこんな

の放って置いてさっさと月行こう、月。

「さっさと終わらせて帰りますわ．．．いや、地球に帰るのも帰るので怖いけどさ．．．大気圏突入とかどうしろと．．．」

『大丈夫！そんな事もあるうかと盾を用意しておいたよ！大気圏突入専用の！』

「まさに技術の無駄遣い！」

『今日この日ために束さんは準備していたのだよ！着々と．．．夢の合金を作る努力を！』

大気圏突入、夢の合金．．．あ、あれ？もしかして．．．もしかすると？

『やっと完成して実戦投入出来るようになったのさ．．．ガンダリウム合金が！』

ああうん．．．ロマンだね、ガンダム。

『でもさ、ISの装甲を合金で作ろうとしたら足りなくなってきた．．．シールドエネルギーもコッチから送ればいいことだし、って事で盾にしたのさ！』

「．．．足りてたら作ってたんだ．．．ISガンダム」

『勿論さ！何のためにビームライフルを研究していたと思ってたのさ！』

「．．．え？ちよ．．．え？」

この人、ロマンのためにあんなビームライフル作ってたのか．．．ってか、もしかしてファンネルも？

『た、タバネガンダム．．．ハアハア』

「おい誰か暴走してる博士止めろ！」

『クロエガンダムハアハア．．．』

「駄目だこりゃ」

うん、本気で月に着陸して旗刺してさっさと帰ろう。もう誰にも頼らない。

月に旗刺した結果？なんというか．．．言葉では表現できない動きをしていたよ。アポロン月に行つたの本当じゃね？って動きしてた

わ。うん、キモかった。後、月の裏にはサンタは居なかった。居るならきつと火星だ。

そして未だ回線では『ガンダムガンダムうへ、うへへ』と合唱している二人をガンスルー決め込んで一人で「そろそろ月に着陸します」とか「旗立てましたー。どーもTUIテストパイロット鷺津翔でーす」とか「これから月から地球に戻りまーす」とか適当に投げやりにしつつも赤い盾を取り出して大気圏突入をする。途中で銀色に光る人型の何かとすれ違ったけど俺は何も見えていない。

「博士バットトリップしてるけど大丈夫なん？」って思ったけど減ったり増えたりしてるシールドエネルギーに安堵しつつ何故か付いてる温度計に表示されてる数字に俺、軽く死ぬんじゃないかな？って焦った。

焦ったのは焦ったけど死んだら死んだで世界救うとか使命丸投げできるからソレはそれでいいかな？とか思った俺は病んでるんだろうか。

空気摩擦で燃えながらもISが何処かの自動的に海に落下してくれるまでの時間が数時間どころか数十時間にも感じた・・・というか、オホーツク海らしい。チラツと見えてた陸地はまさか北方領土だったのか・・・

「白髪とか大丈夫？生えてない？」

「大丈夫！いつも通りのしよーくんだよ！」

無気力状態で海面をプカプカと浮いていたら雪ウサギSFカーが回収しに来てくれ、車内で束博士にチョコクスリーパーを喰らわされている・・・少しズレたらコレ完全に入るよ？数秒もすれば意識落ちるよ？

「無視したでしょ、束さんのロマン無視したでしょ！」

「いや、ガンダムはガンダムでまた別の話でしょ」

「それに盾にも突っ込まなかったでしょ！あれはネタだよ！」

「いや・・・まさかマジでガンダムシールド出てくるとは思わなかったし・・・なに？次はガンダムハンマー？」

「・・・しよーくんはビームランスの方が好み？」

「ハンマー万歳」

チエーンハンマーとかどうやって使えばいいのかわかんが口マシだわ。ほら、某ヒロインの伝説でも主人公が使う作品あったし強かったし。

「脳筋」

「・・・なんか久しぶりに脳筋呼びされた気分だ」

おかしいな、夏休み入る前にも簪嬢に言われてたのになんだろうこの懐かしい気持ちは・・・

「ま、しよーくんにはこの後にも色々してもらおう事があるのさ！」

「何ソレ聞きたくない」

「大丈夫さ！ちよつといろんな武装を試してもらっただけだから！」

「何ソレ楽しそう！」

「TUIの本業さ！」

俺達の企業はコレからだ！

さて、いろいろな話をしよう・・・

夏休みの殆どを束さんのラボ、「吾輩は猫である」と書いて「名前はまだない」と読ませるハイセンスな住所不明のラボで試作品を使っては変えて、使っては変えてを繰り返して過ごしてひたすらデータ取り。

何故か送られてきた「千冬ねえの昔」との件名で一夏君から送られてきたセーラー服の千冬さんがランドセル背負った一夏君を抱きしめている写真・・・だからどうしたというのだ。

オルコットさんから送られてきたメイドさんとのツーショット写真。
真。

デユノアが執事服で少佐がメイド服を着ている写真。

本物の戦車を動かしてるクリスの動画。

ネットで評判の俺と束ねさんの掛け合い。

そして銀の福音が月におっ建てた「TUI」と屋上にデカデカと描かれたビル・・・束さん、もとい社長曰く、本社だそうです。出社するの大変だなー・・・

なんかみんなの平和そうな雰囲気羨ましかったから徹夜明けの俺と束さんのツーショット写真を送りつけてやった。クロエ？アイツ俺に近づかない。むしろ知り合ってから距離が更に離れた気がする。初対面が一番マシだったってどうなんだ？

コッチは普通に会話しようとしてんのになんか毒舌吐かれるし…物渡してくるときにはマジックハンド使うんだぜ？どんなだよ。

「どうにかならんの？束さん」

「どうにもこうにもならんのですたい」

聞けば束さんが育てたと言う話…ああうん、育て親が育て親だから悪いのか。千冬さんから軽く聞いてたけど対人コミュニケーションが壊滅的なんだな。そこを娘みたいな子に伝える必要はなかっただろ…

「いやー、私にとつてのちーちゃんみたいな人が必要だとは思ってたけどそれがくーちゃんにとつてはそれが私みたいなんだよねー」

「いやそれ友人じゃなくて依存してますやん。アカンですよ」

「だからしょーくんになつてもらおうって思ったんだけどさ…」

「マジで勘弁してください」

「何とかしてあげたいとは思っただけだね…束さんは自主性を重んじているのですー！」

「だからと言ってあれはひどい。擁護できねえよアレ」

今だって休憩時間みたいな感じで休んでいるが…ノープソで何やってるかって荒らしてるんだぜ？もうさ、マジで悪意の塊だよアイツ。

あ、ノープソ増やした…何だ？今度は自演でもするんのか？

「せめて将来的にタイムリープするような厨二大学生を叩いてるならねー」

「本気で電話レンジ作りかねないから止めといた方がいいかと…つてか作れる？」

「マイクロブラックホールを作るところから始めよう」

「SERENおつたててデストピア目指そうぜ。んで、一夏君でも勇者にしようぜ」

「ちーちゃんにすぐに潰されるからやだー」

「ああうん、IS素手でぶっ壊せそうだしねあの人」

「実際出来るよ?・・・いや、全盛期だったら出来たから過去形だね」
「出来たんだ・・・バグってやがる」

「ステータス下がってるんだからまだバグじゃないとおもうなあ・・・
どっちかっていうとリングの方がバグだよねー」

「そもそもなんでリングが前世の俺を呼んだんだよ・・・その辺がもう
分からねえ」

「その辺はリングしか分からないよー、束さんもさっぱりさー」

「マジで曲者でしかないなこのリング・・・アイニードモアパウ
ワー・・・」

「くれるのは力じゃなくて知識だけどねー・・・」

「いつそ肉体チートにしてくれればもつと事は楽だったんだけどな」

「残念!それはこの束さんが既に受け取っている!」

「なにそれこわい・・・」

人生にチートなんて無いはずなんだけどなあ・・・いやまあ一夏君
は環境がいいのもあるんだろうけど成長チートだしなあ・・・元々一
般人が性能いい機体貰ったからってそれなりに経験積んでる奴に追
いつけるかねえ・・・ツハ!もしかして奴はニュータイプ!

ないな。前に訓練中に真後ろから撃ってみただけど反応すら出来て
なかったしな・・・そもそもニュータイプならあんなに鈍感じゃねえ
か。もうほんとなんなんだろうねこの状況、誰か助けてくれ。割と、
マジで、切実に。

原作的全校集会ですよ

宇宙で色々カオスになってたり、束博士とクロエが暴走して使い物にならなくなったり、月に旗差してさっさと帰ろうとしたら銀色の何かとすれ違ったり、大気圏突入の際の空気摩擦で死にそうになり、海に着水したら束博士が回収しに来てくれたり、そのまま拉致られたりしたけど、俺はそこそこ元気です。

夏休みはひたすら毒舌を浴びながらの試験機のテストとして働き、三食飯付き昼寝ありネット完備で仕事中でも見れる快適と言える職場で楽しんでいた。なお給料は出なかった模様：いや、お金いっぱいあるから別にいいんだけどね・・・まだ試作段階で製品になってないからね、そりやお金にならないですわ。

八月三十一日

どうやら俺は束アンリミテッドインダストリから解放されたようだ。

何故って？パラシユート背負わされて害悪幼女クロエ・クロニクルの運転する雪ウサギ型SFカーから落とされ空の上からIS学園に向けてシユール！超エキサイティン！敵襲と思われ迎撃に来たモスグリーンのラファールを装備した山田先生に驚かれたのはいい思い出だ。

その後？山田先生に一時間、千冬さんに二時間の説教を受け。そして千冬さんからの修行という名の虐待を受けて夏休み最終日を迎えた。

九月一日

始業式。

偉い人からなんかグチグチとネチツこい嫌がらせを言われたような気がするが・・・一月程クロエの毒舌を毎日聞かされて慣れた俺に死角は無かった！むしろクロエの毒舌レベルが67だとしたら21程度だったので「俺に文句言ってる暇があったら仕事したらどうですか？」っていう趣の事を言っちゃった。

その後、入学式と同様に授業が有ったわけだが・・・別段何事も無

かった。本当に、何も無かった。

九月二日

今日は、ひどかった。

昨日と違って何故か執拗に質問攻めにあつた。何故昨日しなかつたし・・・

途中で新聞部の連中が来たが「取材はNGだ！」と返したら帰つていったが・・・捏造されそう。

一番多かつた質問が「篠ノ之博士って普段でもああなの？」だ。正直言おう「あれよりひどい」

なんてつたつて下着姿に白衣を羽織つただけで俺に試作品を渡してきた事も一度や二度ではない。

だが俺の鋼の精神は揺らがなかつた！クロエが露骨に手で体を隠すようにしてたがそつちには興味ねえ。俺のタイプは包容力のありそうな年上のおねえさんだ、ぶっちゃけてしまえば山田先生のような女性だ・・・欲を言えば年齢は女子大生キボンス。

そして今日！九月三日！

二学期初めの一組二組合同実戦訓練は一組の中で抽選で当たつた一夏君と鈴嬢が空で戦っている・・・

しかしなんだ、一夏君武装に頼りすぎだな。もっと実体剣を使え実体剣を・・・そりやもう金ジムを倒したガンダムさんのように「俺が白式だ！」っていうくらいには使おうぜ。

あ、あー・・・ボロ雑巾のようにフルボッコにされた一夏君はとても哀れだったと追記しておこう。

最近俺の中で流行のデジタル日記を付け、モニターを閉じる。

俺の日記は基本的には一日二本立てだ。昼飯食べる前に少し書いて、寝る前にまた書いて。なんでそんな面倒な事してるんだつて？最近忘れっぽいんだよ言わせるな恥ずかしい。

精神的な意味では毎日毎日夢の中で殺されてるから正直余裕は出来たが・・・なんとというか、自然と脳みそから不必要な情報で抜け落ちるようになってしまった。

一夏君とかクリスとか、その他大勢のISSの動かし方とかは完全に覚えてるんだけど授業風景が殆ど抜け落ちている。

でもそれでも問題ないのさ・・・何故なら俺の脳みそはリングのおかげでチートになってしまったからさ！もう脳みそをネットに直結してるような物さ、正直ズルだよこれ！

そんな感じで変わってしまった自分に凹みつつ、感謝もしつつ、やっぱり凹みつつ、何故か俺になんかの薄いカツっぽいのをあーんで食わせてくる少佐・・・

「なんなのこれ？」

「嫁にドイツを少しでも知って欲しくてな・・・ドイツ料理だ！」

「ああうん・・・その国を知るにはまず食文化って言うよね。で、これ何？」

「子牛のカツレツ。その名もシュニツツエルだ！」

「相変わらずドイツ語はかつこいいなあ・・・ボーデヴツヒとか戦闘機みたいで超かつこいい」

「そ、そうか・・・そうか！かつこいいか！」

「超かつこいい。名前のかつこよさと少佐のかわいさが合わさり最強に見える」

「普通の人間ではこうは行くまい！」

「鈴嬢が持つと頭おかしくなって死ぬ」

「勝手に殺すな！」

向かいに居た鈴嬢に箸投げつけられたけど気にしない・・・いや、だってネタだつとは言え悪いの俺だし・・・

「鈴、箸投げるのは行儀が悪いぞ」

「うっさい一夏！なんか馬鹿にされた！」

「鳳、確かに名前はかつこいい・・・だがしかし！鳳凰ならもつとかつこよかつた！」

「強そう（確信）」

「あ、確かに炎属性っぽいな」

「やっぱり鳳凰の片割れじゃ駄目だな」

「どんな貶しかたよそれ！」

「おい鳳連れて来い。そしたら完全体になれるから」

「なる必要ないし！」

「まあそういわずに、本国戻って鳳探してきなつて鈴ちゃん。強くなるよ」

「強くなる必要ないし！もう十分強いし！」

「一夏君をコロツと落とせるようになるかもよ？」

「私が国に帰つてる間に先を越されるんでしよう！あんた達の魂胆見え見えよ！」

「……え？」

「……え？」

「鈴ちゃん……色ボケしすぎじゃない？」

「ないわー……学生の本分は学業だぜ………ないわー」

「そつ、そういうあんた達はどうなのよ！」

「俺はそんな暇が無いだけ……クリスマスは……」

「……いやだ、死にたくない……シニタクナーイ！」

「なんかトラウマあるっぽい」

「……もうコイツ訳が分からないわ」

「それに関しては同感だ、どうすりゃいいのよ……」

なんかガクブルしてるクリスは放つておいて、そろそろ昼休みが終わるのでさつさと教室に戻る事に……授業に遅れて千冬さんに訓練増やされるのはイヤだしな。

いつの間にか向こうで開催されてる一夏君のパートナー争奪戦に鈴嬢が加わりに行ったが……遅れんなよー。

案の定、一夏君は実戦授業で遅刻してきた。

なんでも「見知らぬ女子生徒に絡まれたから」だそうだ……所構わずフラグ乱立させるイケメン死ね。氏ねじゃなくて死ね。

そんな翌日。

朝っぱらから全校集会が行われた。名目は、今月の文化祭についての色々。

朝のSHRと一限目が使われ、授業がつぶれて喜んでる生徒が大半

だが・・・俺は嫌な予感しかしなかった。

ザワザワとザワついている体育館で、虚さんがマイクを使って「それでは、早速ですが生徒会長からの説明となります」と言うのでザワつきがあつという間に収まった。生徒会つてスゲー！

だがその後には現われ教壇に立ち「やあみんな、おはよう」と発言したのはあの日あの夜あの場所で俺に扇子を突きつけようとしてきた厨二女だった！いやまあ、知ってたから衝撃は欠片もなかったけど・・・あの厨二が生徒会長とか違和感しか感じねえ。

一度軽く微笑み「さーてさて、今年は色々立って込んでちゃんとした挨拶がまだだったね。では改めて、更識楯無です。君たち生徒の長です。今後ともよろしくね」とかのたまってくれやがった。テーマが長とか俺は認めん、認めんぞ！だがなんだ、周りからはレズっぽい奴等・・・以外からもなんか溜息ついてたけど、なんだ？実はあいつカリスマなのか？信じられない・・・

「ではでは、今月含め今年一年の一大イベント！学園祭！今年は例年とは少し勝手が違うから、ちよつとした特別ルールを儲けるわ。そして、その内容というのが！」

すこし大きさに扇子を取り出し、真横に振るとそれに連動してモニターが表示される。

それだけならまだ良い、良いんだ・・・

モニターに一夏君とクリス、ついでに俺の顔写真がデカデカと貼り付けられてなかったらなあ！

「名付けて！『各部活動対抗、男子三人争奪戦』よ！」

・・・こんななんあつたら俺は全力で剣道部に駆け込んでたぞ。糞テンプル騎士が、面倒な事を・・・

そんな俺の悩みを知らない皆さんは盛大に叫んでいる・・・中には女子高生らしからぬ生徒も居る。というかうるさい、超うるさい。

「皆静粛に！学園祭では各部活動が各々に催し物をして、ソレに対して投票を行って上位に入った部活には特別助成金が出る仕組みですが・・・それではつまらないということで部活動に入っていない三人の男子を上位三組に強制入部させます！」

厨二女、死ぬか？なあおい、死ぬか？生まれて初めて他人を本気で殺したいって思ったわ・・・久々にキレちゃったぜ・・・

そんな爆弾発言と、女子生徒達の狂乱と、おまけ扱いで貰っても誰も欠片も嬉しくないだろう内心でキレてる俺。そしてぽかーんとしている一夏君、なんかテンション上がってるっぽいクリス。

この怒りを一体どこに向けようか・・・

とりあえずその辺で壁ドンをして一回落ち着き、教室に戻ったら戻ったで始まった文化祭会議。

六つくらいある織斑一夏シリーズ、五つある金城クリスシリーズ、申し訳程度に添えされている二つの俺シリーズ・・・ってか俺のところがだけ二人と比べておかしくないか『鷺津翔ブートキャンプ』『鷺津道場破り』おかしいだろこれ・・・

いや、文化祭的には二人のホストがどうのこうのより許可は出やすいだろうけど・・・所詮北海道の田舎男の扱いなんてこんな物ってことかチクシヨウ。来いよ脳筋生徒達に脳筋来賓客達よ、竹刀渡してやるから掛って来い。

なんて事にはならず、少佐発案の「メイド喫茶」に落ち着いた。男子は執事をやれと言う話になったが・・・一夏君、クリス、俺・・・これ駄目な奴だよ！鈍感一人に馬鹿が二人、内二人イケメンだから問題ないだろうけど俺がやってもリアル執事みたいな感じで萌えは望めないぞ？そもそも俺が執事服来たらアサシン装束来たコーナーみたいな感じでパツンパツンになるんじゃないか？筋肉的な意味で。

そして落ち着いた先は『ご奉仕喫茶』・・・迸る地雷臭に俺は前世の記憶にある合コン喫茶を思い出してしまった。

そしてクラスの代表たる一夏君が担任である千冬先生の元に報告をしにいくって決まった際、かわいそうなので付いて行ってあげることにした。ほれヒロインズ、この辺の気配りが出来ないようじゃ一夏君が俺ルートに入ってしまうぞ、無論コツチからお断りだがな！だから頑張れヒロインズ、一夏君をこっちに来させるな！

他のクラスメイド達が黒板に落書きしたり話してたりしている教室から生暖かく送り出され、職員室です。

「……で、こうなったわけか」

「……はい、一組は喫茶店になりました」

一夏君と申し訳程度に軽く纏めたレポート用紙を教師机の上に置き、溜息をついてから千冬先生はつぶやいた。

前世の俺も文化祭で喫茶店になってスーパ―に買出しとか行かされたけどIS学園はどうなんだ？業務用を大量に仕入れるのか？

「いやまあ……なんというか、コスプレ喫茶、みたいなことです、はい」

「どちらかと言うとメイド喫茶ですかね。皆メイドで統一するみたいですし……いややっぱりコスプレ喫茶でいいですわ」

「……お前等もなのか」

「いや俺達は執事服だ、です」

「俺とか普通似合わないそうですけどねー」

「で、コレは誰の考えだ……大方騒ぎたいだけの連中だろうが一応聞いておこう」

「それが……なんとですね……」

「ラウラです」

一夏君のその言葉に鳩が豆鉄砲食らった様は表情をした千冬先生……レア顔だー、とか思っていると爆笑し始めた。コレもまたレア顔だな。隣では一夏君が俺を見て微妙な顔してるが……なにか？家族だけしか見ることが許されない表情なのか？爆笑が？

「くっ、ハハハッ！そうか、アイツか！アイツがか！あ、アイツがコスプレやメイド喫茶とはな……いやはや、良い変化と言えいいのか残念になったと言えいいのか……ぷ、くくっ、ハッハッハ！」

どうしよう、手のつけられないくらいスゲーツボってる。

手の施しようが無いので一夏君を肘で突いて催促する。

「はっ、や、やっぱり、意外です……か」

「当然だろう。私はアイツの前を良く知っているからな。おかしくないわけが無いだろう……あいつが、くくっ、こ、コスプレ喫茶とは……」

クックック、あーはっはっはー！」

爆笑しすぎて若干涙目になっている千冬さんを職員室に居る他の教師が奇妙な目で見ているが、一夏君がいるのを確認して「ああなんだ、家族の会話か」となって目線を戻したが「え！なんで驚津くんいるの！」みたいな感じで二度見された。多分これで合ってるはず。

「ふう．．．さて、報告はコレだけだな」

「はい、これで終わりです」

「よろしい、ではこの申請書に必要な機材と数、必要な食材類を書いておくように。クラスでちゃんと話し合うように．．．それと、提出期限は最低でも一週間前だ．．．わかったな」

隣で「あ、やべ、面倒だな」とか顔に出てる一夏君の代わりに「一夏君に丸投げしますんで大丈夫ですよ」と答えておく。

「ちよ、おま、翔！」

「もし提出期限過ぎても提出できてなかったら一夏君．．．皆が悪乗りで考えた案やらせるからな」

「ほう、おもしろそうだな。詳しく聞かせろ」

「そうですね、じゃあ一つ一つ．．．」

「おいばかやめてくれ．．．頼む、止めてくれ．．．」

そんな一夏君は千冬さんにヘッドロックをされているので．．．俺は記憶にある黒板に書かれていた織斑一夏シリーズを上げていく。上げていくと唸ってる一夏君をよそに他の教師達が集まってくる。片棒担いでいる俺が言うのもなんだけど．．．なにこれかわいそう。

原作的原作主人公が生徒会との接触ですよ

日記書いたり、昼飯食べながらネタに走ったり、全校集会があったり、出し物の案が男二人のネタで埋まったり、文化祭の出し物案を担当に提出しに行ったら爆笑されたり。色々あつたけど、九月に入ってから俺は元気です。

一夏君が俺の織斑一夏シリーズを読み上げていく度に唸ってるが、周りの教師達が「おお！」とか「その発想はなかった……。」とか言う度に唸り声が呻き声に変わっていく。耐えろ一夏君……耐えるんだ……

公開処刑から開放され、頭を摩る一夏君と解散していく他の教師達。何故かほっこりしてる雰囲気を出している千冬さんに、とりあえず待機してる俺。

「さて、織斑並びに鷺津。学園祭には各国の軍事関係者やIS企業関係者等が多くやってくる。一般客も、生徒一人につき一枚来場チケットが渡されるから来ないわけではないが、あまり……渡す相手は考えておけよ」

「あ、はい」

「あつはい」

久しぶりに連絡して早坂さんにでも郵送するかな、夏休みに来てたメールもスルーしてたし流石にかわいそうだな……

職員室を出る前に「先ほど言った事をしつかりとクラスの連中にも伝えておけよ」と念を押されながらも頭を下げて退出。するとそこに居たのは厨二会長……カエレ!

「……えっと、どうして警戒してるのかしら?」

「それを言わせますか……」

「一夏君、俺先に教室戻っておくから……後、頑張れ」

「は?いやそれはないだろって翔!」

「貴方にも少し話したいことがあるんだけど?」

「お断りだ。一夏君とでも話してろ」

「だから翔、頼む。一緒に居てくれ」

「その女だけはマジで勘弁してくれよ。何時襲ってくるか分かったもんじゃねえ・・・一夏君も気をつけるようにな、喉に扇子突きつけられる前に縁を切っておくのが個人的にはお勧めだ」

「え、お前そんなことされたのか・・・対応が全然違うな」

「恐ろしい女だぞ？人の後ろつけて来た後コツチの言葉に耳も貸さずに考えもせずに攻撃してきたんだからな」

「あの時は避けたでしょ！まだ攻撃はしてないわよ！」

「攻撃未遂の時点でアウトだ。暗殺してくるストーカーだからマジで気をつけるよ？」

「お、おう・・・」

「その反応、もしかしてもうなんかされた？」

「いや、まだからかわれただけ」

「これ以上何かされないように千冬さんには俺から言つとく、邪魔されないように足止めよろしく頼む」

「分かった！全力で構う！」

一夏君の頼もしいサムズアップを確認してから百八十度ターンをしてドアを開ける。後ろで「ちよつと！」

本人を目の前にして本人の相談ってどんな扱いなの！」なんて嘆きが聞こえるがドアを閉めたらもう聞こえない。ドア先輩マジパネエつす。

「廊下がなにやら騒がしいが・・・また何かやらかしたのか？」

「せんせー、自称セイトカイチョーが一夏君とボーイミーツガールです」

「分からないが、大体分かった」

「え！マジで！」

「後二、三回程本気で打ち合えば目を見るだけで分かるようになるだろう」

「なにそれこわい・・・」

「それなりに力があれば時期に身に付くだろう」

俺、そこまで人間辞めたくないんですけど・・・でもなんか出来るようになったら面白そうだな、目を見れば分かるとか・・・

「で、一夏君の件は？」

「・・・保留だ」

「・・・いいんですか？」

「本当の所を言うとな、お前達三人の中で一番弱い織斑・・・一夏に護衛をつけるのは悪い案ではないんだ」

「え、なにそれ・・・まさか学園にヤバイ奴でも潜入してるんですか？」

「ソレはないだろうが・・・学園祭までに一夏には更識に鍛えてもらう予定だ」

「俺と一緒に駄目なんですかね」

「駄目だな。単に体を鍛えるだけならそれでもいいのだが、それ以前の問題だからな」

「それ以前？」

「性格的な問題だ。力をつけるのも大事だろうが、あいつにはそれ以上に大事な事が足りていない」

「・・・多分それ俺にも足りてないと思うんですけど」

あれでしょ？ 信念的な。俺なんて世界救うだけ？ 身の程を弁えないにもほどがあるだろ。

「お前には師範氏が居たからな。一夏にとって、お前の師範氏が私であればよかったのだが・・・いささか家を空けすぎてな」

「目標が無い、みたいな感じですかね」

「お前は何を教わった」

教わったと来たら・・・あれだろ、教わった剣術の名前からして・・・

「悪い奴等をぶっ飛ばせ」

サムズアップしながら答えたら固まられた・・・解せぬ。

「・・・それでいいのか？」

「師範曰く『気に食わない奴を殴りたくなった時、一発殴って後はソイツにボコられるか、それともそのままソイツをボコれるか。だったら後者の方がいいだろう？』」

「なんともまあ・・・確かにその通りではあるが暴論だな」

「穏やかな外見してますけど中身は自分の意見貫いたまま死にそうな人ですからねえ、夏に戻って挨拶しようとしたら『旅に出た』みたい

ですし」

「旅？それはまた突拍子も無いな」

「師範らしくはありますけどね・・・さて、報告も終えたんで戻ります」
「更識にも悪気は・・・無いだろうと思うぞ」

「ああ、無いって言い切らないんですね」

「実際に言い切れんからな、猫の様な奴でな・・・実力は、確かなんだが・・・」

「ああ、強い人に限って頭おかしいんですね分かります」

「何故私を見て言った」

「ほら、今だってアイアンクローしてきてる・・・これですよこれ」

「・・・コレなのか？」

「強い人ってどっかしら自分の強さ、ああ、腕力的な意味での力を分かかってないから割と気軽に出来るんですよね」

「？力加減はしてるぞ」

「それですよそれ、『抑えてるんだからいいだろう』理論。どうかと思いますですよ？」

俺で例えたら・・・『俺に従え！』ってリングを使うようなもんだ。『自殺しろ』って言わない辺りに加減している、って言われてもあれだろ？頭おかしいだろ、って思うだろ？そういうことだ。

「・・・ふむ、初めて言われたな」

「そりゃ、普通の人じゃ言えませんよ・・・世界最強に対してこんな事」
「・・・私、強くなりすぎてしまったのか」

「いやそんな主人公みたいな・・・正直出席簿も軽く頭に載せるくらいの方でやっていただけると助かるんですが」

「分かった。お前以外にはそうしよう」

「・・・え？あ、あれ？お、おかしいぞ？」

「その代わり、お前には少し割り増しだ」

「お・・・おおう・・・やらかしてもーた」

「計算違いだったな」

「読みが外れるどころかバッターだったらデットボール。ピッチャーだったらホームラン喰らってる感じですよ・・・」

と、肩を落としてガツクリとしていると廊下からガラスが割れた音が響いた。

「……またあれか」

「……あれ？」

「更識が生徒会長というのは知っているよな」

「ええ。俺達の長とか認めないですけどね」

「で、だ。IS学園の生徒会長というのは生徒で一番強い者になるのだ」

「じゃ俺じゃね？」

「まだ選挙してないだろう……そして、アイツを討ち取ったら討ち取った者が生徒会長になるのだ」

「なにその恐ろしい制度怖い。IS学園怖い」

「実際コワイ！アイエエエ！ナンデ！女子生徒ナンデ！つてなりそうなくらい修羅ってるな。」

「と言うわけだ、お前も襲うなら時期を見て襲えよ」

「おかしいな……普通の学校じゃ止められるような発言を聞いてしまった」

「物理的にだぞ？性的にじゃないぞ」

「分かってますよ！そもそもあんなのに対してそんな気も起きませんわよー！」

「……まさかとは思いが……ホ」

「それはねえよ！それだけは無いわ！」

「ではまさか……不能」

「ソレも違う！と言うか単純に好みじゃないんですよ！俺の好みは山田先生みたいな性格の人ですよ！」

「ほう、そうなのか」

「みたいな性格の人なだけなんで、そのの所よろしくお願いします」

「真顔で言うな、少し怖いぞ」

「ええ、意識して真顔になってますんで。勘違いされたまま情報が出るのって一番怖いんで」

ソースは中学二年の時の友人。遊びで厨二してたら「アイツつて実

はあんな性格だったんだよ」と広まった。ちなみにどつかのラスボスみたいな口調、破滅主義な感じ。その後彼は一年間周りの要望に応えてそのキャラを貫き通していた。痛々しいを通り過ぎてかつこよさすら覚えたのを覚えている。

「わかった、この事は私の胸に仕舞っておこう」

「じゃあ俺、改めて教室に行くんで」

「私は生徒会長争奪戦の後処理だ・・・面倒だな」

「なんというか・・・お疲れ様です」

少しキレそうな千冬さんと職員室を出、生徒たちをまとめ上げている千冬さんの後姿を見てから教室に向かった。教師って大変なんだな・・・ごめん、中学時代の担任。クラス単位で散々馬鹿やって。

「最近どうよ、進んでる？」

「それ・・・昨日も言ってた・・・」

「ありや、そうだったけ？」

今日の俺は平和な放課後を過ごすために整備室にやってきている。と言うか、今日もだ。

そして初めよりも随分話せるようになった簪嬢に感涙しそうな俺である。

「脳筋・・・なのに、頑張ってる」

「応ともさ！夏に色々あったからな」

「・・・篠ノ之博士？」

「その通り。『試作品とは言え整備くらい出来るように』ってな」

勿論嘘である。整備どころか改造、それ所か自作できるんですよ、チートのお蔭で。

「そう言えば・・・本音が、織斑君とおねーちゃんが・・・」

「ああうん、一夏君には悪いが犠牲になってもらおう」

「・・・どうということ？」

「俺も前に絡まれたんだけどな・・・あの女、厨二だったんだよ」

「・・・え？」

「人のことアサシンとか言い出してさ、挙句攻撃してきたんだぜ？そ

れも初対面の時にだぜ?どんなだよ。あの人絶対ヤバいって」

「そう・・・だったんだ・・・」

「そうだったんです。何とかならない妹ちゃん?」

「・・・そんなに仲良くない」

「そうなのか」

「・・・そうなんです」

しかし・・・平和だ。平和すぎて何が起きても今の俺なら「あららうふふ」とスルー出来るはずだ!・・・そう、出来るはずなんだ。だからさ、頼むからさ・・・

「いい、あれが簪ちゃんよ」

「翔と仲よさそうですね」

「そうなのよ!アイツが簪ちゃんをたぶらかしてるのよ!」

「いや・・・翔に限ってそれはないんじゃないかと」

「じゃあ誰ならあるのよ!」

「クリスかな?」

ドアから顔出してる厨二女と鈍感男がこちらを覗いている。本人達はいたって真面目に隠れてるつもりなんだろうけど・・・横目に見ても頭のとっぺんから肩まではみ出しているのが見える。馬鹿なんじゃないの。馬鹿なんじゃないの!

「・・・分かってる・・・よね」

「無視だ無視。妹的には姉の相手をするのは大事だろうけど・・・あれはもう姉じゃない、ただの変態だ」

どこの世界でも姉というのは変態になる運命なのか・・・いや待て、千冬さんは違うはずだ。確かに一夏君にはちよつと厳しいが・・・え、嘘だろ・・・まさか、嘘だろ?」

「・・・どういふことなの」

「割と本気でそれだわ。なんでちよつと仲良くなってるんだよ・・・」
「わけがわからないよ・・・」

「マジで、それな・・・もうそのまま仲良くしてりやいいんじゃないかな」

「え・・・え・・・?」

「なに、イヤなの？」

「・・・どっちも、苦手なの」

「確かに苦手な奴等が手を組んだらイヤだな。よし、全力で手を回してみれば？」

「いや・・・関わりたくない」

「恐ろしいくらいに姉妹仲冷め切ってるな。兄とか姉とかいるとそうなの？」

「・・・上が優秀なら、ね」

何時に無くダークな雰囲気の時嬢だが。後ろは後ろでなんか凄いくらいな事になってるっぽい。

「がんばじぢやああん」

「か、会長。落ち着いてください」

「だって！だって簪ちゃんが！関わりたくないって！」

「出来る姉って言うてますから！ちゃんと評価してくれてるから！」

「そつ、そうよね！的確な評価よね！私のことちゃんと見てくれるってことよね！」

なんか必死に自分を取り戻そうとしている・・・だが一夏君、お前はそこで突き落とすべきだ。ソイツは害悪だ、クロエ並みに。だから排除すべきなんだ。

「そろそろ終わりの時間じゃね」

「・・・え、もう？」

「・・・マジでその内餓死でもして地縛霊になるんじゃないのか？」

「そこまで酷くない・・・それに、そつちだって・・・修行のし過ぎで・・・なるほど、言われる立場になると確かにムカつくな」

「・・・え、意識しないで言ってたの・・・今」

「正直気付かんかった。すまん」

「いや・・・私も言ったし、お互い、さま」

「よしじゃあ部屋帰ろうぜ。千冬先生にどやされるのはイヤだからな」

「私・・・鼓膜破れちゃうかも」

「なにそれ貧弱すぎワロエナイ」

後ろからつけてくる二人をスルーし、簪嬢を何事も無く部屋まで送り届けた所で一人減り、自室に戻ってカメラチェック。出るわ出るわ盗撮カメラ・・・これ、俺がカメラ設置して録画してたら本気で物的証拠で勝訴になるんじゃないかね？・・・いや、権力でもみ消されるとかさそれそうで怖いから止めとこう。

原作的特訓を静観ですよ

厨二女と遭遇したり、千冬さんと話したり、簪嬢と並んで作業してたら後ろから厨二女と朴念仁が観察してきてたり、もうなんかいろんな意味で駄目な女と一夏君が仲良くなってるっぽいことに憤慨してる俺です！

簪嬢は簪嬢で厨二女に対しての感情が今までとはなんか違う方向にシフトしていることを部屋に送っている最中に俺に報告してきたりしたけど、俺は元気です。

なんというか・・・駄目な方向に吹っ切れたようです。具体的に言うとか？「放置するスタイル」と言えば伝わるだろうか。駄目・・・いや、駄目すぎる姉を構ってやれよ妹ちゃん・・・
「つていうことがあってね〜」

「ほうほう、一夏君も大変だな・・・ワロス」

朝食を取っている最中情報収集に努める。本音嬢から一夏君が生徒会室に連れてきた、と言う話を聞いている。

厨二会長が連れてきて、一緒にお茶して、会長から剣道場でエロハプニングが起きたつて聞いた、と言っていたことまで聞いた。

一夏君・・・お前つて奴は一体どこの主人公だよ・・・クソが。いやいらねえよ？そんなスキルいらねえよ？あつても俺じゃ一回いい思いついて終わり。社会的な意味で。

「しかし・・・もう本当に面倒事しか起こさねえなああの女」

「それがかいちよーの趣味みたいな感じだしね〜」

放課後に勃発した修羅場の話を聞いて俺はもう本気で暗殺してやるかと思つた。はじめてのあんさつ！

あんなのに俺の大事な大事な殺人童貞捧げたくないから止めとくわ。

「わしわしはかいちよー嫌いなんだね〜」

「嫌いとかそういう次元を超越して関わりたくない。視界どころか意識の中にすら留めたくない。一夏君からアイツの名前が出たら一夏君殴りそうになる位関わりたくない」

「う、うわあゝ・・・」

本音嬢にドン引きされるとかどんなだよ。そりや露骨に嫌ってる自覚はあるけど引かれるほどか？誰だって居るだろ、関わりたくも無い奴。俺にとつてのソレがアイツなだけだ。

「かいちよーにもいいところはあるんだよわしわし！」

「残念！今更いいところを見せられたところでもう手遅れだ！」

「どんな初対面だったのか気になるな」

「アイツにでも聞け。俺は思い出したくも無い」

「ええゝそんなあゝ」

「ほら、そろそろ朝食の時間も終わりだ」

「うゝまだ食べ終えてないのに」

ちなみに、本音嬢が食べ終えるまで待つてた。途中で一回ジャージ千冬さんに絡まれたけど特に何事もなかったです。

放課後になりました、どうも驚津です。早速ですが・・・

「かかってきなさいい」

「ツク！全然当たんない！」

「むしろこちらが一方的に攻撃されてますわね・・・」

「・・・俺、コレ勝てる気しねえんだけどどうよ一夏」

「奇遇だな、俺もだよクリス」

厨二会長vs一夏君・クリス・オルコットさん・鈴嬢の対四の訓練をしています、女性陣の空気が最悪です。

男二人は完全に訓練するって意識でやってるのに対して女子二人が「死んでもぶん殴る」な勢いでやっている。というかあの二人は喧嘩っ早くてイカンでしょ。

そして問題の厨二会長だが・・・おもつくそ煽ってる。とびっきりの笑顔で。「そんなヌルい攻撃見てなくてもよけられるわよ？」とか「スローすぎてあくびが出るわ」とか・・・なんなんだよあの厨二、なんでちよつと世紀末救世主入ってんだよ、お前の武器ISと扇子だろ。

とかまあ、そんな様子をのんびりアリーナの観客席でのんびり観戦

させてもらっている。

少佐とデユノアvs会長とか。会長・一夏君vs篠ノ之さん・クリスとか。楽しそうではあったけどテメーがいんなら参加しねえよ厨二女、訓練じゃなくてガチになりかねないからこっちみんなクソが。アイツ居たら俺やることないし色々見たし・・・そうだ、整備室行こう。

「と言うわけで来ますた」

「・・・真っ先に、私のところに・・・なんで？」

「そりゃ、同世代が他にいないからに決まってるだろ！本格的に勉強してる他学年の人と一緒にとかやってる事も理解できないんじゃないかとね」

整備室は毎日と言うわけでもないが基本的には二、三年生がそれぞれ五人くらい居る。ぶっちゃけ少ないとも思うが、彼女達曰く「その日一日の授業の分からなかったところや、気に食わなかったところの復習や理解をするためにきている」だそうだ。

勿論多いときは多い。簪嬢の隣で作業できないくらい居るときもあるが、誰も居ないときとかもある。

とまあそんな解説は置いておいて、俺の弁に不満そうな顔の簪嬢を見て・・・お前俺に何期待してんだよ！って言いたくなかったがやめておいた。

「なに？どんな返事なら好みだったの？」

「・・・別に」

「『実はお前のことが好きだったんだよ！』とでも言えばよかったのか？需要がねえだろ需要が」

「・・・あるんじゃない？」

「・・・あるのか。ソレはそれでショックだな」

「え・・・」

「簪嬢。君にかけている眼鏡に定価以上の価値がある、って言われたらどう思うっ？」

「へ、変態・・・」

「だろ？変態となんて関わりたくねえよ俺」

「・・・そうだね。そう、だよね」

きつと友人に変態いたんだろう・・・何も言うまい。

「・・・ちゃんと調整、してる？」

「いつも通り微調整してるけど・・・いきなりどうしたん？」

「もうすぐ、キャノンボール・ファスト・・・があるよ」

「キャノ・・・え？何？」

「やっぱり脳筋・・・」

「教えてくださいよ簪さん」

「いつ、いつもよりさわやか・・・！」

なんか凄いドン引きされてるんですけど・・・俺今どんな笑顔浮かべてんだろ、本気で疑問だわ。

「お、教えるけど・・・一言で言えば、ISでのレース、だよ」

「ISでレース・・・何それカオスの予感」

「察しの通り・・・攻撃有り、だよ」

「うわあお、なんだか凄いことになっちゃいそうだぞ」

「動画あけど・・・見る？」

「見る見る。テンション上がったきた」

その後、作業をする簪嬢の隣でじつくりと過去のキャノンボール・ファストの動画を見せてもらったが・・・スゲエなこれ、銃弾飛び交うし、ロケットが画面を埋め尽くしてたり、思いつきり斬りかかっている奴もいるし、スモークで画面見えねえぜ・・・

相手を蹴落とす、と言う行為においては男よりえげつないのが女子だからな。早坂さんから散々聞かされてもうお腹いっぱいです。

なんか一夏君達が皆で仲良く厨二女と一緒に訓練してて最近放課後はもっぱら整備室にこもってる俺です。最近と言っても昨日からだけどな！

まあどうあがいても整備室なんで、厨二女が居ようが居なからうが別にどっちでもいいんだけどな。

そして俺は、キャノンボール・ファスト用の調整に取り掛かってい

る。普段の調整はそれで記録しておいて、とりあえずは速度特化用の型紙を作っている最中だ……

「やっぱ試しながら調整繰り返し返してった方が効率的なんかねえ……」
「トライ・アンド・エラー……?」

「そうそう、人間失敗しなきゃ学ばないからな。データとにらめっこしてても結果は分からないしな」

「……やっぱり脳筋」

「だから止めてくれて。俺も嫌がること言っていないだろ?」

「……じゃ、残念イケメン」

「なにそれこわい」

「……え?」

「え?……だって俺、面そんなに良くないだろ」

「……顔面偏差値、64・7」

「なるほど分からん」

「所詮脳筋……」

「他の例えをくれ、例えを」

「人間……顔じゃないから」

「なんか知らんけど慰められた!」

「ほら……私、他の人の顔知らないから」

「なんか、ごめん」

なんともいえない雰囲気になってしまったが、別にそれでへこたれる俺でも簪嬢でも無い。次の瞬間には、

「スツカリ忘れてたでしょ……私に、知り合いが少ないこと」

「俺の知る限りじゃ本音嬢とその姉……後は整備室に来る上級生方か」

「後は、食堂の人達……」

「ホント少ねえのな……クラスメイトは?」

「そもそも話さない」

「こいつあヒデエヤ」

「でも、これでいいって思ってる」

「駄目でしょ、ソレは駄目でしょ。少しでもいいから前に進もうぜ」

「……実は、鷺津くんと居るだけで……いっぱいいい」

「知らないうちにそんなに苦労掛けてたの俺！ごめん！なんかごめん！」

座ってる椅子から腰を上げ、ジリジリと整備室のドアへと向かう。そんな俺につられたのか簪嬢もジリジリと何故か俺との距離を詰めて来る……え、なんで？

「なんでコツチ来るんだ簪嬢。俺は君の錘でしかないんだろう！」

「もう錘に慣れちゃった……鷺津くんの錘と、同じ」

「ハッ！その発想は無かった！」

いやまて……でもそれってどつちにしろ重いことには変わらないんじゃないのか！

「こんな場所にいられるか……俺は修行をするぞ！」

「待つて……それは、フラグ」

「一体何フラグだよ！死ぬの？俺死ぬの!？」

「そう……鷺津くんはもうすぐ、スキーストックで刺されて」

「マジか、誰に殺されるんだ……俺」

「私」

「……え？」

「本音、大切」

「そつち！ヤンレズなの！」

お互いにネタに走ったとはいえどういふことなの……

「つてか俺が本音嬢狙ってる事になってる事になってる！どういふことなの！」

「え？」

「え？」

「違うの？」

「違うわ！そもそもそんな事考える余裕なんてねえわ！」

「……え？」

「……え？」

「なにそれこわい」

「ぶつちや俺、切羽詰ってるんっすわ。やらなきゃならんことがあつてな」

「そう・・・頑張つて」

「おう。頑張る、鷺津君超頑張る」

なんとというか・・・正直世界救うって言われてもイマイチやる気しなかつたけど、知り合いを助けるって方向なら何とかやっていけそうだな（確信）。

ネタからの唐突なシリアスとか。どうよ、この落差。普段やらないネタだろ。

というかそろそろネタの流れを切らないとどうしようもなかつたからな、やむを得ずシリアスだ。

「・・・そろそろ帰ろう」

「ネタやって疲れたわ、もうしばらくはいいな」

「・・・けど、楽しかった」

「本音嬢とやれ。いやマジで」

簪嬢割とマジにどんなフリが飛んでくるか分からないだよ。今回はなんか殺されることになったけど、前は結婚。その前は知り合いが死ぬ。そのまた前は事故る。なんだこのレパートリー・・・もうやだ寝る。

今日も今日とて放課後整備室。

と思つたか馬鹿め！第三アリーナ観客席だよ！

横には本音嬢がパンをもきゅもきゅと食べている。簪嬢も誘つたが「姉、殺すべし。慈悲は無い」とか言い出しそうな雰囲気だったから整備室に置いてきた。

その際にチラつと簪嬢が妖怪本音置いてけ、に変貌したが、本音嬢の説得でいつも通りの彼女に戻つた。あれは簪嬢じゃない、きつと彼女の中のナニカだ。

しかし・・・相変わらず訳わかんねえなアイツ。

アイツってのはまあ色々な人物を指してのことだ。

まず一夏君。

なんで今ボロボロな動きなのに本番になったら機敏な動きが出来るんだよ。本番に強いタイプ、と言えば耳に聞こえはいいが、逆を言

えば錬度が足りない、勢いしかないって事だ。それを直すために今こうしてるんだらうけど。

次、クリス。

考えても纏まらないので放置で。

本気で分からねえんだよお前。とりあえず、いい奴ではある。

最後がオメーだよ厨二女。

本性見せろ、以上。

ヘラヘラふらふらしてるのは確かに楽だが、その結果がお前の妹からの扱いだよ！放置していくスタイルだぞ、少なくとも家族への対応じゃないだろこれ。

後はなんだ、あれだ。素を俺に見られたのに俺の前でも仮面被るの止めるや。今更かつこつけてなんになるよって話だ。

等と適当にのんびりしていると「本音。それに鷺津くん」との声が掛けられた。

うん、俺に話しかけててきなおかつ本音嬢を呼び捨てにする人と言えば？

「虚さんじゃないですかーやだー。どうしたんですか？」

「お嬢様を探して・・・って居ましたね」

「最近随分お熱ですな」

「鷺津くんも金城くんも反応悪いって愚痴っていたしね。織斑君は反応がいいんでしょう」

「適当にあしらっとけばいいのに自分から首を突っ込んでいくスタイル・・・嫌いじゃないけど真似したくないな」

「簪お嬢様の件は？」

「趣味が合うから仲良くしてるだけだよ。特撮ヒーロー好きとほいいセンスしてるよ」

前に休憩中に「好きな番組何？的な話題から知ったことだが、いいセンスしてるよホント。重量感あるよな！

「私は訓練がひと段落してからお嬢様を連れて行きますので、鷺津くんは本音を先に生徒会室に連れて行ってもらえませんか」

「お安い御用さ布仏の姉御。俺ツチに任せときな」

「・・・どんなキャラです？」

「昼休みに本音嬢と遊んでて出来た『下っ端山賊』的なキャラ」

「良く分かりませんが、任せましたよ」

「あの女と廊下ですれ違わないためにもさっさと仕事を終わらせて見せませうぜ」

「・・・頼みましたよ」

スゲエ怪訝そうな顔で見られたけどコレネタですからね！

原作的文化祭導入ですよ

本音嬢から情報収集したり、厨二女による一夏君強化訓練を眺めたり、整備室で簪嬢と戯れたり、アリーナの観客席で虚さんと遭遇したり、まあ楽しくやってます。

虚さんの会話の後、俺は俺で本音嬢を無事に生徒会室へと宅配し、残りの放課後をどう有意義に使うかと頭を悩ませていたときであった。「鷺津くん、今いいかしら」と、この間と比べて少しはマシな声で話しかけられたのだ。正直全力でスルーしたいが、なんか真面目な雰囲気なので普通にやめておいた。

「あの時はごめんなさいね。私も焦ってたのよ」

「焦ってるからって……いやまあいいか、謝ったし。で、なにか用ですか」

「いえ、一夏くんをね。ISだけじゃなくて体も鍛えようとしたんだけど……鷺津ブーツキャンプがどうのって凄い強いよ。一体貴方、なにをしたの?」

ココに来て俺の首を絞めるのか、俺の一夜の過ちこと鷺津ブーツキャンプよ……もうやらねえ、絶対やらねえぞ!

「あれは……そう、あれは……織斑トレーニング」

「織斑トレーニング?……って、それってまさか」

「ええ、強い方の織斑さんです。彼女の下地を作ったトレーニングをほんの少し教えた程度です」

「そ、それだけであんなになるのかしら」

「世界最強のトレーニング。その一端ですよ。今の段階で生身の一夏君がどれくらい強いのか分からないけど少なくとも後五倍は強くなってもおかしくないですかね」

と言うのは自分の感覚的な物だ。ちなみに言うとブーツキャンプ時の一夏君のレベルが七くらい、だと思う。トレーニングを完遂すれば三十五レベになる。ちなみに鷺津ブーツキャンプした段階での俺のレベルは十八か十九くらい。なお篠ノ之さんのレベルは当時十六。

剣道に限定したら俺のレベルは一夏君くらいなので剣道したら負ける。今でも負ける。

「あれの五倍ですって！・・・わ、私も教われれば強くなれるかしら」
「戦い方違うんでそこまで強くはなれないんじゃないですかね。俺だって効率的な面で言ったらトレーニングの六割くらいしかモノにできてないですし。多分あれ剣士用のトレーニングですわね」

「やっぱり自分に合うトレーニングをしないと意味ないのかしら・・・」
「完全に無意味って程じゃないにしろ無駄は出ますね。たまに織斑先生がトレーニングを見て直接直してくれてるから六割であつて初めなんて三割行つてたかどうか」

「その特訓を、一夏くんは完全に自分のものになってるって事でいいのかしら」

「もしくは、篠ノ之さんと協力して改良しているかつて所ですね。あいつ等のあれも俺からの又聞きみたいなもんですし・・・多分織斑先生直伝なら改良する気も起きなかつたんじゃないですかね」

「世界最強の教え、だから間違つてない！って感じかしら？」

「三人とも同じ流派だつてこともあるんでしょうけどね・・・で、どうです？一夏君のISの方は」

「知つてたかしら？練習は駄目でも本番は凄い、って人間は意外と多いのよ？」

「つまり駄目駄目と。普段から福音の時張りの実力があればなあ・・・ピンチにならないと使えない駒なんてピーキー過ぎんよ」

「そのための特訓よ。参加してくれないかしら？」

「鷺津ブートキャンプを自分のものになってるって事はそれもうブートキャンプ卒業したのと同じことですから。後は勝手に育つてくれつてことでパスで」

さつきのレベルの話の続き。

千冬さんのレベルが九十越えは確定なわけで、低い次元で争つたところどんぐりの背比べ程度なのだ。つまり、俺が一夏君鍛えてもほぼ無意味つてことだな！

「・・・良く分からないところにポリシーがあるのね」

「あんたが俺をアサシンつてのだと思って攻撃してきたのと同じだよ」

「うっ、そのことはもう謝ったでしょ！それはそうと、なんでこんなに話してくれるのかしら？」

「今のアンタがマシだから。少しでも仮面被ってみる？即無視するからな」

「分かったわよ・・・でも、本当に分かるの？」

「織斑先生曰く『達人ともなると感覚で分かる』。俺はまだそこまでじゃないけど、一回アンタの素を見たからそれで判断できる」

「・・・貴方、本当に人間？」

「失礼な、織斑先生とか篠ノ之博士ほど人間やめてませんよ」

そう答えたら答えたで溜息吐かれた。厨二の分際で失礼な奴だな。言動ぶっ飛んでる人間と言動がいたって真面目な化け物、どっちが怖い？俺は両方怖い。言動ぶっ飛んでて化け物を一人知ってるけどなー！お前のことだよ篠ノ之束エ！

「今更なんだけど、なんで急に普通に対応してくれるのかしら？」

「今のアンタがマシだから。謝ってきたし、素だし」

「本当に分かるの！」

「分からなくつても今の反応でバレるぞ・・・で、そういうそつちこそ。なんで謝ってきたんだ」

「・・・虚に少し説教されて」

「今度菓子折りでも持って土下座訪問しなきゃな」

「しなくていいわよ！」

絶対してやる。生徒会室で虚さんに向かって全力で土下座してやる。アクロバティックな土下座をかましてやる。具体的に言えば審査員が全員十点出すくらい。

「んじやま、生徒会頑張つて」

「・・・なんか腑に落ちないけどいいわ。またね」

・・・なんか普通に話せた事に違和感を感じるが、厨二つてなきゃ普通の人だと言うことが分かっただけでも十分な収穫、と思うことにしよう。

その夜、一夏君から「部屋に会長が居る、千冬ねえ呼んでくれ」とメールが来て評価が暴落したかな！駄目だアイツ！

その後？勿論即刻千冬さんに通報しましたが、何か？

何故かとても不機嫌な千冬さんにボッコボコと言う表現もフルボッコという表現でも足りないくらいボコボコにされ、体を引きずりながら教室に辿り着くと・・・篠ノ之さんが絶賛不機嫌でした。

理由を聞けば：「お前か厨二女。少し見直した俺が馬鹿だった。問題しか巻き起こさないならもう死ねよお前。」

同じく不機嫌だった少佐に話を聞いたらナイフ片手に襲い掛かったら投げ飛ばされた模様。そしてその話に同調して篠ノ之さんも今朝ISを使つて襲ったらISで無効化された模様。そしてその二人で仲良く作戦会議を始めた。

とりあえず一言。

生徒最強ってんなら生身でIS無力化しろよ。素手とは言わんよ、俺だつて素手じゃ無理だし、千冬さんでも多分無理だ。千冬さんに刀を献上しろ、打鉄なら三つくらいまでなら何とかしてくれると思う。俺は無理だ、刀あつても生身じゃ無理だ。リング解禁しようやくだ。

とまあ、彼女達の話聞いて分かったのだが・・・千冬さんが、あの千冬さんが、厨二女と朴念仁の同居生活を認めたのだ。よく折れたなああのブラコン・・・

勘弁して欲しいのが一夏君からのヘルプメールだ。

『会長にじやれ付かれて困る。あの人俺を男って思つてない』とか、『風呂上り、俺死ぬ』とか・・・お前・・・そりやお前に惚れてる子達に残酷だろ・・・だつてよ、

『自分達が攻略できなかつた惚れてる男が、突然現われた女に攻略されてる』光景を見せられるんだぜ？・・・ぶっちゃけただけの地獄だろ、それ。

個人的に唯一期待していたデュノアもデュノアで一夏君となんか知らんがクリスとの間で揺れてるし・・・このままじゃデュノアはク

リスルートかな。頑張れ一夏君、なんか知らんが超頑張れって応援したくなった。毒電波でも受信したか？

食堂でのんびり簪嬢と本音嬢と食事をしていたら一夏君を中心に騒がしくなったり・・・簪嬢はレイプ目状態でブツブツと何かを呟きながら飯を食べていたり。一緒に食べていた本音嬢が「おもしろそ〜」とか言いながら騒ぎの輪の中に特攻していったりとか、今日もI S学園は平和です。

最近、授業が終わって放課後になると一夏君が「ドアを開けたら数秒で会長」とかAVのタイトルみたいな事を言っただけで倒れることが多くなってきた。いや、俺はまだ脱法行為をした覚えはないぞ！タイトル知ってるだけで中身なんて知らないぞ！知らないからクリスと一緒にネタに出来るんだって話でもある。

メンタルを削られている甲斐あってか腕前はジリジリと上がってきているらしい。

が、そんな些細なことは置いておこう。

「いやー、まいるわー」

文化祭である！キングクリームゾンを喰らったような気がしたけど気にしない。

「指名入りすぎてまいるわー」

我等がクラスの『メイド喫茶』は予想以上に好評だ。

なんか知らんがいつの間にか作られていた『メイドにご奉仕セット』と『執事にご奉仕セット』・・コレが意外とカオスになっている。なお、俺だけ男三人の中で一人だけ服装が白。つまり・・俺は調理班なのだ！調理用の白衣に何故かピンクのエプロンで雑用係が運んでくる食材をリングの知識をフル活用してとても俺が作ったとは思えないほどの美しいパフェへと変貌させていく。リングの知識つてスゲー！和菓子とか簡単に作れるぜコレ！

しかし・・・どうしてこうなった？

しかし、そのリングゴ知識のせいで急遽『この料理を作ったのは誰だ！』という俺専用メニューが追加され、ネタで頼んだ人の驚く顔がこ

れが意外と面白い。内容は俺が目の前でフルーツをカットしてボウルに飾り付けて提供するというものだ……俺じゃなくてもいいんじゃないですかね。

それでも結構頼まれて、結構ノリノリでやってはいるんだが……これ大丈夫か？ 値段的に言って結構勇氣要るぞ俺専用メニュー。ネタで頼むもんじゃねえと思うんだけどなあ。

「つてかバツクヤード入って来るな、仕事しろ」

「巷で噂の名物シェフが何を言ってるんだか……」

「俺ちよつと調理師免許取ろうかなって思ってた所だ」

「おう、翔なら取れるぜ。俺が保障する、俺より料理上手いな」

「一夏君、なら手伝えよ……この女子達、料理したこと無いって奴のほうが大半だからさ」

「ま、女子高生ってそんなもんだろ」

「え？ 家事とか手伝ったりしないのか？」

「男は小遣いとか言われると動くけど女子はなあ、そんなイメージないなあ」

またしても早坂さん情報だよ！……あれ？ ひよつとして、俺って中学時代仲が良い女子って早坂さんだけだった？……いやいや、彼女どつちかかっていうと男友達な感覚で一緒に遊んでたしな、だけってわけじゃないよな。普通にクラスで仲の良い奴等で遊びに行くとかあったし。俺、リア充だったんだな……

「そうなのか、箸とか皆普通に料理上手いから知らなかったな」

お前の場合はお前のために練習してたんだよ、とは言わない。言いそうにしてたクリスマスにも目線で釘を刺して牽制しておく……よし、良く溜息をつく程度に堪えた。

「でもなんで俺はまだ待機してなきやいけないんだ？ クリスと翔は普通に出て行ってるつてのによ」

「そういうオーダーだからな」

「クラスの女子には考えがあるんだろ。正直クリスマス一人でもこの込み具合……お前が出たらその三倍くらいにはなるんじゃないか？」

「は？ なんで俺が出て行つて三倍になるんだよ」

「需要に対して供給が間に合っていないからだよ、一夏」

「クリス一人じゃ『回ってこないかも』って考えるなるけどそこに一夏君も加わってみろ、『ワンチャンあるかも!』ってなるに決まってるだろ」

「じゃあ翔はどうなんだよ」

「俺のはほら、調理作業を遅らせないために値段高めに設定してるし……そもそも俺じゃあなあ……」

面は簪嬢曰く「偏差値64・7」だし、体付きはこの二人と比べたらゴツイ方だし……女子からしたらマッチョはドン引きだわな。特に俺は「朝、夜とトレーニングしている」と噂になってるそうだし、需要は無いわな!

言つて悲しくなんて無いよ! 田舎に帰れば労働力としてモテモテだし!……うん、そうなんや、労働力としてはな……

「俺、本気で調理師免許狙うわ」

「お、おう……こんな翔見るの初めてだ」

「これが、鷺津の本気……いや資格一つに本気になるなよ!」

「IS乗れる男で、料理できるとか……モテるよな」

「駄目だ! 錯乱してる!」

「ちっ、千冬ねえはどこだ!」

免許とつて店開いたら儲けるだろうな、まあそれもあれもどれも世界を救ってからだ。

「それ以前に文化祭だな。お前等も一応警戒はしとけよ」

「は? なんでだよ」

「そりやお前……俺等のDNAデータとかだろ」

「それもあるけど……一夏君、お前素手の状態で拉致されそうになったらどうにかできるのか」

「……無理だな」

「俺は許可を取って拳銃持ち歩いてるから大丈夫だぜ!」

「な! ズルいぞクリス!」

「一夏君、お前はまともに銃使えないんだから素直に警棒でも持ち歩いとけ」

「いやでも・・・制服の下から銃とかかつこよくないか？」

「だろ！カッコイイだろ！」

「まあ憧れはするわな」

俺は現在進行形で手首からナイフが出るけどな。念のためにアサブレを仕込んで警戒態勢を取っている。不特定多数の大勢が来るんだ、招待状と言うチケットで対応をしているとはいえ何かあるかは分からないからな。

さて、来て見ろよ。こちとら鷺津君マジモードだぞ、戦う料理人だぞ、厨房補正がかかるぞ、強いんだぞ。

原作的主人公の友人ですよ

生徒会室帰りに厨二女と遭遇したり、一夜の暴走が首を絞めてきたり、織斑千冬監督トレーニングメニユーが凄いよって話だったり、虚さんにお礼しなきゃいけないなかったり、生徒会長は予想以上に大変そうだったり、千冬さんにボッコボッコにされたり、一夏君がモゲロだったり、学園祭がはじまったり。俺はリングゴでコックです。

厨二女の特訓で着々と操縦技術を身に付けていく一夏君と、その光景に嫉妬しているのかイライラの収まらない千冬さんにひたすらボッコにされ耐久力が上がっていく俺ですが、パフエ作るって意外とストレス発散というか、なんも考えなくて済むのな。そんな訳で、俺は元気です。

「しかしなんだ・・・集客効果スゲエな」

「まあ三人しか居ない男だしな」

「・・・いや、主に一夏、オメーのせいだ」

「お前が言うなよクリス。どっかで聞いたが『金城栗栖はどこぞの王族』って噂があるぞ」

「え！何ソレ初めて聞いたんだけど！」

「あー、日本人離れな外見してるしなー」

「やめろよ・・・来るなよ！」

「相手が一人なら行けるんだろ、大丈夫だ」

「問題しかない。三人組から注文受けたときは死ぬかと思った」

「クリスはホントおしいよなー、かつこいいのに女の子苦手とか」

俺も、クリスも、そして厨房内に居たクラスメイト達も全員一斉に黙った。そして皆の意見は一致していた。『お前が言うな』だ。しかし、誰もが空気を呼んで彼の顔を見る程度にとどまった。

「え？え？・・・な、なんだよ皆、こ、怖いぞ？」なんてオタオタしている一夏君は置いておいて、たった今入ったオーダーのパフエを作る作業を始める俺。

そんな俺に続いてか、他のクラスメイト達も各々の仕事に戻り始めた。

クリスはクリスで一夏君の事をガン見し続けている・・・何がしたいんだコイツ？

「こんなところに居られるか！俺はフロアに出るぞ！」

「おい馬鹿止めろ」

「誰か一夏君止めろー、計画が崩れるぞー」

俺の声に雑用班が気付いたときにはもう既に遅し、一夏君がフロア入りした事で黄色い悲鳴が教室中に響き渡った・・・

「クリス、行つて来い」

「一年一組のイケメン担当は俺だー！」

「ただし枕詞に残念が付く」

「やめろ！残念を外せ！」

「無理だろ。だつてお前、女の子に囲まれたら積む男だぜ？」

「・・・ああ、そうやって客観的に見たら無理だな」

「努力はしてるんだけどなあ？」

「クラスメイトまでならいける！」

「もうちよつと頑張ろうか」

「おう、ちよつと頑張つてくる！」

出て行つたクリスを見送りながら、果物ナイフを置いて果物にそつと伸ばされていた手を軽く叩く。

「コレで何回目だ？本音嬢」

「うー、いくじゃん！」

「コレ、売り物。食べたいなら学園祭が終わつて余つたのを食べなさい」

「でも、切つてくれないんでしょ」

「してあげようではないか。安心しろ、道民は嘘つかない」

「・・・分かつたーじゃー休憩してくるー」

「ちゃんと休むんだぞー」

「はーいおかくさくん」

「誰がお母さんだー！」

つつこんだ時には時既に遅し、本音嬢は居なくなつていた上に周りから「お母さん・・・？」「お父さんじゃなくてお母さんなんだ」「ピ

ンクのエプロンが似合う・・・お母さん？」とか言われてる、フロアの方はフロアで「織斑くんよ!」「金城くんも居るわ!」とちよつとした騒動になっている・・・もうヤダ逃げ出したい。

なんて内心で泣きそうになっていると「鷺津くん、専用オーダー入ったよ」と毎日あつてるはずなのにどこか懐かしく感じる夜竹さんがまさかの俺専用の注文を告げてきた。

うん、もうちよつとだけ頑張るよ俺。

「って思ってたんだけどな・・・」

「まちきれなかったんだよ」

「・・・ピンク。フフツ、ピンク・・・」

本音嬢が簪嬢を連れてやってきた!簪嬢は簪嬢で笑いをこらえられないのか机に突っ伏して手を叩きつけている。いいじゃんピンク、駄目なのか?

「ところで本音嬢、財布は大丈夫なのか?」

「う・・・オヤツは我慢します!」

「そこまでするほどか?」

「そこまでするほどです!」

「本音嬢にしては随分力強いな・・・よろしい、俺の最高の技術をお見せしようではないか!」

その前に普通に食べやすいサイズに切り分けたフルーツの盛り合わせを作って。裏に戻って包丁と冷蔵してあったスイカを取り出して戻り、教壇に立つ。店に居た客は

「突発一発芸のコーナー!一番、鷺津翔!スイカの飾り切りします!」

完全に飲み会とかのノリになっているが、今日は学園祭である!つまり祭りだ、ハツチャけるぜヒヤツホイ!

俺のスイカの飾り切りは完成直後に何故かオークションとなり。それが終わったら終わったでクラスメイト達の一発芸大会が開かれたり、一夏君がアカペラで歌ったり、クリスは何故かヨーヨーをドヤ顔で取り出したり、途中で織斑君に「ご奉仕セット」をしていた鈴嬢や、簪嬢、その他にも来ていたお客さん達も入り乱れ、まあ力オスだつ

た。盛況してたのは、メイド服の篠ノ之さんが教卓に乗ってやっていた日本舞踊だろうか。うん、綺麗だったわ。けど場所が悪かっただけに残念だった。使ってたものが俺の木刀だったのも残念だ、日本刀なら素晴らしかった。メイド服と日本刀、良い感じにアンバランスでそられる。

とか思ってる俺は今絶賛暇をしている。

一夏君を中心に騒ぎ始めたから調理要員の夜竹さん達に仕事をパスして一足先に休憩することにした。だって巻き込まれたくないだもん。

と、適当にその辺をうろついていると「あら、鷺津くん」と唐突に声を掛けられた。振り向いてみればそこに居たのは最近良く合うことに定評のある虚さんだった・・・

「見回りですか？生徒会大変そうですね」

「ええ、会長がいつの間にか居なくなっていて大変です」

「お、おう・・・俺にはどうしようもない問題で」

「そう言えば鷺津くんは参加型演劇をご存知ですか？」

唐突に歩き始めた虚さんに駆け足で並んでみる。距離取られてたりしてないから別に嫌われているわけではなさそうだ・・・

「観客が舞台上がったりでもするんですか？」

「会長がですね、また面倒なことを考え付いたのですよ」

「なにそれ巻き込まれたくない」

「男子は強制参加だそうです」

「俺、IS学園辞めようかな・・・」

「・・・篠ノ之博士なら何でも出来そうですね」

「戸籍偽装はお手の物。顔面整形も余裕そうですね」

「ま、まあ置いておきましょう。演劇の件については先に私から説明させて頂きますね」

そして語られたのが『王子（男三人）の王冠を取った人物が「その人に一度お願いできる」権利を得る』という物だ。なお、演劇名は「シンデレラ」・・・いやまあ確かにさ、グリム童話の方のシンデレラはエグいけどさ、そこまで殺伐としてなかったと思うんだよね・・・

「つてか、当人の許可取ってからやれよ。どこのガキ大将だよ」

「すみません、そんな子なんです」

「なんでまたそんな母親みたいな事を…で、虚さん。今どこに向かつてるんです?」

「見知らぬ男子が居ると報告がありましたので、身元確認をしに」

「織斑かクリスか」

「あら? 鷺津くんは?」

「俺は女友達に郵送しましたから。ちよいちよいメールも来てますけど…俺に会う気、無いそうです」

「それは… また、なんと言えばよいのか…」

「ハハッ、笑えよ」

無言で肩に手を置かれた…虚さん、正直泣きたいです。

大分俺の精神面も落ち着いた辺りで…なんだろう、長い黒めの赤い髪に同じく黒めの青いバンダナ? みたいなのをつけたホストっぽい顔と服装の男が立っていた…。いや、あれって兄とかだろ? 「クリスの知り合いにパフェ一つ掛けます」

「では、私は織斑くんの方で」

俺達の中には「女子生徒の知り合い」という選択肢は欠片もなかった。何故なら、周りに居る女子生徒達がヒソヒソと話してて誰も近寄らないからだ。もしかしたらこの判断は間違이었다のかもしれない…とその男に近づいていく虚さんを見送り、俺はそっと財布の中身を確認した。

数分もせずに戻ってきた虚さんは素晴らしい笑みを浮かべていた。そしてゆっくりとサムズアップしてこうのたまった。

「財布の貯蓄は十分ですか?」

その言葉と同時に、サムズアップが百八十度回転したように、俺には見えた。

「それと、お連れしました。では、後ほど」

膝を地面につき、後ろから軽く押せば倒れるだろう体勢の俺に謎の男子の対応を丸投げして去って行った虚さんとはとてもしたたかだっ

たと記録しておく。

「あー、あー・・・アンタが鷺津翔？でいいのか？」

「・・・いい、いかにもたこにも！この俺こそが鷺津翔だ！IS学園に入りたくば俺を倒してみるんだな！」

「なんで突然そんな中ボスっぽい発言を！」

「そりやお前。千冬さんがラスボスだからに決まってるだろ。織斑の友人なら知ってるだろ？」

「ああ、納得。っと、自己紹介がまだつたな。五反田弾だ」

「名前カツケエな・・・しかし、なんだ。イケメンの友達はイケメンじゃなきゃいけない決まりでもあるのか？」

「例え俺がイケてても俺よりイケてるのが近くに居るとモテないんだよ・・・意味、ないんだよ」

「引き立て役にしかなれないってことですね分かります」

「高校からは俺の春だー！・・・そんな風に思ってた時期が、俺にもあった。一つだけ誤算があるとすれば、地元の高校だから一夏の方が良いつて風潮が満栄してたことだ」

「スゲエな、織斑姉弟。精神汚染すんのか」

「来年辺りには世界中が織斑姉弟マンセーしてると思うと・・・」

「一夏君はそこまで実力が無いから安心するんだ。早くても・・・IS学園卒業あたりかな」

「あと二年じゃねーか！そこまで遠くないぞ！」

「そりやそうだろ、この学園最強に鍛えられてる上に量は減ってるにしても千冬さんのトレーニングメニューこなしてるんだ。それにアイツ自身も強くなるうとしてるからな、これで強くなれなきゃ無能以外の何物でもない」

「・・・一夏ってそんなに頑張ってるのか？」

「ま、頑張ってるほうだよ。普通の高校生と比べたら密度が違いすぎる」

俺と一夏君が剣道したら多分負けるくらいには頑張ってる。

剣道再開してたった半年で結構続けてきた俺に勝てるくらいのは才能はあるから、最低でも二年でそこそこは強くなれるだろ。ま、最終

的にものを言うのは経験だけだな。

「しつかし良く失踪しないよな、自分の立場もイマイチ理解できてないのに失踪しないなんてスゲエとは思うよ」

「そりや翔、逃げても千冬ねえが地の果てまで追ってきそうだからに決まってるだろ」

「あー、千冬さんならありえそうだな」

「人を動かすのは恐怖……って一夏君！いつのまに！」

「久しぶりだな一夏……ってその格好、なんだ？」

五反田が突っ込んだことでもようやく気付いたのだが……一夏君、執事服のまんまやん……

「鈴のところは飲茶だったよ」

「ってか一夏君、『その格好のまま宣伝してきて』とか言われたのか？」

「おお、良く分かったな」

「五反田、コイツな、コレで女共をキヤーキヤー言わしてんだぜ」

「クソツ！ここでもか！」

「いや、俺より翔の方がカツコイイだろ」

「……コイツは」

「うん、どの口で言うんだろうなコイツ。一回頭見てもらった方がい
ふよ」

「だな。コイツ誰にでもこういうこと言うしな」

「期待させてポイですね分かります」

「え……え？……さっき初めてあったはずの友人同士が仲良すぎて
怖い」

「そりやお前——」

「理由なんて決まってるだろ、一夏君——」

「同士だからだ！」

一夏君に対する感情的な意味で。

「いや、まさかこんないい奴に会えるなんて思っても無かった」

「それはコッチのセリフだぜ五反田。いや、弾と呼ばせてもらおう」

「おう！連絡先交換しようぜ翔！」

弾と仲良くしてたら一夏君の呟いた「俺、まだ翔に君付けで呼ばれ

てるのに・・・」とか言う声が怖かった。お前ホモかよ！シスコンだ
けじゃ飽き足らずにホモかよ！さっさとクリスのところ行って来い
！

原作的灰かぶり姫ですよ

一夏君がフロアに出ちゃったり、本音嬢と簪嬢に指名されたり、リングでチート(宴会芸)したり、散歩してたら虚さんと遭遇したり、厨二女がまたよからぬことを企てているのを教えてもらったり、一夏君の友人と知り合ったり、俺は結構元気です。

ひたすらパフェを作り、時々フルーツ盛り合わせを作ったり、一発芸としてスイカを飾り切りしたり、と変な方向に成長してる俺です。

弾と仲良くなったはいいんだが、その後「厨房回らないから戻ってきて」とクラスメイトからの呼び出しメールが届き、渋々教室に戻ることにした。実際弾は面白い奴だった。

前世の俺には弾に似たような友人はいたが、俺にはああいう友人は初めてだ。どこにでも居そうな良い奴ってのは案外居ないもんなんだよなー、彼の保護者に感謝。

んでもって、クラスに戻ってある程度仕事をこなしたのはいいんだが……

「ププツ、ピンクのエプロン似合ってるわよ鷺津くん」

厨二会長、何故お前は俺専用メニューを頼んだし。まあとりあえず、俺の言う言葉はただ一つ。

「チェンジで」

「それは客が言うセリフじゃないかしら！」

「店員にだって選ぶ権利はある。客は金を払って店を出るまでは客じゃねえ」

「それなんて暴論！」

「さっさと作るからさっさと食ってさっさと金払って出てけ」

「聞いたわよ、さつき凄いい事したんですって？お金は取ってないの？」

「あれは『俺がどこまでやれるか』の確認だ。金額は客が勝手につけて、クラスに着服された」

「そうなの？それは残念ね」

「コレで一步、クラス優勝に近づいたと考えれば安い物だ」

「献身的ねえ。ねえ、その献身ついでに——」

「チエンジで」

「ちよつと！最後まで聞きなさいよ！」

「いや、さつき虚さんに聞いたし。正直二番煎じだし」

「・・・そつ、そう、虚から・・・他に、何か聞かなかったかしら？」

「他に、ね。馬鹿が馬鹿なことを考えたつて言つてたな。実際に聞いたらただの馬鹿な事だつたけどな」

「うっ・・・いいじゃない！せつかくの高校よ！三年しかないのよ！楽しんで文句あるの！」

「少なくとも、俺等男三人は楽しくない。生徒会長とあろう者が生徒に目も向けずに自分だけの楽しさを優先するとか、その辺どうお考えで？」

「・・・う、うう」

一夏君はそもそも追い掛け回されるの好きじゃないだろうし。クリスは追ってくる女子の数次第では気絶しかねない。俺？寄らば斬る！つて感じ。うつとおしい程度だ。

さつきと盛り合わせ作つてさつきと仕事に戻るか・・・

「ま、正直どうでもいいさ。言つてる間に盛り合わせも済んだ。さつきと食つて英気を養つて馬鹿騒ぎの先導でもしやがれ」

「な、な？・・・なんで？」

「今お前がすべきなのはお前がしようとしてる馬鹿騒ぎを『女子だけじゃなくて男三人でも楽しめる』モノにすることだ。精々頑張れ生徒会長」

フロアからバックヤードに戻つて一通り自分の言動を思い返して思いついた言葉が一つ。

「俺、ツンデレか・・・」

まるつきり乙女ゲーのツンデレ男みたいだった事に、俺は絶望した。

適当にオーダー通りのパフェを作り、適当に雑用係と会話したりとそこそこ楽しく時間を潰し、とうとうやってきてしまったよ・・・悪夢の時間がな！

「・・・いや、似合わないだろ」

「俺は似合ってるな。ナルシストっぽくて鳥肌立ったけど」

「お前等いいよなーイケメンだから。俺なんて見ろよ、コートだぜ？ただコート着せられただけだぜ？」

あまり来ない第四アリーナの更衣室。

鏡の前で一夏君とクリスがザ・王子っぽい服装でポーズを取っているのに対して、俺はなんか、制服の上に金色の止め具が目立つ白いロングコートを羽織ってるだけ。王子風の服が二つしかなかったからとりあえずそれっぽいコレ着せただけだろ。

「・・・翔のは剣でも下げればそれっぽくないか？」

「俺と一夏のは剣でも銃でも、武装したらもうバランス崩れるだろうからな・・・」

「俺ホントに刺しちゃうぞ？持ってきて刺しちゃうぞ！」

「止めとけ」

「ですよー」

やけに真面目顔のクリスに止められたのでやめておく。やだ・・・ちよつとこわい・・・

「しかし・・・会長も突拍子のないことするよなー」

「俺あの会長好きだぜ！楽しそうにしてるところが特に！」

「くたばれ厨二女ファツキユー」

「どんだけ嫌いなんだよ・・・」

「アイツ俺が言ったこと覚えてるよな？覚えてなかったら絶対泣かす」

「・・・あの人泣くのか？」

「弄り続ければその内泣くだろ。人弄ってるだけで弄られる耐性なさそうだからな」

「・・・え？そんな事分かるくらいに関わってるの？実は好きなんじゃないの？」

「アレを？純粹にないわ。タイプじゃないし」

「ちよつと！それは聞き捨てならないわ！」

突然ドンツ！と勢い良くドアを開けて入ってきたのは鞆を小脇に

抱えた厨二女・・・うん、まあなんだ・・・

「盗み聞きしてたとか、とうとうただの変態に成り下がったか。あ、昔からか」

「厨二より変態の方が格が下なのか」

「人に迷惑をかけてる変態のほうが格が下なのは当たり前だろ」

「誰にも迷惑かけてないじゃない!」

「被害者は主にお前の妹と虚さん、そして俺。被害内容は精神的な」
「ぐ、ぐぬぬ・・・」

どこぞのネタ画像みたいな表情で地面に両手両膝突いて悔しがってる。コレは割と本気で悔しがってる。んでもって限界ギリギリだ。「ほら、どうだ一夏君。後少し押せば泣くぞ。ほれ、止めを刺す権利をやろう」

「いや刺さないからな!俺を何だと思ってるんだよ、翔」

「いや、ほら。普段の仕返し?」

「・・・確かに困っては居るけどそこまでじゃないしなあ・・・ところで、なんで会長は来たんですか?」

「・・・はい、これ。王冠」

一夏君に止めを刺されずに復活した厨二変態女は鞆から何かを取り出して俺達三人に渡してくる。

一夏君は小さく細い冠。クリスには銀色の同じように小さく細い冠。俺には何故か金色の枠と赤い布で出来たザ・王冠。いや、なんかおかしくね?」

「それと、鷺津くんにははいこれ」

「はいコレって・・・何コレ?」

手首を固定するサポーターと冬用の手袋みたいなのを渡されたんですが・・・なに、なんなの?俺はコレで何すればいいのさ!

「片方封印してね」

「ああうん、縛りね。おい聞いたかクリス、この女俺に縛りプレイを強要してきたぞ」

「なにそれうらやまけしからん」

「良く分からないけど意味が違うことだけは分かった」

「うう、もう一夏くんだけが私の味方よ・・・」

「まあ、俺は普段からお世話になってるし」

「俺も味方ですよ会長！」

「もう少しマシになれば俺も対応を変えるんだけどなあ」

と一夏君に続きクリス、俺の発言に「さ、三人ともっ！」と泣きそうな顔してたが「御三方・・・って、何してるんですか」と入ってきた虚さんに首根っこ掴まれて、「では皆様、用意が済みましたらすぐにいらっしやってください」と頭を下げて出て行った彼女に引きずられていた。

「・・・すぐに行こう」

「そうだな、さっさと行こう」

「いい気味だ」

「だからお前だけ嫌いなんだよ！」

・・・正直自分でもわかんなくなってきた所だ。少なくとも、初対面の時よりネタ色が強くなってきてる感じだ。

三人でのっそりと移動し、幕の下ろされた、暗い舞台上上がる。

道中で突然やってきた虚さんに「申し訳ありませんが、全てアドリブでお願いします」と言われて一夏君がキョドってたのは笑えただけど、やっぱりあいつは駄目っばいな。

「むかーしむかーし、あるところにシンデレラというとてもとても不幸な少女が居ました」

幕が上がり、スポットライトが一箇所当てられるとそこに居たのは何故かボロボロの服を着た厨二会長。まあうん、シンデレラテイストなのね。

「しかし！その幸薄な少女はある日、自分に降って湧いた幸運を握り取り！そして自分以外のライバル達を蹴落として栄光を手に入れた！」

え・・・え・・・なにそれ、俺の知ってるシンデレラじゃない。

「そんな少女の生き様は無数の少女達に夢を与え！そして『ああなりたい！』と思わせるようになった！その物語は時代を追うにつれて名

前と共に進化していき！幾多の舞踏会を堂々と正面から踏み倒し、群がる有象無象をなぎ払っていき、最後に目標を手にした時に土煙で化粧された史上最強の乙女達！そんな彼女達を褒め称えてこう呼ぼう！・・・『灰かぶり姫』と!!」

そして厨二会長はボロボロの服に手を掛け、服を脱ぎ捨てるとそこには白いドレスを着た彼女が立っていた・・・いい厨二っぷりだ、感動的だな・・・だがどうしろと？

「そして！今日の祭もまた舞踏会！血に餓え、灰を纏うべき乙女達の集う宴！乙女達は王子達の冠に隠された自国の重要機密を冠を奪うことで流出を防ぎ！王子達は無事自国へと持ち帰るのが目的よ！乙女達は冠を奪えば、王子達は冠を守りきれば各々の国からの報酬が出るわ！・・・これは、もうシンデレラだけが主役の舞台ではない！シンデレラは新たなステージへと歩みを進めたのだ！」

厨二会長が胸元から扇子を取り出して真上に掲げると、真後ろのモニターに⑩と大きく表示され、徐々に減っていく。

だが、始まる前にコレだけは言わせてくれ・・・

「もうシンデレラ関係ねえ！」

「シンデレラは進化したのよ！新たな物語としてね!!」

「それっぽく言っても騙されねえぞ！」

「もう始まるわよ！後ね、みんなー！鷺津くんの王冠取ったら二つ願い事叶えてあげるー！」

「そのつもりで俺にこの冠渡したなチクショウ！更識楯無絶対許さねえ！」

とか言いつつも逃げ出す俺、しかたないじゃん。壇上に女子いつぱい上がってきてるんだぜ？クリスなんて気付いたらもう出入り口に居るし何時逃げたんだよ。

後ろから聞こえる「終了はチャイムで知らせるからねー」という声がムカついたので冠守りきって一発殴る、絶対殴る。

いや、正直舐めてたわ。何をって？女子力。

あいつ等いつの間にか徒党を組んで先回りしてたり、挟み撃ちにし

てきたり、窓から飛び降りてもう大丈夫だろうと思ってたら親方！空から女の子が！つてなったり・・・目先の欲に駆られた女マジコエエ。そんな女子達から逃げるべく、俺は行き慣れた心のオアシス『整備室』へとこつそり駆け込んだ。

「あくまっつてたよ〜」

「・・・おかえり」

「ただいまー、俺の分のお菓子ある？」

お菓子を食べてる本音嬢とモニター見つめてる簪嬢、いつも通りの光景にいつも通りに返事してしまったが・・・いやまあいいか、あの厨二女の考えなんて知らん。

「イベントは〜？」

「ああ、あれね。逃げてきた」

「聞いたよ〜一人で二人分だつてね〜」

「そうだな、あの女嫌がらせとは器の小さいことをしやがる」

「でさ〜、わたしたち・・・二人いるよね〜」

「・・・え？嫌な予感しかないんですがそれは・・・」

「おやつ〜！」

「姉のポケットマネーでDVDボックス・・・」

「止める、寄るなっ！・・・欲望の塊こっちくんな！」

整備室のドアを開け、廊下に飛び出したところで俺の足は固まった。何故つて？そんなの決まってる。

廊下の先にジーパンに白い半袖のパーカーのフードを深く被ってる明らかな不審者な奴がいるからだ。

生まれ付いての2・0の視力で見える限り、左腕に見覚えのある二本のベルトが見えることからただの不審者からアサシンに格上げだ。ただ、その左肩から右腰に掛けてある帯はなんだ？鞆なのか？前からじゃ見えん！

固まったままの俺の横っ腹に走ってきた本音嬢が激突して悶えていたときに襲つてこない辺り紳士な奴っぽいのでついでに準備を済ましてしまうことにした。

俺とアサシンの雰囲気を感じたのか珍しく口数が少なくなった本

音嬢に冠を取ってもらい、外したサポーターと手袋を渡して整備室に戻って貰う。

本音嬢が激突した横っ腹の痛みも収まってきたので立ち上がったから軽く体を捻る。

アサシンはいつの間にか右手に折りたたみの警棒を持ってやる気満々だったので俺もＩＳから木刀を取り出して正眼に構える。

大丈夫だ、俺は散々夢の中で歴戦のアサシン達に殺され続けた男だ！アサシン野郎ぶっ殺してやらあ！

俺の勇気が世界を救うと信じて！張りに駆け出した俺に合わせてなのか相手も同時に走り出し、思いつきり木刀と警棒をぶつけ合ってから鐳迫り合いになり、相手は相手で最初は右手だけで持ってた警棒を両手で握って対抗してきた・・・この時代劇だ。

と油断した隙に警棒から左手がぬるつと抜けて顔に伸ばされる。手首の下に鈍く銀色に光るパーツを視界に入れた直後、俺の体は勝手に動いていた。

木刀から手を離し、左手で相手の左腕を掴み、右手で胸倉を掴んだまま体を捻って背中を相手の腹とくっつけ、そのまま無理矢理一本背負いとも言えない何かで地面に叩きつける。

ついでに右手に持っている警棒を蹴り飛ばして武装解除し、いつの間にか飛び出していたアサシンブレードに気をつけながら一回転して相手の胴を跨げる場所に移動してからしゃがんで右足の膝で左肩を押しさえつける。念のため右肩も同じように左膝で押しさえつけてマウントポジション確保。

あれ？これうつ伏せにして腕関節決めればよかったんじゃないかね？と思ったが、天井の蛍光灯の光に照らされて見える様になったフードの中身の顔を見て俺の悩みは遙か彼方へと吹き飛んだ。

「アッー！アッー、デズモンドッ！」

幼少期の俺が山で駆け回る切欠となった人物に深く関わりのある人物であり、空気系主人公。デズモンド・マイルズが俺の下で苦しそうな顔をしているのだ。え、ええつと・・・どういふことですかねえ？

原作的公園での戦闘ですよ

仕事してたら厨二会長から注文が入ったり、俺がツンデレだったり、他二人が王子ルックに対して俺だけコートのみだったり、縛りつけられたり、厨二会長はやっぱ厨二だったり、ちよつとした嫌がらせをうけたり、逃げた先で本音嬢と簪嬢に襲われたり、逃げた先で廊下でアサシンの待ち伏せされていたり、何故か一騎撃ちの様なことしたり、押さえつけたらデズモンドだったり・・・カオスでした。

師範や千冬さんにフルボッコにされたり、散々夢の中でお歴々のアサシン達に殺され続けたお蔭で何とか無傷で敵を無力化出来てホツとしてたら重要人物過ぎて戸惑っている俺です！

「なんで俺のこと知ってる！お前もテンプル騎士か！」

多分日本語じゃないけど日本語に聞こえる、異国語間の交流も手軽に出来る。そう、リングゴならね・・・ってやってる場合じゃねえよ。

「安心しろ、つっても信じないだろうが、テンプル騎士じゃない。まあアサシンでも無いんだが・・・あー・・・今誰の記憶に入ってる？」

「・・・お前本当になんなんだ」

「鷺津翔、ISに乗れる男ってだけだ。ところで、なんで俺を襲ったか聞いてもいいか？」

「どうせこのまま警備にでも突き出すんだろ。その時に話させられるんだろ」

「じゃあこうしよう。教えてくれたら開放しよう。後も追わない、オーケー？」

「・・・で、お前はなんで色々知ってるんだよ」

「リングゴ、って言えば伝わるか？」

「リングゴ？・・・まさかあのリングゴか！アルタイルの、最後の・・・」
「先史文明の遺品は世界に散らばってるんだぜ？リングゴはまだまだあるぞで」

「そんなにあるのか！あんな物が、大量に！」

「まあ落ち着けよ。で、今誰の記憶だ？」

「エツイオだ・・・分かる、んだよな？」

「最強のアサシンだろ……にしても、アルタイル経験してるにしちやちよつと弱くないか？」

「いや、無理だろ……記憶を経験してある程度強くはなったと思うけど勝てるかよ……日本人って皆お前みたいなのばかりかよ」

「いや、俺は結構特殊な方だと思うぞ。ちなみに言っておくと、IS学園の奴を襲うのはこれからは止めとくようにな、俺だったから良かったものの……他なら問答無用で捕まるからな」

「サクリ殺して別件で侵入してる奴を手助けしろ……ってそんなの無茶な話だったぜルーシー……」

「ルー……シー?」

アサシンリードでルーシーって言えばあのキャラだよな……ここでアサクリの原作ブレイクでもしちやいますか?でも俺が言った程度でデズモンドが考え方を変えるか?ま、もうどーにでもなれー。

「ああ、彼女がお前を狙えつてな。なんでかは知らないけどとりあえずお前が敵じゃないってことは分かっただけでも収穫……か?」

「その件についてだが、お前は俺に振り返りにされて隙を見て逃げ出したってことにおいて欲しい。俺はアサシンにもテンプルにも関わる気は無いんだ」

「……じゃあなんでリングゴなんて持つてるんだよ。コレクターに売れば結構な額で売れるだろ」

「俺は俺でやることがあつてな、それに必要なんだよ。この事に関してはお前もいざれ知るだろうな」

「……分かった、今は聞かない。だがコレだけは教えてくれ」
「答えられる限りでよかったら答えるぜ」

「なんで俺を逃がす」

「こんなところで殺してもメリットがない。まだ人殺しになるつもりはないし、動きづらくなるからな」

ゆっくり立ち上がって倒れたままのデズモンドの右腕を掴んで立ち上がらせる。そして今気付いた、俺……錘付けたままだった。もうこれ完全にアウトですよ。グッバイ一般人だった俺!ようこそ

化け物に片足突っ込んだ俺！

「二つだけ言っとくぜデズモンド。誰の意味でも無い、自分の意思でやるべきことをなせ」

「・・・ 真実はなく」

「許されぬことも無い。さあ行けデズモンド、ついでにコレ俺の電話番号」

「・・・ 何かあったら頼む」

「安全と平和を」

「・・・ ありがとう、兄弟」

突然デズモンドが言ったアサシン合言葉にノリで返してからついでに連絡先を渡し、廊下を走っていった彼を手を振って見送っていると、タイミングがいい事に電話が掛つてきた。マナーモードにしていて着信音がならなかったので誰かと思って画面を見ると・・・ 千冬さんでした。

「はいもしもし驚津ですけど」

『今手は空いているか？』

「丁度空きました。どうかしましたか？」

『何があったかは後で聞く。すぐに外に出ろ。とある人物を追跡してもらいたい』

「どんな人です？」

『見覚えのないISか、それとも金髪の二択だ』

「ISで逃げてくれるなら分かりやすくてありがたいですけどねえ・・・」

『場所は第四アリーナの更衣室だ。楯無が相手をしているから逃げ出すのも一苦勞だろうが、逃げたら全力で追え』

「了解。IS使用許可は？」

『許す。回収部隊がどこかに居るかもしれないから、では行動を開始しろ』

「イエスマム！」

ところで・・・ そのいるかもしれない回収部隊ってデズモンドも回収してんのかね・・・ 逃がした意味ががが・・・ 何はともあれやりま

すか。

校舎から出て、真っ先に向かった先は屋上。体の向きは第四アリーナで出入り口をガン見しておく。

まだかなー、まだかなー、なんてやってたら誰かからISの個人回線で通信が飛んできた。

『嫁よ！話は聞いたか！』

「逃げたら捕獲だろ？手伝ってくれるのは少佐だけか？」

『オルコットがバツクで控えている。前衛、中衛、後衛勢ぞろいだ』

「そういうのはフラグだからあんまり言わないようになー」

『そう言えば、クラリツサから聞いた覚えのあるような、ないような・・・』

「ない方向でお願いします」

『う、む・・・分かった』

「とりあえず一回切るぞ。見逃しかねない」

『そうだな、無事任務を果たそう』

「オルコットさんによろしく」

通信を終えて実に丁度一分後。第四アリーナの何処かから爆音が響き渡り、開放通信で『逃げられたわ。今から敵の画像を送るから後にはよろしくね』と厨二会長の声が聞こえ、視界に金髪に所々破けたスーツ姿で金髪の女の画像が表示された。うむ、わっるい顔してるが美人だな・・・デズモンド、お前本当にこんなのと協力関係なのか？「ま、ひつとらえてからコイツに吐かせばいいか。丁度出てきたし」

第四アリーナから焦ったように走り去る金髪の人影を目視した俺は鷹の目を使って真っ直ぐその人物の後を追う。勿論、アサシン特有の屋根を走り、木の枝を飛び、ひっそりと後ろを付いていく。

開放通信で『居たぞ！見失うな！絶対に生かして捕まえる！』と若干ネタっぽい少佐の通信が入って来たがスルーする。なんか少佐に反論してるオルコットさんの声も聞こえるがスルーする。

しかしなんだ？全然後ろ振り向かないから尾行が楽でいい。あえてなのか、素で焦ってるのか・・・どっちにしろ、初めての尾行で俺

はテンション上がって来たぞ！フハハハ！怯えろ、竦め！精々逃げ惑うがいいさ！

アサシンってこんなだったよね。アレ？違ったっけ？

ようやく止まったと思ったら公園だった・・・IS学園の敷地外だけど、こんなところに公園あったのかー、とかこの非常時に馬鹿なことを考えてる俺と、公園にある特有の石製の水飲み場で水を飲もうとしてる敵さん・・・なんだ・・・この、なに？この状況。やだっ・・・俺達マヌケ過ぎ・・・？

なんて少し愕然としていると個人通信で少佐からの連絡が飛んできた。

『嫁よ、仕掛けるぞ！奴に水分補給をさせるな！』

「水分って確かに大事だしな・・・うん、初手は任せた。後は流れで」
『私に任せろ！水分補給は絶対にさせん！』

・・・一体何に情熱を注いでんだコイツは。

『あの苦しみの中で続けて戦闘・・・さあ！もがき、苦しむがいい！』
ああうん、たまにあるよね。千冬さんのあの鬼トレーニング。水分不足でぶっ倒れるまで続くんだよなアレ・・・マジの拷問だよなあれ、その内死ぬんじゃないかって思うんだよねアレ。訴えたら勝てる・・・いや、全世界ブリュンヒルデ教が黙っちゃ居ないか。

無謀な計画を立ててる馬鹿な俺をよそに、事態は動く。

突然バックジャンプしたと思ったらそのまま背中から地面にダイブした馬鹿にしか見えない女が一人。

そして現われるIS装備状態の少佐。そして頭に響く『敵機一機！こちらに接近中ですわ！』とのオルコットさんからの通信。

緊急事態、つまり、俺の順番！

「少佐とオルコットさんはソイツを確保して撤退！殿は任せろー」
『バリバリッ！』

『ぶぎけるのは止めてくださいませんかお二方！』

「しかし作戦は以前変わらずだ。レッツ白影！」

屈んでいた木の枝から飛び、そのまま空中でISを展開。したら勝

手にファンネルが動いて少佐に向かって飛んできたレーザーを迎撃した・・・すげえ。遅れて飛んできた二発のレーザーも自動で迎撃した。スゲエ、スゲエを通り越してコエエよ。

『なら私も残りますわ!』

「いや、俺が抜けられた時用に残つといてくださいお願いします」

『・・・行くぞオルコット! 嫁の犠牲を無駄にするな!』

「死亡フラグなんてへし折ってヤンよおおおおお!」

『もう! こんな時くらい真面目にしてくださいませんか!』

「俺に任せて先に行けー!」

『こつ、ここは任せたぞ嫁よー!』

『ああもうこんなことなら鈴さんも連れてくるんでしたわ!』

こんな馬鹿なやり取りをしているの全て白影が俺や撤退をしている二人に向けて飛んでくるレーザーを自動で迎撃してるからです。もう俺このIS無しじゃ生きていけないぜウへへ。

あ、リングさん別に浮気ってわけじゃないです。そもそも君とはそんな関係じゃないです。

「フウーハハハ! どうだ! 篠ノ之束製のISを敵に回すのは。正直俺は添えられてるだけだから特に脅威でも無いぞー! どうだー、コワイだろー!」

腕組んで立つてるだけで勝手に迎撃してくれるし、俺を通り抜けようとしている蝶の様なフォルムの敵ISを勝手に通せんぼしてくれてる。時折こちらのレーザーを機動を曲げる事で回避しているがこちらのファンネルはなぎ払うことが出来るのだ!

しっかし、レーザーをレーザーで迎撃して相殺するってのはどういうことなんだ? まあ篠ノ之束とリングの謎の技術って事で納得しよう。

「ハイガール! このままじゃ何も始まらないし終わらないから解散しないかい!」

『島国のさらに島国のド田舎出身のダサ男に何が分かる』

「温厚で有名な鷺津さんもコレにはおこだお! 激オコだよ! 声が千冬さんに似てるからって容赦しねえぞ! むしろ千冬さん似だからこそ

容赦しねえぞー！」

『フツ、テロリスト仕込の私に勝てるもんか』

「だったら試してみるか、俺だって初代ブリュンヒルデ式鬼トレーニングの犠牲者だ」

『野郎ぶつ殺してやらああああああああ』

「ノリとネタのいい女は好きだぞコンチクショー！」

お互いにファンネル、ビットだけではなく射撃武器を取り出し…
今、公園が戦場と化す。

今までの公園？敵のレーザーを俺のレーザーが相殺してたので奇跡的に無傷でした。

某宇宙世紀の如くレーザーが飛び交う元公園で、そのレーザーがあるときを境にピツタリと停止した。

目の前に表示された分にはただ『悲報』標的、奪還される【訓練マシマシ】の文字。

あちらも同じようで、顔を半分くらい隠して口元しか見えないヘルメットの口元がニヤツと動く。雰囲気で分かった、ドヤ顔してやがるあの女。

『こちらの任務は完了だ。悪いが、私も帰らせてもらう』

「そいつは困るな、それじゃあまるで俺が振られたみたいじゃないか」

『悪いね、ド田舎男に興味はないんだよ私は』

「そうかー、まいったな…」

ISを解除して生身になり、俺は拡張領域からある物呼び出して真っ直ぐ前に突き出す。

俺だって訓練マシマシは嫌だ。

「じゃあさ、もう誘拐するしかねえよな」

『いやその理屈はおかしい…って！何しやがったテメエ！』

空中で振り返ろうとしていた敵が途中で違和感に気付いたのか声を荒げる。が、もう既に遅い。

目の前に倒れてる人間、そして俺の手には拳銃。殺さなきゃ訓練マシマシとか言われたら即断即決で殺す。それくらい嫌だから隠し球

も躊躇わずに出す。訓練が少しでも減るならならそうする。少佐もきつとそうする。

「そしてコレを・・・こうすると」

手に持った物、リングにある意思を送ると突然輝きだし・・・敵のISが消え中にいたノリのいい操縦者が地面にボタツと落ち、そのままモゾモゾと悶えている。初めてだけど意外と上手く言ったな、リングでの相手の拘束・・・

「とりあえず先に確保報告をしてから・・・さーて、お顔拝見と行きます・・・ん？んんう？」

千冬さんに連絡を送り、悶えてる操縦者に近寄ってみると・・・
「クツ、殺せー！」

千冬さんと同じ顔した女が女騎士みたいなことほざいていた。少なくとも、千冬さんはサムライだし、お前は武装からして騎士ではないことは確定的に明らかなんですすがそれは・・・というか、どういうことなの？

原作的ではない捕虜ですよ

デズモンドをひっ捕まえて話したり、逃がしたり、別のところでも襲撃があったと聞いて行動する事になったり、公園で考え事が暴走したり、敵が来襲して殿してみたり、リング使ってみたり、相手が千冬さんそっくりでビビッたけど元気です。

訓練マシマシになるかもしれないとヒヤヒヤしながら「私に口では言えないことをするんだろ！尋問するみたいに、拷問するみたいに！」とか馬鹿なことほざきながらドヤ顔してる千冬さん似の同い年くらいの少女の手足を縛ってISを回収して・・・何故か白影でお姫様抱っこしながら帰還している俺です！

・・・というか、

「助けてくれませんかねえ・・・」

無事IS学園についてISを解除して何とか探し当てた千冬さんの元に辿り着いた頃には俺のメンタルはズタボロだった。なぜかって？

「来いよっ私はさながらまな板の上の鯉だ！しかし絶対に口は割らんぞっ・・・ぜ、絶対にだ！・・・ハアハア」

とか俺の顔の真下辺りで千冬さんそっくりの顔と声で残念な妄想垂れ流しで息荒げてんだぞ。助けてくれ、誰か俺を救ってくれ・・・奇妙すぎる状況で脳みそがどうにかなっちまいそうだ。

「しかし・・・どういう状況なんだ、これは」

「千冬さんも混乱してると思いますけど・・・正直こんなのをずっと聞かされてた俺の身にもなってくださいよ・・・千冬さんそっくりの人がこんなこと言ってるんですよ！俺もう狂っちまうのかと・・・」

「う、む・・・苦勞を掛けたな。ソイツはこちらで預かろう・・・束に連絡は出来るか？」

「ああなるほど、そういう事ですか。ちよつと連絡してきます」

「ついでにコイツの様な者が他にいないか確かめて来い」

「えつと・・・他に大量にいたら？」

「全員まとめて私が面倒見よう」

俺と千冬さんの共通認識として『顔そっくりⅡクローン?』からの『そう言ったことなら東博士が何か知ってるはず』となり。クローンかき集めて自分が面倒を見るとか言い出した千冬さん・・・流石世界最強、男前やでえ。

でもさ、もし本当にクローンでいっぱいいた場合はIS学園一年ブリュンヒルデ組み、とか出来そうなくらい居そうなんだが・・・ついでに東博士巻き込んで寿命とかの問題も完全にどうにかして普通の人生送らせそうで怖いんだがどうなんだろう。俺からしたら悪夢でしかねえぞ・・・一夏君と少佐、密かにブリュンヒルデ教の山田先生を筆頭として教団員歓喜じゃねーか・・・クソツ、需要しかねえのか！畜生なんて世界だ！

など心の中で悲嘆しつつ、妄想垂れ流しのそっくりさんを千冬さんに受け渡すと「私はここから動かんぞ！どうしてもというのなら引きずってでも、あついたらっ・・・やだ、容赦ない。素敵」自分の顔そっくりの娘を千冬さんは問答無用で左足首を掴んで引きずっていった・・・いや、少しは躊躇おうぜ千冬さん・・・そしてそれでいいのかそっくりさん・・・

つーか引つ張られながら俺の方を見るな、子供のように手を伸ばすなもう関わりたくねえんだよ変態女が。

・・・あ！

「待って千冬さん！これソイツのIS！多分情報いっぱい入ってそうだから解析して欲しいんですけど！」

嬉しそうな顔すんなそっくりさん！テメエに用はねえ！

『結論から言うかねー・・・実は結構あったんだよねえ、ブリュンヒルデ量産計画』

普通にISでの通信を試してみた俺を笑うかのごとく簡単に通じてしまい、そして『千冬さんそっくりの娘さんがいるんですけど、コレってどういうことですかね』と聞いた俺にあっさりと真実を突きつけてきやがった。おまけに結構あった？量産計画？千冬さんレベルの人間いっぱい作ったら反逆されるに決まってるだろ馬鹿なの？

『そこはほら、教育方針次第、みたいなの？洗脳、的なの？』

「一夏君が千冬さん至上主義なのは弟だから、みたいなのもんですかね」
『概ねそんな理解でだいじょぶさー！ちなみにそこにいる子の量産計画で生き残ってるのはその子を含めて六人だよー』

「なんで既に把握しきってるんですかねえ・・・」

『ちーちゃん関係のことで東さんがわからないことなんてないのさー！ホクロの数から付き合った異性の数、身長からスリーサイズまで何でもござれさー』

「千冬さんに報告しておきますね」

『そんなご無体な！東さん殺されちゃうよ！』

「ハハッ殺しても死ななそうなの御仁が何を仰る」

『むー、今度あつたらしくーちゃんをけしかけてやる』

「ただしその頃には東さんは八つ裂きになってるかもね」

『・・・でき、しよーくん。東さんがさっき言った事の本当の意味を理解してるかな？』

「・・・なんか言いましたっけ？」

『ブリュンヒルデ量産計画』

「えっと、ちよつとまって東さん。それってさ、つまりさ・・・」

『しよーくんの考えてる通り。各国が裏で歴代のブリュンヒルデを量産してるのさ』

人間ってマジで救いようもねえクスズばっかだな。

ってか、ブリュンヒルデってそんなにいるのか？総合優勝とか、ほぼ無理だろ・・・え？いる？マジか、化け物がまだいるのか・・・

『ブリュンヒルデに連絡してみる？皆で仲良く施設を潰してまわると思うけど？』

「止めてください世界が減んでしまいます」

『世紀末っておもしろそうじゃない？』

「マジで勘弁してくれませんかねえ・・・」

ただでさえ千冬さん一人で何とかかなりそうなのに増えたらもう地獄絵図で世紀末待ったなしだから阻止しておきたい。東さんならマジでやりかねないしな・・・

とりあえず、聞くべき事も聞いたし。千冬さんのところに戻ったら・・・そっくりさんがドアをこじ開けて出て来て、そのまま真っ直ぐ飛び付いて腰をがっちりとホルドしてきた・・・おかしくね？これ、おかしくね？

「たす、たすけっ！助けて下さい！」

「白血病の人でもいるのかな？・・・ってか止めろ、腰に前から抱きつくな！アウトだ、コレ完全にアウトな凶だよ！」

「どうでもいいから助けてくれ！何でもするから！」

「・・・ん？」

今、何でもするって言ったよね？

「揺れるな馬鹿者」

久しぶりに出席簿を額に喰らったけど・・・

「フツ、千冬よ。前より腕が落ちたか、軽かったぞ」

「そうか。なら少し本気を出そう」

横つ面を引つ叩かれ、ギャグマンガみたいに地面から足が離れ、廊下の壁に激突してズルズルと床へと落ちていく・・・おかしいだろ、今の俺錘つけなおしてるんだぜ？それプラスそっくりさんの体重、明らかに百キロは超えてるんですけどね・・・

「で、どうだった」

「このそっくりさん含めて六人だそうです。まあ他にも計画はいっぱいあるらしくもっと居るみたいですけどね」

「で、他にあいつは何か言っていたか？」

「歴代ブリュンヒルデ皆で回収して回ろうぜ！・・・みたいなことを」
「止めさせろ」

「一応言っておきましたけど聞きますかね」

「ハア、私からも言っておく」

「ついでにその辺のことも話しておいてくれますかね。ほら、俺ってただの学生ですし。計画は大人が建てたほうがいいでしょう？」

「・・・よろしい、計画は立てるがお前が実行しろよ」

「我が社はクリーンな会社です、悪は絶対許しません。汚れ仕事で救

われる人が居るならヨロコンデー。東無限大工業の提供でお送りいたします」

「技術方面に関しては確かに信頼できるが・・・生憎トップがな」

「見ろよ、この会社トチ狂ってやがるぜ！」

「では私は連絡を取ってくる。鷺津はこのまま山田先生がくるまでソイツと待機だ」

「了解しました。じゃあ色々頼みました・・・あ、後千冬さん。束さんがスリーサイズ把握してるそうですよ」

去り際の背中に言ってみると「・・・ほう、それは面白い事を聞いたな」とか怖い感じに呟いて角を曲がって見えなくなった・・・アカン。コレ束さんが憂さ晴らしに計画を鬼畜化するパターンや・・・

山田先生が戻ってくるまでになんとかそっくりさんを腰から引き剥がして、とりあえず名前が「まどか」ということを知った・・・まどか、まどか？・・・円環の理かな？だとしてもお前はお断りだ、ゆるふわ系になつてから出直せ。

「鷺津、翔・・・だったな。恥ずかしい所を見せた」

「いや、まあなんだ・・・ネタとして楽しめたよ」

「頼むっ忘れてくれっ！」

「必死だなおい」

「普段の私はあるのではないんだ・・・あれは、ただ・・・お前が悪いんだ！」

「うわあ、人のせいにしやがった・・・」

「仕方ないだろう！姉さんの国を知ろうと勉強してたネタを振つて来たお前が悪い！」

「なんでドイツもコイツも日本の勉強しようとしたらこうなるんだよ！図書館ロールファンブルってレベルじゃねえぞ！」

「それなら知ってる！TRPGだな！皆でやったことがある！」

「おかしくねーかお前の組織！」

テロリストってTRPGする余裕があるのか。まあ映画とかでもポーカールールしてる場面とかあるし案外そんなもんなのか？

と混乱していると山田先生が走ってきた……走ってきた。お胸様が激しく揺れていて僕は満足です。

「はい、えっと……マドカさんがお泊りする部屋はこちらになります」「1250号室ですか、ありがとうございます御座います」

「……いやまて、今なんて言った?」

「ん?ありがとうございます?」

「その前だ!」

「1250号室?」

「俺の部屋じゃないですかーやーだー」

「またお前に私の恥ずかしい姿を見せてしまうのか!」

「わっ鷺津くん!えっちなのはいけなとおもいます!」

「そっち方面じゃなくて精神面とか言動的な意味でだよチクシヨウ!千冬さん似の人と同室とか死ねと申すか!」

「羨ましいですよ鷺津くん!」

「俺のメンタルがもたないんですよお!なんでこうなったんですか!」

「え、ええっと……織斑先生が『アイツにでも任せておけ。仮に暴れても無力化できるだろうからな』とのことです」

「ヤダ……何その無駄な信頼、こわい」

「もうすっかり千冬さんのお弟子さんみたいな感じですしね、鷺津くんは」

「山田先生もやります?毎朝つらいですけど」

「せ、先生にはし、仕事がありますから。ぎ、残念だなー」

「いやならいやってはつきり言ってもいいんですよ」

「もうあんな拷問受けたくありません!」

「ど、どんな訓練受けてるんだお前……そしてどんな訓練してるんだ、姉さん」

「お前もやる?強くなれるよ」

「わ、私はあくまで捕虜だ!捕虜の扱いは国際条約で決められているだろう!」

「ここ、IS学園。他の国なんて知らん」

「アツアツアー・・・」

「こら驚津くん！女の子をあまり怖がらせちゃいけません！」

「アツハイすみませんでした以後気をつけます」

「男性たるもの常に紳士的でなくてはいけませんからね」

「というわけで、部屋に案内するから付いて来い」

「あ、ああわかった。付いていくぞ」

山田先生に挨拶をしてから廊下を歩いて寮へと向かうのだが・・・

「まどか、お前・・・荷物は？」

「ISに入れてたんだが・・・後で姉さんが運んでくれるらしい」

「・・・ずっとおもってただけ、姉さんってなんだ？」

「姉さんは姉さんだろ」

「そつからしておかしいんだよなー。お前クローンだろ？なら千冬さんはオリジナルってことだろ？姉さんはおかしくないか？」

「・・・言われてみれば、確かにおかしいな」

「まあ急に変える必要も無いしな。姉さんでいいんじゃないか」

「そう、だな・・・ゆつくりと行こう」

なんか分かんがスッキリとした雰囲気を出してるまどかを見てよかったと一人で頷いていると不意に「ところで」と声を掛けられた。

「何故制服の上にそんなコートを着ているんだ？」

・・・スツカリ忘れてた、王子とか云々の衝撃よりもアサシンと遭

遇したって方のインパクトとが強すぎて忘却してた。

「・・・俺、こんな厨二っぽい服装でお前と戦ってたりしてたのか」

「ああ、似合っていてかつこよかったぞ」

「似合いたかねえなこれ」

とりあえず気付いたのでさっさと脱いで畳んで腕にかける。

「なんだ、脱ぐのか。せつかく似合っていたのに」

「ちよつと勘弁してくれませんかねえ」

とりあえず部屋に案内すると真っ直ぐにベットにフライングボダイプレスをして、そのまま寝息を立て始めた。いや、捕虜だとしても敵地でこんなあつさり眠れるもんかね・・・神経図太いなまどかよ。

原作的誕生日会話ですよ

ひっ捕らえた捕虜が変態チックだったり、千冬さんがいつも通り男前だったり、束さんに電話したり、衝撃の事実を教えられたり、捕虜のそっくりさんの名前が「まどか」だったり、テロリストが和氣藹々としてたり、まさかの捕虜の監視として同じ部屋で寝ることになったり、なぜかまどかが千冬さんを「姉さん」と呼んでいたり、いろいろ謎です。

千冬さんに助けを求めたり、そっくりさんが千冬さんに回収されたり、束さんから世界壊滅計画を聞いたり、捕虜が泣きついて来たり、少し仲良くなったり、山田先生から拷問じみた話を聞いたり、まどかが俺の寮の部屋で寝泊まりすることになりました、俺はもう発狂しそうです。

とりあえず、文化祭へと舞い戻ってみると他の生徒たちは何にも知らない模様。

しれっと俺の冠持って来た本音嬢と簪嬢が舞台の上で賞賛を受けていた。それはもう、例えるなら国を脅かしていたドラゴンを倒して無傷で生還した英雄を称えるかの如き扱いだっただ。

会長の代わりに別の女子生徒が司会をやっているのだが・・・俺のことを魔王の様な存在にするのはやめろ。なんだおい、やれ空飛んだとか、やれ目の前で消えたとか、俺を何に仕立て上げたいんだよ司会者テメエ。俺は千冬さんじゃねーんだぞ！

かつての有名人やら戦国武将やらが空飛んだとか雷斬ったとか言う話だが、千冬さんはマジでそのレベルで語り継がれそうで怖い。

いや、いつそ俺が語り継いでやろうか・・・あることないこと無双の如く。後世でISのゲームが出たときに生身で参戦させられるレベルで・・・いや、ISのゲームあるけどね。暮桜チート過ぎワロタ。

なお、売り出されるたびに各国から「ウチの国家代表のアプリはよ」と苦情が殺到するクソ仕様な模様。だから売り出してる会社は大手が多いが。案外生産中止になったゲームの方が面白かったりするわけ・・・大手が出してもクソゲー化することがあるから当たり外れ

が大きいのは変わらない。なんだよ、空中浮いてるのに上と下に動かねえって・・・中学の時友人たちと一斉に叩き割ったあのクソゲーだよ！

「鷺津」

「え？あ、はい？」

そんな悲しい過去を思い出している時に真後ろから声がかけられて間抜けな感じで返事をしてしまったわけだが、うん、まあ、千冬さなんだしな・・・

「あいつはどうしてる」

「部屋で寝てますよ。俺アレをほとんど常に見張らなきゃいけないんですかねえ」

「そのことだが・・・あいつはしばらく隠すぞ」

「隠すんですか・・・え？か、隠す？」

「うむ、少し移動するぞ」

・・・マジで？割と真面目であかん話題なんスか千冬さん。

待つて、ちよつと待つて千冬さん。なんか歩くの早くないですか千冬さーん！

連れてこられた先はいつぞやの倉庫。の、そのまた奥の階段を降りた先。いかにも秘密基地がある感じの場所。の鉄製扉の前。

「なんスかこれ、なんなんスかこれ！」

「教師専用トレーニングルームだ！」

「アリーナの中とかではなくなんでこんなところに！」

「ロマン・・・とは轡木さんの言葉だ」

「流石轡木さん！出来る大人は違うぜ！」

「うむ、実に遊び心のある方ではあるな」

「今度特撮について語り合えるかもしれないですな・・・」

「年代がだいぶ違うが大丈夫か？」

「ぶっちゃけ昔の特撮の方が面白かったりするんですよ。別に今のも悪くないですけど」

「最近のは男が一人しかいなかったりするが、楽しいのか？」

「IS出てきてから特撮ヒーローも女性増えまくりましたし……って、ドア開けないんですか？」

「……忘れていた」

まさかの千冬さんドジっ娘説浮上。これ以上属性を付け加えて何を目指しているんだあなたは……。そういや一夏君が千冬さんは家事苦手って言ってたし……。まさかメシマズ属性持ちなのか千冬さん!?! そんなメシマズ疑惑のあるお方に案内されて入った部屋は、まさにトレーニングルームだった。

スポーツジムで見るとような機材が一通り取り揃えられてたり、十畳ほどの床が畳のスペースがあったり、申し訳程度にある襖を開けると剣道場だったり。

「……射撃場とはまた違った感じで」

「一応水泳場もあるが、いらんだろ？」

「大丈夫ですね」

「……そもそも道民って泳ぐのか？」

「俺今馬鹿にされたんですかね？」

「すまない、そんな気ではなかったんだが」

「いやまあ気にしませんけどね。で、ここに連れてきてどうしろと？ あいつと……ここで鍛えろと？」

「概ねその通りだ。そして、奴を使って外部からの襲撃時の対処の仕方方の訓練をする」

「……でも、隠すんでしよう？」

「その方があいつらにも気合が入るだろう」

「そつすね」

「ということ、あいつが持っていたISに細工をしてほしいんだ。束に頼めるか？」

「内容によつちや俺でもできますけど、なんですかね」

「ISでの通信の固定化だ。設定した相手以外とは通信できないようにしてほしいのだが、やれるか」

「試してみます。というか多分そんなの束さんもやったことないんじゃないですかね。発想が新しすぎるでしょう」

「できるのなら、お前のISと私のインカムとつないでくれれば襲撃訓練をするときに便利だ」

「チャレンジはしてみますよ」

「出来次第、訓練の実行を計画する。では頼むぞ」

「……ちよ、ちよつとだけ、ちよつとだけ訓練させていただきませう。先つちよだけ、先つちよだけでいいから！」

なんてやってたら千冬さんに首根っこつかまれて強制退室させられた。別れ際にトレーニングルームのカギを渡されたので今夜でも、ごめんなさい千冬さん嘘ですすみません。

自力で出来なくても最悪束さんにアプデしてもらえばいいかなー、なんて考えていた時期が、俺にもありました。

「成し遂げたぜ」

まどかのISに千冬さんの携帯の電話番号と俺のIS登録して孤立化。一応束さんに連絡して確認してもらったが、束さんが苦勞するレベルで孤立化出来ているらしい。リングつてすげえ！

そしてまどかにISを返して、一緒に訓練して、トレーニングルームにいた千冬さんと三人で話して、軽く計画を立て、そして学食へ。まどか？パンでも食つてろ。冗談だよ、千冬さんが飯持つていくつて話だから部屋に戻れ部屋に。

なんてクズ男みたいな感じでまどかをあしらい、学食に行ったのだが、なんか知らんが一夏君の誕生日が今月らしい。

よし、ここは一肌脱ぐとするか。

「聞いたか翔！」

「おうよクリス。じゃあ行くぜー！」

いつの間にか後ろにいたクリスに誘われまっすぐに専用機持ちに囲まれる一夏君に近寄つていき、クリスがドーンと一夏君と肩を組んだ……うん、はしゃぐな腐女子共！

「二十七日が誕生日なんだって？」

「ああ、これで俺も十六だ」

「よし、じゃあ一夏！二十七日買い物行こうぜ買い物！誕生日プレゼント

ントだ！」

「いいのか！いやー、男だけで買い物なんて久しぶりだなあ」

「いやクリス、お前のそれ下心丸見えだからな？自分の誕生日に祝ってもらおうって考え見え見えだからな？」

「ツハ！その手があったか！」

「ないからな、ないからなクリス」

「とか言つて一夏君普通にプレゼントあげちゃうんでしょ？」

「え？あげないのか？」

「クリスはジョークグッズで満足してくれるいい奴だよ」

「そういうフリやめーや！」

とりあえず騒いでいたが、俺とクリスの作戦はただ一つ。『とにかく専用機持ちずに行動させよう。あとは流れで』というものだ。どうしろって話だ。

なんて疑問を感じている内になんと専用機持ちちが行動に出た！

具体的にいうと鈴嬢がクリスを殴り倒した。うん、どうしてこうなった？

「あんたらそろいもそろってホモか！」

「ホッ、ホモじゃねーし！」

「いや、どもつてる時点で怪しいぞ。クリス」

「クリスと一夏君はホモだろうけど俺は違うぞ」

「俺だって違うぞ翔！」

「いや今のところお前が一番ホモ疑惑あるからな」

「・・・え？う、嘘だろ」

「残念だけど鷺津の言ってる通りよ一夏！あつ、あんたがはつきりしないから！」

「残念だけど鈴嬢、それブーメランだぞ」

「・・・うっさいわね！言われなくなつてわかつてるわよ！」

「じゃあ頑張れ。みんな頑張れ。まあ頑張っても報われるとは限らないけどな！」

「まさに外道！」

顔面殴られた。

俺は鈴嬢と少佐に。クリスは篠ノ之さんとオルコツトさんとデユノアに。

なんで俺がロリ風コンビに殴られなきやいけねえんだよ、だから口リコンじゃねえってば。

「あ、そういや二十七日ってアレがあつたな」

「アレ？・・・ああ、誰もが最速の兄貴目指すアレか」

「いや別に全員じゃないだろ、多分」

「開発者は全員だ！」

「なにその決めつけ怖い」

「いやでも気持ちわかるな。白式に拡張パッケージだって？ソレないけど」

「速さはロマン！有澤にはそれがわかる大人が大量にいるんだ。この勝負、貰った！」

クリスのそんな慢心全開の発言を聞いて、誰かしらが反論するかと思つたら「ああ、うん、有澤。有澤」「有澤ならおかしくないわね」「有澤・・・ゴクリツ」なんて奇妙な雰囲気に包まれた。おいこ食堂だぞ、そんな雰囲気出すのやめろや飯が不味くなる。

「しかし・・・翔ってなんか色々大変だったって話聞いたけど、どうだったんだ？」

「どうだったって、大変だったぞー。命狙われたり、会長が取り逃がした奴を追いかけたり、そいつを回収しに来たやつを一戦交えて・・・逃げられたり」

逃げられたってことにしとかないと千冬さんが考えた襲撃訓練計画がオシヤカになっちゃうからな。

「む、あの後逃げられたのか。しかし、嫁が無事で何よりだ」

「君の嫁は一夏君だけでしょー少佐」

「いや俺も違うぞ」

「二人とも私の嫁だ！」

「おいこの子人の話聞いてねーぞ！どうするよ一夏君！」

「よし、スルーしよう！」

「やだ・・・成長してる・・・」

一夏君、少し見ないうちに随分精神的に成長して・・・友人はうれ
しいよ。

「それにしても、アレには驚いたな」

「アレってなんだよアレって」

「リムバー、だっけ？ ISを奪われた」

「え？・・・なにそれ聞いてない」

「千冬ねえ曰く『存在しない兵器』らしいんだ」

「亡国機業、いったい何者なんだ」

「翔、実は知ってたりしない？」

「ないない。俺の処に情報来る前に千冬さんと東さんで解決しまっ
よ」

「あー、有り得る。あの二人で国を敵に回せるよなー」

「俺が使ってるのも東さん作の IS だけどさ、あれで全力じゃねえっ
て話なんだよ」

「映像で見ただけど、あのチェーンソーいっぱいいてるやつか？」

「アレは俺作」

「え？」

「え？」

「アレ東さんの作品じゃないの？」

「だから俺が作った奴」

「え？」

「え？」

「なにそれこわい」

「だろうね」

「何考えたらあんなの作れるんだ？」

「一夏君の零落白夜がうらやましくてね。ほら、一撃必殺ってかつこ
いいやんっ..」

「いやでもああなるのはおかしい」

「最近じゃアオルコットさんにあこがれて高威力スナイパーの設計を
始めてたりしてるんだがこれが」

「翔はいったい何と戦う気なんだ？」

「亡国機業」

「だよな。いつまた襲ってくるかわからないしな」

「キャノンボール・ファストの時にも来そうだから気を付けとけよ」

「あ、リムーバーって一つのISにつき一回しか効かないらしいぞ」

「マジかよでも誘拐されないように気を付けとけよ」

「誘拐：・誘拐か。そうだな、俺の場合直接千冬に対する人質だしな」
「頑張れ」

「俺木刀なきやただの高校生だしな。翔、素手での戦い方教えてくれ」
「急所殴れば腕力なくても何とかなる」

「どこ殴ればいいんだよ、男の急所とか言わないでくれよ」

「喉とか鳩尾とか殴れその辺は流石にわかるだろ、てか分かれ。んで男の急所は最終手段で蹴り上げろ」

「やりたくないんだけど」

「最終手段だ。俺だってやられたくないからやらないけどヤバくなったら遠慮するな。若さってのは振り向かないことなんだよ」

「いや、いきなり何さ」

「後悔は後からすればいい。今しかできないことしようぜ！」

「え？なんだよ、どうしたんだよ」

「とりあえずみんなの会話の輪に入ろうぜ。青春は一生に一度しかないぜ」

「ちよ、何か起きそうで怖いんだけど。何も起きないよな、なんかの前兆とかじゃないよな！」

「大丈夫大丈夫。俺の言う言葉だぜ？」

「だから余計心配なんだけど！」

俺ってそんな安心感ないのか。それともフラグ生産機だと思われ
てんのか？どっちにしろ解せぬ。

一番解せないのは少し目を離してた間にクリスがボロ雑巾のよう
に専用機持ちちにフルボッコにされていた。

どんな状況かって？ヤムチャしゃやがって……

原作的データらしいですよ

簪嬢と本音嬢が英雄扱い受けてたり、なぜか早足の千冬さんに先導され、トレーニングルームを紹介されたり使用許可が出されたり、千冬さんが一夏君達に発破をかけるような計画を建てているのを知ったり、ISの通信回路改造に成功したり、一夏君の誕生日がそろそろだという話を聞いたり、クリスマスがおちやらけて専用機持ち女子達にキレられたり、ついでに俺も殴られたり。そこそこ平和です。

というか誰かまどかをどうにかしてください。あいつの方が俺の平和をぶち壊してくれます。誰でもいいから円環の理に導いてやれ！

早速ですが、千冬さんがまた別の計画をおつ建てちゃってます。

その名も『私自身が出てちよっと揉んでやろう』計画。

会長に鍛えられ、順調に実力をつけてきてちよっと緩んでる一夏君を引き締めてやろう、という計画だ。この人ただだけブラコンなんだよ、馬鹿じゃねえの！

俺は俺で別の計画に時間を割きたい所なんだが、「計画実行のために、まず慣れる」とか言い出して俺に書類整理させたり、千冬さんの仕事の補佐させられたり・・・これ生徒がする事じゃねえよな！

調べてみたら、生徒会とかはするらしい。生徒会にやらせろよ。え？内緒にして驚かせたい？ハハッ千冬さんのお茶目さんめ。

クソが。

最近、放課後を千冬さんにとられてる俺の自由時間はもう部屋にいるときだけだ！

ということ、まどかに見られながらISに計画書を打ち込んでいく。このIS凄いやお！だって自動的に束さんの所にデータが送られるんだもん！畜生！

俺の肩越しにモニターを見たりしてたまどかもすっかり飽きたのかもう寝てるし、時間も深夜だし、しかし使える時間は夜か休み時間しかない！ぶつちやけ、俺も束さんも開発Ⅱ趣味な感覚だから自由な

時間があつたらつぎ込みたいものだが、千冬さんに時間を取られるんであまりにも時間がない！社会人つてつらいのね。

俺の計画は実にシンプル。『IS宇宙帰化計画』

非情に残念なことに、兵器として根付いてしまったISだが、宇宙開発専用機械にするにはいくつかの手がある。

一つ、ISコアそのものを増やす。束さん働け。

二つ、束さんが公の場でその旨を語り、『宇宙開発しなきゃコア停止させちやうぞ☆』とでもいう。いいぞ、マジでやれ。

三つ、ISより強力な兵器を作る。頑張れ他の国、とくに某大国超頑張れ。

四つ、宇宙開発の場を整えてやること。俺の計画はこれ。

誰も宇宙開発していなかった理由にこれもあるんだろう。ロケット飛ばす金も馬鹿にならないし、そもそもIS単体でどうやって大気圏突破、突入するんだって話だ。宇宙に行っても拠点がないし、資材はすべて拡張領域に入るだけ。

そもそも大気圏突破のトライアンドエラーでジリー・プアーどころか赤字確定だから誰もやらないし、別惑星で取れたもので黒字になるかと言われれば即答できない。つまり、うまみがあまりないのだ。だから誰もやらない。大事なことなので何回も言いました。

だからまずは、某機動戦士の拠点である白木馬よろしく地球でも宇宙でも活動できる拠点を作ろうと思う。別にヤマトでもいいけど波動砲再現はリング科学でもムリゲ。

宙に浮かべずにして何のためのPICだ！スペースステブリを止めずにして何のためのAICだ！

他惑星の地層を調べずして何のためにパイルバンカーなんて作った！あれでボーリング調査しようぜボーリング調査！ロマン？惑星開発の方がロマンだろいい加減にしろ！

武器火器は必要か？それはね、別の惑星に危険な現地生物がいたらどうするんだ！いやまあそのためのエネルギーシールドなんだけども・・・

とりあえず、計画書と設計図やらなんやらを色々と準備し・・・ひ

とまずルナチタニウム合金だっけ？それを量産して装甲に使おうぜ！ってことを強く主張した計画書を送ってから寝る。もうそりゃ、死んだように眠る。夢の中で伝説のアサシンに殺されたから実質死んだ。

他企業達がキャノンボール・ファストの準備を着々と進めている中で、それは起きた。

『T・U・Iこと東無限大工業は此度のキャノンボール・ファストに参加不可となりました。これは各国の多数決によるものです』

人がいい気分で朝食を食べていた矢先、テレビで放送された出来事である。正直言おう、味噌汁噴き出した。

「いやまあ、実際チートだしな。篠ノ之博士」

「どつちかって言うのと東さんはバグな気がするけどなあ」

「そんな些細なことどうでもいいわ！キャノンボール・ファストのために俺がどれだけISを改造したと思っただやがる！ファツキン民主主義！」

「多数決と民主主義はイコールじゃないよ、翔」

「そう思わずにいられるかデュノア！これはアレだぞ、各国がおかかえの技術者達が恥かかないようにって考えた策だ！」

「ふむ、確かにその通りだろうな」

「だがしかあし！」

「翔、荒れてんなあ・・・」

「自分で改造って言ってたし、篠ノ之博士関わってないって言ってるようなもんだし。そりゃ荒れるだろ」

「嫌なことから逃げて人類成長できるか？いやできない！むしろ退化の一路を辿るだろう！大人がそんなクズ共じや子供の未来もクズになっちゃおうではないか!!」

「ふむ、嫁の言う通りだな！人類は困難を打ち破って進化してきたのだ！」

「ヤバい、ラウラが洗脳されたぞ」

「お前の婿だろ、早く何とかしろ」

「無理言うなよ。生身でヴァルキリートレースシステムと戦えって？」

「実際やった奴が何言ってるんだ……」

「というわけで嫌がらせて誰かのIS調整しまーす、オルア！IS出せやゴルアー！」

「あ、駄目だあれ。駄目なパターンだ」

「一夏、お前の白式を献上するんだ！」

「なんで白式なんだよ、そういうクリスこそだせよ」

「俺の渡したら……有澤の技術者たちが凹むじゃないか！」

「そんな改造を白式に受けろって！」

「一夏君、そのISを寄越すんだ……そのISを作った連中はな、とある女の子の専用機制作を途中で打ち切ったクソ共なんだよ！」

「な、なんだってー！専用機の制作を打ち切った！いったい何があつたんだ？」

「主にお前のせいだけだな」

「……え？俺？」

「大まかな流れは、その子のIS制作が予定される↓お前出てくる↓その企業がお前のIS制作の名乗りを上げる↓人手足りねえからどっかから引つ張ってこい↓元々予定されてたIS制作の人員全員が白式持つてかれる↓白式完成↓その子のIS未完成で打ち切り」

「ま、マジか……いいぞ翔！いつそ一思いにやってくれ！」

「応ともさ！白式の整備にも調整にも来ねえ連中だ！プライドぶっ潰す！技術者廃業に追い込んでやるよー！」

「流石翔！俺に出来ないことをやってくれ！」

「そこに痺れる！」

「憧れる！」

「ああ……僕一人じゃツツコミが追い付かないよ……」

「ついでだデユノア！お前のISもだ！デユノア社の技術者泣かせてやるぜー！」

「やめたげてよおー！」

実際問題、自分達が調整したと思ってた物が、数か月後に更にレベ

ルアップしてるのを見て技術者達がどう思うのか、俺は知らない。
とりあえず、弄ったデータは元に戻して履歴も消すことにしよう。
俺は汚い大人が大っ嫌いなんだ。

何やらIS貸してくれた一夏君とIS貸してくれなかったデユノ
アと国から拡張パッケージが来るといってISを渡そうとしなかつ
た鈴嬢が出かけるらしい。とても喜ばしいことだ。今まで一歩も踏
み出せてなかった二人となると喜びも倍！さらにドン！まるで娘が
好きな男が出来て一緒に出掛けてくる！と言って来たような・・・い
や、それはそれでムカつくな。困ったな、急に一夏君を殴りたくなつ
たぞ。

「しかし一夏君。技術者にホイホイ白式を渡すもんじゃあないよ、世
の中には俺みたいないな輩がいるからなあ・・・ゲツヘツへ。大丈夫だよ
白式ちゃん、ボクは悪い技術者じゃないよーハアハア」

このボディーに隠されたコアの奥に零落白夜の秘密が・・・そんな
ことより横で見てる簪嬢の目線が大変なことになってしまっている。

「技術者こじらせたならこうなるんだね」

「うん、これは・・・これは、ないわ・・・」

「いやだって、零落白夜の秘密が気になるんだもん」

「でも・・・そうじゃない」

「勿論そこには手は出さない。デリケートな部分には触れないのが出
来る男なのさ」

「などと、供述しており・・・」

「わしわし捕まっちゃった」

「割と本気でどっかに確保されかねないのが現状なので笑えない」

だって公的には行方不明の篠ノ之束の行方を知っていて連絡が取
れる唯一の人間だぜ？正直捕まっても言わないけど。そもそも俺を
捕まえたければ千冬さんレベルを連れてくるんだな。それでも死ぬ
気で逃げるがな！というか今しがた逃げて来たぜ！千冬さんと書類
からな！

「簪嬢は・・・自分でやるんだな」

「うん・・・くやしから」

「頑張れ簪嬢！俺は応援してるぞ！」

「・・・はあ」

「え？なんで俺今ため息つかれたの？なに？選択肢ミスったの？」

「気にしないで」

「まったくわしわしはダメダメだな」

「え？俺が悪いの？・・・いいよもう、白式弄ってるからもういいよ、ほっとけよ」

畜生畜生、俺のことをわかってくれる人間なんていねえんだ。所詮他人となんて分かり合えないんだ。

なら全力で自分を表現していいんだよね！荒らしてもいいんだよね！待っててね白式ちゃん、今君に翼を授けよう！」

「凄いな・・・思考が、口に出てる」

「途中からだからわからないね」

「アイニードモアパアウアアアアアアアアアアアアアアアア!!」

「ストレスたまってるんだね」

「黙って、見過ごしてあげよう・・・それが、やさしさ」

「か、かんちゃんがやさしくなった」

「余裕が・・・出来ただけ」

後ろでひっそり成長物語が行われてるが知ったこっちゃねえ!・・・やっちゃおうかな、デリケートな所、暴いちゃおうかな？よし、時間が余ったらやろう、そうしよう。

イエア！俺氏有能！というか白式ちゃん、君凄いいい子だね。零落白夜の閲覧許可してくれるなんて君は素晴らしいISだ！と喜んでた後ろでまた視線が大変なことになったが気にしないでおいた。

丁度休憩に入った簪嬢と本音嬢と一緒に僕らの第三アリーナに訪れたところ。だが、

技術者たる簪嬢は鈴嬢のISのパッケージングを眺め、俺は俺で何度もビットで射撃をしているオルコットさんを眺めてる。

何ともなしに見てると彼女がこっちに降りてきてちよつとびつく

りした。

「そういえば、鷺津さんもビットでしたよね？」

「俺のはファンネルな。よくよく考えたらドラグーンっぽくもあるけど・・・まあ違いはあんまりないと思うけど。どうしたんだ？」

「いえ、先日のお園での交戦映像記録を見せていただいたのですが：鷺津さんのビットの使い方や、相手のビームが曲がっていたりしたことを見てわたくしはまだまだ力不足だと思ひまして」

「ああ、そういやなんか死角からビーム飛んでくるなーって思ったらアレ曲げてたのか。ビーム、曲がるのか」

「え！知らなかったのですの！なのになんでよけられたんですか！」

「まあ、死角からの攻撃なんてよくされてたし、気合と根性だな。ってかその口ぶりからしてビーム曲げようとしてたんだな」

「ええ。手札は多い方が安心できますしね」

「ビームが曲がる・・・つまり、一夏君の零落白夜も曲がる？」

「ど、どうでしょうか・・・あと、ビームではなくレーザーですわ」

「レーザーなのか。レーザーライフル、なんかダサイからビームライフルの方がいいな。というわけで俺はビームで押し通す！」

「力強い宣言ですわね・・・」

「で、そのビーム曲げるのって誰でもできるのか？」

「いえ、適正がA以上でかつビット兵器の稼働率が最高でなければいけませんわ」

「つまりファンネルに一撃でも攻撃を食らったらそいつはできないと」

「つまり高いビット制御能力も必要不可欠ということですよわね」

「なるほどなるほど。実に奥が深い」

「では、わたくしはこれにて」

「引き止めちゃって悪かったな」

「気になさらないでください」

そういつて淑女らしく去っていくオルコットさん。こっちが煽ったり弄ったり一夏君が絡まなきやまさに英国淑女だな。少しいじられたくらいで剥げるメツキ程度じゃまだまだ本物の淑女には遠いぞ。

頑張れオルコットさん！負けるなオルコットさん！

しかし、ISの情報が頭にぶち込まれたとはいえ文字通りぶち込まれただけだからな。漁らなきやわからない情報が大量にあるってことがよくわかった。正式名称『ビット偏向制御射撃』ね。キャノンボール・ファストにも出れないことだしじっくり練習でもしておこうか。

原作的機体相談ですよ

千冬さんがよからぬことを考えていたり、その考えに振り回されたり、自分の計画進めたり、キャンボール・ファストに参加不可になったり、やけになつて誰かのIS改良したくなつたり、お話の末一夏君の白式を改良してもいいつてことになったり、白式ちゃんがいい子だったり、ビームを曲げれることがわかつて俺はロマンに溢れている！

白式ちゃんが零落白夜のデータ見せてもらったのはいいんだけど、白式ちゃんの思惑がわからない。パクっちゃつていいのかな？なんて暴走気味な俺です。

デート(?)から帰つてきた一夏君に白式の弄つたところを伝えつつ返却しようとしたら「もつといじりたいんだろ？顔見ればわかるさ」とか言われてまだあずかることに。その爽やかさと察しの良さを少しでも女子に向けてやれよこの朴念仁。出来ないんだから朴念仁なんだろうけどな！

そんな一夏君だが、彼は前の学園祭にて冠を会長にとられたせいで会長からの「生徒会執行部」に加えられ、さらには「部への貸し出しが許可される」という非常にかわいそうなことになつてしまったのだ。おかげで男二人は好きな部に入つていたり、なかったり。少なくとも、俺は入つてない。千冬さんに「茶道部はどうだ」とか言われて勧誘されたがあいにく茶の旨さつて何？つてレベルな人間なんで辞退させていただいた。茶菓子とかもつたないだけだし、そもそも自分で作れるから今度腕によりをかけて作ったものを千冬さんに試食して貰おうとか考えた俺は悪く無いはずだ。

そして今日の俺は自室で自分のISを弄っている。主にデータ面を弄りまくり零落白夜を再現できるかどうかのテスト中だ。

部屋をウロウロしたり俺の背中にへばり付いたり横から腹に抱き付いたりと暇アピールをしてるまどかをガン無視しているのだが：「何がしたいんだよお前は」

「暇だから構え！」

「ゲームでもやってなさい」

「オンラインは・・・地獄だッ」

「知ってた。ぶっちやけ物によつては魔境だもんな」

「気を抜いたら倒されるとか、今までのどの仕事よりも地獄だ！」

「これまでの仕事ぬるすぎワロタ」

「別に仕事がぬるかったわけじゃないんだ。オンラインが修羅過ぎるだけだ・・・」

「とりあえず情報収集してから挑んどけよ。ノーパソは貸してやるからさ、頑張れ」

「・・・がんばる。廃人殺す、慈悲はない」

もはやただのゲーマー女子高生と化したなテロリストよ。千冬さんのクローンとか言われても信じらんねえ程の牙の抜けっぷりだ。単純にオンオフ切り替えてるだけの可能性もあるが・・・オンオフの差、激し過ぎないか？それとも軍人とかテロリストってこんなもんなのか？駄目だ、比較対象が束さんって言うオンオフ切り替え装置がぶっ壊れてる人だったわ。

他？千冬さんはオンとオフの差が、ね？出来る教師とズボラなO.Lって感じの漢女だからなあ・・・さっぱりわからんから考えるのはあきらめよう。

色々考えるより零落白夜を再現してからにしよう。アレできるようになればまどかがどつかで何かやらかしたり、どこぞの連中が襲ってきてても対処が楽になるからな。

俺ので再現出来たら後は量産機でも使えるかどうかを試してみなきゃ。量産機の逆襲のお時間です！とかやってみたいと考えている俺がいる。いやだって、こつちを一撃で沈めに来る大量の量産機とか、胸熱じゃね？

早朝に起きて日課の修行を終え、食堂に行ったら女子達が発狂していた。

静観しているとどうやら「朝、オルコットさんの部屋からパジャマ

の一夏君が出てきた」とのこと。つまりパジャマでお邪魔してたわけですね分かります。いやわからねーよ。ちよつと軽率すぎんぜ一夏君……

放置して朝食食べてる間に一夏君は千冬さんに「懲罰部屋三日間」の御達しを貰っていた。なお、オルコットさんは反省文提出の模様。ちなみに進展はなかったそうだ……ドンマイオルコットさん！

そんな残念オルコットさんを眺めつつ気が付けば実施の授業の間。

高速機動パッケージのオルコットさんと俺改造白式の一夏君がちよつとしたレースをすることになった。

離れてみていた俺のISに一夏君からの通信が入った。

『なあ、翔。さつき山田先生が言ってた「高速移機動」のバイザーってどうやるんだっけ』

「ちやんと学んでるようで俺はうれしいぞ一夏君。だが安心してほしい、ちよつと残念な一夏君のために俺はちやんと分かりやすいものを用意してある」

『なんかすごい貶されたけど……で、どうすればいいんだ？』

「モードってところに『キャンボール』ってのがあるだろ？とりあえず触ってみろ」

『了解……ん？おお！なんか凄いなこれ』

「一夏君の反応速度に白式ちゃんがしっかり合わせて調整してくれたり、まったく技術者泣かせのいいISだぜ」

『そ、そんななのか？』

「お前は白式ちゃんを崇め奉るべき。神棚設置して中に白式ちゃんフィギュア作って収めて毎日三回の祈りをささげるべき」

『白式大明神様、どうかお力を御貸し下さいませ』

「ま、試合ってわけじゃないし適当になー」

『馬鹿野郎翔！やるからには勝つぞ！』

「ガンバ」

結果？同着。あんだけ言ってたのに勝てなかったからなんかして

やろうかな。そんなことよりなんか喜んでピョンピョン跳ねてる山田先生がかわいいです。なんて思っていると千冬さんが手をたたいて注目を集めた。

「今年は異例の一年生参加だが、やるからには各自最大限の結果を出すように。キャノンボール・ファストの経験は今後生きてくるだろうから、全力で取り組むように。では、訓練機組みの選出を行う。各自割り当てられた機体に取り込め。遅れればそれだけ練習時間がつぶれるぞ！」

そんな言葉に続いて皆が一斉に動き始めるわけだが、「お姉さまにいいとこ見せなきや！」とか「買ったらデザート無料券！やるつきやないわね！」と・・・俗物共が。まあ女子高生らしいっちゃらしいけどさ。

とか思いつつ「そういや俺キャノンボール・ファスト出場できねえじゃん！なにすりやいいんだ？」とか頭抱えていたら肩トンスれた・・・ま、まさか、スレンダー・・・

「鷺津。貴様は追加スラスターのない篠ノ之にエネルギー分配でも教えてこい」

「了解です千冬さん。あと、一夏君のも第四世代でしたよね。パッケージとか多分ないと思うんですけど」

「そうだな。では織斑も後で合流させるから先にやっておけ」

「では先に。さて、参ったな・・・人に教えるのは苦手なんですよね」
「教えることで自分も改めて学ぶ事だな」

「ハードル高いツスよ。割とマジで、切実に」

ぶつくさ言いながらもとりあえず空中に浮いているモニターを眺めて唸ってる篠ノ之さんの後ろから近づいて行きそつとモニターを覗いてみる。なんとことはせずに後ろから眺めておく。集中してるっほいしお邪魔しちやダメでしょ。

なんて思っていると後ろから来た一夏君が俺と篠ノ之さんに声をかけてきた。

「千冬ね、織斑先生に言われて来たんだけど・・・何してるんだ？」

「篠ノ之さんが集中してるんでひっそり後ろから見てた」

「性格悪いな、翔」

「応援してるのさー。自分の機体だけでも知っておいた方がいいだろう？ぶっちゃけ第一線で活躍してる人らは自分で調整したりしてる。というかそもそもIS学園ってそれを学ぶ場所でもあるしな」

「俺、あと二年でそこまできなれるかな」

「今のままのペースじゃ無理じゃね？与えられたモノ以上の努力をしなきゃ・・・千冬さん守れないぜ」

「あんまり煽るなよな翔。じゃないと俺・・・うっかりお前を殴りそう
だ」

「なんで！」

「いや、千冬ねえと仲良いのはなんかムカつく」

「お前は少し姉離れをしろよ」

「俺が卒業したらするんじゃないか？」

「ああうん、鷺津これ知ってるよ。しないパターンの奴だ」

「さつきつから後ろでうるさい！」

「ごめん」

「さーせん。でさ篠ノ之さん。ちょっと紅椿見せておくれよ」

「そうそう、俺もそのために来たんだよ。ほら、白式も紅椿も第四世代で追加武装なしだろ？意見交換して来いって千冬ねえがさ」

「む、そ、そうか・・・では早速だが紅椿のエネルギー配分を見てくれ、こいつをどう思う」

ふむふむ、リング知識のおかげである程度理解できるが、なんともまあ、

「凄く・・・ピーキーです」

こりゃピーキーな機体だなこれ。束さんはなんでこれを篠ノ之さんが使いこなせると思ってるんだろうか・・・普通、専用機ってのはじっくりたつぷりデータとって、当人に合わせたものを提供するものだ。簪嬢の様に作る人間もいるがあれはまた別。標準的に言えば自分でISを完成させた簪嬢はきつとこの先天才と呼ばれることだろう。そういう世界だ。

実力で判断されるのならば力をつけるしかない。脳筋が技術、知識

を得るためにはひたすら勉強するだけだ。まあ篠ノ之さんは試験の成績自体は悪くないし軽く教えれば後は自分で手探りでやるだろう。「白式はスラスタが速度特化だからいいとして、紅椿は万能感凄いやな。背部と脚部だけ展開装甲解放するだけで高速機動仕様になるんだし」

「しかし、だな。エネルギーが足りないのだ・・・あの人が作るものはなんでこうも・・・」

実際、会長のおかげかどうなのか一夏君は割と順調にISを理解していつている。篠ノ之さんはそれにつられてなのか、それとも何か考えが変化したのか・・・まあ貰った当初から思えば成長度合いは段違いだろう。

「そう考えると白影だけだな、誰が使ってもそれなりなのは」

「白影はビット適正がなければただの邪魔な装甲だろう」

「アレはビットとして使わなければスラスタになるんだぜ。アレ一つ一つがスラスタだから自由度も高いし・・・というかお前らの機体のエネルギー環境が悪すぎるだけだろ」

「あ！エネルギーといえば箒。絢爛舞踏は？」

「あ、あれは、だな・・・恥ずかしながら、まだ使えない」

「そうだったのか。素人考えだけどどうも紅椿って絢爛舞踏でエネルギー供給しながら、つてのが基本なんだと思うんだよなあ」

「実際そうなんだろう。あと、白式と紅椿。両方揃ってのお互いなんだろう。ISが単騎でつてのは実験か奇襲か緊急事態だし」

「そうなのか？」

「そうなんです。いくらISがほぼ万能だつて言ってもあくまでほぼだし。基本は複数人なはずだ・・・個数が五百未満つていう数不足でそうも言つてられないけどな。つて話が随分逸れたな、戻そう」

「そうだな・・・箒、いつそ脚部はやめて背部だけに見てみたらどうだ？バランスとかコントローラーは普通のスラスタに丸投げしちまつて」

「それも私は考えたんだがな、それでは出力が弱すぎるのだ。そうなる・・・展開装甲をすべて閉じるというのも考えたのだが」

「レースに勝てないんだよなあ」

「ぐぬぬ・・・まったく姉さんめ」

機体と機体作った人に文句言ってもなー。

「そういう一夏、お前こそどうなのだ？」

「俺は翔に全部任せちまつてるんだけど・・・実際どうなんだ？翔」

「ぶつちやけスラスター極振り。というかそうしねえと勝てねえよ白式ちゃん」

「前から思ってたんだけど、なんでちゃん付けしてるんだよ」

「白式ちゃんすっげーいい子だよ。一緒にレース用の調整悩んでくれたり訓練の時の稼働データ見せてくれたりメニューまとめてたりしてくれたり、まったく一夏君には勿体ないくらいいい子だよ」

「白式任してる間にそんなことが・・・」

「というか、ISと会話？」

「訓練機や量産機じゃ難しいだろうが専用機なら別に難しいことじゃないぞ。ほら、銀の福音。彼女はISコアが自己判断で俺たちと戦ってたんだからな」

「アレってただ暴走してるだけじゃなかったのか」

「あの子のデータをIS学園が取っててな。見返したら面白いことに『操縦者を守ろうとした』んだよ。一夏君も篠ノ之さんも、しっかりコミュニケーションとってたら気絶した時に守ってくれるかもよ？」

「ふむ、付喪神の考えだな」

「日本ってすげえよな！八百万も神様いるんだぜ！それどころか日々増えてる勢い」

「多分日本の人口よりも多いよな、神様」

「で・・・レース中に相手が攻撃してきたらどうするつもりだ？」

「・・・体当たりしかねえんじゃないかな」

「雪片は零落白夜使えないけど触れるし、左手の爪も一応そのままだ。物理だけの攻撃は出来るぞ。白式ちゃんと相談すればレース中にも零落白夜使えるには使えるけど下手すりゃレース途中リタイアになるぞ」

「・・・やっぱ体当たりだな」

「猪武者か、お前は・・・まあ、お前らしくてぴったりだが」

「今度篠ノ之さんの紅椿も少し俺が弄ろうか。一応東さんの弟子というか、助手というか、そんな感じに動いてたから機体特性はぼつちりだけど」

「ふむ、少し頼もう。私は一夏のように丸投げにせず一緒に考えよう」

「紅椿と三人仲良く頭悩ませようぜ」

「ぐぬぬ・・・翔！俺も今から一緒にやるぞ！」

「ある程度の調整はすんだからあとは白式ちゃんが自動でやってくれろぞ。というか残念なことにもうほぼ白式ちゃんオリジナルになつてたし俺が手出ししたら悪化するぜ？」

「くっそ！せっかく翔と仲良くなれる機会だったのに！」

「キモいからやめーや」

「鷺津・・・あまり一夏には近づかないようにな」

「当然だけどな」

「違うんだよ、ホモなんかじゃないんだよー!!」

「よるなホモ！ほら千冬さんが呼んでるぞシスコン！」

「くっ！後で絶対話聞くからなー！」

千冬さんの元に走っていく一夏君の背中を見つつ・・・篠ノ之さんがやさしく肩に手を置いてきた。

いや、どっちかかっていうと俺がお前にする側だと思っただけどな？
だってほら、戀愛相手がホモだったんだぞ？事の重大さ分かってる？

原作的ではないキャノンボール・ファスト裏舞台ですよ

一夏君が相変わらず朴念仁だったり、まどかがゲーマーになってたり、オルコットさんがあと一步で残念だったり、授業で軽く一夏君とオルコットさんがレースしたり、一夏君がやっぱりホモだった今日この頃。

なんだかんだあつて後ろからの攻撃に警戒し始めた鷺津です！

俺の肩に手を置いていた篠ノ之さんも一夏君の後についていき、専用機持ち組でも俺ボツチ。ボツチ・・・

「鷺津。今から走る者達のモニターをしてやれ。ついでに個々で記録して後で見せてやれ」

「了解しました千冬さん。そう、俺は技術者。技術者とは常に孤独なものなのだ・・・」

「わ、鷺津?」

「大丈夫ですよ千冬さん。俺は元気です」

「そ、そうか・・・頼むぞ」

ふっへへへ、筋肉とデータだけが友達さ。

なんて考えてると突然の通信! 相手は東さん・・・何故このタイミングで? と思いつつ千冬さんに「東さんから連絡あったんで少し失礼しまーす」と声をかけて隅っこの方へ移動して通信を開く。

『はいしよーくん! 元気してるかなー!?!』

「ええはい、元気です。で、どうしました?」

『せっかちな男は嫌われちゃうよー?』

「いやまあ、世界救って死ぬんなら別に嫌われたままでもいいんじゃないね?」

『ダメだぞしよーくん。世界を救うまでの人生もあるんだから』

「世界救って死なないって答えはないんですね分かります」

『でさーしよーくん。ちよつと、ちーちゃんクローン助けに行かない

？』

「まーた唐突ですね」

『この辺にー、彼女たちがまとめられてる施設、あるらしいっすよ。じゃけん今度行きましようねー』

「あーいいッスねー．．．ねえ、分かっててやってますねよね？これちよつと洒落にならないんですけど」

『何のことかな？』

「で、いつ行くんです？」

『いやーキャノンボール・ファスト？だっけ？まあどうでもいいんだけどー、その日ね』

「まあ俺出れないですし．．．って、あれ？もしかして束さん？」

『たっ束さんは何もしてないよ！裏工作とか！トップのヤバイ裏とかチラつかせてないからねっ！』

これは．．．どっちだこれ、マジなのか？ブラフか？．．．一体なんなんだ！

「その話は一回置いておいて。計画とかはどうなんでしょうか」

『くーちゃんがステルスカーで回収しに行くからあとは流れで。あ！

ISは使わないでEOS使ってね！』

「パワードスーツひやつほい！」

『じゃあ後は、待機でよろしくー』

「ラジャーラジャー」

通信を終え、後ろを振り向くと一夏君がコースアウトして地面にぶっ倒れていた。うん、何やってんだあいつ。

『しょ、翔。すまねえ、せっかく整備してくれたのに．．．』

「何があったのか聞こうじゃないか」

『吹き飛ばされた』

「まあ、なんだ？もつと精進しろ」

『練習しまくってやる。せっかく翔が調整してくれたんだ。ここでやらなきや男じゃねえー！』

「とりあえずIS解除しろよ。ずっと倒れっぱなしかよ」

『．．．あ』

もう馬鹿な一夏君はこつちに来てる山田先生に任せる……いや、こいつまたラッキースケベかますんじゃないか？　そういや、大丈夫か。こいつホモだったわ。山田先生の貞操は安泰だな。

とりあえず、千冬さんに言っとこう。

そしてやってきたキャノンボール・ファスト当日。

この日になるまで白式ちゃんを調整したり、紅椿をすこし見たりと楽しく過ごし、俺は今屋上に突っ立っている。

東さんからの連絡で「屋上待機！」とか言われ、千冬さんに「ちよつと仕事してきます」と伝え、今に至る。

制服じゃなくてジャージだけど大丈夫かな？　これからカチコミもとい潜入だぜ？　人、殺すことになんのかなあ……

千冬さんとの約束破らないように尽力はするけどクローン実験なんてやってる畜生共だ、慈悲はない。

とか覚悟完了した直後、タイミングのいいことにクロエが雪ウサギカーにのってやってきた。

乗ったら乗ったで「東様から提供された装備一式はそのカバンに入ってますので拡張領域に入れておいてください」だの「装備はISに入っているEOSに着替えてからジャージでも羽織っててください」とか業務的なあつさりとしたやり取りを終え、EOSの上にはジャージを着た俺はさらにフルフェイスのヘルメットをかぶっている。完全に不審者ですありがたいとございます。

「なるべく殺さないようにと東様が配慮しておりますので装備の確認をお願いします」

「そうだな、なんも考えずに登録して量子化して拡張領域にぶち込んだけど確認してねえや」

「ツハ、これだから」

「やっぱこの子すつげえムカつくわ」

とりあえず空中ディスプレイ出して確認。

リストスタンガン、タバコ型麻酔銃、麻酔銃、台車、スモークグレネード、ハッキングツール、ピッキングツール、ヒートブレード。

あらやだ素敵アイテムの数々・・・ただタバコ型麻醉銃は無理だなあ、フルフェイスだし。つてかなんで全体的にメタルギアテイストなんだよ。アサシン要素リストスタンガンだけじゃねえーか！

「ステルス迷彩はないのでお気を付けください」

「なんだっけ？クロークって言うんだっけ？完成してないって話だけど・・・やっぱり？」

「ええ、ご察しの通り。束様が開発済みです」

「もう特許でも取って素直に隠居してればいいのに・・・」

「それはもはや束様ではありません。束様という名の抜け殻です」

「酷い評価だ・・・」

とか言いつつ、リストスタンガンの感触を確かめたり、フルフェイスについてるボイスチェンジャー弄ったりして時間を過ごした。

クロエの「これから海に入ります」とかいう言葉を聞いて驚いたり、海底洞窟にあるエアスポットからとりあえず出動し、酸素ポンペを背負ってフルフェイスと連結し、ヘルメットのバイザーに表示されるマップを頼りに泳いで進んでいく・・・ヘルメット万能すぎじゃね？

「まさかスキューバダイビングを体験することになるとは思ってもなかったけど・・・しかし、海、暗かったわ。俺ちゃんと帰れるかな」

基地で言えば底にあたる場所にあるハッチをISを使って挟じ開け、中に入り込んでから閉じ直してIS装備を解除してその辺のどっぱりをつかんで上へ登り、ポンペを拡張領域に仕舞いながら俺は初めての経験に感動と恐怖を感じていた。

一応人間の耐えられる程度の水圧の場所だったが、洞窟の中ってマジ暗い。超怖い、サメ出てきて食われるんじゃないかってくらい怖かった。

マップを見てみればどっかの海にある島。どうやら空からもこの島にある基地にも入ることが出来るみたいで・・・なるほど、海路は嫌がらせか。クロエめ、帰ったら覚えとけチクシヨウめ。

「ま、潜入成功。発見された感じどころか人気がそもそもない。船、というか潜水艦が三機目の前にあるんだけどこれで全部なのかどうな

のか」

正直ここでウダウダしてるのも時間の無駄だしひとまず行動することにしよう。

マップを開いてー、通信開いてー、あつ切りやがったあの白髪ロリ。仕方ねえ、束さんにでも繋ぐ・・・いや、あの人めんどいからいいや。自力で探した方が束さんと話してるより速そうだ。

よし、リングゴにこの施設のカメラでもハッキングしてもらってマップに反映してもらおう。とか考え付いた直後にマップにいくつかの赤い点と、バラバラの場所に五つの緑色の点が現れた。

赤い点は動いたり止まったりと忙しく、緑色の点も、二つがふらふらと動いている。クローンの数はまだかを含めて六人。つまり全員この基地にいるってことか・・・いや、全員一緒に纏めるか？普通。

とか思ってる間に赤い点がこつちに近づいてきている。と言つても一つだけだから怖くもないが、とりあえずドアの陰に隠れ右手首を軽く回し、装備しているリストスタンガンを確認する。

開いたドアから入ってきたのは迷彩服の上から防弾ベストの様な物を身に着け、迷彩帽子をかぶり、両手でアサルトライフルを持ち、太ももに拳銃の入ったホルスターを装備した男。

とりあえずそつと後ろから近寄り右手首のリストスタンガンを飛び出させ背中押し当てる。

一度大きく痙攣したかと思うと、ガクツと地面に倒れた・・・あー、やべーよ。白目向いちやつてるよ・・・下手に首筋とかに当てなくてよかつたよ。気付かずに人殺すところだったわ、束さん改造し過ぎだよこれ。

とりあえず気絶？させた警備員はその辺の潜水艦の中に入れて、胸元に付いている証明写真とバーコードと『LEVEL2』と書かれたプレートを奪っておく。リングゴ使えば鍵なんてあつてないようなものだけど一応気分的に。

「ダンボールでもあれば麻酔銃片手にうろつくんだけどなあ」

なんてぼやきつつ、ひとまず周りに赤い点が多い緑色の点へと向かう・・・なんでこの緑色の点は五つの赤い点に囲まれてんだ？

道中に六人ほどの警備員を見かけたが、三名に壁ドンと三名に電撃。六人全員に快適な睡眠をプレゼントしてやった。働き過ぎだ、少し休め。休んだら仕事首になるだろうけどまあなんだ、死んでないだけマシだ頑張れ。

さてと、部屋の前まで来たのはいいんだけど中には赤点が五つと緑点の一つ。どんだけ嚴重に守ってんだ？

突入の前に部屋の周りをグルッとまわってみて、通気口を発見！ジャンプして金網を掴んで、壁に足をつけて金網もぎ取って通気口の中に入る。

ご丁寧に入り口と出口に金網がつけてあるようで、ひとまず金網から部屋の中の様子を覗き見る。ストーカーな気分。

部屋の中はどうかやらコンピュータールームの様だ。スーパーコンピュータみたいなのとケーブルで繋がったノートパソコンをパチパチやってるボサボサヘヤーの後ろ向いてる緑点。囲んでる赤点は赤点で各々自由に過ごしている。

カップ麺食べてたり、トランプしてたり、本読んでたり・・・なんかスツゲーやり難くなったなおい。

ま、いや。ゆっくり金網に手を伸ばし、ゆっくりと押し剥がして通風口の中に引き込み、スモークグレネードを真ん中の緑点がいるあたりに投擲。

ヌルリと通気口から這い出てすぐに駆け出す。

一番手前、カップ麺を食べていた一人のどてっばらに勢いを乗せたままやくざキックをするとそのまま吹っ飛んで何かに激突した音が聞こえる。

二番目、本を読んでいた男。延髄蹴りを食らわし足元に崩れ落ちる音が聞こえる。

三番目、四番目、五番目。拡張領域から呼び出した麻醉銃を一発ずつ打ち込み、すぐに三つの倒れる音が響く・・・うん、おかしいよね。東さん即効性強すぎませんか？

つと、そんなことより今はこの目の前でスモークを吸ったのか咳き

込む残念っぽい雰囲気醸し出してる女の子だ……いや、千冬さん似
なんだろうけど、なんだろう、この感じ……
「え？えつ、えつと。え？」

うん、髪の毛は千冬さんより長く。何より目立つのはビン底眼鏡。
赤い芋ジャーの上に白衣を着て女の子座りしてるから身長は分
からないがこれ完全に頭脳にステータス振った千冬さんだな。千冬さん
の可能性の一つ、と捉えると違和感しか感じねえな。

「動くな！」

「ひいっ!!」

ついノリで麻醉銃を向けてしまったが、案外素直にホールドアップ
してくれた。それはいい、それはいいんだが……胸が、ね。千冬さ
んより大きそうです。そういうや胸筋つて鍛え方一つでバストアップ
にもダウンにもなるんだっけか？千冬さん鍛えすぎ説浮上。

「織斑千冬のクローンで間違いないな」

「えつ、あつはい！コードネームR、れいですつ」

「この施設には君以外にも織斑千冬のクローンがいると聞く、どこに
いる」

「わっ私たちは基本的に接触不可になってますつ。ですから場所は分
かりません！」

「ところで、君。立てるか？」

「え？あ……す、すみません、腰が抜けちゃったみたいです」

「そんな君はこれに乗ってもらおう！」

装備一覧を確認した時は疑問で仕方なかったが、いや今でも疑問で
仕方ないが、とりあえず拡張領域から台車を取り出し『れい』を乗せ
て、ノートパソコンもケーブルを引き抜いて彼女に渡してマップを頼
りに歩き始める。

「では出発だ、行くぞディアボロス！」

「えつ、ちよつと、え！」

「安心しろ、台車の名前だ」

「だい、台車に名前を付けてるんですか！」

「え？付けないのか、名前」

「え？ええ、つけませんよ」

「そうなのか・・・」

前世の俺が読んでた漫画で台車にそんな名前つけてたキャラがいたからついノリで付けちゃったんだけどなディアボロス。いや、だが安心しろ。

「行くぞディアボロス！俺、他の娘達を全員お前に乗せるんだ！」

「え、ええっと、それはフラグですよっ！」

東さんとクロエに『一人確保。作戦行動を継続する！』とメツセーヂを送り、悲鳴を上げる『れい』の乗ったディアボロスを全力で押して駆け回る。スニーキングしろ？バレる？もう知ったこっちゃねえよ、こっちは一人お荷物抱えてんだ。警備員なんてEOSエンジン台車で跳ね飛ばしてやるよ。

原作的ではないキャノンボール・ファスト裏舞台2ですよ

授業中に束さんから連絡があったり、一夏君がやつぱり一夏君だったり、クロエが俺を回収しに来たり、よくわからないラインナップの装備を渡されたり、まさかの海から敵施設に侵入したり、色々頑張つて五人の内一人を何とか回収した今日この頃。

何をトチ狂つたのか、俺は今現在進行形で台車を押して走り回つてます。

だが安心してほしい、走り回つてるルートは地図にある敵がいる赤い点から結構離れている場所だ。

その辺はすでにリングゴが手を打っている！この基地の中の事は知らないが、外から基地、基地から外への連絡はリングゴがなんか上手いことやっているらしい。よく知らんけどリングゴが『任せろー』って言つてるし、俺に愛想尽かない限り裏切ることなんてないだらう．．．ないよね？

そんなことより台車の上で喚いてる千冬シスターズが一人、れいちゃんがかわいいです。速度上げたりや角曲がったりするたびに「きゃー」とか「わー」とか声あげてくれるとつてもキュート。千冬さんのクローンとは思えないくらいカワイイ。

「っと、お遊びはこれまでだ。これより本気モードに入る」

「え．．．ええ？今までのつて意味なかったんですかあ？」

「はい完全に意味のない行動でしたー、というわけで次へ参りまーす」
「ゆっくり！ゆっくりでお願いしますー！」

とりあえず、赤い点に囲まれてない緑点を目指しますかね。

道中、一人跳ねたけど大丈夫だよな。一応近づいて確認したら息してたし大丈夫だったし．．．念のためスタンガン押し当てといたし、れいちゃんは目回してるし。黙つてる内にさっさか行動しちやいませうかね。

ブシーンがッ！」

「とりあえずデータをUSBにでも入れて箱にCD戻して抱えてろ。その他の行動をしたら・・・」

「なんだ！アレな事するのか？同人か？それともバチイなのか!？」

「なんもせずに帰る」

「それだけはっ！それだけはご勘弁を!!」

「じゃあ喋っててもいいから付いてこい。ただし余計なことしたら置いていく」

「任せろ！芸人気質と名高い俺でもその真顔を見ればフリじゃないくらいは分かる！」

もうほんと、何なんだよこいつ。割と真面目に置いていきたいんですけど誰か助けてくれません・・・

「で！これからどこに行くんだ！」

「行先は決まってるけど誰がいるかは知らないな・・・ってか初対面なんだろ？ほら挨拶でもしてなさい」

「え、はい！は、話には聞いてましたが本当にいたんですね」

「・・・これは、なんとというか・・・そそられますな」

「どこ見て言ってるどこ見て」

なんでこいつはれいちゃんの胸ガン見してるんですかねえ、完全におっさんじゃねーかよこれ。

「あ！自己紹介がおくれました、俺はコードネームU、ういだ！主な仕事は情報収集！」

「・・・して、情報ソースは」

「Och」

「おいマジかよ、マジかよ・・・」

「え、えっと。れいです、よろしくお願いします」

「これから末永ーくお願いしますねー」

手をワキワキしながられいちゃんに近づくな・・・日常的にクロール達を会わせたら大変なことになるからやらなかったのかこの組織。スゲエな、尊敬するわ。だが壊す。

「ハアハア……い、今の。今の俺にも……バチイって、バチイって奴！」

道中の警備員を二人、一人はスタンガン、もう一人は頭を壁に勢いよくドン！とした直後のセリフである。

「いいから黙ってる。それか情報はよ」

「情報って言われてもなあ。ここは空か海からでしか出入りできない！」

「うん、それは知ってるわ。もつとこう、構造的な所はないのか？」

「そうは言ってもそこまで調べてあるなら多分俺が知ってる情報と大差ないぜ？」

「なんだ、使えねえなこいつ」

「使えないとはなんだ使えないとは！俺だって一応ハイスペックなんだぞ！」

「廃スペックなんですわ分かります」

「ちっげーし！俺これでも織斑千冬のクローンだぞ！なんでこんな扱い受けなきゃいけねーんだよ！」

「遺伝子だけは優秀ですね」

「ってかお前さんはなんでこんなところに来てれいと俺と、他のクローンも回収しようとしてんのか？」

「趣味というか、仕事というか、興味本位というか、逆らえないというか。まあ細かいことは気にするな！青空のもとに出してやろう！」

「えー、部屋でいい」

「わ、私も部屋がいいです」

「黙らっしゃい！お前ら何歳だ！まだ一ケタだろ！」

「肉体的には十六ほどだ！……ったはずだ。確か、それくらいだったはず」

「じゅ、十四歳と十五歳の間ですわね」

「サバ読んでんじゃねーぞオイ」

「そ、外でないから時期の感覚が」

「よしじゃあ外出るぞ」

「……あ」

なんだ、ただのバカだったのか。

さて、グダグダ話しつつ、時折遭遇する警備員に睡眠を提供しつつ、俺は今襖の前。マップでは中には赤い点と緑の点が二つが表示されている。つまり・・・何してるんだ？

「つ、次はどんな人なんだろう」

「次の奴はどんな属性持ってるんだろうか、楽しみだなあ！」

問題は警備員が二人いるってところなんだよなあ、多分これ襖開けたら四人に見られるってパターンだろ？四人全員に麻酔銃使ったとしても正直運ぶのが面倒だし、台車は一つしかないしなあ・・・ま、麻酔銃構えながらとりあえず開けるとしますか。

「全員動くな！・・・!?!」

俺は混乱した。なぜなら、入った部屋が畳の大広間で、ガツチガチの装備を着込んだ警備員がぶっ倒れていて、道着に短髪と袴にポニテの千冬さん似の女の子同士が組み合っていた。なにこれ、最初からクライマックスなんですけど・・・

おまけに動くなつて言ったのになんかもう、袴の方が道着の方を地面に叩き付けたと思っただけに立ち上がって袴の方の顔面ぶん殴るし、殴った腕を掴んでまた地面に叩き付けるしで、やだ・・・女って怖い・・・

そしてようやく千冬さんのクローンらしい娘に遭遇して俺氏、少し安心。やっぱり千冬さんはこうでなきや！

「ねえおたえ、あの人・・・邪魔じゃない？」

「ええ、そうですね。誰かに見られていたら注意散漫になってしまいますしね」

・・・え？

「そういうわけで、排除します」

「では、ご覚悟を」

千冬さんのクローンにまともな奴なんていなかったんや！

まあ「畜生！良いぜ、まとめて相手してやるからかかって来いよ！」なんて答えて麻酔銃を拡張領域に仕舞って迎え撃とうとする俺もま

ともじやないと思うんだけどね！

忘れないでほしい、俺がEOSを装備していたというのを。

忘れないでほしい、俺はこれでも剣士だということ。

忘れないでほしい、俺が提供された装備の中にヒートブレードというものがあつたことを。

忘れないでほしい、俺は勝つために手段を択ばない男だったということ。

「勝てばいい、それが全てだ」

しかし、流石は千冬さんのクローンなだけはある。戦いという一点に置いては一夏君よりも強いんじゃないかな？ま、まあ例えいくら息の合つた二人で襲つてきても俺に勝てるわけがな、ないんだけどね。

結果として、何とか倒した後でスタンガンで気絶させ、ワイヤーガンの引き出したワイヤーでグルグル巻きにした道着娘と二人分の警備員のベルトで両手両足を縛つた袴娘を担いで道場みたいな部屋から出る。そしてこの女の子を米俵の様に運ぶ暴挙である。

これだけ同じ顔の人間がいると投げ捨てたくなるけどグツとこらえてあと一人、あと一人回収してクロエに迎えに来てもらえば解放されるんだ・・・あ、IS学園に戻つても同じ顔が二人いるんだつたんだ。全俺のやる気が逝つてしまった。

「そろそろれいちゃん立てる？」

「は、はい。大丈夫です。どうぞお使いください」

うん、そんな丁寧な台車を明け渡されたのなんて初めてだわ。今後の人生に多分ないだろう経験を味わつたところで、台車に体育会系千冬さんクローンを並べて乗せる。抱いた感想はただ一言「まるで築地だな・・・」。

そんな築地専用台車と化したディアボロスを押しながら最後の緑の点に向かう。残っている赤い点は五つ。道中に二つ、緑点と同じ場所三つ。

一つだけ確実に言える言葉がある。

麻酔銃当てればすぐ終わるんだろうけどぶつちやけめんどい。

「つく！殺せ！」

「目覚ましたと思ったらこいつ等は・・・もうそのネタは使われたぞ。お前らの姉妹に」

「なっ、なんだと！できるっ」

「そうでしたか・・・少し、残念です」

「しかしなんだ・・・なんで千冬さんのクローン等はネタに走りたがるんだろうな」

「・・・娯楽が、ネットくらいしか」

「なんか、すまん」

「だから俺がエロゲーやってても仕方ないよな！」

「それとこれとは話は別だ。十八歳未満はあんなゲームしちやダメです！」

「なんでさ」

「エッチなのはいけないと思います！」

「それ男のセリフじゃねーから！」

「・・・だけど、おたえの他にもいるのは知ってたが、こんなにかか」

「そうですね、少しびっくりしています」

「・・・とりあえず皆で自己紹介でもしてな。目的地に行くまでにな」
とりあえず、道着の方がコードネームI、いちこ。袴の方がコードネームO、おたえ。とのこと。うん、まあ古風な名前だことで。ネーミングセンスを疑うよ。

後、もう大丈夫そうなのでワイヤーガンを回収。ベルト？いいえ、知らない子ですね。

最後の徘徊警備員をスタンガン&壁ドンし、最後の部屋の前までやってきた。

麻醉銃とスタンガンを用意して・・・早く終わらせたいからさつきと突入！

一番手前にいた奴に麻醉銃撃つてから、そのままダッシュで一人に飛びついてスタンガンを押し当てる。

最後の一人が警棒を引き抜いたところで颯爽と警棒を奪い顔面にシウウウウ！超！エキサイティン！！

うん、テンションがおかしかったな。うん、言わなくても分かっている。大丈夫だ、だからそんな目で見るなお前ら。お前らがネタやるから俺もやりたくなつたんだよチクシヨウ！

なんて心で泣きながら突然の事態に混乱してる最後の千冬さんクローンをワイヤーガンのワイヤーで縛っているこのタイミングで通信が入った。なんと相手は千冬さん・・・なんで？大会でなんか事故でもあったのか？

「はいもしもし、鷺津ですが」

『鷺津・・・悪いニュースと凄い悪いニュース、どちらから聞きたい』
「とりあえず良いニュースを一つ。千冬さんクローン、五人集めました。あとは回収してもらうだけです」

というか、メッセージ自体は通信していても飛ばせるので東さんとクロエに『全員回収完了。迎えはよ』と送っておいて、千冬さんとの通信に集中する。

『そうか・・・まずは悪いニュースからだ。IS学園が襲撃された』
「それより悪いニュースがあるんですか、一体どんな酷いことが・・・」
『その前に、だ・・・まどかが襲撃犯の対応に回ったせいで私が計画していた襲撃演習計画が無駄になった』
「いや、ちょ、千冬さん!?!このタイミングでそれは流石に冗談でしょう」

『私はいたって真面目だ。それをよく知っているだろう、鷺津』
「いや、もつと悪いニュースが気になってそれどころじゃないんですけど」

『ふむ、では言おう』

そして千冬さんの口から語られる衝撃の事実はッ！

『金城が裏切ったぞ』

原作的キャノンボール・ファスト終了ですよ

れいちゃんがかわいかったり、完全にアウトな奴を確保したり、彼女らの肉体年齢が14〜5だということが判明したり、千冬さんクローン二人組によくわからん理由で襲われたり、返り討ちにしたり、最後の一人をノリと勢いとほんの少しの暴走の末に確保したり、基地の中を奔走しまくり全員確保した今日この頃。

千冬さんからクリスが裏切ったって言葉を聞いた鷲津ですが、「裏切りとかよくあることですよね」

『いやその考えはおかしい』

え？・ないの？「騙して悪いが」と言われながら襲われるとか日常茶飯事じゃないの？

『ところで、その、なんだ・・・確保した私のクローン達は』

「あ、迎えが来たみたいなんで切りますね」

『なっおい、待て！』

通信を切ってメッセージを表示する「航空入り口、あと五分」・・・いや、おま、それはないだろ。

「総員！至急発射場に向かうんだ！・・・発射場でいいのか？」

「・・・そもそも、なんで俺らお前について行ってるんだっけ？」

「そんなの簡単ですわ」

「負けたからですよ。敗者は勝者に従うのみ」

「わ、わたしじゃ、その・・・か、勝てなそうです、し」

「そーいや、俺も勝てねーわ」

「自分はこんな有様ツスし、そもそも戦闘要員じゃないツスし」

ワイヤーグルグル巻きの最後の一人が口開いたと思ったら一人称が自分で、ツス口調か。なんだこの凄まじい後輩感は・・・

「とりあえず自己紹介からだ！」

「あー、コードネーム。というよりクローンネームA、あいツス。みなさんのことはよく知ってるんで自己紹介は大丈夫ツス。よろっす」

「自己紹介も済んだことで戦ってない奴は俺の不戦勝とする！ついでに」

後輩千冬クローンが乗った台車を押しダッシュする。後ろを振り返ったら・・・よかった、ちゃんとついてきてくれてる。武闘派二人がれいちゃんをうまく担いで追ってきてる光景にはびっくりしたけどまあそれでいいなら何も言わんよ俺は。

クロエ曰く航空入り口、マップ曰く発射場、しかしてその実態は!？」カタパルトじゃねーか!？」

それも結構ガチな、空母とかな感じ。IS学園のアリーナとかにある奴じゃなく、マジの軍事用・・・洞窟をそのまま利用したかのような狭い空間、そしてその先に見える太陽の光を薄らと通す水のカーテン!へへっ設計者め、ロマンをわかってやがるぜ。

しかし!そんな場所に強烈な違和感を発するものが一つ!そう、雪ウサギカーの胴を長くしたような、なに?顔だけウサギな白いダックスフロントなの?っていう愉快な代物。人数乗せるからなんだろうけど、デザイン他にねえのかよ・・・

頭抱えてると側面の一部がスポーツカーみたいの上に開いて「回収しますので早く乗せてください。置いていきますよ」とか、真顔のクロエが顔を出して言ってきた・・・ほんとなんでこいつは一々俺に喧嘩売るかねえ。

「まあいいや、乗れ乗れ。全員乗れー」

取り合えずワイヤーガン回収した後輩クローン乗せて台車仕舞って次から次へ乗せて行つて・・・

「ロリコン。異常発生、対処をお願いします」

「それほんとにお願いなのかよ。で、何が起こつたんだ」

「未確認機が一機、こちらへ向かっています。ISかと」

「まあ、このご時世でISじゃなかったらなんなんだって話だけど・・・了解、時間稼ぎは任された」

「前から来ます。十秒前」

「言うの遅くない!」

「五秒前」

「駄目だこの子聞かぬえ!もういいよ!行けよ、後ろは任せろ!」

「では言質も取れたことですし、発進！」

そして、映画のワンシーンの様に滝から出てきた敵ISとすれ違い、滝から出ていくウサギダックス・・・もうギャグ映画にしか見えねえよ！

つと、そのままの勢いで地面に足をつけて速度を下げたUターンしようとしていたISに向けてワイヤーガンを撃ちこみ、EOSの出力を最大に引き上げてワイヤーを思いっきり掴んでワイヤーを肩にかける形で引つ張り上げる。

実は俺の着ているEOS、本来はバッテリー式なのである。

何故本来はと言ったのか、それは当然の如く束さんが手を加えているからである。生体電気を増幅して最低限のスペックを維持できるようにしている、説明書に書いてあったがその下に更に書いてあったのだ。

『バッテリーそのままだからEOSの限界まで出力を上げればISとタメ張れるよ！でも制限時間がトータルで三分しかないから気を付けてね！・・・あ、一応使わなければ使わない分生体電気で充電するようにしてるけど軽く一時間以上かかるから気を付けてね！』とのことだ。

つまり、ISに匹敵するであろうEOS最大出力+俺の素の筋力＝「フイフイフイフイッシュュ!!」

急に引つ張られたからか、焦ったのだろう。相手が体勢を崩したところにスラスタがいい具合ではまったのだろう、天井にぶつかり、俺に引つ張られ俺と敵の場所が俺を中心に百八十度変わった。

そしてバッテリーを一分一秒も無駄にできないから早々切った。やりくり上手の上手さが際立ちます。

ISを釣り上げるのに使った時間が大体五秒。視界に小さくタイマーを用意している束さんの用意周到ぶりに感謝しつつヒートブレードを取り出す。

ISには敵わない？いえいえ、そんなことはない。『しっかりと対ISの準備をすれば生身でも死ぬ気でやれば倒せる』それが束さんの言葉だ・・・多分常識的におかしいんだろうが束さんだし、想定して

たデータが千冬さんだし、普通じゃきつと無理だ。

なんてことを思い出しつつ、ワイヤーガンの先端を巻き取ることで回収し、拡張領域に仕舞いこみ、敵I Sの一挙一動を警戒する。

『ぬ……ぐぐつ、今のはなんだ、我は一体何をされた。いつぞやの傷が……うずくつ!』

あ、厨二病の方でしたか。それも、結構重度……または、そんな世界で生きてきたのか。まあ戦場なんて知らない一般市民の俺からしたら厨二病なんですけどねー。

『貴様か!この我によくわからぬ術をかけたのは!殺す、殺してくれよう!』

うん、これはガチですよ。まだ言ってることがわかるだけマシではあるがこれでアイドル的熊本弁だったらもう積んでたわ……

しかし、このキャラの濃さ……

『もしかして、貴様もブリュンヒルデの写身か!』

『く、クククク。よくぞ気付いたものだな……いかにも!我こそかの戦女神が複製が一人!コードネームR!らんこである!』

ノリに乗って見たらあつさり教えてくれた……それに名前、厨二、完全にパクリじゃねーか!?マジでアイドル熊本弁か!?

うーん、それにしても困ったなあ。コードネーム?がRとRでダブってしまったぞ?

『他の複製達を追いたくば、この俺を倒すことだな!』

『クククク、戦乙女の写身であるこの我に挑むとは……よかろう、遊んでくれるわ』

………こんなんで、いいのか?

あー、うん。まあ、なんだ?

「クツ、この我の鉄壁なる城壁を破るとは……ッ!ふんつならばよかろう、好きにするがよい!」

なーんでこいつも千冬さん顔でクローン達と似たような女騎士スタイルなんだろうねえ……無意識化だとすれば千冬さんにこういう願望でもあるのか?それとも製作者の趣味か?

おまけにワイヤーで縛ってもリングゴで不動にしてる訳でもないの
にどこからともなく取り出した縄を差し出してくるし・・・厨二病つ
てなんなんだろうな。

「まるで空を駆けし燕の如く自由さ」いや、全力で三次元移動してただ
けです。

「その攻撃まさに龍が爪の如し」出力最大で飛び跳ねてそのままヒー
トブレードを叩き付けただけです。

「この瞳に映らぬ速度、さながらスカイフィッシュの如く」なんでそこ
でスカイフィッシュなんだよ、だせえよ。

「そして何も出来ぬまま敗北を期す我・・・」ほんとにね、何で来たの
？ってレベルの置物っぷりにビックリだよ。

「其方が近代なる鎧を使い見えていれば、我とてっ！」IS 同士の戦い
は得意だったのね。

とりあえず、縛っとくか。本人の希望でもあるっぽいし。

数分後に来たクロエとクローン達にドン引きされたわけだが・・・
何故だ！こんなにも美しく縛つただろうが！

見ろよこれ！リングゴからの知識で完璧な亀甲縛りだぜ!?!?.....
うん、俺がどうかしてたわ。これはないわー。

とりあえずほどこいて未来カーに投げ入れて助手席？の椅子に座る。

「た、ただのロリコンじゃなかったんですね驚津さん？」

「アレは彼女が望んだことだ。時間もあつたし知識もあつたしやって
みただけだ。しかし、亀甲縛りは凄いな。実用性は高いしバリエー
ションも豊富だ。それに何より目の保養になる」

「・・・ドン引きですよ」

「でもなんだ、ちゃんと回収に来てくれて助かった」

「計画の内に必要な事ですし・・・それに、今回のIS 学園襲撃の件で
計画のいくつかが前倒しになりましたね。忙しくなります」

「ところで、彼女たちはどこに運ぶんだ？」

「IS 学園ですよ。オリジナルもいますし、少なくともラボよりも施
設も環境も整っていますし」

「・・・というか全員集めて七人クローンがいるんですけど？」

「もつといますよ?」

「・・・もうやだこのクローン達」

「残念でしたね。織斑千冬からは逃れられない」

「そのフレーズ聞いたの、今まで生きてきた中でもう二回目だ」

「二度あることは三度ある・・・」

「やめてくれよ、やめてくれよお・・・」

毒舌からメンタル削る方向にシフトして来てやがる。悪い方向に進化してやがるこの幼女!

「・・・ただいま戻りました」

「うむ、無事戻って・・・無事か、鷺津」

「俺は置いておいて、これがあなたのクローンで、まどかの姉妹たちです」

「なんというか・・・これが私の可能性の数なのか」

「千冬さん、あなたはそのままですいてください・・・」

「む?そ、そうか」

IS学園の倉庫についたと思つたら即全員降ろされて俺が千冬さんを倉庫に呼び出し・・・

「しかし・・・酷いな」

待ち時間の間に全員を一纏めにして縄でグルグル巻きにして放置してた。

だってこいつ等、ほつといたらどっか行くんだもん。どっかのキヤブテンと植物みたいに笛吹いたら集まってくるとかの機能もないし正直もう関わりたくない。

「時に鷺津。こやつ等のコードネームというか、クローンネームを聞いた結果だな・・・こやつ等で終わりの様だぞ」

「・・・何故?」

「まずまどかのM。れいとらんこのRが二つ。あいでA、ういでU。おたえでOといちこでI。これを並び替えれば・・・」

「・・・ORIMURA。通りでおたえとか聞いた時には違和感しかなかったはずだ」

「母音だけの命名には骨が折れただろうな」

「内一人完全にネタな奴がいますがね」

「・・・どれもネタだろう?」

「ああ、まあそうですよね」

自分のクローンに対して『ネタ』と言い切る千冬さんマジ千冬さん。

「ああ、こやつら。任せるぞ」

もうやだ死にたい。消えてなくなりたい。

彼女らクローンを一か所に纏めることにしたらしく、場所はいつぞや案内された教員用トレーニングルームの畳の部屋に布団を敷いて仲良く寝ることになった・・・

まあ、ちよいちよいローテーションで千冬さんの寮長室で誰か一人が寝ることになったんだが初日ということ千冬さんがこつちに来てその代わりに俺は自分の寮室でいいことになった。

なった、はいいんだが・・・

「わ、鷺津くん・・・て、手伝ってくださいい」

山田先生に泣きつかれた。理由?そんなの簡単だ。千冬さんが漢女、部屋で誰かが寝る。つまり・・・そういうことだ。

「ちよつと待って下さい、今から一夏君呼ぶんで」

弟ならどれ捨てていいと分かるだろうしとりあえず召喚しよう。

したはいいんだけど・・・なんでこの子凹んでるん?

「だって翔、クリスが・・・クリスが」

「あー、そういやそうだったな」

「それだけかよ!」

「まあそう荒れるな腐るな一夏君。その内どっかで敵として戦うことになるんだ、その感情はその時までとっておけ」

「翔・・・そうだな、まだちよつとアレだけど・・・それより先にこつちだよな」

「そうだな・・・これだな」

「ええ・・・これですね。では、お手伝いよろしくお願いします」

「俺たちの戦いはこれからだ!!」

一夏君と二人で山田先生が開けるドアの中へと走っていく。向かう先は当然なんだろう、凄い布の山。

「これは・・・ゴミ、これは書類」

「あ、それは私が預かりますね」

「これは下着・・・って下着！どうすりやいいんだ一夏君！」

「それはこの袋」

「のっけから結構キツイぞこれ」

「姉の下着を片付けてる俺の身にもなってみろよ」

「ああうん、今度飯奢らせてくれ」

「・・・ガッツリ食べてやる」

「おう食え食え、それでストレス発散出来るなら食え食えたーんと食え。つらいときはたーんと食べろ」

「・・・おう」

やだ、なんでこの子涙目なの？そして山田先生、発狂しないで掃除してください。そんなんじゃない終わりませんよ・・・今度はジャージが発掘されたぞ・・・これ、オークションに出したらどれくらいになるんだ？

原作的ではない何処かへ

帰れると思ったら敵が来たり、予想以上に厨二だったり安定のクローンだったり、クロエが別方向に進化してたり、IS学園に帰ったり帰ったで今後は酷いことになったり、千冬さんの部屋へ打ち切りダッシュしたりした今日この頃。

千冬さんの部屋の掃除が終わったところにはもう空が明るかった件について。

「いやあ、寮長室は強敵でしたね・・・」

「これ、前は俺一人でやってたんだぜ？もう少し量は少なかつたけど」

「は、はは。これは、キツかつたですね」

「・・・朝練出来んかった」

「あはは、鷺津くんは健康ですね」

「健全なる魂は健全なる肉体に宿る。つまり！毎日しつかり体を鍛えれば仙人にもなれる！」

「いやその理屈はおかしいぞ翔」

「そうだな、仙人はいい過ぎだな。千冬さんを超えられる可能性がある！」

「うぐつ、ひ、否定できない！」

「それになー夏君、まどかにはあつたんだらう？」

「あ、ああ・・・あいつか。千冬ねえのクローンだったつけ」

「彼女はお前にとって姉の遺伝子を持った妹だ！どうだこのカオスな属性！萌えるだろ！」

「いやわかんねーよ！いきなり現れて千冬ねえのクローン！妹！もうわけわからねえよ！」

「安心しろー夏君・・・さらに増えた」

「・・・え？、じよ、冗談だろ？」

「合計六人。みんな個性的で楽しい子達だったよ」

「しよ、翔？そう思うならせめて生氣のある顔をして言ってくれ！」

「それでよ、俺が面倒見るんだつてさ・・・ははっ、笑えよ」

「いや、笑えないつて。怖いつて翔」

「もうさ、このやり場のない怒りとかを全部クリスマスにぶつけるしかないよね」

「八つ当たりかよ。いや、俺もクリスマスには色々あるけどさ」

「まああいつも悪に染まっちゃったし、殺しても家族に怒られるくらいだろ」

「あー、シャルの奴も怒ると思うぞ?」

「その辺はほら、あってみないとわからないからなあ」

朝食を食べに食堂に行ったらデュノアがいたので早速聞いてみたら瞳からハイライトを消して「待っててね、僕が迎えに行つてあげるからね。大丈夫だよ、脅されてるんだよね?昔の僕みたいだ。だから今度は僕が助ける番だよ」とか言つて笑つてたわ。なんでヤンデレつてんだよこの娘・・・怖いわあ。

「大丈夫だったろ?」

「お前はな。お前はな!これマジでヤバい奴だろ」

「最悪・・・シャルに殺されかねないよな」

「これじゃ俺たちの手で楽にしてやるしかないのか・・・」

「いや、それは・・・どうだろうな」

「いやだつてこれ・・・デュノアによる監禁エンドとか有り得るぜ?それより、さ」

「いや、だからつて殺しちやダメだろ流石に」

「じゃあどうする?監禁されてもらうか?」

「うーん・・・楽にしてやるしかないのかなあ」

「同じ飯食つたり風呂入つたりしたダチだしな、最低限の尊厳は守つてやろうぜ」

「・・・あんた達、なに物騒な話してるのよ」

「鈴。いや、クリスをどうするかつて話しててさ」

「とりあえず殺してやるのが一番良い方法だと結論が出た訳だが」

「殺してどうすんのよ。犯罪者でしょ?罪を償わせるのが一番なんじゃないの?」

「いや、でもさ鈴。シャル見てみるよ?」

「俺が犯罪者なら捕まってアレに管理されるくらいなら自殺するわ。」

怖いし」

「ああ、アレくらいでいいんじゃないかしら？当然の結果よ」

「女子って怖いな翔。なんというか、ドライというか」

「三人いて、うち一人がトイレに行った隙に残った二人がいなくなつた奴の悪口言つてたりするしな。クソ怖いぞ女子」

「なにそれ超怖い」

「それって日本人だけなんじゃないの？」

「日本限定の話なのか、ソレ」

「え？女って全部そんなもんなんじゃねーの？」

「そんなのあんたの勘違いでしょ。ま、何にせよクリスは生け捕りね。いいわね」

「りよ、了解」

うん、やっぱ女って怖いわ。

しかし、テレビではとあるニュースで持ち切りである。もちろんクリスに関係していることでもあり、そうでもない。

テレビで流れるニュースはただ二つ。

『有澤重工が突如として空中に浮きあがり、太平洋のド真ん中に移動し要塞と化した』フロート技術を存分に使ったかと思うとビルの底から大量の巨大な足が生えて海底に足を降ろして固定したらしい。ロマンだな。

『有澤重工の社長で一度会った事のある和一から全世界へ向けて放送がなされた。内容はIS世界をぶっ潰す、と言ったもの』こっちは相対意訳してのものだけだな。

言ったことを割と正確に略すと『IS関連の物作ってもあんまし売れないから大規模の戦場作ったら売れると思つたから戦争売るわ』マッチポンプよりもひどい何かだ。一体脳みそのどこをどうしたらこの発想になるのか俺には分からない。

俺にはたった一つだけ言えることがある。

「あんた等の製品戦争起こしても売れねーよ」

例えてしまえば、戦車の主砲をパイルバンカーにしたり、ヘリコプ

ターのメインローターを刃物にしたり底にパイルをつけたりするって事だ。意味が分からねえよ！

「そうなのか？」

「あそこのカタログかネットのウェブページ見てみる、斬新過ぎてついていけねえよ」

「それに、この有澤について行ったほかの企業ってどうなのよ」

「他？ああ、キサラギか。あれは・・・駄目だ」

アングラというか地下というか政府極秘というか、そんな所にあつた『生物兵器開発研究所・キサラギ』が昔から有澤とつながっていたらしく一緒について行った。あらかじめ研究資材や研究成果やらを有澤重工ビルに運び入れていたそうだ。

背中にパイル背負つたアミダとか遭遇したくないわ・・・ってか存在意味が分からねえよ、なんでパイルつけたんだよ俺・・・

「それにしても、よく二社だけで戦争なんてしようって思ったな」

「戦争しても相手が出てくるのがISだろうと思つたんだろ」

「ISって十分強くないか？」

「相手がデュノア社とかだつたらただ慢心してるだけだろうが・・・やりにもよって有澤だしなあ」

ISのゲテモノ兵器開発専門つてところすでに対IS用の武器があるってことなんだよなあ。人材に関してはアミダ投下すればなんとでもできるし、自爆もしないようにしてるなら兵器を乗せて・・・うへえ、考えたくねえ。

戦法として、物量にモノを言わせたアミダで弾切れ誘発してから残つたアミダで圧殺、または弾が切れた時点で兵器つけたアミダ投下すりゃいい・・・んだけど、

「問題はクリスがいることなんだよな。厄介だ」

「でもクリスって鈴とかシャルとかに負けてたぞ？」

「馬鹿かこのタコ。実力ってか武装隠してたんだろ。もちろん実力も隠してたんだろが多分武器と合わせての実力だろ。こつちが人海戦術で行くってわかつてる上での武装って言ったら・・・」

マルチプルパルス・・・だっけ？あまり有澤っぽくないけど作つて

あるんだろ？うなあ、嫌になるな。

『それに対し、各国は軍部を一つに纏め上げ早期決着を狙うと声明を出しており……』

どこでも同じようなニュースだったのだが、突然音声途切れたのでどんぶりから顔を上げ一夏君と近くにいる鈴嬢と顔を合わせてから、砂嵐となってるテレビに顔を向ける。

『ぱんぱかぱーん！東さんだよー！』

うん、でしょうね。思わず頭を抱えた俺に一夏君は『なんか知ってるのか！』と言わんばかりの表情を向けてくるが知らん！なーんも知らん！

『いやー、ISを創ったこの東さんを無視してISをつぶしてやるーって息巻いてるやつらいるじゃないですかー』

……なんで漫才するみたいな話し方なんだよ、おかしいだろ色々とき。

『そこで東さん考えましたー考えちゃいましたー！彼らにISをつぶされるくらいなら自分でつぶしちゃおうって！』

待って、何言ってるのこの人！

『そういうわけで、しよーくんしよーくん！彼女たち連れて帰ってきてねー』

……うん、おかしいな。食堂の雰囲気が一瞬で変わり果ててしまったぞ？

「翔、悪いけど……東さんの所にはいかせないぞ」

「突然裏切られるのもツライけど、これはこれでキツイわね」

「待って！ねえ待とうか！完全に寝耳に水だよ！訳が分からないよ！！」

「いやでも、東さんああ言ってるし、行かせるわけには、なあ」

「なんかム力つくしここで捕まえて千冬さんに渡してやるわよ！」

周りを見渡せばこちらにじりじりと近寄ってくる女子生徒達、前にはやる気満々の一夏君と鈴嬢……

「もしかして……これってピンチってやつ？」

「翔からしたらピンチなんじゃね？」

「・・・東さんには悪いけど素直に捕まっとくわ。ぶっちゃけ千冬さんと戦ってる最中で後ろから来られちゃどうしようもねえし」

両手をパーにして上に突き出してお手上げ侍。どうしようもねえし・・・

「ふむ、良い判断だ。殺すのは最後にしてやろう」

「それって絶対途中で殺される奴じゃないですかーやだー」

後ろに千冬さんいるしー。

「束にはこちらから言っておこう。とりあえず、お前は懲罰部屋行だな」

「千冬さん相手じゃなんもできませんって。かいちよーと二人で襲ってきたらマジで積みですし」

リングも、そう大つぴらに使ったらいずれ対策されるだろうし俺の切り札でもあるから乱用はしない。

つーか千冬さんにリングって効くの？精神力で押し切られそうで怖いんですけどどうなんだろうか。

懲罰部屋でのんびりと過ごし、翌朝食の乗ったトレイを運んできたのは・・・

「やあやあしよーくん見事に捕まっちゃってー、まあちーちゃん相手じゃ仕方ないよねー」

「束さん、なんですか？昨日の奴は」

束さんだったでござる。うん、ツッコミどころはいっぱいあるけどまあいいや、それよりもこれからどうするかだ。

「割と本心だったんだけど・・・駄目だったかな」

「いやまあ、駄目ってほどじゃないですけどテレビであの発言はちよつとマズイかと」

「そつかー。でさしよーくん、少しちーちゃんと話して考え直したんだけどさー・・・連中と国際連合、それにIS学園！の三竦みにしない？そつちの方が世界も救いやすいし、どーお？」

「現状束さんが『協力しまーす』って言っても効果は薄いでしょうけどとりあえず交渉するところから始めましょうか。とりあえずその旨

で千冬さんに伝えてみたらどうですか?」

「そうだね! とりあえずちーちゃんの所行つてくるよ!」

「待って束さん! 飯、俺の飯は置いて行ってくれませんか!」

数分後、俺はスーツを着た轡木さんと千冬さんの対面に、そして隣には束さんという異色の組み合わせの中、カツ丼をかきこんでいた。

「轡木さんって、なにやら偉い方だったんですね」

「ええ、実はそうでした。今は女性社会ですからねえ、男がトツプって言うのは面倒だろうと思ひましてね」

「お互い肩身が狭いですねえ。まあ俺の方が圧倒的にマシではありませんが」

「・・・男二人で話し込むのもいいが、鷺津。そろそろ思惑を言ってみたらどうだ。束は他人と手を取るなんて発想はしないだろうからお前の発想だろう」

「ではひとつ。と言ってもさつき考えたばかりなんで拙いですし、子供の荒い発想ですけどね」

俺の考えは相変わらず簡単で適当なものだ。

一つ、束さんの技術力で戦う際の光景を放送する。

一つ、企業、国際連合? に話をつけて一時的に国家代表等の肩書を廃止。

一つ、IS学園の生徒達にはTUIが一時的にスポンサーとなりISからそのすべてを提供する。

一つ、これより完全スカウト製にする。つまり国家代表とは名ばかりになる。アメリカ代表はアメリカ人だけではなくイギリス人でもフランス人でもアメリカが『この人だ!』と思った人を代表とし国を挙げてバックアップする、といった具合。

一つ、承認しない場合、IS学園はこの件には不干渉。人材を学園に入れないし出させない。

「・・・とりあえずはこんな感じですかね。正直、束さんが強行してISの停止もできる・・・んですよ?」

「何言ってるのさ、しよーくんにだって出来るでしょ!」

「・・・出来たっけかな?」

「鷺津、どうなんだ」

「頑張ればできます」

「よろしい。ではそれを盾に先ほどの提案をゴリ押そう」

「他にもこちらで肉付けしておきますかね。鷺津君はひとまず休んでおいてください、交渉は大人たちでやりましょう」

「あ、頼みます」

「え！しょーくん一緒に脅しかけないの!？」

「鷺津よりもお前の方が相手方にしては恐怖だろう。鷺津が技術力を隠している、というもの大きいがな」

「じゃー東さんが相手にしょーくんの凄さをわからせてやるんだから！」

「いや、いいです。面倒事は勘弁してください」

「しょーくんが考えてた宇宙要塞を発表してやろうよ！」

「ISを学会に発表した時みたいになりますよ」

「今は技術レベルが追い付いてるさ！」

「ソレは東さんだけね。他はそうでもありませんって。自力で拡張領域とかを開発したわけじゃないですし」

「ぶーぶー、東さんの助手は凄いんだーって教えてあげれないなんて・・・しょーくんに申し訳ないよ」

「その気持ちだけで十分すぎるんで。ほんともうその気があるなら全力でほかの国の連中脅しちゃっていいんで」

「!?ちーちゃん聞いた！しょーくんからゴーサインでちゃったよ！」

「・・・私からも許可しよう。やれ」

「やれやれ、IS学園は篠ノ之東博士に脅されたわけではないと強く言っておかなければ・・・」

「轡木さん、無理を言ってますみません」

「いえいえ、これも次の世代のため。老骨の私ができることなんてツテを生かすことだけですからね」

頼れる大人が二人もいるし東さんまでいるし・・・ま、俺はいらないだろ。

「で、束さん。ISつぶすつて本気です？」

「うーん、ちよつと考えてるところさ」

「ま、やっちゃつてもいいんじゃないですかね。やるならもちろんIS全部に連絡してからですよ？」

「わかつてるよー、私の娘達だよ？突然殺すなんてことはしないつてば」

「ついでに聞くんですけど・・・そろそろ俺死にます？」

「うんそうだね！」

「笑顔で言われるとなんか・・・なんか妙な気分」

「お葬式は派手にやつてあげるよ！」

「身内葬でひっそりとお願ひします」

「えー、つまんなーい」

なんて話が俺と束さんの間でひっそりとあつた事を千冬さん達は知らない。さて、遺書書いて遺品を纏めるかな。

原作的ではない何処かへ2

掃除を終わらせたと思ったらデュノアがヤンデレってたり、有澤重工本社が日本から太平洋のど真ん中に移動したり、戦争売ってきたり、東さんがいつもの東さんだったり、そのせいで俺が懲罰部屋行になったり、朝に東さんが御飯運んで来たり、轡木さんが実はすごい偉い人だったり、有澤ぶっ潰すために国々が纏まった国際連合に条件付き付けてみようとしたり、今日は便利です。

そんなタイミングでまさかのそろそろ俺が本気を出す時が来たようです。それに合わせて遺品整理して遺書でも書こうかと寮の部屋に戻ろうとしていたところ・・・

「まったく連れないわね鷺津くん。あんな面白そうな話するときくらい呼んでくれたっていいじゃない」

生徒会長が現れた。正直言おう、存在を忘れていた。

「でもあなた、ロシア代表でしょう？ I S 学園生徒会長でも国優先するんでしょ？」

「その通りだけど、でもこれでも I S 学園の生徒会長よ？ 所属国だけ優先するわけじゃないわよ」

「ロシア怖いしなー、それに大人たちに任せておいた方がいいと思いますよ？ この後色々してもらおうと・・・さっき考えたんで」

「・・・絶対忘れてたでしょ」

「いやだなーそんなわけないじゃないですかー。あの篠ノ之束博士も協力するんで I S 学園一丸となって頑張りましょうよ」

「・・・ハア、もういいわ。この先のことを考えましょう。で、色々してもらって、何をさせたいのかしら？」

「とりあえず轡木さんと話しておいてください。俺、会話専門なんじゃないんで。でもとりあえずは生徒達への演説ですかね。これ割とガチな戦争なんで」

「いきなり実戦に出すなんて賛成しないわよ？」

「そのための東さんと俺ですよ。それに、整備科の方々もいますし。 I S を一人で作ったって謳い文句のあなたもいますしねえ」

「・・・性格悪いわね、鷺津くん」

「さーてなんのことか。俺は東さんには及ばないながらも全力でかき回すんでよろしく」

「・・・早速頭が痛くなってきたわ」

「保健室にでも行けばいいんじゃないですかね」

「もういいわよ、幸い相手もアサシンだし全力でやればいいんでしよう」

「・・・え？有澤アサシンなん？」

「え？知らなかったの？」

「ってかアサシンって有澤のこと言ってたん」

「有澤のことじゃないわ。有澤重工を隠れ蓑としたテロリスト集団、亡国機業がアサシンなのよ」

「なるほど、分かん」

訳ではない。テンプル騎士としちゃ敵のアサシンが勝手に世界を敵に回してくれてありがたい状況なのね。大義名分の元、歴史の裏で行われていた争いにケリつけられるかもしれないんだからな。

けど真面目にそんなのどうでもいいわ。アサシン側の有澤が動いたってことはテンプル騎士に邪魔されないようにするってことなんだろうし、というかテンプル騎士の邪魔をするためなんだろう。

・・・あれ？アサシンってそんな大規模だっけ？いや、大規模なんだろうけどこの世界では力関係が1：1くらいなんだろう、きつと。

「ま、とりあえず何をするにも頑張ってくださいね。会長」

「・・・分かったわよ、一仕事したら一夏くん弄って満足するもん」
あつちやー、一夏はまーた面倒な女をひっかけてたのか。もう彼とかかわるのやめといたほうがいいのか？面倒事に巻き込まれる前に関わらないのが頭いい方法だと思います。

とかそんなことを考えつつ、去っていく会長を見送り・・・遺書を書くために部屋に入った。

千冬さんはクローン達と同じトレーニングルームで生活しろとか言ってたけどもうそんな悠長なこと言ってる場合じゃないのだが。

とりあえず荷物を一つに纏めてドラム缶バックの底に封筒を置いて準備完了。

遺書はよくある『これを読んでいる頃には、俺はもう死んでいるでしょう。もし俺が生きてたら見ずに処分してください』な感じだ。テンプレ通りの素晴らしい遺書が書けたと自負しているのでこれに関しては悔いはない。

それに伴い、すっかり集中していたのだろう。束さんから『話し合い終わったよー』と連絡が来ていることをすっかり無視していたので先ほど話し合った場所、学園長室へ向かう。

ドアを開けると、そこは魔境だった。

ISブレードを携えEOSを着て感触を確かめている千冬さん。

空中ディスプレイを何個と出して爆笑しながら操作している束さんと、その脇に水筒持つて立っているクロエ。

わっつるい顔でわっつるい笑い声出して話している轡木さんと会長。そしてドアを開けたまま硬直している俺。

「ん？驚津か。よし、少し付き合え」

「付き合ったら付き合ったでいつもよりも酷いフルボッコ確定じゃないですかーやだー！」

「今回の作戦、IS学園の存亡がかかっているのだ」

「・・・え？」

「束が今ISCコアを量産している。理由は単純だ、この学園の生徒一人一人に貸し出すためだ」

「・・・え？」

「というわけでしょーくん！しょーくんもコア作るのてつだつてー！」

「え！俺ISCコア作れたの!？」

「え？リングゴ使っておきながら作れないとか、ないわー」

「オーケークロエ、その喧嘩買ってやるよ。束さん、俺何個作ればいい！」

「作れるだけ作っちゃつてー」

「え、なにそれ怖い」

俺、ISコア作れるみたいツス。訳が分からないよ・・・

「鷺津、貴様・・・技術科寄りだったのか」

「いえ、メインは脳筋ですよ？夏休みの間に詰め込まただけなんで」
「二か月もない時間でISコアを創れるようになるなど、他の技術者が聞いたら泣き出すぞ」

「俺の方が泣きたいですよ千冬さん」

「そんなことよりも行くぞ鷺津。束が調整した私用のEOSだ、いざという時のため感触を確かめねば」

「あ、どっちにしろ俺がボコされるのは確定なんですね」

木刀同士で軽く、だったはずがいつの間にか千冬さんはISブレード抜いてたし、それに対抗して俺もヒートブレードを取り出して稽古が加速、その後その騒ぎを聞きつけた千冬さんクローンが集まりチーム戦の様な事に。

そこまでならよかったんだ。

一年専用機持ち組が加わり、いつの間にかEOSを脱いだ千冬さんVS俺VSクローンズVS一年専用機持ち組へと変貌した。ついでと言わんばかりに会長まで来て専用機持ち組に入ってたのは流石にキレた。俺一人の時点でもう大分積んでるからね？嬉々として俺を集中砲火するのでマジでキレたけどそこそこ強い上に大人数には勝てなかったよ・・・

翌朝、起きて飯食べた俺は・・・束さんにさらわれて彼女のラボでひたすらISコアを創ろうと四苦八苦している。

「ここはねーしよーくん、こーするんだよー」

「なるほど、分からん」

まずどこを指してるのかも分からないし、どうすればいいのかも分からない。ただ脳みそが勝手にリングからの知識を勝手に参照し始め・・・ようやく分かった。

「こうですね分かります」

「そーそー、しよーくんは優秀だねー。そこまできたらもう少しぎー」
「もう少しですか、そうですか・・・糖分が足りない」

あ、出来た。しかし・・・これ、ISに関する知識があっても一から作れないってこれ。知識だけある俺はただ混乱してるし・・・こうやって作ったISコアにしつかり意志が宿ることに戸惑いを隠せない。

「しかし、このコアの素材って何なんです?」

「んー、知りたい?」

「いや、やっぱいいです。教わっても脳みそが追い付きませんって」

「これはねー今までのコアの素材と違う奴を使ってもらったんだよー・いやー、まさか一発で作れるとは流石しよーくんだねっ!」

「・・・え?俺、今新素材の実験してたの?」

「ちなみに素材はルナチタニウム」

「ISがガンダムになつてしまふ・・・」

「サイコフレームなんかはまだ作ってないよ?ほんとだよ?」

「すべてがブラフにしか聞こえないんだよなあ」

「あーそういうこと言うんだー。じゃーもつと言っちゃおー。実はリングを量産できてまーす」

「やめろ!やめるんだ束さん!」

「遺跡のカギも量産できちやったりしてるとるんだなーこれが」

「もう何が本当なのかわからないぞ!」

「じ、実は・・・やっぱこれはやめておこう」

「なんでそこだけマジトーンで言うんです!怖いよ!怖いよツ!」

ひたすら束さんに弄られながら一日で作ったISコア、束さん曰く『第二世代ISコア』の数は三個。一方その頃束さんは十一個作っていた・・・もうなんなのこの人マジ怖い。

「しよつ、翔!助けてくれ!」

IS学園に戻つたら一夏君が泣きついてきた。彼が出てきた曲がり角から出てきたのは・・・千冬さんクローン達。

「兄!兄でいいんだろう!」

「お兄様、でよろしいのでしょうか?」

「兄貴兄貴!一緒にギャルゲーやろうぜ!」

「我が原点と血を分けし者よ！いま、血分かたれし者達の宴を！」
「にーさんにーさん、とりあえず彼女らとのなれそめから教えてくだ
さいツス！」

これはひどい。いない連中もいるからまだマシ・・・なのか？とい
うか内二人が酷く、一人が何言ってるか分からなく、二人は単純に呼
び方の確認してるのか？

助けてやろうとクローン娘達に声をかけようとしたら丁度携帯に
着信が入った。画面を見れば千冬さん。うん、これは一夏君には悪い
けど彼は放置で。

「はいもしもし、鷺津です」

『国際連合との会議の内容を話すから学園長室に来てくれ』

「わかりました、急ぎます」

形態をポケットにねじ込み、一夏君の肩を鷺掴みクローン娘達に渡
して目的地に急ぐ。後ろから「翔っ！待ってくるえ、翔！しょーうー！」
なんて悲痛な叫び声が聞こえるが家族のコミュニケーションは大切
だから他人が関わらない方がいいと思います。

「と、言うわけで一夏君と妹達をそのままにしてみました、なにか
？」

「よくやった。一夏はあまりあいつらと関わろうとしないからな」

「そりゃ、姉のクローンで自分の妹なんて言われたら俺も関わりませ
んよ・・・姉、いませんけど」

「まあそれが普通の反応だろう。正直言って、私も驚いた」

「驚いただけで済んだんですね、分かります」

「生まれてきて育ったあいつらに罪はないからな。姉として今後を
しっかりと支えてやるのが義務だと考えたのだ」

「千冬さんマジ大人」

「まあその話は一度置いておこう。本題だ」

一つ。篠ノ之東による全世界生放送は承認。

一つ。IS学園にいる代表候補生の肩書の一時的廃止。それに伴
い国家からのバックアップは出来ない。

一つ。一時的な廃止なので代表候補生以外の生徒のスカウト製を

完全承認。ただし交渉は終結後に、話を受けるか受けないかは個人の自由とする。

一つ。この期間中、I S学園を一つの国家とし、国際連合に加入するか否かはそちらに任せる。

一つ。このテロでI S学園が目覚ましい活躍をなさなかった場合、I S学園は解体とする。

一つ。この後、交渉次第でこの項目は増える場合がある。

「・・・I S学園解体、ねえ」

「轡木さんと更識の尽力による結果だが、有無も言わなぬ結果を出さねばならない」

「実は、束さんがI Sコア。まあ新しい第二世代I Sコアってのを量産してるところです。元々ある訓練機とそれを足して数の暴力で恐怖心を薄めるしか方法がなさそうなんですよねえ」

「・・・生徒達を実戦に出すことは教師として止めるべきなのだろうか。これだけは言わせてもらう。生徒達の参戦は本人の意思に任せるものとする」

「そりゃ勿論。強制なんてするつもりは毛頭なかったですよ。ま、人数に関しては生徒会長の演説次第ってところですかね」

「・・・あいつに演説させるのか？お前や束ではなく」

「ここはI S学園。それに俺は男ですし、束さんは人の気持ちなんて関係ないって感じですし、その点会長はそれが本職、なんでしょう？勿論、誰も戦いたがらなかったとしても俺一人で戦火上げますし」

「一夏はおそらく出るぞ」

「彼、出しては戻して出しては戻してを繰り返すのが一番いいと思うんですよね。篠ノ之さんがあのワンオフ発動できないならですけど」

「それに関してはすでに束が手をかけて・・・I S自体の問題らしいぞ」

「成長の過程で篠ノ之さんに合わせた結果ですかね。多分こつちからの手出しで何ともできないと思いますよ。リセットしないともうどうしようもならないレベルで手遅れかと」

「・・・そうだろうな。まあどちらにしろお前には馬車馬の如く動いて貰うがな」

「えー、俺は俺で動きたいんですけどー」

「やることをやったら好きに動いていいぞ。まずはその、第二世代とやらの制作からだ」

「とりあえず素体を作って武装はお好みで、って感じでいいですかね」
「うむ、とりあえず束の元に戻って作業に取り掛かれ」

千冬さん人使い荒いですって。

ちなみに話した内容を束さんに伝えたら変な笑い方しながら作業スピードを上げていた……うん、今までとは別ベクトルで変態になっちゃった。いや、もうなつてたのか……焚きつけといてなんだが、大丈夫かこれ？

原作的ではない何処かへ3

生徒会長と話して彼女が作戦に加わったり、新しいオモチヤを貰ってテンション上がってる千冬さんに巻き込まれたり、なんかしらんが新しいISコアを創らされたり、一夏君が妹達に追われていたり、国際連合？の要求を聞いたたり、千冬さんに仕事を終わらせるまで自由を奪われたどうも驚津です。

エナジードリンクを飲みながら束さんの隣でクロエに毒舌吐かれながらもISコアを創ってる俺です。

「寝ても、いいですかね」

クロエが仮眠に行ったところで、俺はようやく口を開いた。今の今まで無言でドリンク飲みながら触ってる感じのないキーボードをタッチしてたから感覚がぶっ壊れてる。今何時だよ、サラリーマンってこんな大変なのかよ。

「駄目だよしょーくん、これが山場さ。束さんは後十個、しょーくんは後四個だね。それで何とか一学園分？になるのかな」

「束さん467個もどうやって作ったんですか」

「コツコツやってれば半年で出来るよ。でも第二世代は勝手が違うからねー、まいつちやうよもー」

「製作者がなに泣き言言ってるんですか」

「束さんも大分無茶して作ったんだよ！分かってよ！」

「脳筋に天才の考えを理解しろだなんて・・・ハハツワロス」

「ISコア創れる脳筋なんてしょーくんだけだかね！他にいないんだからねー！」

「案外いるんじゃないですか？世界探せば三人くらい」

「世界にISコア創れる人間三人も！・・・あ、いるかも」

「いるんですか、そうですか」

「束さんでしょー、しょーくんでしょー、あとはー、ゴーレム作ったの。まっあれはかなりの劣化品だけだね」

「連中ってあの、なんでしたっけ？亡国、なんでしたっけ？」

「亡国機業ね。連中束さんの大切な子達をパクるなんて！」

「有澤解体作戦で出てくるのがアレかあ、困んで叩けば何とかかなるかな」

「多少アップグレードされてても所詮は第一世代にも及ばないからねー、第二世代なら子供が乗ってても楽勝さっ！」

「そんなスペック上がってるんですか、第二世代」

「そんなスペック上げてみたよ。だからこそ、第二世代！」

俺には違いが分からんが、とにかくすごい自信だ。

「とりあえず作業再開しよっか」

「そうですね、息抜きにもなりましたしさっさと終わらせて寝ましよう」

「やだ・・・しよーくんってば束さんに寝ようなんて」

「いや、うん、ないです」

「そ、そんな真顔でっ！」

黙ってりや美人なんだけど口を開けば残念だからな。というか、そんな余裕はない。そもそも考えたくもない。

ノルマを達成してようやく待ちに待った睡眠時間。に入る直前に千冬さんからの連絡が入ってきた・・・勘弁してくださいあ。

「はいもしもし、眠いっすけどなんですか。すっごい眠いんですけど」

『更識が演説を行う、来い』

「・・・音声繋いでてくれませんか？」

『何をしていたんだ』

「第二世代コアを作っていました。ノルマ終わったんで寝ようとしたら・・・これ」

『無茶をする』

「いつ国際連合？が行動するか分からなかったんで早めにやろうって束さんが」

『嘘だな』

「はい嘘です。千冬さんの伝言伝えたらやる気満々になっちゃって」

『そんなことだろうと思ってた。付き合ってしまったようすまないな』

「まあ俺にもいい経験になりましたし・・・じゃ、今から向かいますね」
『いや、映像を送る。そのまま寝ていろ』

「横になってのんびり待ってます」

『もうじき始める予定だ。志願する者に対しては全力でバックアップをする。TUIの基本方針はこれでいいのだな』

「同級生に戦争なんてさせたくなかってないししたくもないけど、相手は国じゃないし、それに敵も多分人間使ってこないでしょうし」

『待て、どういうことだ』

「束さん曰く「有澤はゴーレム出してくる」そう。まあ、たぶん・・・他のも出てくるとは思いますけど」

『心当たりがあるんだな』

「クリスの奴が、多分やらかしてくるかと思います」

『内容まで分かるか』

「まあ、俺のチェインソーみたいなものかと」

『・・・アレ以外に何かあるのか』

「アレ自体、執念を具現化したみたいなもんですし。考える脳と実行できるだけの科学力と素材があればアレとはまた違う規格外が」

『それに出会うまで楽しみに待っておこう』

「まあそんなポンポン使えるような代物じゃないと思うんで・・・いや出てきたらどうしよう」

『そこは自信をもって言い切れ。まあいい、相手が使ってくるのはゴーレムだな』

「多分、きつと・・・メイビー」

『だから自信をもって言え。更識に伝えてくる、重要な情報だからな』

「束さんが出所って忘れないでくださいね」

『わかっている、私を誰だと思っている』

「せかいさいきよーさん」

『少し寝ている。演説が始まり次第起こす』

「おやしゃーす・・・」

もうむり、きぜつしよ・・・

人の話し声が聞こえるのでぼんやりと寝ぼけ眼をこすりながら起き上がると、なんか妙なことになっていた。

「束さん悪くないもん！無防備に寝てるしよーくんが悪いんだもん！」

『だからと言って添い寝する馬鹿がどこに・・・ああ、ここにいたな』
「ちーちゃんそれはひどいよ！束さんだって頑張ったんだよ！」

『いいから布団から出ろ』

「いえ、大丈夫でしょう織斑千冬様。鷺津様はロリコンですから」

『・・・それはそれでいかなものかと』

「そーだよ！ロリコンなんて悪だよ悪！束さんが修正してやるんだー！」

『やめろ束』

「やめてください束様」

「アカンて束さん。俺、性癖は普通だから」

「おっ起きてたのしよーくん！」

「さつき・・・っーかなんすかこれ？これからシリアスやるんすよ？なにふざけてんすか」

「寝起き、怖いよしよーくん」

「やだなー、いつもどおりじゃないですかー」

「いつもより容赦なかったからね！」

『鷺津、これから更識の演説だ』

「了解です千冬さん。映像回してもらっても？」

『元より、そのつもりだ』

頭を軽く振って出てきた画面に顔を向ける。まだちよつと眠いけど起きるんだ俺。

その後、語られた長ったらしい話に俺は寝落ちした。パトラッシュ、なんだかとおつても眠いんだ。

起きたのは深夜で、録画されてた演説を見ることになったわけだが、やっぱ本職は違うな。なんというのか、聞いている人間を引き付ける何かがある、と思わされるが同時に人間の素直な面を引き出す技術

もあるのだろう。演説中は皆内容に押し黙り、演説も終わり『みんなの意思を尊重する。自由に決めてくれて構わない』と途中の言葉を受けて生徒達は皆で深刻な顔をして話し合っていた。

「出来れば誰も参加してくれない方がうれしいんだけどな」

「そーだねー、やることも増えちゃうしねー」

「束さん、こんばんわ。起きてたんですか」

「さつき起きたらしよーくんが録画みてたから黙ってたのさ！」

「なんかありがとうございます」

「できでさ、しよーくんまだ眠い？」

「おめめパツチリですわ」

「じゃあ今から最終調整するから整備室来てよ！」

「白影のです？」

「んいや、もう一つの方さ！」

もう一つ？・・・ん、もう一つ？あつたつけそんなの？

翌朝、整備室での最終調整をしてから仮眠をはさみ、束さんとIS学園に戻り第一志願生徒のISの調整に駆り出された・・・のだが、一年専用機持ちしかいねえわ。あ、いや、角に会長が隠れてる。何してんのあの人。

「で、一夏君。参加すんの？マジで？」

「クリスを連れ戻してやらなきやな！」

「あれ？楽にしてやるんじゃないか？」

「・・・シャルが、な」

「あーうんなんだ、ドンマイ」

死んだような眼をしてたからこれ以上深く掘り下げない方がいいな。

「篠ノ之さんは博士と家族水入らずでどうぞ」

「うむ、気遣いありがとう」

その直後、束さんが篠ノ之さんに飛びついて叩き潰されていた。

「オルコットさん、ビーム曲げるのは順調？」

「いえ。ですが、もう少し、あと少しで何かつかめると思っております

わ

「そのあと少しを実戦で求めるのはリスクリーというか、なんとか・・・」

「鈴嬢はパツケージは外してる?」

「あ、まだだわ。外しておくわ」

「あー、こつちで外すつもりだったんだけど・・・自国の情報云々のな?」

「デュノア・・・うん、クリス捕まえて戻ってこようぜ」

「うんそうだね翔。ところで・・・クリスを捕まえられるような武器、あるかな?」

「なんでこんな怖くなっちゃったのこの子。」

「少佐。まあ、少佐は大丈夫か」

「私としては、軍人でないものが戦場に立つのは見逃せないさ。勿論、嫁に関しても同じだ!」

「この子、いい加減一夏君の所行ってくれないかなあ。なんの悔いもなく死ねないじゃないか。」

「簪嬢。武装が尽きたらすぐに戻ってくるようにな」

「もち、ろん・・・心配しないで」

「ピースしてる手を突き出してきて宣言してるんだけど・・・後ろのシスコン会長がウゼエんでやめてもらってもいい?」

「んで、君も来たのね本音嬢」

「かんちゃんがいくならわたしもいくささ」

「この子、大丈夫なん? いや、ガチで。」

「とりあえず、本音嬢には第二世代ISコアで作った篠ノ之束製後付武装量産機『灰兎』の一機を身に着けてもらって調整をしていく。」

「つと、簪嬢。これ、やってみる?」

「・・・いいの?」

「この後、志願する人が増えてきたら流石に俺の手じゃ足りなくなるしな。束さんにクロエがすぐくとも調整する人数が減るのはいいことだしな・・・あと、出来れば整備科の人達に手伝って欲しいとは思ってるんだけど、どうかな?」

「まかせ、て」

「ばりばり」

「やめて！」

後、志願と言えるのか微妙だが。千冬シスターズが参戦。

「まどか、全員の相手頼むわ。一夏君生け贄にして構わないから」

「クックック、アーハッハッハッ！残念ね、私は円なる写身！」

「まどかなにしてん？」

「・・・ちよつとは乗ってくれたっていいじゃん。せつかくのネタだったんだからさ」

「俺もうあの戯言聞きたくねえんだわ」

「今度全員この口調でそろえてきてやるんだからね！」

「何その意味の分からないツンデレ。ツンしかない上に嫌がらせにも程があるだろ」

「だからこそやる！」

「お前千冬さん似だからって容赦しねえぞ」

「良いのか？姉さんが黙ってないぞ！」

「ついさつきから売られた喧嘩は買う趣味にしてね。幸いお前の姉妹たちは束さんにISの調整をしてもらってるし邪魔は入らないな」

「え・・・ちよ、じよ、冗談だつて」

「お前、気に食わない奴の物まねを知り合いにされたらどう思う？俺はキレル」

「私は笑うけどなー、って答えは聞いてないんですよね分かります」

「くたばればつきやろう」

その後。IS学園に、まどかの悲鳴が響いたことは言うまでもないだろう。

勿論、そのあと千冬さんに俺がフルボッコにされたことも語るまでもないだろう。

調整したデータを纏めてファイル分けしたりとかしたり、量産型の武装の在庫確認したり・・・いくら第二世代ISコアを作ってるとは言っても「作りすぎてバランス崩すのはいけないよねー」とは束さん

の言葉だ。ぶっちゃけもうバランスぶっ壊してるんだけどなあ・・・と内心でぼやきつつすべきことをやっている、後ろから声がかけられた。

「鷺津、君・・・つれてきた」

連れてきたか？と思いつつも振り返るとなんと簪嬢の隣でなんやかんややってた整備室の常連メンバーが大勢来ていた。

「あ、マジで連れて来たん？いや、まあ助けるけど」

「これでも腕に自信はあるのよ？」

「伊達に二年もIS弄ってないもの」

顔は知ってるけど名前は知らん先輩達にとりあえず量産機を触ってみてもらおう。何事も慣れから、つてのは千冬さんの言葉だ。

「鷺津くん、今までのISとだいぶ違うんだけど？」

「束博士が新しく考案して制作されたISコアですからね。色々変更点が多いかと」

「え！篠ノ之博士ISコア増やしたの！」

「IS学園にあるISは専用機と訓練機。それだけじゃ少し数が心許ないってんで作ってましたよ」

「うわあ・・・流石天才、やることこのスケールが違いすぎるわ」

ま、ほとんど口から出まかせなんですけどねー。

「鷺津、くん・・・ここは」

「ISの意味と対話しよう」

「・・・え？」

「対話しよう」

「・・・頭、わいちゃったの？」

「ISと会話すれば、どこに違和感があるのか教えてくれるし、解決方法も教えてくれる。人間で例えるなら、体調崩した針師がどこに針撃てばいいのか教えてくれるようなもんだ」

「・・・わけが、わからないよ」

「考えるな、感じるんだ簪嬢！大丈夫さ、優秀な技術者な君なら大丈夫だ！」

「なんで、急に・・・熱血に」

「もつと、熱くなれよ！」

「暑苦しいから黙って」

簪嬢、キレたら流暢に喋るようになるのか。いや、こっちが素？ならさっさとあの厨二姉との決着というか結論とどうかその辺すつきりすれば本来の簪嬢として生きれるのかねえ・・・まあどっちにしろ世界守らなきゃな（使命感）

原作的ではない何処かへ4

納期間近なサラリーマンな気分を味わったり、新しいISコアが制作できたり、寝落ちしたり、ISの調整したり、戦線に志願してきたのが一年専用機持ち組だけですが、まあ二年三年が来なくとも俺が頑張ればいいんだよね！

※束さんは俺の好みではないです。

演説から二日目。

三年生の半数と二年の整備科全員が志願してきた。IS乗る人たちはIS着せて調整してデータを確保して名前を付けてフォルダリング。数が限られてくるから使いまわすのだが、名前を言えばフォルダからデータを移せばお手軽、だからこんな作業をしているんだが・・・

その最中、先輩の一人に聞いてみた。「どうして志願されたんです？」と。

「家族と電話して、『自分の好きにしなさい』って励まされて・・・気が付いたら今こうしてる」

と笑っていた。うん、俺には分からん領域だったようだ。

一応他にも色々、髪切ってる最中の床屋の店員みたいに聞いてみたけど・・・男の俺には分からん事だったんだろう。

問題は整備科の方達だ。この人たちの考えは俺でも共感できた。

「バックアップなら任せろー！ついでにスキルアップだー！」大分意訳したが・・・うん、まるで俺を見ているようだ。

とりあえず整備科組には武装の付け替えと調整データの入れ替えの方法を教え、IS組にはアリーナでひたすら訓練して灰兔に慣れてもらったり、一年専用機組と戦って貰ったりする。

その間俺は整備科の人たちが手軽に武装の換装と調整データ入れ替えがしやすいように少しづつだが改良していく。

うん、こっちは普通に教えてたが向こうからしたら「こいつ一体何を言ってるんだ？」状態だったからな。まあやりながら教えたなら何とかなったけど流石に全員にそれしていくだけの時間と気力がない・・・

というか単にめんどくさい。

ってか、開戦っていつなんだ？すぐにつてことを想定して色々準備してたけど、マジでいつなんだ？

入学した当初、一組代表を決める試合が決まった翌日に話しかけてきた三年生の二人組が志願して来た人たちの中にいた。なんか妙な気分だが、まあ、やることやるだけなんだけどもさ。

「お久しぶりですね先輩。四月からだから、ちょうど半年ぶりですかね？」

「あら、覚えていてくれたの？それにしても、まさかこんなことになるなんてね」

「状況って半年でこんなに変わるもんなんですかねえ」

「本当よ。多分私が君に教えることなんてもうないんじゃないかしら？」

「どうですかね、正直ノリで生きてるところあるんでよく分かってないところしかないっすよ」

なんてよくわからない会話をし、妙な気分を適当に流す。引きずっても仕方ないものはブン投げる事にした。

まだやらなきゃならないことがあるし、とりあえずは一つの目標に向かって走ることにした。勿論寄り道もするけどすぐに本筋に戻れるようなものだ、大丈夫大丈夫、余裕余裕。

と、思っていたのも束の間。顔見知り三年生コンビが終わり、次に入ってきたのがまあ面倒な輩だった。

女性至上主義っていうの？その手の人でさ。

「篠ノ之博士じゃなきゃ信じられない。男は消えろ」とかなんとか。クロエ呼んで丸投げしたが・・・世の中女だけじゃなく男でもああいふのいるからなー、萎えるわー。

「しよーくんしよーくん、太陽フレア。あと一日くらいだよ」

「・・・マジ？」

「マジマジちよー本気」

「明日ですか、そうですね」

「反応わるいなーしよーくん・・・あと、有澤の下に、海底に遺跡があるって情報入手したよー!」

「そっちの方が朗報でしたね。割とマジで」

「というわけで、他の国の連中にも『IS学園の準備が終わりまりましたので、明日IS学園は向かいます』ってあの会長つてのが伝えてたし、会長がさつき演説もしてたよ」

「あと十二時間くらいですかねえ」

「残念、しよーくんの冒険はここで終わってしまった!」

「もうちよつとだけ続くんじゃよ」

「もう終わらせちゃつてもよくない?」

「いや、ここで止めたら俺つて何のために頑張つてたん? つて話になつちやいますし」

「ま、束さんもしよーくんが死なないように頑張るんでー」

「はい頑張ってくださいねー」

とりあえず、夕食も食べたし明日に備えて眠るか。

夢を見た。

アサシン装束の男四人とその他に囲まれた夢だ。

全員、一本ずつ剣を持ち。俺にも一本の剣が渡される。

シンプルな装備一式の伝説、左肩にかかるマントが目立つ最強、斧を手に持つ先住民族、海賊映画で見るとような三角形の帽子をかぶった女性、両腰に剣と銃を下げているハンサム。そして、遅れてきたのだろう、黒いフードの付いた中世の様なコートを着た男と、黒いコートにガチガチに装備を固めた男。見覚えのある人から無いものまで、多分アサシン全員集合ツ! 状態なのだろう。

その後、何故か全員と一対一、剣のみの勝負となった。

一人につき三回ほど死んだが、死んでもやり直させられるというあらゆる種の拷問が続く。最後の追い込みなのか、実際どうなのかは分からないが気が付いたら朝になっていた。

目が醒めると何処から現れたのか、布団の上にかけていた赤い

マフラーみたいな長さの布・・・うん、これ腰布だ。伝説さんが腰に巻いてる布だ。どつから湧いて出たんだよこれ・・・リンゴ？やっぱ、リンゴ？

何はともあれ寝間着として着てるジャージの上からそれっぽく腰に巻いて朝食を食べるに食堂に向かっていたら千冬さんに腰布引つ張られてそのまま何処かへ引つ張られた。体がくの字になるってこういうことなのね。

引きずられながら「これを読んでおけ」と足の上に投げられたのは数枚の纏められたルーズリーフ。とりあえず読んでみたがどうやら班分けを纏めた物らしい。

オペレーター「あい」「うい」「れい」

A班、a—1「まどか」とかB班、b—1「いちこ」やら千冬さんクローン達の名前が見える。

専用機組、は複数あるが1—A1「ボーデヴィツヒ」と1—B1「デュノア」そしてそれぞれ一年生が割り振られている・・・一夏君と篠ノ之さんが別の班だったりするのに簪嬢と本音嬢が一緒の班だったのが印象的。なのだが、

「で、これを読んで俺にどうしろと？」

「演説をしろ。きっかけは束だが、お前がやる方が遥かにマシだから、やれ」

「・・・これ読む必要性」

「巻き込んだ人のことを知っておけ」

「いやきっかけ俺やないやん・・・いえなんでもありません、全力で事態収束に向かわせていただきます」

「死ぬ気でやれ。だが死ぬなよ」

「どうしろって言うの・・・」

ま、死に行くみたいなのもんですけどね。

演説前に少し束さんと話してとあることを決定し、ジャージに赤い腰布のまま体育館の壇上に立つ。そしてこの違和感である。

「えー、どうも。鷺津翔です。千冬さんから演説しろとか言われてま

だ十分経ってないですけど東博士がやるよりマシだからって理由で今立ってます。マイクとか慣れてないんでハウリングとかしたらすみません」男はさがれーとかいうブーイングが飛んでくるがスルーする。

「あー、まず最初に注意事項を一つ。指揮とかとるのは東博士や教員の皆さんなので命預けられないって人は辞退していただいて結構です。まあ死ぬことはめったにないと思いますけど結構大きな怪我とかする可能性もあるので、同じく嫌な方は辞退していただいでかまいません。正直、これは東博士が建てた会社と博士自身の発言の尻拭いみたいなものですからそれも嫌な方は辞退してください。大事な事なんで何度も言います。命と体が惜しい人は辞退してください」俺としては全員辞退して欲しいが、一夏君を筆頭にして「今更やめれるか！」と続く志願した一年二年三年威勢のいい連中ばかりなことでしょうーくん困惑。

「何言えばいいのか分かってませんし分かりませんが：：シールドエネルギーと弾とかが減ってきたと思ったら即逃げ帰って補充してください。まだいけるはもうヤバイです、プライドよりも命が大事なんでその辺よろしく願います」主に一夏君、てめーの事だよスーパー朴念仁。

「相手は多分、皆さんも知っているでしょうけど一年のクラス代表戦に突っ込んできたISです。勿論改良されてるでしょうからあまり気を抜かないようにしてください」どんなんだっけ？って声が聞こえてきたので「あとで放送はしますけどあまり期待しないようにしてください」とだけ伝えておく。

「作戦自体は後でオペレーターに聞いてくれればいいですが。これだけは宣言しておきます。自分、この後有澤に突入してきます。一番槍は任せろー！グチャグチャに引つ掻き回してやるぜー!!」『やめてっ！』うん、ノリ良過ぎっていうか何処でネタ仕入れてきたんだよお前ら。この世界じゃ支払いは任せろーは二十年位前のマジックテープ財布出始めのネタだぞ。

壇上から下がる途中にまさかの携帯が着信音を鳴らした。画面を見てみれば二文字『兄弟』

「もしもし、鷺津ですが」

『れ、連絡が遅れたな。デズモンドだ・・・なんか、大変なことになってるみたいだな』

「まあこっちは何とかなってるけど・・・デズやん亡国機業？っていう連中とツルんでるらしいじゃん。敵やん」

『デ、デズやん？・・・いやまあいい。亡国機業達とは縁を切ったんだよ。他のアサシン達が世界を救うのに賛成してくれてな、今じゃアサシン教団として動いてる』

「おー、やったなデズモンド！いやー、嬉しいわ。敵じゃないってのもそうだけど・・・いや、踏み込んだ話はやめよう。もう今日太陽フレアが来るらしいけど、準備は出来てるか？」

『その辺りは大丈夫のはずだ。遺跡のカギはコナーの記憶で見つけたし、仲間が回収したって報告もあった。あとは帰ってきてこの馬鹿デカイ扉を開けるだけだ』

「ところで、ルーシーってのはどうなった？」

『ん？ああ・・・父さんを助けにテンプル騎士の拠点の一つの会社に行ったんだが、そこで少し、な』

「なんか分からんけどそっちは頑張れ。俺も今から有澤に力チコミかけてくるから」

『やることが物騒だな。まあ、俺が言えた立場じゃないか。で、なんでお前そんなに色々知ってるんだよ』

「ふっふっふ、知りたいかいデズモンド君？」

『やっぱいいわ。さっきなのであの博士思い出しちゃった・・・』

「真似したからな。ま、何にせよ世界救ってハッピーエンドだ。もう少し気張っていこうぜ」

『ま、俺は鍵が届くのを待って開けるだけなんだがな』

「じゃあな兄弟。真実は無く、許されぬことなど無い」

『こっちよりヤバいんだからそっちこそ気をつけろよ、兄弟』

イヤー、なんか順調に行ってるようで何よりだよデズモンド。あと

は鍵運んでる仲間がテンプル騎士に襲撃されれば死ぬのは俺だけだね！やったねデズモンド、明るい未来が待ってるよ！

さて、当日になった、演説も終わった、電話も済んだ、飯も食った。最後の朝食はふりかけを振りまいたタマゴかけごはん、実は大好物だったりするから満足である。

一応祖父母にも親にも連絡はしたが、あらかじめ聞いていたらしくむしろ連絡しなかったことを怒られた。まあ当然だな。

その後四人からのありがたいお小言を貰い、勇気充電元氣百倍愛情MAX。

「お待たせしました束さん。いつでも行けますよ」

「やっぱやめないしよーくん」

「やめせんって。束さんが助けてくれるんでしよう？」

「うー…ぬー！いいよっ、そこまで言うのならばいいさ！覚悟してこの束さんに助けられるんだなっ!!」

「ういつす、俺の命任せました」

そして用意してもらったものに顔を向ける…

「またよろしく、VOB」

「襲撃って言えばこれにお任せ！今度は垂直じゃなくって水平だからね、本領発揮さー」

「文字通り一番槍、行かせていただきますか」

「一撃でぶっ壊しちやえー！」

「ま、普通にカチコミするだけなんですけどね」

地面と水平になってるVOBと白影の背部を連結。VOBと比べると申し訳程度だがファンネルもスラスタ―状態にしてさらなる速さを目指す。

「鷲津様、行ってらっしゃいませ」

「しよーくん、行ってらっしゃい！」

「ただいま、って言いたくなるフリはしないで下さいよ」

カウントに入るクロエ。なんか旗を振っている束さんをハイパーセンサーで見つつ、VOBが火を噴くのと同時に気持ちを入れ替え

る。

覚悟、完了

「そんな装備で大丈夫か」

「大丈夫だ、問題なああああああああああ!!」

いい感じで決めたのに崩しに来た束さんを生きて帰って絶対ぶん殴ると決めたが・・・まあ確かに正気とは思えないわな。ISに乗ってるのにジャージに赤い腰布とか頭おかしいよね、だがこれが俺の一番いい装備なんだ。

太平洋上で時速2000kmを叩き出す速度計を見つつ、真正面からこちらに飛んでくるナニカとすれ違う。

ハイパーセンサーなんて使わなくともなんとなく分かるし、見えた。

とつさに通信回線を開き、千冬さんに繋ぐ。

「千冬さん！クリスがそつちにぶつ飛んでいった！」

『・・・なにつ!?!』

やっぱり考えることは同じかクリス・・・死ぬなよ。あ、いや。死んだ方がましなのか？とりあえず、頑張れクリス。超頑張れ。

原作的ではない何処かへ5

三年の先輩達が志願して来たり、整備科の先輩様達と調整したり、知り合いの三年生と懐かしい再開をしたり、あと一日で地球が滅ぶらしかつたり、夢の中で歴代アサシン達と見知らぬ方々にぬつ殺されたり真つ赤な腰布継承したり、演説することになったり、慣れてないから何言いたいんだか分からない感じになったり、デズモンドから連絡が来たり、好物を食べるでテンション上げたり、VOBで有澤まで一つ跳びしたり、束さんがネタはさんで来たりと忙しいですがまだ一日始まったばかりです。

ついさつき太平洋の上でクリスと時速2000kmですれ違ったばかりの鷲津です！彼の無事を祈りつつ有澤へと向けて一直線で向かっています。

『鷲津、金城がこちらへ向かっているとはどういうことだ』

「俺と同じことしてるってことですよ。ロケットに括り付けてぶっ飛ばしてIS学園狙ってるってことです」

『すぐに迎撃に向かわせる。ゴーレムは確認できているか？』

「俺の目にはまだ何も。有澤も見えませんがし何も無い水平線が広がってます」

『分かった。こちらは任せろ。一段落つき次第増援を送る』

『その頃には終わってたりして？』

『じゃあ増援はいらん』

「すみません千冬さん！増援欲しいですごめんなさい！」

『分かればいい、分かればな。なんとかかなり次第向かわせる』

「十分です、助かりますよ」

さて、報告も終わったところで水平線の奥から黒い長方形が少しずつ近づいて来たしVOBのページ準備に入る。

適当なタイミングでページし、その勢いのままビルにでも突っ込んでやろうかと考えたが、有澤ビルの周りがある六角形の足場の様な物が連結している場所に着地する。六角形が合体して巨大な六角形になつてるとかなんだこれ？

そう思いつつ周りを見渡していると足場がポツリポツリと下に下がっていき、出来た穴から黒いIS、通称ゴーレムでありリングゴを内蔵していたISと同じような造形、いや？ちよつと変化してる。首とつか顔がなかったり、羽衣みたいな背負ってたりよくわからないが、

「残念だ。有澤つてことで期待してたけど結局ISか、この世界じゃ仕方ないのかもしれないけどな」

スカート状のファンネルを機動し、横一列に並べて準備完了。

「ビームコードを「零落白夜」に、ファンネル掃射！からの薙ぎ払いで撃ち漏らしを落とせ」

白式ちゃんから教わった『どんなISでも簡単に零落白夜を使えるようになるデータ』を使って魔改造した白影の前にはISなどただの紙装甲の的なんだよ・・・何このクソゲー。白式ちゃんのファンやめます。

『はーはっはっはー！流石は彼の天才篠ノ之束博士の助手なだけはあるなッ驚津君！』

何処からともなく聞こえる野太い男の声。それと同時に地面に落ちているISごと床が下に下がっていき、再び現れるISの群れ。

そして一段大きく開く穴と、せり上がる床とそれに乗った十メートルほどはあるのだろう。横幅の大きい頭の上に何かを横に背負っている人型、人型？むしろ戦艦の管制室の様な・・・下はタンクの機械・・・来たか、ロマンガチタン。

『しかし！零落白夜は自身のシールドエネルギーを大きく削る諸刃の剣！さあ、今この場にある無人ISは146機だッどう対処する！』
「スルーで」

『・・・ハッ、ハッハッハッ。対処してくれ！頼むから！』

「なんか意味有り気に出てきて悪役っぽかったのにどうしてそうなったし」

『君がゴーレム狙ってる時に私が君に攻撃をして「このゴーレム達はIS学園に向かわせる！邪魔はさせん！」ってやりたかったのに！』
「有澤さん、あなたとはいい酒が飲めそうですよ・・・俺まだ未成年で

すけど」

『成人したら特撮を見ながら盛り上がりたろうではないか！・・・これがどう終わるか、まだ分からないがね』

「じゃ、とりあえず邪魔なこのISどつかやってくださいよ」

『そうだな。では全機！IS学園へ向け全速前進だッ！』

・・・あ、そうだ！

「IS学園には、行かせるかあああああ！」

『なっ裏切ったな・・・ハッ！そうはいかないぞ鷺津君！彼らゴーレムには有澤重工の未来がかかっているのだからなあッ！』

す、すげえよ社長。零落白夜撃ってるファンネルに銃弾当てて射線をズラすなんて・・・マジで何者だよこの社長。

『・・・驚いたよ鷺津君。まさか突然あんなことをするなんて』

「さつきは乗れなかったんでノッてみようかと。お嫌いでしたかな？」

『いいや、大好きさッ』

良いボイスでそのセリフはやめろおっさん。世代なんだろうけどやめてくれ。

とりあえず千冬さんにメッセージで『無人IS146機がそっち行きました』と送っておく。

『時に鷺津君、これまでのやり取りはすでにテレビ放送されているのかい？』

「ISは全部束博士がハイパーセンサーで覗き見してる状態で目についた映像流してるだろうから・・・まあ流れてるんじゃないかな？」

『そうか。ならばこのAISCの性能を見せつけることにしよう』

「・・・一応聞きますけど、何の略称で？」

『アンチ・インフィニット・ストラトス・コアの略称でね、文字通り攻撃に特化、シールドエネルギーを重点にし、あとは色々拡張領域に突っ込んだだけのような物だ・・・もはやISコアとは呼べない劣化品だがそれでも十全だ』

「IS技術の流用じゃぶっちゃけ勝てないと思いませんでした？」

『初めに使おうとしていた技術の第一人者が技術を完成させる前にな

くなつてしまつてね。資料なんかは纏められてはいるのだが、誰が読んでもさっぱり分からなくてね。そんな折、亡国機業に話を持ち掛けられたんだ。質問には正直、やり方次第ではなんとでもなる、と答えておこう』

「聞いてないことまで答えてくれるなんていい人だなー」

この世界はどうやらIS以外の技術を受け入れない様だ。転生者がいるからなんかの原作だろうと、何か変なの混ざるだろうと思つたら混ざつたのはアサクリだけだつたでござる。

まあコジマとか受け入れられてもこつちが困るからありがたいつちやありがたいんだが、頭硬いよ世界さん。だってKARASAWA生まれじゃないじゃん。

『まあ、お話はこれまでだ。戦おうじゃないか』

「え、この締まらない雰囲気の流れでやるんですか？正直ですか！」

『正面から行かせてもらおう、それしか能がないのでね』

「いや待つて社長、ちよつと待つて社長。その背中から構えたのはなんだー！」

有澤社長の乗る機体が背負う背中の上が、奇妙な起動を描いて動き出し、曲げられた主砲が折れるんじゃないか？と疑問になる形で展開する。

『ロマンだよ。わかるだろう？』

「それ太いんだよ、固いんだよ！暴れつぱなしなんだよ!!」

『よくわかつてるじゃないか鷺津君ッ！』

「そんなもんガチで作るなんてマジで変態だよあんた等ア！」

俺が叫んだ直後、巨大な主砲が火を噴いた。

『正直、君はエネルギー攻撃が主体だからね。先に落とさせてもらつたよ』

「有澤社長！俺が特撮スキーな事を忘れてもらつては困るぞ！」

巨大な銃弾が着弾したことで巻き上がる煙と爆炎からもう一つのISへと着替えて飛び出す。

真っ白な全身装甲のボディ。どこぞの戦う社長やら光の戦士の息子みみたいな近代鎧に身を包み、白地に裾が青いコートに袖を通してボ

タンは留めずに赤い腰布で抑えつけ・・・ドヤア。

『かつ、カツコイイではないか鷺津君！しかし、まさかその服・・・アサシンだったとはな。想定外だよ』

『というか社長！ラスボスならラスボスらしく社長室で待ってるよ！有澤ビルに突っ込もうと思ってたところだったんだぞ！』

『社長室には・・・まあ、なんだ。もう先客がいるからな』

『え？俺より先に誰か来たん？』

『亡国機業のトップが社長室独占してるのだよ。まったく、有澤の社長は私だというのに・・・』

『なんかもうすみません』

『構わないさ。しかし、君も本気を出したことだ・・・今度こそ、正面から行こう』

正直、強いパワードスーツを着た人間がとあるACシリーズの五メートルでも十分デカイのにその二倍の十メートルくらいある重機と正面から戦うとか馬鹿じゃないの？と思うだろう。

しかし、これは先史文明が築き上げ、束さんが作り、俺が改良し、さらに束さんが魔改造したリング知識の悪乗りの象徴とも言える代物だ。やってやれないことはない！某裸蛇さんだってそれくらいの大きさのもつとデカイの生身で倒してたからなッ！

・・・しかし、流石タンクAC。横幅と威圧感がハンパねえぜ。わざとゆっくりとキャタピラ動かしてこっちくんなクソ怖えよ。かといってブーストもするなよ？ギャグじゃないんだからペラペラになんてならないんだからな？・・・ならない、よな？

戦車の底面からブースターを噴かせ宙に浮く・・・明らかにおかしいが、背中から二門、両方の足裏から、肩の外側からブースターを噴かせ宙に浮いてる手前で人の事はあまり言えないがISの技術と人の執念が戦車を空に飛ばしたということに喜ぼう。

「だがしかし戦車を飛ばす発想はやっぱり狂ってるわ！フロートならまだ許すけど現実でガチタンが飛ぶってやっぱりおかしいわ！」

『ロマンだ！』

「それ言えばいいと思っただらァンター！」

『口を動かしてばかりで攻撃してこないな！どうした、武装はないのか！まさか拳かッ！』

「答えられないからッて急に戦闘モードに戻るのやめてくれませんかね！」

しかし、そっちがその気ならこっちにだッて考えはある。今の俺のIS『クリード』には対ISの切り札零落白夜こそ積んでいないがそれ以上の武装を積んでいるのだ。

「篠ノ之束の科学力に喧嘩売った事後悔させてやるぜ社長！」

左手をまつすぐタンクに向け、束さんがとあるアニメを見て言った言葉を思い出した。『やっぱり、手の平から攻撃するッて、いいよね』手の平と指を繋げる複合部が根本から伸び、そして関節毎に一つ一つ展開していく。

手の平の中心部に黄色く光る六角形、そして伸びた指の関節部に走る電気。そう、俺の左手にある武装はたった一つ。

「デッドリー・フィンガービーム！」

関節部の電気が中央の六角形に集中していき、赤く輝くビームを出した……。これ、Hi-Erro粒子とか積んでないのになんで出せんか？と思いつつも赤いビームがタンクの胸部の装甲に直撃しその巨体を少しづつだが押していく。

『こ、この雷電……。削り殺されるほど軟ではないぞ鷺津君！』

ビームを浴びながらも肩の巨大な砲からの射撃を避ける為に攻撃を中止し横にスライドする形で移動する。

『エネルギー攻撃には弱いが、それでもこの装甲とシールドエネルギー……。削れるというのなら削ってみたまえ』

「よし一夏君を呼んで来よう」

『それだけは止めてくれ！一発で落ちるから止めるんだ！』

「……。なんで有澤さんは黙ってボス雰囲気保ってくれないん？」

『それはだね。私がこういう人間だからだッ！社長が夢を見なければ社員も夢を見れないからだ！』

「言ッてることはカッコいいのにやッてることはテロじゃねえか！」

『私は人類皆に夢を見てほしいのだよ!』

「エゴだよ、それは!」

もう・・・もう本当に、締まらねえよなあ。

『だが、期待に比べて少しノッてあげよう、先ほどノッてもらったお返しとしてな』

「いえ、いいです」

『エネルギー攻撃には弱い、それでもこの亡国機業の作ったISCコアを五個連結しているんだ。生半可なシールドエネルギーだと思わないことだな!』

「さっきまでの事なかったことにしやがった!」

『大人とはこういうことだ!』

「キタねえぞクソ社長が!」

『人類の進化のためならば私はいくらでも罵られよう!』

「もうやだこの人の相手!誰か代わってくれ!!」

『だが君はここで落とさせてもらうぞ鷺津君!』

社長がそう叫ぶとこれまで肩に背負っていた巨大な砲塔が白い輝きに包まれ、その光が両腕までおおい・・・現れたのは左肩から膝下まで体半分を覆う半球体、そして表面でキョロキョロと目まぐるしく動く突起。右腕は巨大なガスバーナーを抱えるように持ち、ほのかに赤く光る粒子の様な物を「光の剣」と表現できそうな勢いで噴射している。

『この機体のエネルギー、五分の一を使って君を落とさせてもらおうッ!これが、私の覚悟だッ!』

「ヒュージブレードじゃねえかよ!タンクでやるもんじゃねえだろ!」

『いいや、我が社命名「ブレードバーナー」だッ!確実に当てるために太さにエネルギーを割くことになるが、それでもそう易々と逃げ切れる範囲ではないことを言っておこう』

「俺に伝えてどうすんだよそんなこと!」

『私はフェアなプレイが好きな男なのだよ!』

「コア五個も連結しておいて何がフェアだよ!」

いや、まあ、かなり劣化しているとはいえグラインドブレード作った手前言えないが・・・それでも！俺は言い続けるぞ！

「あんた頭おかしいよ！」

『トップがロマンを求めて何が悪いッ！』

この人ホントなんも聞きやしねえなッ！

原作的ではない何処かへ6

クリスの事報告したら千冬さんに増援を絶たれそうになったり、太平洋有澤拠点が改良されたり、白式ちゃんに教わった零落白夜で無人IS一掃したり、ドン引きしたり、有澤社長が床からせり上がってきたり、ノリがよすぎていまいち戦闘！って感じじゃなかったりと調子がポキポキ折られている鷺津です。

そして、社長が取り出したのはオーバードウエポンの一つ、ヒュージブレード。

「そっちがその気ならこっちだつて出す物出すぞチクショウ！」

左腕をまつすぐ空に突き上げ、拡張領域からアレを呼び出す！

「来いよ、我が息子よ！」

そう、ヒュージブレード登場以来比べられ、それまで愛用していた前世の俺の友人にも登場以来「いや、ヒュージブレード使うだろ」と言われ捨てられ、「MURAKUMOでも使つとけよ」と蔑まれたオーバードウエポンが一つ。

それが、俺の左手首から生える六つの真つ白な二メートルはあるチェーンソー。グラインドブレードver. 鷺津……いや、このネーミングはないわー。

『……ハハッ、まさか正面对決とは……一本取られたな』

「正直今すぐに回れ右したい所ですけど……俺だつて男で、機械屋だ。来いよ社長。借り物のアイディアだけどこれでも愛着湧いてんだ、俺の息子が最強だつてプライドがあるんだよ！」

初めて作ったチェーンソーを繋いだだけの時からずっと改良に改良を重ね、パージ必須つて所を必至こいて取り除いたつて事で安定度は増したけどロマン度は下がったが……だが俺は信じてるんだ。あのレジスタンスは弱かっただけで正義だつたつて。それをただ、証明したいだけだ。証明するには勝つ！それだけだ。

ついでに言えば、分の悪い賭けは嫌いじゃない……なんか言えば言うほどダサくなるから止めとこう。言葉は無粋押し通れつてな。

『行くぞー！鷺津君ッ！』

「かかってこいやあああああああああああ！」

タンクが体を右に半分反らす。

チェーンソーが左手を中心に回転し始め、刃先が徐々に中央に寄って行き手首から先が回転。ハイパーセンサーでも円錐の様にしか見えなくなる。

タンクが体全身を動かし、まるで某狩りゲーの槍の貯め攻撃の様にこちらへと突き出してくる。

「デッドリー！……ええい思いつかん！フィンガービームツ！！」

手の平が展開していく感触を確かめながら、目に入る真っ白の円錐が真っ赤な光に包まれるのを見ながら。背部のスラスタを吹かし、こちらへと一直線で飛んでくる光の中へと突っ込み、そのまま真っ赤な円錐となった左手を突き出す！

『なっ！分かってはいたが、敵の攻撃に向かって全力で突っ込むなんて……なんてロマンツッ！』

なんて声が通信で聞こえてくるが構ってる余裕なんてない。ガリガリ削れていくシールドエネルギーのゲージに舌内しつつ、束さんが悪乗りでほぼ完成しているこのISに半ば無理矢理捻じ込んだシステムを起動する。

「コードー！「絢爛舞踏」発動オー！」

白式が一夏君の零落白夜を俺が流用した機体だとすれば、このクリードは束さんが自分の技術を悪乗りで乗せた機体。

視界が金色の粒子で覆われていくのと、表示されているほぼ空っぽだったエネルギーゲージが満たされ、削られては満たされてを繰り返していくのを『ああ、やっぱり（自分の力だけじゃ）駄目だったよ』と悲しい気持ちになりつつも、さらにスラスタを上限目一杯まで引き上げグラインドブレードの回転速度とフィンガービームの出力も同じように、こちらは少しづつ上げていく。

『最後の最後で覚醒だどツ……流石だ、流石としか言えないな。鷺津君。だがしかし、まだこちらのシールドエネルギーは残っているぞ！これから、全身全霊で、君を叩き潰すことにしようではないかア!!』

抵抗が一気に跳ね上がったが、残念だけど有澤社長……これ、シー

ルドエネルギー尽きないのよね。何故って？この絢爛舞蹈、束さんが「発動も停止も操縦者の任意にしておいたよ!」とかいい笑顔で言っていたからだ。つまり無双ゲー。

「もうこんなのヌルゲーなんてレベルじゃねえぞ!ゲームで言ったらボタン連打で勝てるってイベントなんじゃないかなあ!」

『煽られようと私は私のやることを貫くだけだアツ!』

「俺のチェーンソードリルは!目の前の壁に穴開けるドリルだツ!」

神殺しチェーンソーと天を衝くドリルが、ここに一致団結した。というか、させちやった。

「ぶち抜けええええええええええええ!」

『私の光の中から……さらに輝く光が、逆流するツ!?グワアアアアアアアツ!』

グラインドブレードの先端から足裏までまっすぐにして抵抗を減らすことで威力は倍!足裏のスラストも全開にしてさらに倍ツ!ついでに回ってさらにさらにツ!!某たまご先生の調理論が通用したのかどうなのか、気付けば俺はタンクが抱えるヒュージブレードの発生装置をぶち壊して地面に激突していた。

散々グラインドブレードの事を熱く言ってたのに最後はこの様かよ……すまぬ、すまぬ……と酷使したせいなのだろう、先端から花が咲いたようになってる六つのチェーンソーとバチバチと電気の迸る左手に感謝と謝罪をしつつグラインドブレードをパージし、絢爛舞蹈も解除する。

『流石だよ鷺津君、先ほどの攻撃で五つのコアすべてのエネルギーを使い切ってしまった……そこで一つ、言い忘れていたことがある……このタンクに積んでいるISコアは全部で六つだ』

「……で、五つを連結して利用してたってことは。つまり!」

『そう、予備電源として一つを残しておいたのだ。騙して悪いが、これも戦いだからな』

方や左手イカレかけてる人が着てるパワードスーツ。方や十メートルはあるタンク。どちらが有利かなんて有澤社長と戦い始めた時よりも明白だ。

「有澤社長、俺も言い忘れてたことが一つあるんですよ」

『むっ、まだ奥の手を残しているのかッ!』

そんなもの、依然変わらず・・・

「これ、零落白夜積んでるんですよ」

『なっ! 織斑一夏を呼ぶと言っていたから積んでいないものとはカリッ!!』

足裏背部肩、すべてのスラスターを全開にしてまっすぐタンクへとぶっ飛ぶ。向かう先は勿論胸部。理由? ロマンだッ!

右手で拳を作り、一気に開くと同時に手首の裏から腕の真ん中ほどのパーツが小気味よい金属音を当ててせり上がり、真っ白い小さな刃が形作られる。

さつき言っただろう? 『このクリードは束さんが自分の技術を悪乗りで乗せた機体』だつて。当然の如く零落白夜だつて載ってるってことだ。

そして、そのままタンクの外装を凹まし、衝撃によってその巨体を傾けながら、零落白夜の出力を全開に引き上げる。

『この、雷電の・・・エネルギーを削り切るとは、篠ノ之束の技術、化け物かッ!』

「あ、ようやく気づきました? マジで敵に回すべきじゃない人間っているもんなんですよねえ」

地面に横たわるタンクの凹んだ外装の上でクリードを解除してグツタリと大の字になって寝転がる、少し休ませて、これはマジで疲れた。

『フッ。まあいい、君もアサシンということは、世界の崩壊を眺めるのだろうか? 雷電の上はあまりいい席とは言えないが?』

「あー、有澤さん。俺、確かにアサシンの服着てますけど別にアサシンってわけじゃないですよ?」

『何? しかし、最後の零落白夜はたしかに、彼ら特有の武器の様だったか?』

「ま、言えない事情って言うのが少しありまして・・・で、遺跡への行き方、教えてくれませんか?」

『何、簡単だ。私が連れて行こう。それが、敗者の役目だ』

「・・・え?」

『気にするな気にするな。今更「よくもやってくれなア!」などと恥をさらす気などない。それよりも、そこからどいてくれないか? 出れないから』

「あ、すみません」

とりあえずふらふらと立ち上がり、覚束ない足取りで胸部から装甲を伝って地面へと滑り台の様にすべり降りる。

少しすると胸部がガタガタと揺れながら上へと突きあがり、そこからいつか見たままのスーツ姿の有澤社長が降りてくる・・・しかし、スーツでやってたんかよ、耐Gスーツとかじゃなくて大丈夫だったのかよ。

「では早速案内しよう。ついてきてくれたまえ」

「いや、まあなんというか・・・ありがとうございます? でもなんでそんな、いいんですか?」

「社長がゴネるわけにはいかないだろう?」

そういつてニカツと笑う有澤社長はまるで少年の様だった。

案内された先は有澤ビルの一層下。そこまではエレベーターに乗って行ったのだが、話すことなすぎ過ぎて奇妙な居心地の悪さを味わった。

そしてエレベーターが開けた先はドックの様な場所で潜水艦の様な物から結構大きい船まで泊まっていた、そんな中で何より目を引くのがテレビの特集なんかで見る数人乗りの「海底探索艇」の様な物が天井から吊るされていた。

「ではいこうか鷺津君。遺跡までの直通便だぞ」

「いや、まさか、こんなのに乗る日が来るなんて・・・」

「というか、君はどうやって海底にある遺跡まで行こうとしていたんだ?」

「ISで潜って」

「・・・君も君でやっぱりおかしいな」

「有澤社長にだけは言われたくありませんでしたよ」

その辺にぶら下がっていた工場とかで見る黄色い規範についている赤いボタンを有澤社長が押すと海底探索艇がゆっくりと降りてきて、着水した。

何処からか持ってきた小さい脚立を持った有澤社長が探索艇の脇に置き、上って探索機と天井を繋ぐロープ別の物へと付け替え、入り口であろう蓋を開いて俺に乘るように示してきた。

どうすればいいのか分からないので流されるままに中に入り、有澤社長が乗ってきて蓋を閉め、水圧扉についているようなハンドルを捻ってから、目の前にレバーが二本付いている椅子に座り、「カッコいいだろー!」とキラキラした顔で言ってきたので頷いたら満足したのかレバーを倒し、探索艇が動き出した・・・いざ、海底へ。

つと、千冬さんに連絡してなかったことを思い出して『有澤社長、討伐完了』とメッセージを送ったらすぐに千冬さんからの着信が入った。

するとそこには、スツツツゴイ不機嫌な顔をした千冬さんの顔が画面いっぱい映し出した。隅っこで束さんが正座してる・・・あれ?これって、まさか・・・

『鷺津、貴様。私に言っていない大事なことがあるだろう』

「これから世界救いに行つてきます」

『そのことに関するとでも大事なことだッ!』

「あー、束さんから?」

『何故かソワソワと落ち着きをなくしていたから聞き出した。貴様、死ぬ気か!』

「そのために頑張ってきたんで」

『何故だ!お前はまだ若いだろう!何故そう命を簡単に散らすッ!』

「嫌だなー千冬さん、簡単なわけないじゃないですかー。十分悩んで、決めたんですよ」

『何故そのことを私に言わなかった!』

「だって、言ったら『私が救う!』って言い出すでしょう」

『当たり前だ!お前は私の弟子で!私の生徒なのだぞッ!教師とし

て、いや、人として止めるのは当然の事だろう!』

「確かに、俺がやらなくても誰かが救ってくれるでしょう。でもね、千冬さん。決めちゃったんですよ」

『………まったく、ドイツもこいつも馬鹿者だらけだ!』

「あーはいすみません。ところで、千冬さん? そっちはどうになりました?」

『これから死ぬ奴になんぞ死んでも教えんツ!』

あ、切られた……最期が喧嘩別れってのもまあ、うん、千冬さんらしいなあ、と。

「お別れは、今のでよかったのか?」

「あー、個人的にあオツケーです。千冬さんには申し訳ないんですけど、らしいと言えばらしいんで」

「……まったく、鷺津君も罪な男だな」

「ハツハツハ、テロ起こして世界中に罪ばら撒いてる社長程じゃないですよ」

「これは一本取られたな! ハツハツハ!」

しばらく探査艇の中では笑い声は絶えなかった。正直、これが最後の笑いだと思うと中々に酷いな……。

探査艇の前についている耐水圧ガラスから見えたのは、遺跡をすっぽりと覆っているガラスのドームだった。

ドームの外側の数か所が鉄で出来ているのだろう、社長が何かボタンを押すとその内の一つが開き、その中にすると探索艇は降りていき、ゴウンゴウンと機械音が響いたと思ったらガラス窓から海水が引いていく光景が見える……

「カッコいいっすね」

「だろう! ちょっとした海底都市だ。これは売れると思うんだが、どうかな」

「ええ、人口多くなったら海底都市ってのもいいかと。少なくとも、宇宙進出するより安定してます……よね?」

「そうだろうそうだろう! もっと浅い所に作っていけば事故も起きな

いだろうからな！もう少しプランを練ることにしよう・・・獄中でな
！」

「ええ、出れたら一からの再スタートですね」

「なに、私は諦めんよ。なぜなら私は有澤社長だからだッ！」

有澤さんマジ社長。

そして探査艇から降り、遺跡の奥、青白い巨大な壁の前まで向かう・・・現実で見るとまた神秘的というかなんというか・・・

「さて、ここは私たちでは開けられなかったが・・・勿論準備しているんだらう？」

「ええ、してなきや来てませんよ」

拡張領域から古銭の様な鍵を取り出し、青白い扉の脇についている、どう表現すればいいのだろうか。ドアノブの先端に鍵を入れる丸い穴があるのでそこに近づける。

するとまるで磁石のS極とN極を近づけた時の様にスツと鍵が俺の手を抜け穴の中へと入っていく。

岩同士がこすりながら動くような音が響き、少しづつ青白い壁が消えていく。隣で社長が「ワンダフォー」と呟いていたのは無視し、そのまま進んでいく。

「私はここにしよう。ああそうだ、私の連絡先を織斑千冬に送っておいてくれるかい？」とメモ用紙を俺に手渡し、入り口で手を振って俺を見送る社長は本当にいい男だった。

社長の連絡先をメッセージで送ると、すぐにメッセージが戻ってきた。

内容は一言『私は束の案に乗るぞ』と。・・・ああ、俺を助けるって奴？ありがたいなー。

と他人行儀な感情を抱きつつ、奥にある丸い机に近づき、中央に半球状の凹みがあることを確認して、首から下がるISの待機状態のドックタグを左手で引きちぎる。

手の中で黄色い光を放ちながら感触が変わっていく妙な体験を味わいながら、何の躊躇もなく、躊躇いもなく、凹みにリングをはめる。いきなり体から力が抜けていき、睡魔に襲われる。これはきつと、

太陽フレアの熱で苦しんで死なないようにするための物なのだろうか、俺は丸机に突っ伏した。

最期に思うのはただ千冬さんや一夏君、山田先生に始まり束さんにクロエ。篠ノ之さんにオルコツトさん、鈴嬢にデュノア、少佐と簪嬢と本音嬢、最後に先輩方に・・・ついでにクリスと生徒会長のこれからを・・・

そんなことよりおうどんたべたい——

原作的ではない彼方へ

あの時は、また目が覚めるなんてことになるとは思ってもみなかった。

最初は『また記憶が輸入されたのか?』と、少し考えてみたがどうやら違うようだ・・・

俺は、嬉しくなつてつい泣いてしまった。泣き顔を隠すように、右手で顔を覆った。

いいや待てよ?俺は今、両手で顔を覆おうとしたんだ。なんで片方しか手の平の感触がないんだ?

とりあえず、体の上にかかっている布団を両手で・・・どかそうとしたんだが右手だけでどかした。

もうすでに嫌な予感がマツハで止まらないが、俺は決心して左腕があるであろう場所を勢いよく見た。

・・・・・・・・・・。

「俺の左腕があああああああああ!?!」

どうも、熱血な感じで有澤社長を倒して、なぜか有澤社長が仲間になって、海底の遺跡に移動して、千冬さんに怒られて、リングを装置に設置してそのまま眠つて、うどんを食べたいと心に抱いたまま死んだものとはばかり思った驚津翔です。

「なーんで生きてるんだらうなあ」

どうやら俺の脇の下はなくなつてしまったようだ。というかそもそも左腕が肩から指先までマルツと消失した。ノースリーブの入院服だから簡単に分かった事なのだが・・・しかし、意味が分からない。なんで生きてるん?叫んだことで来たナースさんは驚いてすぐどこか行つて、その後で白衣来たおっさんが来て脈とか測られたり、目にライト当てられたりと一通り身体検査したら医者のおっさんどっか行つた。

その間全部ポカーンとして何話したかとか覚えてないや、つてかど

うなってるの?と混乱に苛まれている俺を救ったのはなんと・・・
「俺は先に起きたから色々聞いたけど、お前起きたばっかだもんな。
驚津」

横を見ればなぜかベットから上半身起こしてこちらを見ているデズモンド君。目を引くのは右腕がないってことかなー。デズモンド君・・・デズ、モンド・・・?

「死んだはずじゃッ!」

「さっき自分でも言ってただろ。なんで生きてるんだーって」

「いや、うん、ごめん。まだ整理がつかないんだ・・・」

「とりあえず、俺が篠ノ之束から聞いた事を教えるな」

「ああうん、お願い。もうなんか、駄目だわ。なんか泣きそう」

「正直言うと、俺も両親に会って泣いた」

「・・・とりあえず先に教えてくれないか?」

「わかった兄弟」

そしてデズモンドから聞いたことは纏めてしまえば実に簡単だ。

とりあえずIS学園は落ち着いた。国際連合が出てくるよりも先に落ち着いたらしい。

束さん、千冬さんと一緒に他の遺跡に行く。

しかし遺跡には世界滅亡を目論むアサシン達がッ!

しかし相手が悪かった、世界最強と天災だ。

まず一つ目の遺跡を攻略し、この前俺に嘘か本当か分からなかったが「量産した鍵とリング」を使って一つ目の遺跡でまず千冬さんが。

二つ目も同じように無双して束さんが。

一方その頃!テンブル騎士団の誰かが同じことを!

太陽フレアは防げたが余波なのかISが機能停止に陥る。ここで束さんのネタ晴らしで「そういう風にISコアは設計した」とデズモンドから聞いて驚きも収まった。

しかし、第二世代ISコアは太陽フレア対策して作ったので大丈夫だったらしい。

そして機能停止に陥って落下していた初代ISコア製IS達は第二世代コアの連中が地面に激突する前に回収して操縦者達は無傷で

した。

世界各国が「ISコア寄越せ」と脅迫を仕掛けるが束さんが「ISコアはこれからは宇宙進出に使うこと。守らなかつたら強制終了してこつちから叩き潰しに行くから」と対応。

IS学園は宇宙飛行士養成学園となるらしい。

んで、デズモンドと俺のなくなった腕は燃えて炭化して壊死しかけてたんで急いで切ったそう。そして代わりの腕は今束さんが作ってるらしい。

「まあ、こんなところだな」

「あー・・・ご都合主義すぎるでしょう?」

「俺もそう思う。でも、現実って案外そんなもんなんじゃないか?」

「やだ、この子悟っちゃってる・・・!?!」

「さつき俺が教えた事、あの篠ノ之東のテンションで教わったんだぜ?・・・もうどうにでもなれ、って奴だ」

「ああうん、束さんデズモンド君にあのテンションで接したんだ、なんというか、慣れてないとつらいよな」

「まあ、教えたから俺はもう寝る」

「お疲れ兄弟」

「お互い様だろ」

布団手繰り寄せて頭から被って、よつぽど辛かったんだねデズモンド君。束さんの相手。

「鷺津、私が言いたいことは分かっているな」

しばらく窓の外をのんびり見てたらドアがノックされ、千冬さんがやってきた・・・うん、俺の現状的にアカンのが来た。

そして何がって、何がって・・・

「千冬さん・・・左手、ないじゃないツスカ」

ヒラヒラしてる左の袖が、なんか、とても・・・

「命と引き換えだ、そう悪くはないだろう」

「千冬さん・・・理由は分かりませんが、なんで・・・」

俺は今、相当落ち込んでいる。命を懸けて守ろうとした相手が俺の

命を救って挙句腕一本犠牲にしているのだ・・・いや、分かるよ。千冬さんもこの感情抱いてるって分かるけど、分かるけどさ・・・少しは成長したつもりでいるけどIS学園に来る前から変わってないのか、俺はそこまで大人じゃないんだよ・・・

「子供は大人に甘えればいい。なに気にする事じゃない、一夏は私のこれまでの人生の殆どを犠牲にしていたからな」

「多分それ、今後も続くかと思えますけど・・・ってか、多分それブラコンのせい」

「・・・ほう、言うようになったな鷺津」

「一回死んだみたいなもんですし、なんかもう、いいかなって」

「そうか。まあなんだ、私はお前を助けるために傷物になったのだ・・・」

「いや、待って千冬さん？その言い方なんか違うくないですか？」

「束も言ってくるぞ」

「束さんは好みじゃありません」

「真顔で言うな、束が哀れに思えてくる・・・」

千冬さんはそう言っただけ息を少しついた後、いきなりプツと、噴き出した。

「冗談だ鷺津。まあどのみち相手などいなかっただろうからな、変わりにないさ」

「自分で言っただけ虚しくなりません？」

「だが、お前にも相手がいなかったら・・・その時はまあ、傷でも舐め合おうではないか」

「心臓に悪いんで勘弁してくれませんかねえ」

「これもまた冗談だ、独り身の方が落ち着く」

「とりあえず、相手を見つめるよりも先に一夏君落ち着けなきゃいけないですしねえ」

「・・・思い出させるな」

「なんか、あつたんですか？」

「・・・・・・・・IS学園防衛の際に、増やした」

「・・・・・・・・もう一夫多妻のどつかの国の代表にでもしません？」

「言ってみたが、嫌がったぞ」

「一夏君マジ何なんだよ」

「ああ、それで思い出した。金城だが、デュノアによくされているぞ」
「・・・聞きたくないです」

「安心しろ、お前の考えているようなことじゃない。説教を受けているという意味だ」

「あ、そっち」

「ついでに洗脳まがいな事もされているがな」

「誰か助けてあげてよ・・・」

「裏切り者にはそれ相応の制裁を与えなければ示しがつかないからな・・・周りの女子達も納得していたから許可した」

「クリス、強く生きろよ・・・」

俺にはもう、お前を助ける事なんて出来やしないよ・・・

「ところで千冬さん、もう一人いるじゃないですか。英雄」

「ああ、そっちの事はあまり知らないのだがな。まあ、同じような状況と言っておこう」

「つ、ついでに・・・あれから何日たってます？」

「四日だ」

「通りで異様な空腹感が・・・おうどんたべたいです」

「入院食でも食べていることだな」

ツハ、って感じで鼻で笑ってから「では、仕事があるのでな」と言っ
て去って行った・・・絶対しばらくの間は根の持つてるよあの人。そ
れで弄られ続けるんだ俺・・・耐えろよ俺、悪いのは俺なんだから。

一年専用機持ち達が来て女子陣がフルーツ持ってきてくれて嬉し
かったけどなんか一夏君が拗ねてた。いや、なんとなくわかるし、話
切り出したくないけど・・・うん、謝つとこう。

「・・・一夏君、千冬さんの腕の件は」

「いや、千冬ねえが自分で決めたんだから翔のせいじゃないよ・・・そ
れよりも、相手がいなくなったら千冬ねえと結婚するってマジなのか」
「一夏君まで言うのかよ・・・いや、勘弁してくれよ。相手いなかった

らその時は素直に独り身貫くさ」

「違う！俺は責任を取れって言いたいんだよ翔！」

「え．．．えっ？」

え？やだ、このシスコン．．．何言ってるの？

「男なら千冬ねえ傷つけた責任くらいとれよ！男らしくないぞ翔！」

「いや待て一夏君！本気で待て一夏君！お前は何を言ってるか理解できてるのか!？」

「本当は俺だつてまだ割り切れてないさ！でも、でも．．．ち、千冬ねえが決めたんなら仕方ないだろう！」

「誰だ！一夏君に酒飲ましたのはッ！」

そう叫んだ直後、病室のドアがガラツと開き、

「私だ」

そう一言だけ千冬さんが言つて、ツカツカと歩いて一夏君の襟首掴んで引きずって帰って行った．．．え、いつからいたの？つかマジで飲ませたの？

女子陣は俺の視線に対して首を振るだけだ．．．え、素であれなん？シスコン拗らせたらあなるん？

どっちにしろ、一夏君から「義兄さん」なんて呼ばれる趣味はないので忘れることにした。

「しよーくーんひっさっしぶっりー!!ついでのデズっちおひさー！」

病室のドアを蹴り飛ばして入ってきたのは右腕がメカニツクな束さんだった．．．俺の腕もあんななるん？

「どうも束さん、個人的にはあんまり久しぶりって感じはないですけどね」

「あ、ああ、久しぶり」

「というわけで、持ってきたよ義手！」

そういつてベットのの上にポンツと乗せたのは．．．

「久しぶりだな、相棒」

いつぞやの成金ドックタグだった。まさか、また会うことになるとはな。

「デズつちにはこれねー」と渡していたのは首紐を通した遺跡の鍵：そっちの方がよかったなあ。

とりあえず首にかけて、右手でコンソールを呼び出して『しょーくんズ義手』をタツチする。

「IS技術を流用して部位展開みたいにしてみたんだよ！これがあれば工具も重機も何もいらないよ！だってIS並のパワーがあるからねー！」

「ぎ、義手って言うくらいだから腕に付けるのかと思ったけど」

「でもデズモンド、それじゃ風呂入りにくくね？」

「・・・ああそうだった、鷺津は日本人だったな」

「え？何？忘れてたん？」

「あまりにも自然に会話出来過ぎてて忘れてた。そうだった、日本人は風呂が命だったな」

「食事もだが・・・病院食はなんか、駄目だ」

「そうか？俺が作ったオートミールより全然マシだろ」

「・・・そうか！しょーくんの義手だけ普通の義手にすれば・・・むふふ」

「やめてくださいいね束さん」

「じよ、じよーだんだよー。束さんってそんなに信用無い？」

「食えない相手だなあと」

「あ、しょーくんしょーくん！TUIの副社長の席はいつもで空けるからねー！」

「今すぐ業務に出ろ！とかじゃないんですか」

「え？そうして欲しい？」

「ずっと眠りっぱなしより動いてる方が気が晴れますって」

「そうーじゃあちよつと待っててね！」

そういつてドアのない出入り口からタツタカ出ていく束さんを見送りながら・・・

「あんなこと言ってよかったのか？」

「いや、本気で気が滅入るのよ。体動かしてなきや落ち着かないって言うの？」

「ああ、噂に聞くジャパニーズ脳筋ってやつか」

「お前までそれで弄るのか、兄弟」

「兄弟だからな」

容赦ねえな兄弟って。

「驚津様、先日はお疲れ様でした」

「あー、うんただいまクロエ」

束さんが来た翌日、俺は束さんのラボ『吾輩は猫である』に来ていた。というか、入院服からジャージに着替えさせられて連れてこられた。

正直、あのまま病室にいたら絶対に面倒なことになるから逃げ出したかったところに渡りに船だったから乗ってみたと言うのもある。

どうあがいてもクリスとか来るだろうし、クローン達だって来るだろう。俺は面倒事が大っ嫌いなんだ。

「デズつちから聞いたと思います！TUIは改めて！ISの当初の目的『人類の宇宙進出』を指して奮闘していく次第でございます！束さんなんですかその口調」

「そのためにはまずしょーくんが設計してくれた宇宙空母の作成から入ろうと思います！」

「おお、ついにあれが来たか」

「その資金集めとして、まずは宇宙関連の技術を一通り宇宙に一番近い連中に売っぱらいます！」

「あ、束さん、その前にその連中に第二世代ISコア渡しておいた方がいいんじゃないですか？」

「ツ！そうだねしょーくん！ながれいしだねえりゆうせきだねえ流石だねえ！」

「と、言うよりも宇宙進出を目指している所にISコアを渡してしまつたらどうでしょう束様」

「うんうん、三人寄れば文殊の知恵だねえ！二人ともギューってしてあげるっ！」

「く、苦しいです束様」

「主に、首に二の腕がジャストフィットして……息が……」

その僅か半年後、TUIは本当に宇宙空母『空白』を作り

上げその乗組員を第二次IS学園の卒業生達から集めるのであった。

「さあしよーくん！クーちゃん！私たちの冒険はこれからだよっ！」

「ええ、宇宙は何が待ってるか分かりませんからね。束様」

「あー、千冬さんからの連絡履歴が大変なことになってる……宇宙空母開発で全然出れなかったからなー」

卒業生の先輩方はノリノリで思い思いの気合の言葉を発していた。

先行き不安なのは俺だけなのだろうか……ま、世界も救ったしもう何も背負うものはないし。楽しけりやそれでいいか！

よく考えたら俺ってIS学園から逃げ出したから中卒扱いなんだよなあ……やっぱ先行き不安のお先真っ暗だわ。

原作的ではない其方へ

「は、はは・・・帰って来たぜ、IS学園」

その日、俺は絶望していた。

俺が世界を救い、東さんとクロエとともに宇宙へ向けて頑張る企業の後押しをしながら金を集め、宇宙空母を作り上げ、その搭乗員として誰を雇う?という話が持ち上がった時に言ってしまったのだ。

『今のIS学園ってそっち系専門じゃなかったでしたっけ? IS学園の今後のためにも卒業生掻っ攫って宇宙開発目指してる会社に発破でもかけませんか?』と。

その提案を鵜呑みにした東さんが「今年の卒業生東さんがマルツと面倒みるよー、卒業式に会いに行くよー」と声明を十一月に発表。

そして負けじとIS専門の知識を持ったIS学園卒業生を求めて他企業が続々と声を上げていく。

そこで俺は気付く。『あ、これ俺死んだな』と。

理由? 実に簡単だ。あの日黙って病院から抜け出し、着信も無視し続けたから何されても文句言えないのだ・・・絶望である。東さんはノリノリだし、クロエは俺が気付いたことに気づき事あるごとに腹黒っぽい笑みを俺に浮かべてくる。

そして、忘れるように宇宙空母の制作に全力を上げて気付いた事から追い出し、卒業式を終え、東さんは「流石に今から宇宙は突然だし、家族との団欒の時間を過ごしておいきー」と、よくわからない親切心を出してクロエはそれに感動していた。が、俺はもう終わった。すぐに宇宙に行かないなんてオワタ・・・

「どうかされましたか? 驚津様」

「わかって聞いてるってことを知っているから黙ってるクロエ」

「いえ、私の考えていることと違うことを考えている可能性もありますのでお聞かせ願いたいと思います」

「ハハッ、ワロス」

気付いてからずっとスルーしてたが、俺の携帯の着信履歴が千冬さんでミツチリと埋まっているのだ。主に三日に一度。弾に簪嬢やら

一夏君やらデユノアが表示されているが比率で言ってしまうえば千冬さん9：その他1だ。

それどんな病んデレ?と思うだろう。違うんだ、殺んデレなのだ。卒業式の終わりまで後五分ほど!という大一番で束さんとクロエと三人で檀上に突入、TUIに就職希望する先輩方との打ち切りエンドを楽しんでいた最中、ずつと。ずうつと千冬さんの射殺さんばかりの視線と、一夏君の謎の視線に襲われていたのだ。

IS学園にはどうやってきたかって?勿論宇宙空母で来た。

IS学園にある海に浮かんでるはずだが、束さんの手によつて完成した完全ステルスで来た所も止まっている所も誰にも見られていないという酷い話。

そして今、何気なしにクロエと共にステルスと解除した宇宙空母『^空白』を目の前にして立っているが・・・後ろ振り向きたくないです、はい。

「鷺津様、素直に振り向いた方がよろしいかと」

「いや、何も言わずに去るのもクールかと思ったり、何だり・・・」

「男らしくした方がまだ痛くないかと」

「だよね・・・だよねー」

そして隣から宇宙空母へ向けて歩いていくクロエに背を向け・・・いやいやだが。本ツ当にいやいやだが!振り向くことにした。

「・・・どうも千冬さん。鷺津、翔です」

「どうも、鷺津翔。織斑千冬だ」

日本刀二つも持つてるよ、うわー。髪型ポニーテールにしてるよ、うわー。

これから戦ですか?なんて似合わないナンパ台詞No.1な言葉を言いたいけど今ネタやったらすぐに叩っ斬られそうだ・・・

「いつぞや貴様が言っていたな。『千冬さんだったら真剣持って来た挙句俺にまで真剣渡してガチの殺し合いくらいするでしょう?』と」「いやいや、アレって確かIS学園は一枚岩じゃないって話じゃ・・・」「上からは『鷺津翔は篠ノ之束の犬だ。生徒だからと言って取り戻そうとすれば・・・言わなくても君ならば分かっているだろう?』とな」

「アツハイ、現状一枚岩じゃなかったですはい」
「ということだ。決闘と洒落こもうじゃないか」

そういつてこつちに日本刀を投げ渡してくる千冬さん……これが
チな奴ですやん。やだ……男前……トウンクツ！

お互い刀を引き抜いた鞘をその辺へと投げ捨て、両手で持ち正眼に
構える。

「知っているか鷺津、あの一件で左腕を失くしたのは貴様と私の二人
だけだ」

「……お互い結婚指輪付けなくなっちゃいましたね」

ゆつくりとにじり寄り、間合いに入ったと同時に振り下ろしと切り
上げが交差し即座に後ろへ下がる……気抜くとバツサリだわこれ……
「良い相手はいないのか？」

「個人的には全く思い浮かびませんね。千冬さんは？」

「私にはおらんよ。近づいてくる男は皆権力か金かだ」

「このご時世にそんなのが理由で女性に近づくなんて……それも千冬
さんっていうね……」

再び間合いを詰め、袈裟斬りと胴斬りが交差してからまた下が
る……
「私が見るに、鷺津、貴様には幾人かいるように見えるんだが？」

「個人的にNGなのが数人」

「束と私の妹達、あとは……ラウラか？」

「クローン達はどうか知らないですけど……ちよつと勘弁してくださ
いって相手から迫られても、ねえ？」

「確かに、言う通りだ」

間合いに入った直後、お互い上段に構え振り下ろし、漫画やアニメ
でよく見るような日本刀の中ほど同士で鏢迫り合いを……鏢じやな
いのに鏢迫り合いとはこれいかに？

「他には、確か……そうだ、更識とかはどうだ？」

「いや、彼女は友人ですし……」

「ならば私はッ！」

「……まーた答えづらい事をつ」

頃合いを見て後ろへと飛び退き、右手を開けて手のしびれを取るために振る。千冬さんは千冬さんで投げ捨てた鞘を拾い、刀を収める。

「私が勝てば、IS学園に逆戻りだ」

「え？それでいいんですか？」

「では、私と結婚してもらおう」

「………へ？」

「一夏程ではないと言え、家事は出来るのだろうか？」

「え、ええまあ。人並みに？」

「では、私としてはこれ以上ない人材だ」

「……え、えー？結婚相手そんな理由で決めます？」

「それくらいドライさでいいと、私は考えている。そして何より、気心の知れた相手だ。不満は無い……行くぞ」

左腰にピツタリと鞘を持った左義手を当て、右手を柄に添えてジリジリとすり寄ってくる千冬さん。

本気でこの楽しい斬り合いを終わらせに来ているということ、俺も本気で極めた一つの型。左肩を前に出して自分の体で切つ先を斜めに地面に向けた刀を隠す、下段の構えを取る。

俺が一步踏み出すと、千冬さんは立ち止まる……いや、居合つてそういうのじゃねーから。相手が鞘に納めてる刀見て油断して間合いに入ったと同時に刀を抜いて構えて斬るものだから……そういうもの、だよな？俺、間違えてないよね？

などと、意味の分からない所对自己に対して疑心暗鬼に陥って立ち止まっていた所に、タイミングがいいのか、悪いのか。

「教官！そして嫁ッ！」「え……千冬ねえに翔！一体何やってるんだよッ！」と二つの短い叫び声が響き、それがきつかけとなって千冬さんがこちらへ向けて上半身を一切揺らさずに駆けてくる。

それにタイミングを合わせ右足を前へ地面をこするように動かし、刀を振り上げる。

金属同士が当たる小気味良い音を響かせ、俺はそのままの勢いで真っ直ぐ刀を振り下ろす。

「ふむ、相打ちか・・・か」

「このまま心中、なんてオチやめてくださいいね？」

正直、勝ったッ！番外編完ッ！ってなると思ったらまだ続くんじゃない状態だったでござる。

現状、千冬さんの左鎖骨に対して垂直で俺の刀が添えられており。千冬さんの刀が俺の左首に当てられている・・・正直言おう、俺の負けじゃね？

俺は刀引いても殺せるかどうか分からない点なのに対して千冬さんは刀引くだけで頸動脈がスパーンと逝ってしまう訳で・・・

「さて、相打ちの場合は・・・鷲津、お前が私に求めることはなんだ？」

「え？いえ、特にないですけど・・・」

「私が結婚を要求したのだ、同じような事を言えればいい」

とは言われてもなあ・・・うーん、どうしょ。据え膳食わぬは男の

恥、とも言いますが、結婚は墓場とも言おうし・・・ぬーん・・・

「千冬さん・・・俺の作った義手、着けてくれますか」

我ながらどこの脳みそがどう働いたのか訳が分からないよ・・・

そしてその数秒後、理解してくれたのか顔を真っ赤にした千冬さんに俺の首が搔っ切られた。

「なにしてんすか千冬さん、マジで死んだかと思ったじゃないですか」
「・・・すぐに傷が癒えたから問題ない」

どうやら俺の首を搔っ切ったことで一番驚いていたのは千冬さんだったらしい。客観的に見ればその通りだろうが、切られた本人が一番驚いてるっつーの。

しかし、少し頬を赤らめている千冬さんかわいいな。あれ？ブリュンヒルデどこ行った？

「いやー、一応念のためにしよーくんは治癒用のナノマシン仕込んでおいてよかったよー。本当にどうなることか！って思ったんだからねちーちゃん！」

首を切ったことに動揺して宇宙空母にいた東さんを呼び出し、なんと俺はお姫様だつこで空母内にある自室のベッドに寝かされた、らしい。

そして目が覚めたら千冬さんが頭を下げていて隣では爆笑しながらその姿を写メってる東さんっていう状況だったのだ。うん、カオス。

「うむ、今回の一件に関しては感謝しておこう」

「俺も感謝しておきますけど、知らない間にそんなもの入れられてたなんて・・・つーか三途の川見ちゃいましたよ」

俺の前世の中の人々が川の向こうでスツゴイ嫌そうな顔しながら親指を下に向けてたわ。

「でさでさ、ちーちゃんはどう返すの？」

「私はもうすでに答えを示しているからな。鷺津、いい義手を作れよ」

「ま、二つ同じの作るんですけどね」

「もー！東さんを放置してイチャイチャするなー！」

「イチャイチャも何も、いつも通りではないか」

「そんなことより俺、血が足りなくて頭クラクラしてるんですけど？」

「やだ・・・なにこの老夫婦みたいな・・・しょーくんとちーちゃんが東さんより先に大人になってしまったようです・・・」

「お前が成長してなさすぎなだけだ」

「東さんメンタル幼稚園生並ですからねえ」

「慈しむような眼で東さんを見るなー！じーちゃんばーちゃんに愛でられてる孫みみたいな気分になっちゃうだろー！」

そして泣きながら走り去っていく東さんを見送りながら、少し無理して起こしていた体をベッドに寝かした。

「あいつ、そんな経験なかっただろうに」

「あ、そうなんです？」

「生まれた頃にはそもそも祖父母はもう亡くなっていたそうだ」

「じゃあどっからあのセリフが・・・」

「さあな、本当にそう感じたのかもしれないぞ？」

「それって老けてるってことですかねえ」

「精神的に成熟しているという意味だ、解かれ」

「いやまあ、解かってますけどね？」

「・・・鷺津、お前には色々と言いたいことが溜まっているのだ。聞け」
「拒否権はないんですね分かります」

だがしかし、貧血のせいで寝落ちしたのは言うまでもないだろう。

数年後！

とある一軒家の玄関、そこには成長した俺と入院服の千冬さんが赤ん坊を抱きかかえた写真が写真立てにッ！

「コウノトリさんありがとうございます」

「おい翔」

「いやだって千冬さん、そういうことにしておかないと・・・ね？」

「・・・まあ、あまり掘り返されてもな」

「というわけでコウノトリさん、二人目もお願いします」

「・・・まったく、貴様という奴は」

「千冬さんと一夏君みたいな姉弟になるといいですね」

「・・・私は、母親としてしっかり出来るのだろうか」

「俺だって不安ですよ。父親歴ゼロですから」

「そうだな、母親歴ゼロの私と子供歴ゼロの娘・・・そう考えると、仲良くやっていけそうだ」

「あ、そういうば言い忘れてましたけど。東さんから地球日本支部に配属して貰ったんで二人三脚で頑張っていきましょう」

「三人四脚だ、馬鹿者」

数年前に亡くなった爺さん婆さん、そして北海道に戻った父さん母さん。そして最後に前世の中の人。俺は今、幸せです。